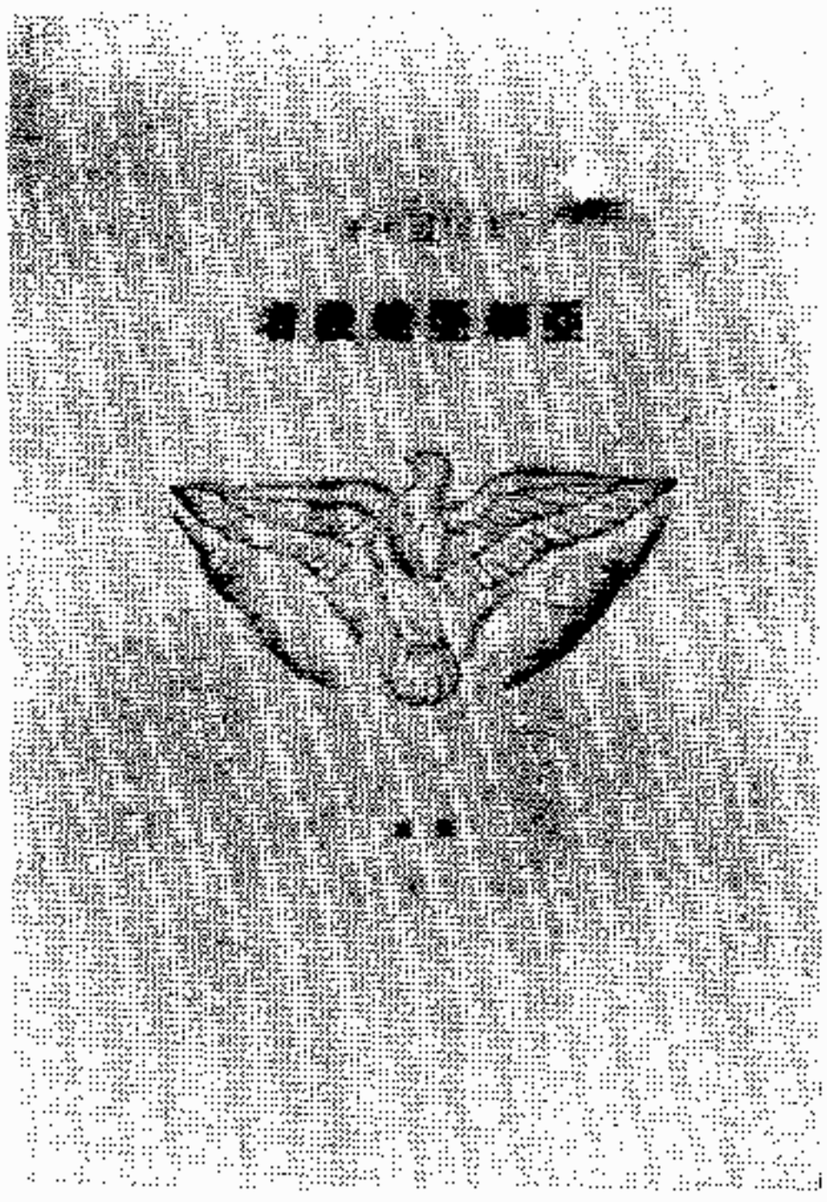
亜細亜建設者



【解説】一、前掲の「復興亜細亜の諸問題」（一九二三）の続篇として昭和十五年（一九四〇）に刊行された。前著が第一次世界戦争（一九一四―一九一九）前後を中心とせるに続いて、それから第二次世界戦争（一九三九―一九四五）初期に至るまでの約二十年に亙るアジア独立運動の行程を解明したものである。而して本書は、前著の地域別乃至問題別の叙述とは構想を異にしてアジア解放の五人の英雄（イブン・サウード、ケマル・アタトゥルク、レザー・パフラヴィ、ガンディ、ネール）を択び、これらの英雄の行蔵とその惨澹たる善戦健闘の生涯を通して、夫々サウディ・アラビア、新トルコ、イラン、印度の国々の試煉と更生の姿を示したものである。そしてこれら英雄が「独り卓然として機運の趨くところを徹見し自ら陣頭に立って亜細亜を正しき動向に導けるものでこれ実にかれらの荘厳なる魂に外ならぬ」ことを明らかにしている。

一、昭和六年九月（一九三一）満洲事変、昭和八年三月（一九三三）日本の国際連盟脱退、昭和十二年七月（一九三七）支那事変、昭和十四年九月（一九三九）第二次世界戦争の勃発あって亜細亜問題が大きく世人の関心を惹くに及び、博士の著書は広く要望されるに至った。前著「復興亜細亜の諸問題」が再版されて（明治書房刊）普及されたのは即ち昭和十四年（一九三九）であった。その再版にあたり博士は「これとわり」と題して、「此書（復興亜細亜の諸問題）世に出てより約二十年は予の最も欲するところであるけれど憾むらくは風塵に塗れて其の遑がない。予は唯だ久しく埋れたる旧著をして思いがけなく再び天日を仰がしめるだけで満足せねばならぬ」（昭和十四年四月）とされたが、越えて昭和十五年十二月（一九四〇）には世間の要望に応じて、本書がその第二巻として刊行されたものである。

復興亜細亜は荊棘の道を歩み続けて今日に及んだ。其間の複雑多端なる経緯を叙し来りて本書の第二巻たらしめることは予の最も欲するところであるけれど憾むらくは風塵に塗れて其の遑がない。予は唯だ久しく埋れたる旧著をして思いがけなく再び天日を仰がしめるだけで満足せねばならぬ（昭和十四年四月）とされたが、越えて昭和十五年十二月（一九四〇）には世間の要望に応じて、本書がその第二巻として刊行されたものである。

（昭和十五年十二月・四六版・四二八頁・第一書房刊）

序

偉大なる事業は、決して一人の力では出来ない。然し乍ら勝れたる一人の決意と指導となくしては、如何なる事業の成就も望まれない。新しき亜細亜の歴史を学びつつ、予の最も強く胸打たるる一事は、歴史に於ける英雄の偉大なる役割である。トルコにケマル・アタトュルクなく、イランにパフラギ皇帝なかりせば、此の瀕死の両国は決して復活しなかつたであらう。アラビアにイブン・サウード生れざりせば半島の統一は絶対に実現されなかつたであらう。秋草哀れに枯れ、冬天また印度にガンディなかりせば、その独立運動は決して今日の如くなるを得なかつたであらう。

た花影なきも、一陽来復すれば満目の新緑転た清鮮である。此等の英雄は、国運既に窮まり、国民総て希望を失ひ、或は号哭し或は自棄する以外、また為すところを知らざりし時、屹然立つて民族の命脈を一身に負担し、芳出度き春を其の国々に回らしめた。予は今更の如く、一人能く国を興こし、一人能く国を亡ぼすと言へる古人の言葉を、身に泌みて感ぜざるを得ない。

さて此の小著は、予の旧著「復興亜細亜の諸問題」の続篇たるべきものである。旧著の世に出でてより春風秋雨二十年、其間亜細亜は不断に復興の一路を歩んで来たが、其路は嶮峻を極め、荊棘に満ちて居た。いま其の錯綜曲折せる経緯を辿りて、旧著以後の亜細亜の行程を物語らんとするに当り、予は特に五人の英雄を択び、その惨澹たる善戦健闘の生涯を叙べることによつて、彼等の生れし国々の試煉と刻苦と更生の姿を、一層如実に示さんと志した。蓋し亜細亜復興は、紛れもなく世界史必然の発展段階であるとは言へ、世を挙げて廬山の雲霧に彷徨しつつありし時、独り卓然として機運の趨くところを徹見し、自ら陣頭に立つて亜細亜を正しき動向に導けるものは、実に彼等の荘厳な

る魂に外ならぬ故である。

前後五篇のうち、第一及び第二は雑誌「公論」に、第三は雑誌「新亜細亜」に掲載せるもの、第四は曽て東洋協会より小冊として発行せるもの、印度復興の精神的根拠を採り、ガンディ出て多少の筆を加えた。第五は新に筆執れるものにして、ネールを中心として第一次世界戦後より現在現の政治的意義を明かにせんとした。

に至る印度独立運動の動向を辿つた。新亜細亜を物語るためには、泰国の指導者並に支那の孫文・蔣介石の志業を逸し去つてはならぬ。わけても孫・蔣両者の功罪を正しく認識することは、相手にすべき者と相手にすべからざる者とを誤らぬためだけでも、東亜新秩序建設の重大なる準備の一である。唯だ予は東亜を以て亜細亜のうちの特殊の地域となし、之を別個に研究の対象たらしむべきものと考へ、暫く東亜を除外して亜細亜といふ文字を使用した。本書に「亜細亜建設者」と題したるは、決して羊頭を掲げて狗肉を売るためでない。

紀元二千六百年（昭和十五年）十二月

大川周明

アラビア神国建設者イブン・サウード

一　天幕の民と屋壁の民

アラビアは、多く学者によつて、セム民族の故郷とされて居る。而も其民は、夙く既に此の荒漠たる故土を去りて北のかた小亜細亜に出で、更に東はイラン高原に達し、西は地中海沿岸より北阿弗利加一帯に分布し、シリア人、アッシリア人・フェキニア人・カナン人・イスラエル人等の諸種族に分れ、或るものは其の経済的活動により、或るものは其の宗教的信仰により、それぞれ世界の文化に貢献した。　然るに独りアラビアの故土に残れるアラビア人のみは、茫々たる砂漠によつて自余の世界と隔離せられ、予言者マホメットの世に出づるまで、世界史の舞台に何の役割をも勤めなかつた。

かくてマホメット出現以前のアラビア人の生活は、最も好くセム民族の原始的社会状態を彷彿せしめ、概ね遊牧を事として天幕の中に住し、自ら「天幕のアラビア人」と誇り、水草を追うて各自の部落内を転々遷移して居た。彼等の或るもの、例えばメッカの民は商業を営んだ。また或るもの例へばヤスリブ（後のメヂナ）の民は農耕に従つた。而もアラビア人の最も好めるところは、実に広野の牧畜に外ならなかった。

さて総ての砂漠のアラビア人は、アブラハムの子イシマエルを先祖とするといふ古き伝説を信じたるに拘らず、幾多の部族に分れて深刻に対立して居た。而してセム民族に通有なる部族的感情は、アラビア人に於ても亦極めて強烈であつた。部族の至高の律法は、血に血を報ゆる復仇であつた。自己の部族に属する者の生命を護ること、及び「目

には目、歯には歯、命には命」という鉄則に従ひて、傷けられ又は殺されたる個人の仇を報ゆることは、部族が履行すべき絶対に神聖なる義務であつた。かくて復仇を目的とする部族間の争闘が、間断なく行はれた。或る部族に属する一人が、他部族の者のために殺された場合は、加害者又は其の家族の者の生命を奪ひて、死者のために仇を復すことが、部族全体の負ふべき責任と定められて居た。而して復仇せられたる部族は、更に之に対して復仇を企つるが故に、流血は恒に絶ゆべくもなかつた。此の不断の族闘が部族生活を国民生活に向上せしむべき一切の道を杜絶した。

不羈奔放にして矜高自負なることに於て、砂漠のアラビア人即ちベダーヰ人は、古も今も変りはない。而も彼等の生活が、ノブラハム以来殆ど変るところないのは、能はざるに非ず、寧ろ為さざるのである。古のアラビアの諺に従へば、神は特に四つの賜物を彼等に与へた。四つとは、王冠たるべきターバン、家たるべき天幕、城塞たるべき剣、及び律法たるべき詩歌である。彼等は自ら人間至高の典型と信じ、其の言葉を至純の言語と信じて居た。彼等は飽くまでも神より賜はれる四つの賜物を護持せんとするのである。

彼等は自由を熱望した。彼等は一切の拘束を唾棄した。而して砂漠こそは彼等の求むる自由郷であつた。吾等の故土は未だ嘗て異邦人のために汚されずとは、彼等の神聖なる誇りであつた。一天幕に一家族住み、数多の天幕相集まりて一部落となり、部族の各員は皆な同胞 **Akhu** として生活する。各部族には一人の族長 **Shaikh** がある。族長は時に世襲の場合もあつたが、多くは部族が認めて知徳兼備とする者が、選ばれて其職に就いた。而も一たび選ばれて族長となれば、彼には義務ありて権利なく、徳を以て薫化すべくして力を用ゐることを許されない。彼の天幕は、部落の端れ、敵の最も襲ひ易く、友の最も訪ひ易き処に張らねばならぬ。敵と戦ふことに於て先頭第一、並に友を犒ふことに於て先頭第一であることが、同時に彼の義務であり且特権であつた。彼は決して肆に部族に命令し指揮することが出来ぬ。彼は部族内の家長を召集し、彼等との合議の上で部族のこ

とを決めねばならぬ。若し夫れ専断横暴を敢てするならば、奔放なること悍馬の如き民のために、去られるであらう。

この自由に対する熱望、部族に対する愛着と共に、砂漠のアラビア人の其他の特性は、己れ飢ゑても客に満腹せしめんとする歓待の風、好戦尚武の気象、詩歌と雄弁とに対する好愛、及び最後に隊商を襲ひて其の貨物を掠奪する禁じ難き盗癖である。隊商を襲撃することは、彼等に取りては正当なる戦争であり、其の掠奪せる貨物は、誇るべき戦利品であつた。

砂漠のアラビア人は、之を其の光明の一面だけに就いて見れば、実に熱烈新鮮なる性格の所有者であり、その生活は人を魅するに足る諸相を具へて居る。ボスワース・スミス嘆じて曰く「進歩といふ観念の囚(とりこ)に非ざるアラビア人は倉惶齷齪を憫笑し、所謂文化なるものを作り上げるために、富を求め、贅沢と混乱を求め、知識の集積を求めて匆忙息むことを知らざる民族を蔑視する。繋くことなき欲望に追はれつつ、熱病患者の如き焦躁に襲はれつつある西欧の社会から、暫く想ひをアラビアの砂漠に馳せ、徹底して己れの運命に安んじ、明日の事を思ひ煩はず、天地の間を濶歩して、何等求むる所なきアラビア人を脳裡に描き来れば、仮令瞬間ではあるが、尚且心を慰むるに足る」と。

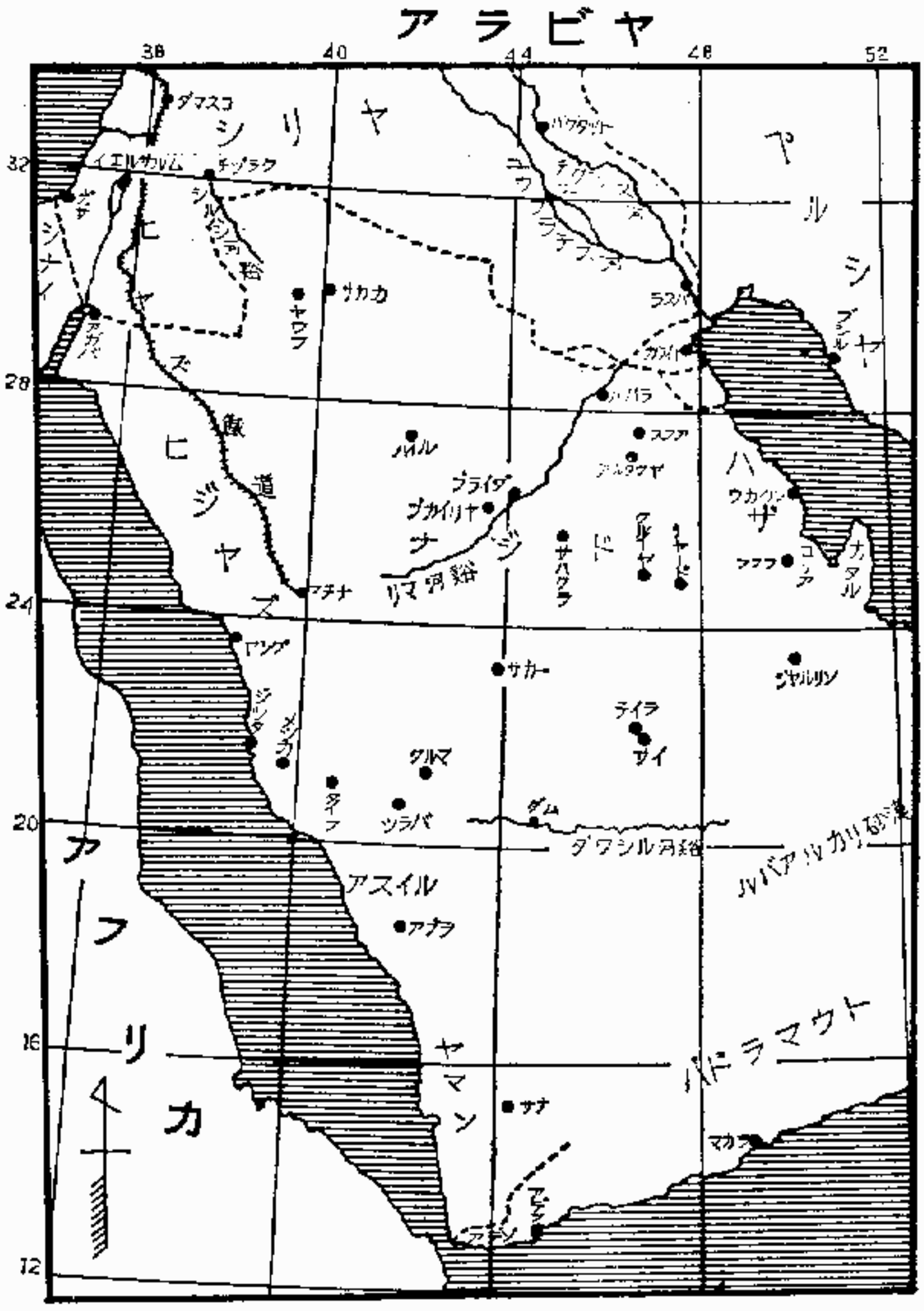
而も一たび去つて暗黒の一面を窺へば、アラビア人の性格並に生活は、顰蹙すべき数々の点があつた。彼等の暴酒は度を知らなかつた。酔ひて後の乱暴狼藉は沙汰の限りであつた。賭博は其の好んで措かざるところ、若し賭すべき一物もなきに至れば、自己の自由を賭し、負くれば即ち奴隷となつて止んだ。また女児を殺す風習が普く行はれた。生みの父が、平然として可憐なる女児を生埋めにした。而して一般に女子は物品の如く取扱はれた。一夫多妻は制限なく行はれ、妻の離別は屠人の解屠よりも手軽であつた。同時に一妻多夫もまた行はれ、境遇之を許し、才能男子を凌ぐ女子は、幾人でも夫を有つことを妨げなかつた。ウム・カリージャーと呼ぶ女子が、四十人の夫を有つて居たこ

とは、今に伝はる名高き語草である。

さて純乎として純なるアラビア人が自ら「天幕の民」と誇り、砂漠を自由の楽土として、太古以来の原始的生活を送りつつありし間に、彼等の或者は海岸の沃地を求めて、東はペルシア湾岸に、西は紅海岸頭に、南はヤマン、ハドラマウト、マーラーブの諸地に定住し、砂漠のアラビア人が軽侮せる「屋壁の民」となりて、農耕及び商業に従事した。

彼等の伝説に従へば、セムの孫即ちノアの曽孫に、カーターン及びヒムヤールの二子があり、前者は商業に従事するアラビア人の祖先、後者は農業に従事するアラビア人の祖先として太祖アブラハムの生活を繰返せるに反し、夙く既に南方肥沃の地に拠つて、ヤマン、ハドラマウト、マーラーブの諸国を建設し、就中ヤマン国は、土地の膏腴と人民の勤勉とによつて目覚ましき発展を遂げ、西紀前第八世紀頃より、南アラビア一帯に覇を称へた。然るに西紀第一世紀に、ヤマンの沃野に瀦溏するマリーブ貯水池が、不測の天災によって汎濫するに及び、耕すべき土地を失へる彼等の一部が、半島の東西両岸に沿ひて北方に移住し、先づシリアにヒーラ国を建て、次で西紀第二世紀には、オイフラート下流の西岸にガッサーン国を建てた。其後、西紀第四世紀に至り、ヒーラ国より岐れたるキンデー国が、北部ナジドのアラビア諸族を統一した。

此等の諸国以外に於て、特に注意すべき「屋壁の民」としては、メッカ及びヤスリブ（後のメヂナ）両市の民がある。此等の両市は、南方の隊商が、貴重なる産物を駱駝に積載して、北方シリア方面に赴き、之を製造品と交易して帰還する紅海沿岸の隊商路に建てられたるものである。メッカの起原は遽として知るべくもない。その初めて文献に現はれし頃は、既に商業的並に宗教的に、最も重要なるアラビアの中心となつて居た。メッカの名前其のものが、衆会の地を意味するアラビア語バッカー Bakkah の転訛である。此地に移り来れる諸部族は、アラビア至聖の神殿カ



箇月、即ち十一月・一月・二月を聖期として、一切の争闘を中止することとなつて居た。

にして、メッカ巡礼の安全を期するためであつたが、後に宗教的意義を失つてからも、之によつて、大小市政を決する議場たらしめたるのみならず、市民冠婚の式場たらしめ、また軍隊が戦場に馳せ向ふ時も、並に隊商が遠国に族立つ時も、共に此処から出発せしむることとした。

の修羅場から救ふことが極めて必要なりしため、此の不文律は一年中の四アラビアの天地俄然として泰平無事の楽土と化し、昨日の仇敵も互に其手を握り、砂漠の隊商は安んじて其の駱駝を

さてアラビアの不文律は最も厳格に守られて居た。かくて聖期一たび来れば、

ーバを手に入れ、従つて覇をメッカに称へるために相争つたが、西紀第五世紀初頭に至り、クライシュ族の有為なる族長クサーイが、其の争覇者を倒してメッカの主権を握り、偉大なる勢力を揮つた。彼はカーバ神殿の前に、メッカの社会的・政治的中心たらしむべく市会堂を建て、市の長老を召集して

追ひ、或は相会して盛んなる饗宴を張り、或は相携へて聖地に巡礼した。然るにメッカ首長となれるものは、聖月の第一月より始め、従つて十一月を普通月と変更する特殊の権力を有して居た。此の特権は「転換 Nasa」と呼ばれたが、此の権力之を掌握することが如何に偉大なる勢力の源なりしかは説くまでもない。而してクサーイは、此の権と、巡礼者に食物と水とを供給する特権と、カーバ神殿の鍵を護持する特権とを、悉く一身に収めたのである。マホメットは実にクサーイ五代の孫に当る。

次にヤスリブは、アラビアの伝説に従へば、当初一アラビア部族の築ける都市であつたが、彼等は極めて早くユダア人のために逐はれてしまつた。此等のユダア人は恐らくネブカドネザルを初めとし、其後の諸侵略者のために故国を逐はれて南下せるものである。然るに西紀第三世紀頃、ガッサーン国より逐はれたるアウス及びカズラジの両アラビア部族が此地に移住し、ユダア人に歓迎せられて土着することとなつた。而して両者の関係は当初親善であつたが第五世紀末葉に至り、此間次第に勢力を蓄へ来りしアラビア人が、ユダア人に代りてヤスリブの主権を握らんと企て屢来両者の間に惨澹たる争闘が行はれた。而して最後の勝利はアラビア人のものとなり、カズラジ族長が将にヤスリブの君主たらんとした時に、予言者マホメットの出現を見たのである。

二 第一ワハブ帝国の興亡

さてアブラハム以来、混沌乱雑の修羅場なりしアラビアは、西紀第七世紀中葉に至り、予言者マホメットの出現によつて、忽然一個強大なる国家となつた。当時のアラビアの状態、その文化的・社会的・政治的事情を顧みれば、何人もマホメットが千古の偉人なることを拒み得ない。彼は其の熱烈なる信仰によつてアラビア人の魂を浄め、之を一個堅固なる国民、一層適切に言へば一個強烈なる宗教的戦争団体に鎔合し、信仰と剣戟とによる征服を開始して、常

勝の歩みを四方に進めた。十年ならずして全アラビアが彼の威風を仰いだ。彼の遺業を継ぎたる信者等は、北はシリアを経て小亜細亜を平らげ、進んでコンスタンチノープルに迫つた。東はオイフラート河を渡りて、ペルシアを席捲した。偖に百年ならずして、アラビア帝国の版図は、実にジブラルター海峡より大西洋に達し、更にスペインを経略してフランスを脅したのである。

やがてアラビア人以外の諸民族が、此の砂漠の信仰に帰依し、彼等の後を継いで更に征服の歩みを進めた。そはコンスタンチノープルを陥れ、バルカン半島を北上してジーンの城門に迫つた。黒海を渡りて南ロシアを従へた。中央亜細亜を従へて、遠く万里の長城に押寄せた。

然るにアラビア帝国が四方に版図を拡め、回教が諸国民の信仰となるに及んで、アラビア自身は、アラビア帝国並に回教の中心たることを止めてしまつた。中心は先づダマスコに、次でバクダードに、次でカイロに移つた。かくてアラビア自身は、此の驚くべき信仰と力とを生みたる後、次第に古の混沌蒙昧に還つて行つた。そは再び自余の世界と隔絶し、世界史の進行と没交渉になつた。砂漠の北では、十字軍が戦はれた。ビザンチン帝国が栄え且衰へた。成吉思汗の勢威が、遠く蒙古から押寄せた。タメルランの軍勢が、近く中央亜細亜から猛威を揮つた。最後にトルコ人が一個強大なる国家を建設した。而も砂漠によつて隔てられたるアラビアは総て此等の興亡と風する馬牛であつた。

千年の長い間、アラビアは、マホメット出現以前の惨澹たる修羅の巷となつた。

然るに十八世紀初頭に至り、アラビアの中部、未だ曽て異邦の羈絆の下に立たざる自由奔放の国ナジドの一邑アヤイナに、偉大なる回教改革者ムハムマッド・イブン・アブドウル・ワハブが生れた。十歳にして既に哈蘭の全章を暗誦せる此の寧馨児は、長ずるに従つて知識は愈々深く、信仰は益々篤くなつた。彼は遊学多年の後、一七四四年のころ郷里に帰り、回教の堕落を革新し、之を原始の純一に復らしめずば止まぬ覚悟を以て、熱烈に伝道を始めた。彼は

第一に独一のアラーに対する絶対の帰依を力説し、神人間の一切の仲介者を斥けた。第二に哈蘭及び聖伝（スンナ）の私の解釈を排した。第三に純一なる信仰を蔽へる一切の儀礼を禁じた。第四に剣か哈蘭かの鉄則を確立し、説教によつて改宗せざる異教徒に宣戦すべきことを高調した。而も彼の峻厳は郷里の民の喜ばざる処であつた。彼も亦故郷に容れられざる予言者として、家族と共にを要求した。アヤイナを去らねばならなかつた。幸にして彼はナジドの一邑ダイヤルに君臨せる有為なる族長ムハムマッド・イブン・サウードの帰依を受け、両者堅く相結んで、回教帝国の再興を誓つた。かくて燃ゆる信仰が鋭き剣と結ばれた。アラビアの心髄はナジド、ナジドの心髄はリヤードと呼ばれる。そのリヤードが先づ彼等の有となつた。彼等の勝利の歩武は迅速であつた。ナジド全土がやがて彼等の権威を仰いだ。彼等は其民に向つて、哈蘭の一切の掟の厳守を求め、喫煙を禁じ、飲酒を禁じ、日々五度の祈禱と聖月の断食とを励行した。僅に六十年の間に、ワハブ帝国の版図はメッカ、メヂナの両聖都よりペルシア湾、印度洋よりシリアのリバノン山脈に及んだ。彼等は砂漠の主人として、雷にアラビアに対するトルコの主権を拒めるのみならず、進んでイラクを襲ひてシア回数徒の聖地カルバラを蹂躙し、シリアを襲ひて地中海沿岸に進出し、アレッポを襲ひ、ダマスコを脅し、更にペルシア湾頭のバスラを劫掠するに至つた。

トルコは漸く此の熱狂的なる宗教国家の危険を感じ、一八一一年、エジプト太守ムハマッド・アリ・パシャにアラビア征討を命じた。エジプト軍は幾多の苦戦を経てナジドに進軍し、一八一八年遂に首都を陥れ、トルコ国旗を高くリヤードに掲揚した。而して彼と共に第一ワハブ帝国も亡んだ。

広場で首刎ねられた。

此時よりアラビアは、エジプト軍によるトルコ支配の時代に入る。而もトルコ人及びエジプト人は、寥寞たる砂漠

の生活を好まなかつた。彼等は諸処に要塞を築き、衛兵を残して引上げた。その衛兵も次々に撤去した。かくてアラビアは、亦復四分五裂の状態に入つた。第十九世紀を通じて、アラビアは又もやアブラハム時代の古に還り、砂漠は三度目の闇に沈んだ。部族同志の争闘は間断なく行はれた。而して最も露骨なる弱肉強食の世となつた。其間に第十九世紀末葉に至り、二つの勢力中心がナジドに出来た。一方は北方シャマル諸族を統一してハイルに都せるムハムマッド・イブン・ラシッド、他はサウード六代の孫にして、エジプト軍撤退後に再びリヤードに拠れるアブドゥル・ラーマンである。一八八〇年十一月吉日の払暁、天は此のアブドゥル・ラーマンに一男児を授けた。此の男児こそは第三回教帝国、又は第二ワハブ帝国建設の使命を帯びて生れ、而も見事に此の使命を果たしつつあるアブドゥル・アズィズである。其の詳しき名前はアブドゥル・アズィズ・イブン・アブドゥル・ラーマン・イブン・ファイサル・イブン・サウード Abdul Aziz ibn Abdur Rahman ibn Faisal ibn Saud であるが、いま略称してイブン・サウードと呼ぶ。

三　イブン・サウードの教育と試煉

イブン・サウードの母は、其名をサラーと呼ぶ。総て良家のアラビア婦人と同じく、彼女もまた七歳の時から面帕（ヴェール）を以て其顔を蔽ひ、女ばかりの間に人と為り、読むことも書くことも教へられなかつたが、生れ乍らに信心深く、思慮分別に富んで居た。イブン・サウードは、此の賢明なる母親の懐で哺まれたが、乳離れすると同時に母親の手を離れ若干の同年輩の奴隷児童と一緒に、一黒人奴隷を傅役（もりやく）として、男子ばかりの間で育てられた。此等の児童は、やがて彼の遊び仲間となつた。彼等は彼と共に飢ゑ、苦しみ、戦ひ、血を流して今日に及んだ。歩行が出来るようになると、父アブドゥル・ラーマンが、親ら其子の教育者となつた。彼は常に其の偉

大なる先祖を追慕し、光栄あるワハブ帝国を再興し、等の魂に復活させることが、彼の家門に課せられたる神聖なる任務と確信して居た。それ故に彼は先づ最も厳格なる宗教的訓練を其子に与へた。イブン・サウードは、既に七歳の時には、毎日寺院で行はれる五度の祈禱に列なり、厳格に断食を守り、重要なる哈蘭の章句を暗誦して居た。また此の使命は、悪戦苦闘を経てのみ成就さるべきものなるが故に、彼は戦士として必要なる一切の鍛錬を其子に与へた。イブン・サウードは剣を学び、射撃を学び、鞍なくして馬を馳せ、疾駆の間に其馬を乗換へることを学んだ。彼は三時間の熟睡で休養し、一握りのなつめ椰子実で腹を充たし、三杯の水で三日の渇に耐へることを学んだ。また困苦欠乏に慣れさせるために、父は其子を長途の旅に出した。真昼の砂漠の灼くが如き砂の上を、裸足で歩かせた。氷の如き風が山上から吹下ろす真冬の夜半に、裸身で狩に出した。同輩との試合に優勝せぬ場合は、懲罰として三日食物も水も与へぬこととした。かくして育てられたるイブン・サウードは、短身肥満の父とは肖もやらず、丈高く筋肉締り、敏捷豹の如き少年となつた。

かかる間にハイルの君主ムハムマッド・イブン・ラシッドの勢威、漸く加はつて来た。彼は夙くより虎視眈々としてリヤード及び之を囲む富める邑々を窺つて居たが、サウード家の内訌に乗じ、一八九〇年イブン・サウード十歳の時、大軍を率ゐて南下し、遂にリヤードを略取した。アブドゥル・ラーマンは、夜陰に紛れて妻子と共にリヤードを脱出し、名状し難き辛苦艱難を忍びつつ路を東北に取り、ハサと相接するアジマン諸族の首領ヒトラインを頼り、此処に身を寄せることとなつた。

当時トルコは、前述の如く、名目上は全アラビアの宗主国であつた。但しトルコは沿海地帯、即ちペルシア湾岸のクワイト、ハサ、紅海沿岸のヤマン、アスィル、ヒジャズ、及び北方シリア、イラクを辛うじて保持して居ただけで其の勢力は砂漠のアラビアに及ばなかつた。それでもトルコは、中部アラビアに強国の出現することを厭ひ、反間苦

肉の策を用ゐて常に諸部族を相争はしめ、勢力の分散を助長して来た。かくて今やイブン・ラシッドの勢力日に加はり、覇をナジドに称へんとするを見、之を抑へるためにアブドゥル・ラーマンを利用せんとした。即ちハサの太守は、彼に向つて下の如く提議した――「若しアブドゥル・ラーマンがトルコの主権を認め、貢物を献じ、リヤードにトルコ兵営を置くことを承知するならば、トルコ正規軍を彼に与へ、イブン・ラシッドの手からリヤードを奪回させてやらう」。

然るにアブドゥル・ラーマンは、頑固一徹なるアラビア人であり、且熱烈なるワハブ宗徒なるが故に、正しき信仰を失へるトルコ人の前に、其膝を屈することを肯んじなかつた。彼は啻に膠なく此の提議を斥けしのみならず、ハサ領内に擡頭しつつありし反トルコ騒乱に荷担した。ヒトラインは、強大なるイブン・ラシッドを敵とし、其上トルコをまで敵とする此の頑固なる客人が、其の領内に駐まることを拒んだ。若し長く此の客人を庇護するならば、彼自身がイブン・ラシッド及びトルコを敵とせねばならぬであらう。

アブドゥウ・ラーマンは、妻女達をペルシア湾頭の一島、真珠産地として名高きバーラインに避難せしめ、己れはイブン・サウードを伴ひて、道なき曠野を南に進み、総ての邑々を避け、遊牧民の天幕をさへも迂回しながら、地上の焦熱地獄、アラビアの死界と呼ばるるルバ・アル・カリの大砂漠まで漂泊の旅を続けた。彼は此の焦熱地獄の一角ギランの鹽井のほとりで、駱駝を牧せるムラ族の天幕を見、其の保護を求めて承諾を得た。

ムラ族は、全アラビアの遊牧民のうち、最も未開蒙昧の民である。その生活は駱駝のそれと択ぶところない。彼等は一箇処の定住地さへなく、常に駱駝のために草地を求めて彷徨する。彼等は実に砂漠の恐怖であつた。而も彼等はイブン・サウードに取りて善き師匠であつた。彼等と共に半獣的生活を続けた間に、イブン・サウードは一切の砂漠の秘密を知つた。如何にして砂上の足跡を消すか、如何

にして駱駝を長途の旅に耐へさせるか、如何にして長時の飢渇に耐へ得るか、総て此等の祕訣を、イブン・サウードは此の蛮民から学んだ。

さり乍らムラ族の不潔・野蛮・窮乏・瀆神の生活は、最早五十歳を超えたるアブドゥル・ラーマンの長く堪へ得るところでなかつた。彼は使者を四方に派して、彼を庇護する者を求めたが、之を肯んずる族長は居なかつた。恰も此の時、ペルシア湾頭クワイトの首領ムハムマッドが、彼をクワイトに招いた。それはハサに新任せるトルコ太守が、又もやアブドゥル・ラーマンを扶けて、年と共に勢威を張り行くイブン・ラシッドを抑へんと企て、若干の生活費を支出すべきことを約束して、ムハムマッドをして彼を招かしめたのである。老いて平和なる信心生活を希へる彼は、喜んで此の招致に応じ、バーライン島から家族を呼寄せ、クワイトに落付くこととなつた。

さてクワイトは、まさしくペルシア湾頭のマルセーユである。その住民は、東洋の港町に見る狡猾・惰弱・便佞・放埒なる混血種である。諸国の商人が或はテーランから、或はボムベイから、或はシリアから、或はイラクから、皆此処に集まつて来る。巷にはヨーロッパの冒険家、アルメニアやユダヤの行商人が雑沓する。波止場に近く立並べる珈琲店では、七つの海を渡り歩くイギリス、フランス、イタリーの水夫どもが、泥の如く酔ひて喧嘩口論する。此処に住めば居ながらにして砂漠の消息を知り、バグダードやコンスタンチノープルの消息を知り、さては朧気ながらヨーロッパの国々の消息を知り得る。

厳格を極むる信仰の町リヤードに生れ、野蛮蒙昧なるムラ族の間に育ちたるイブン・サウードに取りて、此の港町の事々物々は、皆な驚異の種であつた。而して全く新しき幾多の経験を此処で積んだ。其上に彼の幼時の厳格なる宗教的鍛錬は、此の罪悪の塲（るつぼ）なる港町に於て、能く一切の悪習に染まざらしめた。彼は依然として祈禱と断食とを厳守し、独一のアラーに対する信仰を強めて行つた。而して十五歳の時に、夙く良縁ありて妻を娶つた。此の早婚がまた

彼を堕落から救つた。彼は同年輩の少年よりは、四五寸も丈高く、知慧も腕力も嶄然として群を抜いて居た。

さてクワイトに於けるサウード父子の生活は、トルコからの補助金が途切れがちであり、後には全く止まつたので貧しく且苦しかつた。唯だ首領ムハムマッドの末弟ムバラクが、サウード父子に並々ならぬ好意を示し、わけてもイブン・サウードを吾子の如く愛撫した。彼は其兄と好からず、青年時代に印度に渡り、ボムベイで放蕩三昧の生活を送つたが、年経て故郷に帰つて来た。其兄が吝嗇と誅求との故を以て人民から嫌はれたのに反し、寛濶快活なるムバラクは、クワイトの人気者であつた。兄はムバラクの聲望を嫉視した。兄弟の確執は次第に激しくなつた。一八九七年、ムバラクは遂に其兄を殺し、自らクワイトの主人公となつた。人民は喜んで彼に服した。時にイブン・サウードの齢十七歳。

偶々之と時を同じうして、クワイトは俄然世界政局の重点となつた。それはドイツがバクダード鉄道の終点として此の汚なき港町を選定したからである。予てより回教の友、アラビア人の保護者と名乗りてトルコ皇帝と相結べるドイツ皇帝は、其の東漸政策の実現としてバクダード鉄道の敷設に着手し、コンスタンチノープルよりアレッポに、バクダードに、バクダードよりクワイトに出で、以てペルシア湾頭に達せんとした。而も是くの如き計画は、印度より西漸し来りて、ペルシア湾を自己の湖水とせるイギリスが、決して黙視せぬところである。イギリスはムバラクがクワイトに君臨せる丁度其年に、断乎としてドイツに向つて之を拒んだ。今や英独両国は、而してロシアもまた、ムバラクの甘心を買ふに努めた。ムバラクは自己の地位が一朝にして重大なるものとなれるを見た。而して地位と境遇との変化は、彼の人間をも変へた。彼は最早昨日の遊俠無頼の放蕩漢に非ず、俊敏大胆なる外交家、聰明強力なる政治家として、巧みに列強を操縦した。而も彼のイブン・サウードに対する愛情は、依然として変らなかつた。彼は其の総ての劃策を彼に打明け、殆ど総ての会議に列席することを許した。イブン・サウードは、常に部屋の

一隅につつましやかに脚を組み、默々として、而も渾身の注意を以て、ムバラクが列強の使臣を待遇する有様を見つめて居た。ムバラクは、英独露の全権達を、一様に愛嬌を以て迎へ、一様に彼等の言に傾聴し、一様に彼等と贈物を交換した。或時は彼が一本の風雅なアラビア製パイプを贈つたのに対して、イギリスは二十万磅の小切手を贈つた。イブン・サウードは、此処で外国人の如何なるものなるかを学び、如何に彼等を遇すべきかを学んだ。またクワイトは一切のアラビア諸族が雑居し、各国の商人が入込める難治の町であつた。詐欺・陰謀・刃傷・強盗は日常の沙汰であつた。而もムバラクは善く此の町を統治して、年と共に其の繁栄を加へさせた。斯くしてイブン・サウードは如何にアラビア人を治むべきかをも学び得た。まことにクワイトは、彼のために最も有益なる教場であり、王者として列強と交り、国内を治むる有らゆる技術を此処で習得した。

四　リヤード奪回とサウード家復興

さてムバラクは、東夷を以て東夷を制する弱小国の常套手段により、巧に列強を操縦して居たが、東漸政策の確立を急げるドイツは、ムバラクの遂に度し難きを知り、トルコに強要して彼を其位より逐ひ、適当なる傀儡を立ててクワイト君主たらしめんとした。時に英国に於ては、大英帝国主義の権化、カイロ・カルカッタ政策の高調者カーゾン卿が新に印度総督に任ぜられ、断乎ドイツの東漸を阻止するに決し、ムバラクの懐柔に努めた。ムバラクは独土両国よりの危険を免れるために、喜んで英国と握手し、一八九九年一月、イギリスの承認なくして他国と条約を結ばずと約束し、事実に於てイギリスの保護領となつた。かくてトルコは、直接ムバラクに手を下し得ざるに至つたので、ハイルの君主イブン・ラシッドに対し、若しクワイトを討つならば、金と武器とを与ふべく、其上鉄道敷設の承認を条件として、此地を彼に与へようと提議した。ハイルでは、ムバラクが其兄を殺してクワイトの主人となりし丁度其年、僅

に数月を隔てて有為なるムハムマッド・イブン・ラシッド病を以て歿し、性急短慮の野武士アブドゥル・アズィズ・イブン・ラシッド其後を継いだが、喜んでトルコの提議に応じ、大軍を率ゐてクワイトに迫つた。唯だクワイト港頭の英国巡洋艦の威容が、彼をして軍を回さしめた。

時にイブン・サウードは、二十歳の青年になつた。彼はムバラクの眷顧篤き者として、人々の尊敬を受けた。彼の風貌態度が、またアラビア人の心に尊敬の念を起さしむるに十分であつた。彼の身長は、普通のアラビア人より約一尺高かつたので、人々は彼を「若き巨人」と呼んだ。肩幅広く、胸厚く、総ての筋肉が見事に発達して居た。その風貌も甚だ気高かつた。その褐色の両眼は、澄んで優しかつたが、時ありて爛々と燃え上り電光の如き凄味を帯びた。彼は多く物言はなかつた。而も一たび口を開けば、火の如き言葉が聴者の魂を焦き尽した。彼はクワイトの遊惰な生活に堪へなくなつた。彼の闘志は年と共に旺盛となつた。彼は最早クワイトの敵であり、それ以上に彼等父子の敵であるラシッド家と戦ひ、先づリヤードを回復し、次でラシッド家を撃滅して、全アラビアの主人たらんとする壮心烈志を燃立たせた。彼はムバラクに打明け、熱心執拗に遠征の援助を請うた。

ムバラクは遂に彼の懇願を容れた。但しムバラクの彼に与へたる援助は、貧弱なる駱駝三十頭、小銃三十挺及び弾薬、及び金二百リヤルに過ぎなかつた。而も彼は勇躍して遠征の同志を募つた。従弟ジルヰ、弟ムハムマッド、及び三十人の友人が直ちに之に応じた。彼の父母は、流涕して此の無謀の計画を諫止したが、彼の妹ヌラだけは彼の壮挙を鼓舞激励した。かくて一九〇〇年晩夏の一夜、眠れるクワイト人の目を覚まさぬように、イブン・サウード、従弟ジルイ、弟ムハムマッドを先頭に、三十名の戦士と二十名の奴隷とよりなる小遠征隊が、大胆極まる冒険の門出に上つた。

彼等は道なき砂漠の丘陵を越えて南下した。少年時代にムラ族と共に起臥せる経験が既に此時から彼に役立つた。

彼は時には隊商を掠奪し、時には邑々を襲撃し、
手下に加はつた。イブン・ラシッドは、初め此の小
ハサのトルコ太守を動かし、之を征討せしめんとし
るアラビア人が、次第に離散して行つた。此事を伝
し、一先づクワイトに帰りて再挙を図らしめんとし
位するハラド泉地の畔に於て、今は残り少くなれる
ードは、一切の威嚇・警戒・忠告・懇願を斥けて、
ャルビン沃地に馳せつけ此処で悲壮なる覚悟を以て
彼等は一夜を椰子の樹蔭で口尖らして居たが、暁方
共にせる三十人、及び旧主の若き嗣君のためにリヤ
止まつた。彼等は最後の血の一滴を流すまで、最後
つた。

この大胆なる主従は、奇襲によつてリヤードの
算は固より少いけれど、若し成功すれば一挙アラビ
ドに間諜を派し、其の報告によつて、ラシッド家の
知つた。彼は第一に敵を油断させねばならなかつた
彼の部下が皆な彼を捨てて去つたといふ噂を立てさ
戦ひなく女もないことは、アラビア人の堪へるところで無い。其上食糧は日に乏しくなつた。部下の不平は次第に高

まつた。辛うじて之を統御し得たのは、実にイブン・サウードの異常なる人格の力である。此年十二月十七日、リヤード上より程遠からぬジュバイル高地に進み、翌一九〇一年正月、アブー・ジファンの泉に達した。一月十七日、リヤードより程遠からぬジュバイトに疾駆し、部下の半を此地に駐め、若し彼等が二十四時間内に何の知らせも受けなかつたならば、直ちにクワ残余の部下を率ゐ、リヤード沃地の入口まで前進し、弟ムハムマッドに二十人を与へ、戦敗の合図あるまで椰子林の間で待てと命令した。而して夜の更けるのを待ちて、彼自身は従弟ジルヰ以下十人の同志と共に、椰子樹を伐り倒して梯子に代へ、番兵にも覚られず、犬にも吠えられずに城壁を乗り越えた。折しも真冬の深夜で、高原の嵐吹き荒んで居たので、総ての市民は屋内に居た。彼は代官アジランが、夜は必ず厳重に警護されたる城砦の中に眠り、夜明けて自宅に帰ることを知つた。彼は広場を隔てて城砦の前に在るアジランの自宅に闖入し、死を以て威嚇して留守を護れるアジランの妻及び其他の女子を沈黙せしめた。彼及び其の部下は哈蘭を読誦し、珈琲を飲み、窓より城門を見つめつつ、明方までの四時間を過ごした。やがて夜は明けて城門は開かれ、従者及び奴隷を従へたるアジランが門内から歩み出た。その瞬間に、イブン・サラードの一党が、驀地にアジランに躍りかかつた。敵味方の猛烈なる乱闘の間に、アジランは殺された。ジルヰを先登として城内に斬込める一党は、八十人の守備兵を屠つて、完全に之を乗取つた。四方の塔の上から、声高らかにイブン・サウードの勝利が伝へられ、市民は名状し難き歓呼を以て之を迎へた。

アブドゥル・ラーマンが故郷を亡命してより第十一年目、リヤードは再び旧主の手に復つたのである。

イブン・サウードは、イブン・ラシッドの攻撃に備へるため、先づリヤードの防備を厳にした。次で南方諸部族を帰服せしめた。弟サードがクワイトより来りて兄を助けた。爾来今日に至るまで、サードは最も忠実且有能なる協力者である。一九〇二年の冬までに、彼の勢力はリヤード及び南部諸邑に確立せられ、来るべきラシッド家との争覇に

攻撃を取り得るまでになつた。そこで彼はクワイトから老いたる父をリヤードに迎へた。父は厳粛なる儀式によつて位を其子に譲り、サウード大王以来伝承せる黄金の太刀を彼に与へた。此時より約三十年間、既ち一九二八年アブドゥル・ラーマンの老死するまで、父子両人は常に一心同体となりて国家の経営を共にした。父子の関係は世にも美しきものであつた。一切の公会に於て、寺院の祈禱に於て、彼は必ず上席を父に譲り、信仰と徳操の一切の疑問に於て大小の政務に就いて常に父の意見を尋ねた。

五　サウード、ラシッド両家の争覇

アブドゥル・アズィズ・イブン・ラシッドは、初めは殆ど歯牙にもかけざりし青年冒険者が、易々と彼の手からリヤードを奪ひ、剰へ次第に版図を拡め、砂漠のアラビア人の魂を収攬し初めたるを見て漸く之を怖るる心を生じた。かくてサウード、ラシッド両家のナジト争覇戦が始まり、幾たびか衝突が繰返された。イブン・ラシッドは其敵の容易に破り難きを知り、トルコの援助を求めた。トルコは其の伝統的アラビア政策により、イブン・サウードの頓に強大に赴くを阻むため軍隊を出だしてイブン・ラシッドを助けることにした。かくて一九〇四年七月十五日、トルコ、ラシッド聯合軍と、イブン・サウード軍とが、ブカイリヤに合戦した。戦闘は早朝より夕刻に及び、両軍とも戦死者一千に達したが、遂にイブン・サウードの敗北となつた。蓋しトルコ軍の大砲が、此戦に於て異常に役立つた。この恐ろしき武器が砂漠に持込まれたのは此時が最初であり、その射撃に驚いてサウード軍の騎兵は退却した。加ふるにイブン・サウード自身が、砲弾の破片を受けて駱駝より落ち、左手の一本の指を失ひ、膝を挫いて倒れたので、全軍遂に潰走するに至つた。若し此時トルコ軍が、直ちに彼等を追撃したならば、恐らくイブン・サウードの運命は尽きたであらう。唯だ灼くが如き砂漠の暑熱が、トルコ人から其の勇気を奪つてくれた。

アラビア人の感情は、紙の如く容易に燃え且消える。勝利は彼等の勇気を立ちどころに百倍せしめるが、敗北は直ちに其の意気を銷沈せしめる。アカイリヤの敗戦は、イブン・サウードに取りて深刻なる試煉であつたが、誰よりも善くアラビア人の性格を知れるイブン・サウードは、其の重き負傷に拘らず、恰も勝利者の如き快活なる態度を以て、巧に其の将士を鼓舞激励した。其上彼は四方に使者を遣はして、トルコの勝利はアラビアの自由の弔鐘に外ならぬこと、トルコと相結べるラシッドは、アラビアを異邦人に売るものなることを力説して、諸部族の加勢を求め、約二千の兵力を集め得た。而して負傷も全快せる身を以て、直ちに復た敵軍と戦ふべく北上した。

イブン・サウードは、リマ河谿を行軍中の敵を、側面より急襲した。此度もラシッド軍は敗走したが、トルコ軍が頑強に抗戦したので、味方は再び危く見えた。彼は若し此の一戦に敗れるならば、絶対に再起の望なきことを熟知して居た。それ故に彼は最早討死を覚悟して、股肱の騎士を激励し乍ら、トルコ軍の真正面に無謀なる突撃を試みた。トルコ軍は此の狂乱的なる威力の前に初めて動揺した。勝利は漸くイブン・サウードに傾き、トルコ軍は退却を開始した。彼の将士は勢に乗じて追撃した。砂漠の太陽の下に、炎熱と飢渇とに喘ぎつつ、重き制服を着し、重き背嚢を負へるトルコ兵は、一たび兵列が潰裂すれば、最早疾風迅雷の如きアラビア騎兵の敵でなかつた。かくてトルコ軍の大半は屍を烈日の下に曝し、少数の部隊のみが辛うじて出発点バスラに辿り着いた。

コンスタンチノープルでは、此の敗戦を以て、アラビアに対するトルコの権威に関するものと考へ、多数の軍隊を動員して、再度のアラビア征討を計画した。戦勝に酔へるアラビア人は、再びトルコ軍を粉砕せんと喜び勇んだ。但しイブン・サウードは冷静であつた。彼は彼の武力が到底強大なるトルコ軍と戦ふに足らぬことを知つて居た。それ故に彼は、トルコとの和平調停を、策略に富むクワイト君主ムバラクに依頼した。此の交渉は成功した。トルコの宗

主権を認め、且アナイザ及びブライダにトルコ兵を駐屯せしめるという条件の下に、トルコはイブン・サウードをナジドの支配者として承認した。やがてトルコの守備兵が到着したが、彼等は憐むべき孤立の状態に陥つた。遠路バスラから送られる一切の食糧や軍需品は、悉く途上で掠奪された。イブン・サウードは彼等に如何なる救護をも与へなかつたので、トルコ兵の多くはぼろぼろ服を纏ひ、食物を得るために武器を売らねばならなかつた。多くのものは病気に斃れた。大多数の兵士はあつさりと脱営した。而して守備兵全部が何時とはなく消え失せた。加ふるに此頃からトルコ自身の国情が次第に険悪となり、最早砂漠のアラビアなどに力を注ぎ得なくなつた。

いまやサウード、ラシッド両家の多年に亘るアラビア争覇戦が、漸く結末に近づいた。武勇に於ては人後に落ちなかつたが、謀はなかつたが、武者に走るので、両者とも常に味方の裏切りに苦しめられた。自己の陣営に於てさへ、不断に身辺の危険を感じた。イブン・サウードは、毎夜剣を腕にし、短銃を腰にして大地の上に眠るを常とした。

既にして一九〇四年四月中旬、イブン・サウードは、自己の陣地を距る二時間行程のムハンナ低地に、ラシッド軍が野営を張れることを探知し、不意に之を襲ひて遂にイブン・ラシッドの頸を打取つた。敵は総崩れとなつて敗走した。而してラシッドの後嗣は虚弱なる無能者なりしため、一族の誰彼が権力争奪のために互に屠り合つた。イブン・サウードの名は今や全アラビアを魅するに至つた。かくて一九〇六年暮までに、彼は事実上ナジト全部の主人公となるを得た。

固より此後も内憂外患は相次いで起つた。而もイブン・サウードは殆ど超人的なる努力によつて一切の艱難を克服し、一九一三年までに、ハサよりトルコ人を駆逐し去り、北方はクワイト国境、東方はペルシア湾岸、南方はオマン国境まで其の版図を拡めた。唯だ西方ヒジャズには、メッカ首長フサインが、次第に其の勢力を張り、一九一〇年ナ

ジドに侵入したが、大敗して軍を回した。

六　神国建設の基礎

総て偉大なる事業は、偉大なる信念から生れる。その志業が歩々実現するに従ひ、イブン・サウードが自己の使命に対する信念は、次第に強大になつた。アラビア人は、曽てはアラーの正しき教を礎とし、壮厳なる帝国を建設して之を統治せる偉大なる国民であつた。いま正しき信仰を失ひ、邪まなる路を歩むが故に、アラビアの統一は破れ、諸部族は嫉視・反目・抗争を事とし、或者は実に異邦人の臣従になり果てた。正しく強き信仰によつて再び彼等を結び昔日の偉大に復らしめることが、アラーより課せられたる神聖なる使命である。彼は此の信念を年と共に強くした。

従来とても彼は最も敬虔なる回教徒であつた。戦場に於て無所畏なりしと同時に、宗教の一切の儀礼を守ることに於て厳格であつた。彼は未だ曽て酒杯を手にせず、煙草を喫まず、戦陣の間に於てさへ祈禱と断食とを守り、その私生活に於て哈蘭の教ゆる掟と習慣とを厳守した。彼はマホメットの教訓に従ひ同時に四人以上の妻を有たなかつた。但しマホメットは、決して離婚を禁じなかつたので、彼は順次に其妻を取換へた。其数は恐らく百人を越えるであらう。但し彼が其妻を離婚した時は、多額の財産を与へて生活を保障した。または自ら第二の夫を撰んでやつた。而して夫婦生活以外に於ては、決して女を弄ばなかつた。放蕩を以て名高きクワイトの老ムバラクに対しても、又はムラ族の破戒に対しても、何等意に介せぬ如く見えた。彼自身も、蓄音機を買求めイギリスやアメリカのレコードに限りなき喜びを感じて居た。然るに彼の信仰が昂まるに従ひ、その宗教的生活は次第に厳格となり、心の至深処に響くアラーの声によつて一切を律せんとするに至つた。彼は他に対しても厳格に掟を守れと命じ初めた。而して無神的なる蓄音機を打砕き、彼の周囲の一切の音楽を禁じた。而して彼の戦争は、次第に

回教初期の信仰戦争の色彩を帯びて来た。

さてイブン・サウードの臣民の大部分は、砂漠のアラビア人であつた。市邑のアラビア人の数は、彼等に比べて極めて少い。而も砂漠の遊牧民は、最も頼み難き臣下であつた。彼等は昔ながらに不羈奔放である。彼等は遊牧民と呼ばれるが、羊とを追ひ乍ら、常に水草を求めて転々するが故に、郷土感情なるものを知らなかつた。彼等の本職であつた。故に砂漠には如何なる平和もなく、その牧畜は寧ろ第二の仕事で、邑々の襲撃と隊商の掠奪が彼等の本職であつた。故に砂漠には如何なる平和もなく、その旅行は恒に危険であつた。加ふるに彼等の気分は不断に動揺し、その機嫌は瞬間に豹変した。仇敵に変へ、一つの警句が号泣を哄笑に変へた。臣下の大多数が斯くの如き要素である限り、堅固なる国家は実現せらるべくもない。イブン・サウードは峻酷無比の厳罰によつて、彼等の匪賊性を膺懲せんとしたが、其の効果は一時的であつた。

かくて彼は、極めて単純ではあるが、若し成功するならば、千年以来の砂漠の民の全生活を、根本的に改造し去るべき計画を樹てた。それは遊牧民を諸処のオアシスに定住せしめ、之を村落の農民と化することである。彼は之によつて、遊牧生活並に部族生活を覆し、同時に、掠奪並に族闘の蛮風を根絶し、流血と貪慾とを生命とする彼等をしてアラー及び君主への奉仕を生命とせしめ、其上耕作地の増加によつて国庫収入を増し、ナジドの人的資源をも殖やし得るであらう。

彼はアラビアに於て、信仰のみが能く不可能を可能ならしめることを知つて居た。それ故に此の計画を先づ敬虔なる老父及び寺院の長老達に打明けた。数々の議論が行はれた後、長老達は次第に説得された。彼等は此の計画を彼自身の計画として、異常なる熱心を以て実行に努力することに決した。彼等は多数の説教師をして村々を遍歴せしめ掠奪と血闘の重罪なること、アラーに仕ふるは部族に仕へるよりも功徳なること、土地を耕すは天国に入る門なるこ

と、トルコの脅威に対して一致団結し、神に於て相結ぶ同胞たらねばならぬことを力説せしめた。

一九一二年、最初の宗教植民地がアルタキヤに建設された。アルタキヤは荒蕪の僻に久しく見棄てられて居た沃地である。此処に来りて生活を共にする者は、一切の部族や家門の相違を忘れ、同一信仰によつて結ばれたるアラーの赤子なることを示すために「同胞 Ikhwan」と名乗ることにした。彼等は先づ小さき礼拝堂を建て、次でその周囲に各自の泥小屋を作り、土地を配分して或は穀物を、或は椰子樹を植ゑた。壮丁には皆な小銃と弾薬とを与へて武を練らしめ、学校を開いて哈蘭を習はしめた。此の最初の計画は見事に成功した。アルタキヤはやがて村となり、次で町となつた。今日では住民一万を超え、北ナジドに於ける最も有力なる中心となつた。爾来数年の間に、水あり耕すべき土地ありて、而も顧みられざりし幾多の箇処に、同様の植民地が建設された。アミン・リハニによれば、一九二七年には其数七十三に達した。此等の「同胞」団こそは、実にイブン・サウードの最も信頼すべき常備軍であり、その神国建設のために最大の貢献をなした。「哈蘭に還れ、土に着け」を標語とせる此の同胞運動は、実に彼の政治的天分の絶好の証左である。

七　世界戦と大英帝国主義者の夢

地図を披いて点検すれば一目瞭然たる如く、アラビア半島は、イギリスの亜細亜領土と阿弗利加領土との間に横はる大なる障壁である。其上アラビアは、イギリスより印度に到る至要の大道即ち紅海航路と、ペルシア及びイラクに達する唯一の海路即ち・ペルシア湾航路を脅威する。若しイギリスがアラビア半島を支配し得るならば、軍事的・経済的に爾く重要なる二大動脈を、完全に確保し得るであらう。また其の宿年の夢なりしケープ・カイロ・カルカッタ政策の実現によつて、鉄路直ちに喜望峰とシンガポールとを結び、南阿より馬来半島に及ぶ広大なる国土をして悉くユ

ニオン・ジャックの旗風に靡かせ得るであらう。

かくて世界戦勃発し、トルコが独墺側に参戦するや、イギリス帝国主義者は、アラビア征服の好機到来したと考へた。彼等は先づアラビアをトルコより離叛せしめ、之によつてトルコの敗戦を早めんとした。アラビアにして一旦英国側に参加するならば、之を威嚇乃至懐柔して、自家の勢力下に置くことは、決して難事でないと考へた。一は吾がイブン・サウード時アラビアに於てイギリスが利用価値ありと認めたるものは、二人の君主の外になかつた。一は吾がイブン・サウードであり、他はメッカの首長フサインである。かくてイギリスは、早くも一九一四年冬、W・H・I・シェークスピア大尉をイブン・サウードに派して交渉の任に当らしめた。恰も此と時を同じうして、トルコはイブン・サウードを攻撃せしめんとした。此事英国と提携することを妨げるため、彼の宿敵ラシッド家に武器と戦費とを与へ、ナジドを攻撃せしめんとした。此事を探知せるイブン・サウードは、直ちに軍を率ゐて北上し、一九一五年一月ジャラブに於てラシッド軍と会戦したが雷に勝敗を決し得ざりしのみならず、イブン・サウードの諫止を聴かずして従軍せるシェークスピア大尉は、不幸にして戦死した。爾来イギリスは彼に対する積極的策動を中止し、唯だ此年十二月、サー・パースイ・コックスをして彼との間に友好条約を結ばしむるに止めた。

いまやイギリスのアラビア政策の中心はフサインに移つた。イギリスはフサインを助けてトルコ皇帝に拮抗する回教の宗教的首長たらしむると同時に、英国保護の下に強力なるヒジャズ国を建設し、戦後に於ける対アラビア発展の足場たらしめんとした。此のイギリスの政策に於て、最も重大なる落度は、イギリスが其の確立せんとする人物の検討を怠つたことである。フサインはメッカの首長として、永くアラビア政局並に回教圏内に特異の地位を占めて居たに拘らず、英人は彼の為人について殆ど何事をも知らなかつた。彼は貪欲饕くなき吝嗇漢で、年々メッカに集まる巡礼者を誅求して、莫大の富を積んで居た。彼は此等の巡礼者の報告によつて、総ての回教諸国から憎まれて居た。そ

れにも拘らずイギリスは、一切の甘言を以て彼の虚栄心に訴へ、一切の激励を以て彼の野心を煽り、トルコに対して奮起すべきことを勧めた。フサインは喜んでイギリスの勧請に応じ、一九一六年六月、公然トルコに叛旗を翻へし、自ら「アラビア諸国の王」と称するに至つた。英国は軍艦を派してジッダ及びワジを砲撃し、此等の港よりトルコ人を逐ひ、また埃及より軍隊を送りて、ヒジャズ鉄道をトルコの手から奪取せしめんとした。

北時アラブの舞台に登場せる白面短軀の一少年学徒が、名高きT・E・ローレンスである。彼は世界戦の生める最も特異なる人物の一人にして、其の華々しき功業の故を以て「アラビアの無冠王」と呼ばれ、その複雑多感なる性情に対する驚くべき理解、並に英国政府が与へたる無限の黄金の力によつて、忽ちアラビア人の絶大なる信頼を博し、就中フサインの美しくして浪漫的なる第三子ファイサルと肝胆相照らした。ローレンス及びファイアルは、ヒジャズ鉄道沿線並に北ヒジャズのトルコ軍隊に対して、神出鬼没の遊撃戦を試み、遂に完全に之を国外に放逐した。かくてヒジャズは名実共にフサインの有となつた。

イギリスは、フサインを籠絡して、トルコをアラビアより駆逐することに成功したが、ヨーロッパに於ける戦況は決して聯合軍側の楽観を許さず、多くの人人は寧ろ同盟国側に勝算ありと考へた。イギリスは、一九一七年セント・ジョン・フィルビー一行をリヤードに派遣し、英国側に参戦せよと交渉した。彼は使節一行を極めて鄭重に待遇した。潔癖なる教師や市民は、彼が不信者なる異邦人と語り、剰へ之を宮廷に宿泊せしめたことを憤慨した。彼は其の憤慨にも、また英国使節の懇願や威嚇にも、等しく冷静であつた。彼は英国と親善を保ち乍ら中立を守ることが、最も賢明なる政策であることを熟知せるが故に、容易に使節の言に動かされなかつた。加ふるに彼は、其の宿敵フサインが、彼に幾倍する国から毎月五千磅の補助金を受けて、時局を静観することとした。

る莫大なる補助金を英国より与へられ、次第に其の勢力を強めつつあることに、大なる不満と憂慮とを抱いて居た。

蓋しイギリス帝国主義者の夢は、フサイン一家を傀儡として、大アラビア主義を実現するに在つた。彼等はフサイン一家をしてヒジャズ、トランスジョルダニア、イラク、シリア、クルジスタン諸国の王位を占めしめ、此等諸国を聯合又は統一して一個のアラビア帝国となし、之を英国の保護下に置かんと企てて居た。一九一八年、世界戦は同盟国側の屈服を以て終りトルコ帝国が全く崩壊し去りし時、この計画は順調に進みつつあるかに見えた。此の壮厳なる夢が若し実現されたならば、英国の支配は実に遠く支那国境より地中海に及び、亜細亜に於ける英国勢力は、頓に倍加すべき筈であつた。その成功を妨げた原因は、何人も予期せざりしトルコの急速なる復興、英国近東政策に対するフランスの強硬なる反抗、回教圏全体に漲るイギリスに対する不信であるが、就中重大なる障碍は、フサインとイブン・サウードの深刻なる対立と抗争、而して後者の最後の勝利である。

イギリスの後援を頼めるフサインは、一九一八年、世界戦の休戦直後、三回に亙りてヒジャズ、ナジド国境地帯のクルマを襲ひ、三回とも撃退された。もと此地はフサインの勢力下に在つたが、ワハブ宗の熱心なる伝道者が、首長ルワイ以下市民を改宗せしめ、イブン・サウードの治下に入らしめたものである。そは豊沃なるオアシスに囲まれる富める町で、砂漠のアラビア人は其の羊と羊毛とを此町に運びヒジャズ商人の齎らせる貨物と交換する商業中心地であり、其上ヒジャズ国に至る通路を扼する要衝であつた。フサインの侵入は其の都度市民自身の手で撃退された。首長ルワイは援助をイブン・サウードに懇願したが、彼はイギリスの意図を顧慮して容易に之に応じなかつた。

然るに一九一九年に入りて、フサインは更にクルマ侵略を計画した。彼等の憤激は極度に達し強ひて之を制すればイブン・サウードに離叛すべき形勢であつた。

一九一九年三月、アラビアの風雲急にして、若し英国の干渉又は調停なくば、両国は必ず干戈を交ふべしとの報がロンドンに達した。両国は等しく英国より補助金を仰ぐ「友邦」であり、両国の交戦は全回教国に好ましからぬ反響を惹起すべく、其上両国はそれぞれ英国に対して訴ふるところありしが故に、英国政府は、外相カーゾン卿を委員長として会議を開き、対策について協議した。この会議に於て陸軍省側は、問題を純然たる軍事的立場より研究し、両国軍備を精細に比較し、アサイン側の軍備は有らゆる点に於て遥に優秀なるが故に、一旦干戈を交ふれば勝利は決定的にフサインの手に帰すべしと判断した。カーゾン卿は「吾人の政策はフサイン援助政策なり」と言明し、フサインのクルマに対する主張を是認して、イブン・サウードに譲歩を求め、若し聴かずば補助金交附を廃すべしと通告した。而も此の威嚇は遂に無効であつた。彼は英国に対し、昂然として予は予の名誉に命ずる所に従つて行動すべしと答へた。

イギリスの援助に勇躍せるフサインは、其子アブダラーに、大砲及び機関銃を以て装備せる正規軍四千、アラビア雑軍一万を与へ、クルマに向つて進軍せしめた。アブダラーはトゥラバ沃地に至りて陣営を張り、クルマ進撃の準備を整へんとした。時にイブン・サウードは、リヤード軍を西南に進めてサカ沃地に駐屯して居た。而も勇敢なるクルマ首長ルワイは、敵がトゥラバに陣せりとの諜報に接するや、イブン・サウード軍の到着を待たず、暗夜に乗じて疾風迅雷の如くトゥラバを急襲した。アブダラーは寝巻のまま馬に飛び乗りてメッカ目指して逃げ出した。アラビア雑軍は潰散した。正規軍四千のうち、亡げて命を助かつた者は百に過ぎなかつた。大砲・小銃・機関銃、其他敵の遺棄せる数々の軍需品が、悉く分捕られた。フサインの軍隊は完全に撃滅された。やがてイブン・サウードがトゥラバに到着した。最早彼のメッカ進軍を妨げる如何なる武力も無くなつた。タイフの民は恐れて逃げ隠れた。巡礼のために諸国よりメッカに来れる幾万の信者は、戦禍を恐れて雪崩の如くジッダの港に押寄せた。フサインは狂気の如く

英国に援助を求めた。

英国は事の意外に驚いた。そは此時初めてイブン・サウードの実力を知り、其の勢力の容易に破り難きを知つた。戦後の処理に忙殺せられつつありし英国が、アラビアに軍事的干渉を試みる如きは、思ひも寄らぬことである。かくて英国は、クルマに対するイブン・サウードの主張を承認せるのみならず、トゥラバをも彼の版図とすることを承認し、辛うじてイブン・サウードのメッカ侵略を思ひ止まらせた。而して英国は今後も年額六万磅の補助金を彼に与へることにした。此年の暮、イブン・サウードは、聯合軍勝利に対する祝辞を述べ、且各般のアラビア問題を協議するため、其子ファイサルを英国に派遣した。此の少年使節は、当時僅に十四歳であつたが、甚だ好き印象を英国の各方面に与へた。

トウラバの大敗によつて著しく面目と勢力とを失墜せるフサインは、サウード家の宿敵ラシッド家を煽動し、武器と戦費とを与へて南下せしめんと策動した。然るに恰も此時、アラビアに珍しからぬお家騒動が、ラシッド家にも突発した。一九二〇年秋、ラシッド家の当主サウードは、一日王族廷臣を引具して、ハイル郊外に楽しきピクニックを催した。其時行はれた小銃射撃の競争に、王族の一有力者アブダラー・イブン・タラルが、事もあらうに当主サウードの頭を射的に択び、見事に之を打当てた。但しアブダラーは即座に射殺され、故主の甥アブダラー・イブン・ミトアブが位を嗣いだ。而して新王は柔弱無能の青年なりしを以て、国内は動揺した。北の形勢を看取せるイブン・サウードは、一九二一年七月、決然大軍を率ゐて北上し、殆ど抵抗を受くることなくしてシャマル諸族を平らげ、遂にハイルを囲んで之を降した。ラシッド王族は、名目は賓客として、事実は捕虜として、之をリヤードに護送し、邸宅を与へて永住せしめることとし、以て今日に及んで居る。

さてハイルの西方には、遠くシリア及びパレスティナに連る茫々たる曠野があり、ルワラ諸族が駱駝と羊とを牧し

て、之を彼等の天地として居た。此の曠野の中央、リヤドを西北に距る七百哩の地に、ジャウワ、サカカの二つの大なるオアシスがある。此処よりスィルハン河谿に沿ひて西に向へば、二百五十哩にしてパレスティナに到る。ワハブ伝道者等は此の曠野の間に熱心に信仰を宣伝し、既に多くの帰依者を得てゐたが、今やハイルを征服せるイブン・サウードは、其の猛烈なるイクワン軍を派遣し、一九二二年夏までに此の地方をも其の版図とした。ジャウフは北アラビアの重要なる一中心にして、エジプトよりバグダードに、シリアよりペルシア湾に到る隊商路は、此のオアシスを通らねばならぬ。此地に拠る者は、パレスティナ、シリア、トランスジョルダニアを脅威し得る。英国は今更の如く危険を感じ、イブン・サウードはアラビアの勢力均衡を根柢より覆したと憤つた。而して使節を派して国境協定を議せしめた。会議は先づ一九二二年秋、ハサ海岸ウカイルに於て開かれ、次で一九二三年秋、クワイトに於て開かれたが、英国側の要求が過大なりしため、協定を見るに至らなかつた。

八　聖　戦

さてフサインが、其の貪婪と誅求との故を以て、全回教圏内に甚だしく不評判なりしことは既に述べた。全世界より集まる回教徒のメッカ参拝が、ヒジャズの最大の財源であつたが、彼は此の利益を壟断した。飲料水の値段が羊の販売、巡礼者への食物及び飲料水の供給、海港よりメッカ及びメヂナへの貨客運搬を独占したので、多数の巡礼者は堪へ難き渇のために死んだ。全く衛生医療の設備を怠つたので、巡礼者は絶えず匪賊に襲はれた。彼は斯くして集めたる黄金を外国の銀行に貯へた。斯かる事情の下に、巡礼者の数が年々減少して行つた。之による減収を補ふために、彼は官吏の俸給を減じ、巡礼者及びヒジャズの人民に一層重く課税し、そのために暴動をさへ惹起した。諸国の回教徒は皆な吝嗇な彼を憎んだ。

其上彼はイギリスとも確執を生じた。彼は戦時中にイギリスが彼に約束せる一切を、文字通りに履行せんことを強要した。彼はシリアより仏国を放逐し、パレスティナよりユダヤ人を放逐せよと英国に求めた。彼はパレスティナ及びシリアのアラビア人を煽動し、英仏に対して叛旗を翻へさせんとした。英国はローレンスを派遣して之を懐柔説得せしめようとしたが、遂に無効であつた。彼の両子、即ちトランスジョルダニアの王となれるアブダラー、イラクの王となれるファイサルは、一九二三年夏、此の頑冥なる老父を宥め、イギリスと妥協して、虎視眈々ヒジャズを窺ひつつあるイブン・サウードに備へねばならぬことを極力忠告したけれど、これまた遂に無効であつた。

かかる間に一九二四年となつた。而して此年三月三日、トルコは突如政教分離を断行し、カリフをコンスタンチノープルから放逐し去つた。此事は全回教圏を驚倒せしめたが、やがて一層驚くべき事件が起つた。それは三月六日、老フサインが自らカリフの尊号を称へ、全世界の回教徒に向つて精神的臣従を求めたことである。全回教圏、わけてもアラビアの回教徒は、之を聞いて火の如く憤慨した。無神無慚の老爺を神聖なる位より引下ろせと叫ぶ声が、一斉に昂まつた。

イブン・サウードとフサインとは、晩かれ早かれ勝負を決せねばならぬ間柄であつた。之を政治的に考へれば、フサイン及び其の両子が西北に於て彼の領土を包囲せるが故に、之を打破せざれば彼の発展は不可能となつた。之を宗教的に観れば、フサインは断じて聖都の守護に当らしむべき人間でなかつた。彼は聖都に於て数々の異端の儀礼を許し、一切の邪悪を横行せしめ、剰へ信者至大の勤行たる聖殿参拝を至難ならしめて居る。彼を聖都より放逐せずば、回教の真実無垢の信仰が、四海を光被すべくもない。それ故に彼は夙くより聖都奪回を祈念して居た。而して彼の臣下、わけてもイクワン団は此点に於て彼よりも性急熱烈であつた。彼等は幾度か猛烈にメッカ進撃を彼に強要した。彼の容易に起たざるを見て、彼等は其の因循怯懦を攻め立てた。凡そアラビア人には希有なる忍耐と自重とを以て、

イブン・サウードは奮起の準備成り、機運熟するまで待つた。遂に其時が来たのだ。

イブン・サウードは、イクワン団の諸統領、教師たち及び族長たちをリヤードに招いて会議を開き、フサイン征討の可否を諮つた。会衆は異口同音に「フサイン討つ可し」と唱へた。わけてもイクワン団は即刻進軍すべしと絶叫した。イブン・サウードは、彼の満々たる戦意を確めて意を強くしたが、いつも乍らの周到なる用意を怠らなかつた。メッカに単にアラビアの一都市に非ず、予言者此地に生れ、回教至聖の神殿鎮座する全世界回教徒の首府である。それは宗教的に一個の国際都市なるが故に、其の攻略に着手する前に、予め万国回教徒の意向を探らねばならぬ。かくてイブン・サウードは、先づフサイン征討の宣言を諸国に伝へた。諸国は之に対して殆ど応ふるところ無かつたが、唯だ印度七千万の回教徒は、満腔の賛意を表明して彼を激励した。

内外の準備成りて、漸く彼は行動を開始した。彼はイクワン軍の一団をイラク国境に、他の一団をトランスジョルダニア国境に派して、此等の勇武なる統領イブン・ビジャドをして、ヒジャズ国境に出没して諸邑を遊撃せしめた。八月下旬のこと、フサインの長子アリが暑をタイフに避けて居た時、ビジャド部下の一隊が嵐の如く来りてタイフを襲うた。不意を打たれしアリは、守備隊の兵力を以てしては勝算なしと考へ、之を率ゐてメッカに向つて逃走した。タイフ市民は危害を蒙らざる条件の下に無抵抗に降服した。然るに軍隊の城門に入るや、哨兵詰所より小銃を発射したので、憤れる軍隊は終夜民家を掠奪し、老幼男女三百を殺戮した。市民は潮の如くメッカを目指して避難した。アリはハッダ高原に陣してビジャド軍を阻止せんとしたけれど、激戦の後に敗走してメッカに帰つたが、老フサインはビジャドに逃げた。

メッカに帰つたが、老フサインの憤慨甚しく、彼を引見することを拒んだので、遂にジッダに逃げた。老フサインは傷ける虎の如く咆哮して、メッカ市民の奮起を促したが、何人も之に応ずる者なかつた。彼等は平素よりフサインの苛斂誅求を憎んで居た。今や彼等はまた音に聞ゆるワハブ軍隊の剽悍に大なる恐怖を抱いて居た。

令に従はざるのみならず、或は彼を殺して其の不義の富を分配せよと叫び、或は彼の首をワハブ軍隊に献じて其の怒りを宥めよと叫ぶに至つた。フサインは漸く自己の立場を認識した。而して積めるだけの財宝を数台の自動車に積み匆惶としてジッダに亡命した。十月五日、彼は遂に位を長子アリに譲り、ヨットに家族と財宝とを載せ、ジッダを出航してアカバに到り、次でキプロス島に落着き、余命を保つこと五年にして、寂しく此島に歿した。

ジッダに於てヒジャズ王位を継ぎたるアリは、英国の援助を歎願したが、英国は耳を藉さなかつた。彼は一旦メッカに帰つたが、その到底守り難きを知り、十月中旬退いてジッダに立籠つた。其後にワハブ軍隊は何等の抵抗を受けずしてメッカに入り、イブン・ビジャドが治安維持の責任を負うた。而してイブン・サウードの厳命を奉じて、堅く殺戮並に掠奪を戒めた。唯だ彼等は純正なる信仰に背くものとして、多くの偶像的遺物乃至歴史的紀念物を破壊した。

さてメッカの捷報リヤードに達するや、イブン・サウードは長子サウードを留めて首都を守らしめ、軍容を整へてメッカに向つて進発した。行軍二週間、陣営を張る毎に遠近より雲集せる民衆の歓呼によつて送迎された。第十五日目、彼はメッカを繞る丘陵を越え、聖都を臨む広野に達し、茲に駱駝を駐めて野営を張つた。而して剣を解き、王者の衣裳を脱ぎ、二片の白布より成る巡礼着を纏ひ、戦勝将軍としてに非ず、敬虔なる一信者として聖都に入り、神殿に詣でて粛かに朝覲の礼を行つた。時は一九二四年十二月五日のことである。

さてワハブ軍がメッカに駐屯してイブン・サウードの来着を待ちつつありし間に、ジッダに拠りて父王の位を継げるアリは、城壁を修理し、塹壕を掘り、二台の飛行機まで購入し、心密かに列強の支援を期して、荐りに防備を堅くした。メジナもまた之に倣つた。やがて一九二五年に入り、ワハブ軍は徐ろにヒジャズ経略を開始し、十二月五日先づメヂナを降し、更に数日の後メヂナの海港ヤンブを見て、十二月十九日王位を退き、即日英船に乗じてアデンに去り、次でバグダードに赴きて、弟イラク王ファイサルに身を寄せた。かくて十二

月二十三日、イブン・サウードは堂々たる威容を整へてジッダに入り、市民に臣従を誓はしめた。そのメッカに凱旋するや、メッカの長老達が出でて彼を迎へ、市民がハブの緑旗が翩翻として翻つた。戦は茲に終り、ワジャズ国王に推戴せる旨を告げた。

越えて一九二六年正月八日、年頭金曜の祈禱日にイブン・サウードは平服のまま寺院に赴き、静に説教を聴き、厳かに礼拝を終りたる後、使を派して市の長老達を召集し、正式にヒジャズ王位に即く旨を宣告し、次で独り内庭に入りて曩時の祈禱を捧げた。然る後メッカ郊外の要塞から百一発の祝砲を発たしめた。これが実にイブン・サウードのヒジャズ王即位式であつた。

ソ連は列国に先んじて新王国を承認し、イギリス、フランス、オランダ之に次いだ。やがてトルコ、ベルギー、スキス及びドイツも之を承認した。一九三三年に至りナジド、ヒジャズ二重王国は、サウド・アラビアという国名に改められた。イブン・サウードがヒジャズ国王に即位せる一月八日には、爾来毎年荘厳なる紀念祝祭が行はれて居る。蓋し此日を以て新しきアラビア歴史が始まつたからである。

九　アラビア統一

さてヒジャズの諸部落は、古来最も度し難き剽悍無頼の民であり、恒に為政者並に巡礼者を苦しめて来た。多くの人々は、ヒジャズ新王も必ず彼等の統治に手を焼くだらうと信じて居た。然るにイブン・サウードは、一年ならずして此の難治のヒジャズに完全に治安を確立した。彼は主なる族長等を召集して、部族内の行政には殆ど何等の干渉を行はぬ代り、各部族内に於ける治安の維持に対しては、絶対の責任を負ふべきことを厳命した。一部族内に治安を紊る者ある時は、族長は之を処分して国王に報告せねばならぬ。若し処分又は報告を怠る時は、隣接族長より戎告を与へ、若

し聞かずんば武力によつて之を懲戒せねばならぬ。両者とも之を怠る時は、国王の軍隊が両者を討伐するであらう。

旅長等は此の命令に服する外なかつた。而して懲罰は峻厳を極めた。かくて数月ならずして族闘は止み、砂漠の匪賊は影を潜めた。アラビアの現地を熟知せるセント・ジョン・フィルビーは、今日世界の如何なる国家も、アラビアの如く犯罪の少なきはなく、而もアラビアの如く犯罪の警察費の少なきはないと言つて居る。事実イブン・サウードがヒジャズに君臨して以来、メッカ巡礼は未曽有に完全になつた。一九二七年の巡礼者は、第二十世紀に入りて第一の多数であつた。

彼は其の国土を統治するために、文明の利器を採用した。十年以前まで、砂漠のアラビア人は容易に政府に対抗することが出来た。政府の軍隊は、その装備に於て毫も彼等に優るところなく、而も行動の敏活と砂漠の馳駆に於て、却つて彼等に劣つて居た。然るにイブン・サウードの政府が、無電を利用し、飛行機を利用し、自動車を駆使するに及んで、彼等は最早無力となつた。一九二四年、ヒジャズには僅に三台の自動車があつた。イブン・サウードはメッカとリヤードの間を白動車で往復する。イラク政府及びアラビア政府は、印度及びイランよりの聖地巡礼を容易ならしめるため、バグダードよりメッカに至る自動車道路の測量を始めた。エジプト航空会社は、数時間にして巡礼者をエジプトよりジッダ港に運ぶが故に、曽ては苦難の数週間を要したる旅程が、今や三日で足りることとなつた。近き将来に於て、エジプト、アラビア、イラク間に定期の航空聯絡が必ず実現されるであらう。

然るに此のアラビアの近代化は、厳格なるワハブ宗徒の決して喜ばぬところであつた。イブン・サウードは神国の礎を置かしめ、砂漠の信仰の宣布のために戦ひ来れるアラビア清教徒は、自動車や無電や飛行機をば、悪魔の発明にかかるもの、教祖や聖者たちの知らざりし邪教の魔術として憎悪した。加ふるに彼等は、イブン・サウードの政治的改革が、アブラハム以来存続し、且永遠に存続すべき砂漠の自由なる生活を脅すべきことを恐れた。イブン・

サウードは、リヤードに教役者たちを集め、諸種の新奇なる機械の使用が、決して回教の本義と背馳するものに非ざることを懇ろに説教した。さり乍らイクワン団の古強者共は、此の新精神に順応するを得なかつた。業の際に最も勲功ありし聖戦の勇士は、必ずしも建設の際に於ける有能者でない。従つて戦塵一たび収まれば、彼等は次第に華々しき舞台から遠ざかり行く。此の不安と不満とが、三年に亙る内乱を惹起した。イブン・サウードは希有の忍耐と、適切なる手段と、驚くべき寛大とを以て此の難局を処理した。彼は熟烈なるワハブ宗徒ファイサル・ウド・ダヰシュを首領とする叛軍を幾度か懐柔し、幾度か撃破したが、一九三〇年暮に至り、バティン低地の会戦に於て、遂に之を撃滅した。而して其後二年にして再び起れる叛乱をも容易に鎮定した。

イブン・サウードの君臨するヒジャズ及びナジドは、同じくアラビアの国ではあるが、甚だしく国情を異にする。両国は数百年に亙る宿敵であり、国民は互に他を憎み、一は他を以て濱神無頼の外道と憤り、他は一を以て偏狭無智の蛮民と蔑んで来た。この両者を一律に治めることは不可能なるが故に、稍々文化の程度高きヒジャズと、原始的なるナジドとを二個の行政区劃に分ち、長子サウードを後者の太守とし、それぞれ適当なる方法によつて統治することとした。ナジドの民は、その頑冥固陋に拘らず、信仰に於て純一熱烈、彼に対して忠誠無雙である。彼等は外国人を嫌悪する。而してイブン・サウードは、彼等の純情を失はしめないために、外国人及び外来思想との急激なる接触を避けしむるを得策とし、従つてナジドの急速なる近代化を手控へした。彼はリヤードに於ては、昔乍らのサルタンとして、毎木曜日には教役者や長老を集めて国事を相談する。或時の会議に於て一教役者が、サルタンの口髯は予言者のそれと異なり、長きに失すると糺弾した。彼は早速理髪師を呼び、彼等の面前で口髯を短く苅込ませた。

而もヒジャズに於ては、着々之を近代国家たらしむべく努力した。学校を設けて教育を奨励し、留学生を国外に派

遣し、国立銀行の創設、鉄道の建設、鉱山の開発、電力の供給のために外国資本を誘致した。行政部門には有能なる国外のアラビア人を挙用した。例へば最初に彼の外務大臣として、ヒジャズ占領直後の国際的紛糾に善処せるは、イラク国モスルに生れしアブダラー・アル・ダルムジであり、一九二九年彼の後を継げる年少気鋭の外相はシリア生れのファド・ハムザである。また文部大臣ハフィド・ワフバはエジプト人であり、列強との交渉に重大なる役割を務めた。以上二人の外、大蔵大臣アブダラー・アル・スライマン及び無任所大臣アブダラー・アル・ファドルは、共に有為なるナジド人であり、前両者と併せてイブン・サウードの四天王と呼ばれて居る。

イブン・サウードの本願は、全アラビア諸国の独立並に統一であつた。彼はアラビアの貧困無力を克服するためには、全アラビアの力と資源とを、進歩と自由とに向つて統一集注せしめねばならぬことを熟知して居た。かくて半島の制覇漸く成るや、彼は直ちにアラビア諸国の提携を企て、一九三〇年には宿敵ファイサル王を誘ひ、イラク国との間に友好条約を結んだ。

次で幾多の困難を排して、一九三二年トランスジョルダニア王アブダラーとも友好条約を結んだ。而して一九三〇年には、ヒジャズの南に横はるアスィルを併合し、ヤマン国と境を接するに至つた。

ヤマンはローマ人の所謂「多幸のアラビア」にして、印度洋より吹寄せる風が多量の雨を降らすが故に、アラビア半島に於て地味最も肥沃に、人口最も稠密なる国土である。其民はシア派に属してザイド宗を信じ、国王は同時に教主にして、祭政一致の国柄である。現国王ヤフヤは、熱心なる信仰家であり、強き性格の持主であり、覇を南アラビアに称へんとする大志を抱いて居るので、イブン・サウードの擡頭を喜ばず、従来屢々紛争を生じたが、イブン・サウードは能く之を隠忍して来た。

然るに一九三四年に至り、ヤマン王はサウド・アラビアとの国境地帯に在る数部落を占領し、且サウド・アラビア

領内人民の叛乱を助けたので、イブン・サウードは失地奪回のため、遂に此春出兵するに決した。ヤマン王はトルコ軍人の力を藉りて軍隊を再編し、之を近代的に装備してナジド軍と戦つたが、到底其敵でなかつた。ナジド軍は破竹の勢を以て繋争地帯を奪回し、進んで沿海低地を侵略し、フダイダ港を占領した。ヤマン国の首都サナの没落は、今や時間の問題となつた。

是より先きエルサレム世界回教会議は、一九三一年十二月の会期に於て、実行委員を選任して之をメッカに常置して来たが、該委員会は使者を両交戦国に派して調停を提議した。両国は此の提議を容れて干戈を収め、此年六月タイフに於て平和条約の締結を見た。条約の前文には「アラビア国民の統一を促進し、其の地位を昂め、其の尊厳と独立とを維持するため」の条約なることが明記された。而して「両国民は一体にして互に他の利害を以て己れの利害とすべきことを宣言し、両国は一切の外交上の問題に於て一致協同の行動を取るべきことを約束し、且アラビア半島に対する外国の攻撃に対して共同戦線を張るべきことを声明した。かくてヤマンは実際に於てサウド・アラビアの保護国となつた。十年以前、イブン・サウードの軍隊がタイフに入りし時、アラビア統一の基礎が初めて置かれた。十年以後、一九三四年六月のタイフ条約によつて、統一の大業は一応遂げられたのである。

一〇　むすび

年少にして故国を逐はれ、艱難辛苦を嘗め尽した亡国の王子が、一切の難局を克服して、遂に全アラビアに君臨するに至つた。まことにイブン・サウードの生涯は、波瀾重畳を極めて居る。而も彼は東洋の豪傑には珍しく、幸運と成功とに恵まれても、決して倨傲慢心に陥らなかつた。彼の生活は、昔も今も厳格にスパルタ的である。彼は宮殿に眠る時でも、野戦用の鉄製寝台を用ゐて居る。衣服には粗き麻布を用ゐ、絹布や刺繍を施せるものを用ゐない。彼の

唯一の装飾は髪を飾る細き金環である。食事は概ね一片の肉、一皿の米、一握のなつめ椰子実で満足する。彼の頭脳は、精密機械の如く働き、異常なる肉体に殆ど休息を与へない。その睡眠は青年時代から三時間で足りた。彼の頭脳は同時に数人の秘書に手紙や命令を書取らせ、同時に数人の客と応対して、決して要件を取違へることがない。

彼は断乎として殆ど疲労することを知らない。彼は同時にアルコールとカルタと女遊びを斥け、飲まず、打たず、買はざる生活を続けて来た。彼の唯一の慰楽は、寸刻を惜みつつ昼間の仕事を終り、日暮れて妻の許に行きたる後、広間に帰り来りて夜もすがら友人達と会談することである。話題は数限りなく多い、政治に関することは固より、人物の月旦、馬や駱駝の話、在りし日の回想談、わけても宗教上の問題、一として対話の題目とならぬはない。彼は高い安楽椅子に坐り、両脚を組み、上衣を攪ねのけ、獅子の前脚の如き巨大なる両手で顎を支へながら、或時は声を潜め、或時は喇叭の如く声を響かして語る。彼の座談は極めて巧妙で、強く印象的な身振りが、一層相手に深い感銘を与へる。やがて東天漸く白み、客人たちは奴隷に導かれて辞し去れる後、彼は独り宮殿の屋上に昇り、恭しく跪坐して朝の祈禱を献げる。然る後に彼は己れの居間に降りて行く。時としては急を要する用事のために、秘書が既に彼の来るのを待ち受けて居る。そのやうな日には、彼は一睡もせずに昼間の仕事に取りかかる。

その体質は超人的であり、その神経は鋼鉄であつても、彼の如く肉体を酷使すれば、時ありて健康を害せざるを得ない。其上、彼には肝臓の持病がある。不休不眠の活動が長期に亙れば、彼の喜怒哀楽が常軌を逸して激しくなる。彼は呵々として大笑するかと思へば、忽ち深き憂鬱に沈む。かかる時に彼の側近に侍る者は、雨の如き拳固を覚悟せねばならぬ。但し彼は必ず己れの非を覚るが故に、その打擲に対して篤く償ふを常とする。或時リヤード宮殿の内蔵シャルフープに些かの落度があつた。それが運悪くイブン・サウードのいつもの不機嫌の時であつた。彼は声張り

上げてシャルフーブ及びその先祖をまで叱り飛ばした後、跣足でハサまで歩いて行けと怒鳴りつけた。六十歳を越した憐れなシャルフーブは、即座にサンダルを脱いでハサに向はねばならなかつた。二日の後ダフナまで辿り着いた時イブン・サウードの使が追ひついて連れ戻した。この苦難の償ひは艶色無雙の一美女であつた。

彼は回教本来の精神に則りて、徹底して平民的である。全アラビアに君臨する今日でさへ、大名も奴隷も、富者も貧者も、等しく彼に謁見を求めることが出来る。或はメッカの宮殿に於て、或は広大なるリヤードの賜謁処に於て、或は野営の天幕の前に於て、山の如き肩を聳やかし、澄みて鋭き両眼を瞠り乍ら、身には粗末なアラビア服を纏ひ、イブン・サウードは彼等の請願や愁訴に耳傾ける。彼は一切を「神の掟」によつて立ちどころに判断し、宣告し、処分する。そは衆目の視るところで行はれるが故に、迅速・適正・峻厳でなければならぬ。まことに彼の政治は、古代カリフのそれを彷彿せしめる。一例として彼の裁判振りを挙げよう。

一婦人が其夫を殺したという理由で、加害者に死刑の宣告を下してくれと願ひ出た。事情を糺せば、婦人の夫が椰子樹の下に坐つて居た時、樹上で椰子実を採つて居た加害者が、四十尺も上から夫の上に転落し、其頸を打つて絶命させたというのである。イブン・サウードは、其の転落は故意か過失かと訊ねた。婦人は、故意にせよ過失にせよ、自分の夫の死んだことは確実だと答へ、イブン・サウードが賠償金を受取つて辛抱せよと勧めても聞かなかつた。「宜しい」と彼は言つた。「然らば汝は其の椰子樹に登れ、予は加害者を其樹の根許に縛り置くが故に、四十尺の上から落ちて彼を殺せ」。婦人は賠償金で満足した。

一九三五年のカーバ神殿大祭第三日、イブン・サウードの神殿参拝中に、ヤマンの刺客四人が、突如凶刃を揮つて彼を刺さんとした。彼は泰然自若として、襲ひかかる一人の腕を押さへ「殺すな、縛れ！」と命じた。彼の左右に従つて居た二人の護衛が、刺客の三人を斬り、一人を捕へたので彼の生命は無事なるを得た。此等の護衛に、幼少の時

より彼と共に育ち、四十年の嶮難崎嶇を彼と共に渡り来りし忠誠無比の臣下である。而も神の掟は、聖殿に於て血を流せる者を死を以て罰するのだ。両人は死刑の宣告を受けねばならなかつた。イブン・サウードは、死刑の前夜に親ら両人を監房に訪ね、終夜彼等と共に祈り、彼等と共に語り明かした。翌朝両人は、主君万斛の涙に慰められ、甘んじて死に就いた。

マホメットは「勝算確実なる時にのみ聖戦を宣すべし」と言つたと伝へられる。イブン・サウードは貧しく乏しき砂漠の国であり於て、外交家並に政治家としての偉大を立証して居る。それアラビアは、アラビアに比べて遥に富有なる上に、その諸国である。此等の国々は、アラビアに比べて遥に富有之を囲むものは漠然として居る。イブン・サウードが四方に勢威を揮ふに従ひ、ワハブ軍隊の意気頓に軒昂を加へ、昔日の偉大なるアラビア帝国の夢を描き、出でて比等の国々を征服せんと熱望するに至つた。其為には幾たびか絶好の機会があつた。例へば一九二二年イラクに叛乱起り、イギリスは窮地に陥つた。此時も彼は容易にイラクに侵入し得たのである。世界大戦の直後にも、トランスジョルダニア進出は困難でなかつた。スィハルン谿地を北上してシリア廻廊を占領せる時も、之を固持することが不可能でなかつた。それにも拘らず彼は逸り立つ軍隊を抑へ、堅く猪突を慎しんだ。彼は此等の国々を以て彼を包囲する者は、英国に外ならぬことを知り、英国に対して大なる憤りを抱いて居た。而も彼は早急に英国を敵とすることの不利を熟知し、隠忍して時を待つた。之をメッカのフサインの誇大妄想的態度と比較する時、吾等は彼の成功し、此の失敗せる所以を明白に知り得る。

イブン・サウードは、時に砂漠のクロムウエルと呼ばれて居る。神に対する信仰が、一切の行動の礎となつて居る点は、まさしくクロムウエルに共通である。少年時代に父から与へられた厳格なる鍛錬は、彼を最も敬虔なる回教徒たらしめた。彼は公けの場処で人民と共に在る時も、戦陣の間に馳駆する時も、外国使節と折衝する時も、独り私室に坐する時も、

時も常に神と偕に在ることを信じて疑はない。重大なる事件に当面する毎に、彼は先づ必ず退いて神に禱る。彼はふ――予は第一に回教徒、然る後にアラビア人、而して常に神の僕であると。神は彼に命じて総てのアラビア人を一個の国民に結成せしめ、之を導いて祖先の偉大を再現せしめ、神の言葉を全地に行はしめんとする。彼は斯く信じて今日まで戦つて来た。而してアラビア統一の使命は既に之を成就した。今後も彼は一層その使命に精進するであらう。

アメリカに帰化せるシリア生れのアラビア人アミン・リハニといふ人がある。一九二二年アラビアを旅行してイブン・サウードと会見し、初対面の印象を日記に書き留めた。イブン・サウードの為人を知るべき好個の一資料なるが故に之を摘記して比の一文を結ぶ――「予はアラビアの総ての国王と会つたが、此人より偉大なる王は一人もない。彼は言葉も偉大である。彼の性格は複雑である。握手をする時、此人の反対の気質が現れる。彼は予に対して、予自身に関する色々の報告を披露し、また杖を以て地面を打つ時、彼が予のことを予自身よりも好く知つて居ると云ふ。彼は初対面に際して、恐れず包まず其の心情の一部を予に吐露する。彼は自分を知り、且彼の人民を知る。彼は吾等はアラビア人だと言つた。彼の衷なる人間は、国王よりも偉大である。何となれば彼は尊号によつてに非ず、人格によつて其民を治めて居るからだ。予は彼に対して好悪の情を有たず、イギリス側の意見にも耳を藉さず、虚心坦懐イブン・サウードの前に出た。実際予は冷静なる批判的の心構へで彼に来たのであるが、一見して彼は予の心を捉へてしまつた」。

新トルコ建国者ケマル・アタトュルク

一　世界戦前に於ける列強のトルコ争覇

一九一四年、世界大戦が勃発した丁度其年の二月、重徳来助氏の好著「瀕死の土耳古」が刊行された。重徳氏は此書に於て下の如く断言して言ふ、土耳古は死に瀕せり、唯だ時間の問題を余すのみと」。世界戦争前に於てトルコを以て停め難き崩壊の一路を辿りつつあるものは、決して重徳氏のみではない。当時の欧羅巴列強は、尽くトルコの運命を斯くの如く判断せるものと確信して居た。従つて世界戦前に於けるトルコ問題とは、如何にして此の瀕死の老帝国を処分し去るかといふ事であつた。

試みに地図を披いてトルコの位置を見よ。そは実に欧羅巴と亜細亜を結ぶ橋でないか。此橋より印度に到る陸上唯一の捷径である。而して此橋の下を奔馳する海潮は、地中海より黒海の町々に到る唯一の海路であり暖海に通ずるロシアの唯一の出口である。ボスフォラス海峡の急潮は矢の如く疾き上に、水深くして碇を下ろすべくもない。その狭き両岸に立並ぶ廃屋の一つに、唯だ一個の水雷を仕かけよ。そは能く世界最大の軍艦を瞬時に撃沈し去るであらう。「戦争とは陣地の争奪なり」とは、ナポレオンの名高き言葉である。然るにトルコは、其の老衰瀕死の病軀を、此の形勝無比の地に横たへて居る。欧羅巴列強が、トルコに対して至深の関心を抱くことに何の不思議もない。

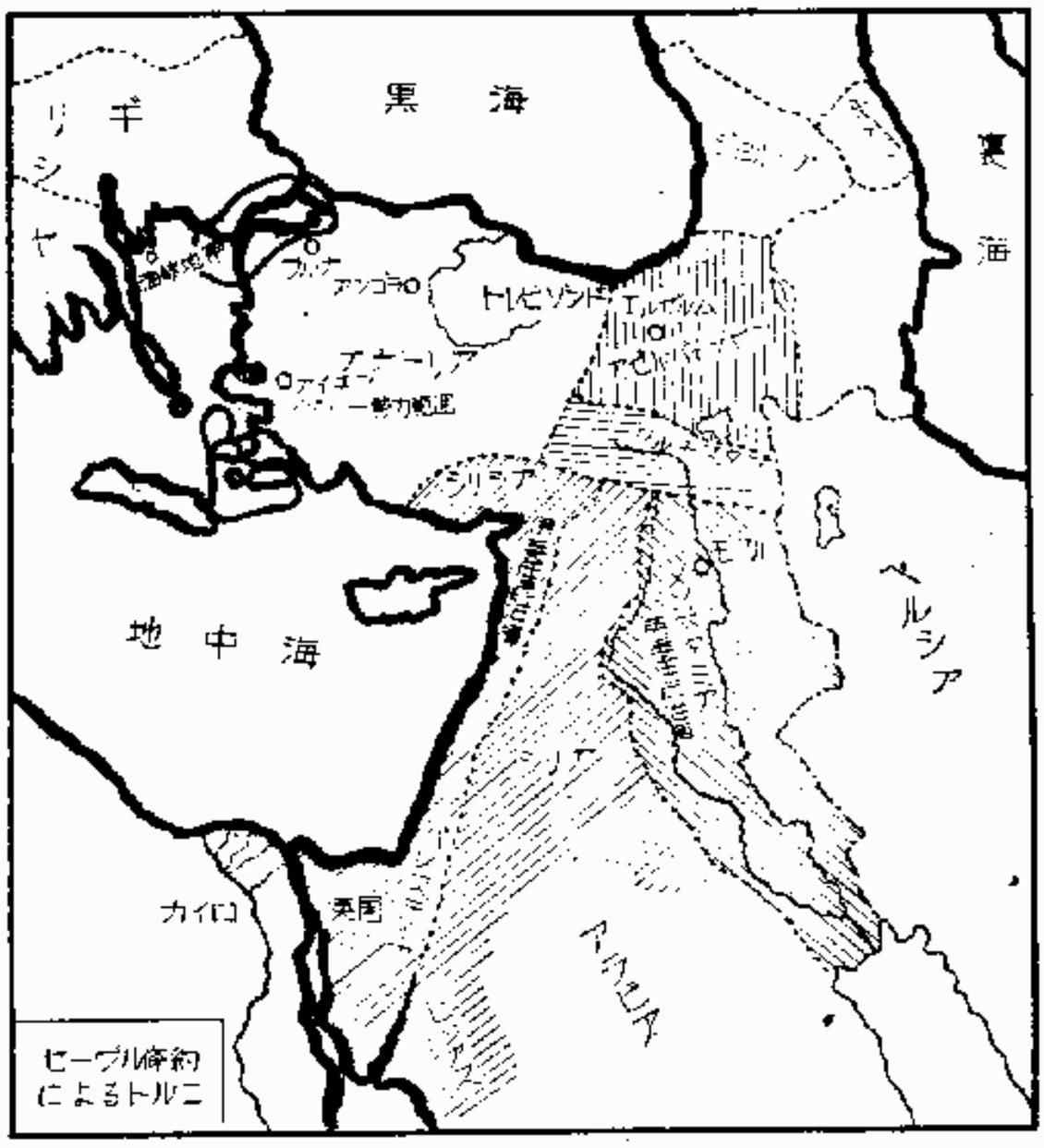
第一にイギリスである。イギリスが其の世界帝国の地位を保持して居るのは、取りも直さず印度を領有するが故である。若し一朝イギリスが印度を失ふならば、スナサレフが切言せる如く、歴史の鐘は直ちに海洋の女王の死を世界に告げるであらう。それ故に第十九世紀前半以来、英国対外政策の根本義は、印度保全の一事に存して居る。イギリスは、如何にして印度に到る海路、又は陸路、能ふべくんば海陸両路の支配権を自国の手に握るべきか、如何にして印度自身の防衛を全うすべきかについて、常に肝胆を砕いて来た。而して其の印度には回教徒の数が七千万に近い。之に加ふるに自余の英国領土に於ける回教徒を以てすれば、其数は優に九千万に達すべく、従つてイギリスは、実に世界最大の回教国として、回教徒の動向に関して切実なる関心を有つ。イギリスは彼等の心を収攬して、強大なる勢力を世界回教圏内に扶植せねばならぬ。

是く考へ来る時、少くもスエズ運河開通以前に於て、イギリス近東政策の重点が、コンスタンチノープル及びボスフォラス海峡の防禦壁であり、其の近東並に中東進出をして後顧の憂なからしむる城壁である。加ふるに聖ソフィア会堂を回教徒の手から奪回して、再び此上に黄金の十字架を樹てることは、ロシアに課せられたる神聖なる使命と考へて居た。それ故にロシアは、幾たびかトルコと戦ひて此の目的を遂げんとした。而もロシアのトルコ支配は、独りイギリスのみならず、仏伊両国の利害とも衝突するが故に、常に打克ち難き抵抗を受けて来た。

然るにスエズ運河の開通は、世界政局の上に深甚なる影響を及ぼした。新世界の発見以来、地中海は欧羅巴の一湖水となり、その重要性は大西洋に奪はれて居た。然るに今や此の運河の開通により、地中海は一朝にして大西洋と印度洋とを結ぶ世界至要の交通路となつた。而して之を開鑿せるものは実にフランス人である。

フランスは、其の地中海に於ける地理的位置、その近東に対する永年の文化的努力、並に其の重大なる経済的利害の故を以て、当然近東に於ける政治的優越をも志して来た。エジプトを支配する者は世界を支配すべしとは、ナポレオンの堅き信念であつた。フランスは、ナポレオンの蹉跌に拘らず堅確なる地歩をエジプトに占めて、此国をして政治的並に軍事的に回教圏内の第一国たらしむべく、倦むことなき努力を続けた。そはトルコ皇帝に対するエジプト太守の離叛を援助し、ムハムマッド・アリ・パシャをして偉大なる軍事的成功を収めさせた。然るにイギリスは、エジプトに於ける仏国勢力の確立、並に仏国と相結べる軍国エジプトの出現が、印度への兵站路を脅し、従つて其の世界覇権を脅すべきことを熟知せるが故に、極力エジプトの国力充実を阻み、トルコ皇帝に味方して仏埃親善を妨げて来た。従つてイギリスは、フランス人の手によるスエズ運河は遂に竣工開通した。之と同時に、イギリスと印度とを結ぶ吐の最短海路の支配は、イギリスに取りて絶対に必要なる事となつた。かくてフランスを敵手として、エジプト並に印度への新海路の争奪が、英国政策の最大問題となり、其の近東政策並に回教政策の重点は、スエズ運河開通を転期として、コンスタンチノープルよりエジプトに移るに至つた。

英仏のエジプト争覇は、苦もなくイギリスの勝利となつた。スエズ運河開通してより僅に七年、英国首相ディスレーリは、エジプト太守イスマイル・パシャの財政的窮乏に乗じ、ロスチャイルド家の援助の下に、一八七五年突嗟の間に運河会社株の大部分を英国政府の手に買収し去り、一挙にして運河の支配権を握るに至つた。これと同時に、斯くして把握せる運河支配権を、軍事的並に政治的に確保強化することが、直ちに英国当面の急務となり、そのために



先づ一八七八年キプロス島をトルコより獲得し、次で一八八二年アラビ・パシャの国民運動鎮圧に名を藉りて、軍をエジプトに出だし、遂に之を事実上の保護国とした。英国政府の言葉を藉れば、イギリスは「エジプトに於て正義と自由と公安との原則が、堅固なる礎の上に確立せらるるまで」エジプトを「指導」することゝなつたのである。

さてエジプトに於けるイギリス勢力の確立は、その世界政策の上に深刻重大なる影響を及ぼした。

即ちイギリスのエジプト侵略と共に、従来の如く印度のみが大英世界帝国の唯一の支柱ではなくなつた。いまや大英世界帝国は、東方に於て印度を支柱とするアングロ・印度帝国と、西方に於てエジプトを支柱とするアングロ・阿弗利加帝国との複合体となつた。イギリスは、新しき礎を之に与へて、統一ある世界帝国たらしめねばならぬ。そのために最も必要なる条件の一つは、此国の両帝国を海陸両面に於て確実に相結ぶことである。而して陸上の両帝国に属する国土を、イギリス支配の下に置かねばならぬ。この目的を得ずして、之に伴ひて、其の近東政策並に回教政策も、また従来の親土政策を棄て去つた。印度回教徒の激昂を招くまに於ける両帝国聯絡のためには、トルコ皇帝の版図に属する国土を、イギリスのトルコ政策は必然変化せざるを得なかつた。イギリスは未練なく従来の親土政策を棄て去つた。印度回教徒の激昂を招くま

いために、表面はトルコを刺激せぬやうに努めたが、実際に於ては容赦なきトルコの敵となり、仏・露・伊の列強と共に、トルコ分割の機を覗ふに至つた。かくてグラッドストンは、名高き「バッグ・エンド・バッゲージ」演説によつて、徹底してトルコを欧羅巴より駆逐すべしと主張した。一八九六年には、アルメニア人虐殺問題を機としてロシアに接近せんとし、実にトルコ分割をドイツ皇帝に提議し、翌一八九五年にはソールスベリが、個人的提案として、トルコを欧羅巴より駆逐すべしと主張した。一八九六年には、アルメニア人虐殺問題を機としてロシアに接近せんとし、実にトルコ分割をドイツ皇帝に提議し、翌一八九五年にはソールスベリが、個人的提案として、トルコを欧羅巴より駆逐すべしと主張した。

下の如く声明した――「今や吾人はコンスタンチノープルに対して利害関係を感ずること前日の如くならず、英国東方の門戸はエジプト、スエズに在り。故に若しロシアにしてエジプトに於ける吾人の主張を承認せば、吾人は決してロシアのコンスタンチノープルに拠らんとするを妨げざるべし」。加ふるにイギリスは、回教圏内に於ける一切の反トルコ運動を助けて、回教徒に対するトルコの政治的並に宗教的勢力を覆すことを努めた。

斯かる時に当りて、新興ドイツが其の発展の方向を東方に求め初めた。而して東方への発展が、政治的並に経済的に深甚なる意義を有することを最も明瞭に看取し、アナトリア鉄道の創設並にバグダード鉄道の準備によつて、其の東漸政策を最も有効に具体化せしめたる偉大なる先覚者は、ドイツの職業的政治家に非ず、実に銀行家ゲオルク・フォン・シーメンスであつた。シーメンスは、彼と時を同じうせる英国のセシル・ローツと共に、資本主義を初めて大規模の政治目的のために運用する先例を開ける者として、特に深刻なる歴史的役割を勤めて居る。かくてドイツ外相フォン・ビューローは、一八九七年の冬、帝国議会に於て「ドイツは断じてトルコに対する積極的圧迫に参加せず」と声明し、翌一八九八年には、ドイツ皇帝親らコンスタンチノープルより聖地を巡回し、ダマスコに於て「全世界の回教徒は、永久に予の友情に信頼せよ」との有名なる演説を試み、以て独土提携の礎を固めた。

初めイギリスは、印度に対するバグダード鉄道の意義を軽視し、且そのドイツの世界政策に対する価値をも軽視した。当時イギリスは、ドイツがバグダードを経由してペルシア湾頭に出で、以て英国の死活に関する利益を脅すが如

きは、到底在り得べからざることと思ひ上がつてゐた。然るに其後の歴史的進行は、イギリスをして適切にバグダード鉄道の将来に対する不安を抱かしめ、英独の反目次第に顕著となつたが、一九〇三年英国外相ランスダウンが、ペルシア湾に対する英国モンロー主義を声明して「ペルシア湾は印度国境の一部として見らるべきものなり」と公言し同時にエレンバラーが「予はペルシア湾岸に外国武器庫の建設を見るよりは、寧ろコンスタンチノープルが露国の手に帰せんことを欲す」と演説したる時に於て其の反独的態度は最も鮮明となつた。そはイギリスが何等包み隠すところなく永年のトルコ保全政策を一擲し、コンスタンチノープルを露国に与へることによつて、印度並に英国海上権を脅威せんとするドイツの東方進出に当らしめんと決意せるものである。

イギリスは、斯くして君府争奪に関して独露の離間を図ると同時に、ファショダ事件以来フランスとの間に久しく蟠り居たる感情の離齬を融和するため、一九〇四年、両国の間に親睦協商を結ぶことに成功し、次で一九〇七年、中亜に関する条約をロシアと結びて、ペルシャに於ける両国の勢力範囲を定め更に露仏両国を誘ひて所謂「三国協商」を結び、以てドイツを孤立に陥れることに成功した。かくして英国は、仏露を両翼として、欧羅巴方面並に亜細亜方面からトルコを打倒し、且近東に於けるドイツの地位を転覆するに努めた。其後列強の対土政策に幾多の紆余曲折ありしとは言へ、此の根本動向だけは、世界大戦勃発の時まで決して変らなかつた。

二　世界戦に於けるトルコ

叙べ来れる如き事情の下に、トルコが同盟国側に立ちて世界戦に参加せることは、極めて自然の径路であつた。世界戦勃発の前年、タラート、エンヴェル、ジェマルの三領袖が、青年トルコ党を率ゐてトルコの実権を握れる時、欧羅巴列強は彼等を以て無頼の冒険者と目し、其の運命は決して長くないと信じて居た。其時に彼等に対して提携の手を

差し伸べたのはドイツだけである。彼等は、危険ではあるが有力なる後援者をドイツに於て見出だし、遂にドイツの与国として世界戦に参加するに至つた。そは決してドイツに対する絶対の信頼からではない。過度の親独主義者と目せられたるエンヴェルでさへ、トルコは毫もドイツの恩恵を蒙つて居ない、ドイツこそトルコの恩恵を受けて居るのだと公言した。唯だ彼等は、時局の深刻なる世界政策的意義を認め、ドイツと結ばれたる因縁の断ち難きを認め、遂に興亡を賭して運命をドイツと共にせるものである。而も一九一四年十一月十二日、トルコが聯合国側に向つて宣戦するや、イギリスはトルコの行動を以て前代未聞の忘恩不信と憤慨した。次で十四日、トルコが「聖戦」を布告して全世界回教徒の参戦を号令するや、イギリスの憤慨は限りなき憎悪と変つた。

汎回教主義の諸指導者は、多年回教圏のソリダリティを力説し来れるが故に、ドイツは此の「聖戦」に多大の期待をかけ、イギリスは甚だしく之を恐れた。而もトルコの「聖戦」布告は完全に失敗であつた。世界の回教徒は、異教徒と提携し、不信心を以て聞えたる青年党領袖等の指揮する戦争を、聖戦として承認することを拒んだ。アラビアはトルコより離叛して聯合軍と共に戦つた。エジプトに期待せる叛乱も画餅に帰した。ロシア回教徒はトランスコーカサス国境に於て、戦争の最初より最後までトルコを敵として戦つた。印度回教徒はパレスティナ、シリア、メソポタミアの諸戦線に於て、甘んじて英国将校の下にトルコ軍と戦つた。汎回教主義は竟に一個の夢であつた。

世界戦の局面は幾変転したが、最後に同盟軍の惨敗を以て終つた。一九一八年十月、ブルガリア先づ武器を捨て、之によつてトルコと独墺との連絡は絶えたが、此時には独墺自身が既に力尽きんとして居た。パレスティナ及びメソポタミアでは、イギリス軍が敗残のトルコ軍を北方に追ひまくつた。トルコを雙肩に荷ひて戦ひ来れる青年トルコ党の三領袖、タラート、エンヴェル、ジェマルは遂に屈服して国外に亡命した。此等の三人は皆な悲惨なる最期を遂げた。即ちタラートはベルリンに於て一アルメニア人のために殺され、その屍は会堂の窖に六年間放置された後、一九

二九年に至りて漸くハーゼンハイデの寂しき回教墓地に葬られた。エンヴェルはトルキスタンの砂漠の只中に落命し、何人も其の埋骨の地を知らない。ジェマルはモスクワよりアフガニスタンに赴かんとして、途上テイフリスに於て是亦刺客の手に斃れた。

此の難局を負ひて彼等の後を継ぎたるアーメッド・イゼット・パシャは万策尽きて提督ラウフ・ベー一行の使節をダーダネルス海峡を威圧せる聯合国の艦隊に派した。而して一九一九年十月三十日、ムドロス島上に於て、イギリスのカルスロップ提督との間に、休戦条約の調印を見た。休戦の条件は苛酷を極めて居た。ダーダネルス、ボスフォラス両海峡及び之を護る諸要塞は、聯合国側に明渡されねばならなかつた。軍隊は悉く武装を解除されねばならぬ。聯合軍は保安に必要と認むる限り、トルコに於ける一切の戦略要点を占領する権利を得た。トルコの鉄道並に電線は、悉く聯合国側の管理下に置かれ、一切の港湾は、彼等のために開放されねばならぬ。遠く故土を離れてヒジャズ、トリポリ其他に戦ひつつありしトルコ軍隊は、尽く降服せねばならぬ。トルコの花座に解放されねばならぬ。かくてトルコは、数世紀に亙る征服によつて獲たる一切を失ひ尽さんとした。トルコはともいふべきアナトリアの農民は、或はダーダネルスの戦場に於て、或はシナイ半島やメソポタミアの灼くが如き砂漠に於て、空しく散り果ててしまつた。トルコは唯だ其軀を俎上に横へ、列強の料理を待つ外なかつた。

三　セーヴル条約

さてヱルサイユ平和会議は、一九一九年十一月を以て散会したが、最も重要なる三個の問題は未決の儘に残された。その第一は如何にしてヱルサイユ条約をドイツに履行させるかの問題である。その第二は如何なる共同政策をロ

シアに対して採るかの問題である。而して第三は如何にトルコを処分すべきかの問題である。トルコは、既に百年以来列強争覇の対象であり、聯合国側の手に帰すべき最も豊満なる獲物なるが故に、其の処分に就いては列強の間に幾多の祕密条約が結ばれて居た。然るにロシア革命は、一挙にして聯合諸国の皮算用を覆し去つたので、トルコ問題の解決は至難となつた。若し帝政ロシアが健在であつたならば、ロシアはコンスタンチノープルを支配し、黒海沿岸及びトルコ東北国境の若干地域を併合したであらう。またロシアの軍事的協力が継続したならば、イタリー及びフランスは確実に小亜細亜及びシリアを占領し、イギリスはメソポタミアを占領して居たであらう。而して列強は、此の現実を基礎としてトルコ分割の歩調を整へたであらう。然るに革命ロシアは戦時中に結ばれたる一切の祕密条約を公表して、トルコに対する列強の陰謀・不信・欺瞞・嫉視を白日の下に曝すと同時に、自らトルコに対する一切の領土的野心を一擲した。かくて帝政ロシアの崩壊と共に、列強のトルコに対する歩調破れ、イギリス、フランス、イタリーギリシア四国は、最も露骨に貪婪の爪を磨き初めた。かくて余りに多くの異なれる利害関係、余りに多くの相容れざる野心、余りに根強き嫉妬憎悪、此等のものが相合してトルコ問題の解決を至難ならしめたが、幾多の紆余曲折を経たる後、一九二〇年八月十日、一とまづセーヴル条約の調印を見るに至つた。

この条約によつてトルコの版図は、欧羅巴に於てはコンスタンチノープル及び其の狭小なる背後地、亜細亜に於てはアルメニア、スミナル、シリシアを除けるアナトリアだけとなつた。コンスタンチノープルはトルコの首府たることを許されたが、ダーダネルス、ボスフォラス両海峡は、その欧亜両岸、イスミッド半島、ガリポリ半島、並にダーネルス海峡に近接する諸小島と共に、所謂「海峡地帯」として「海峡国際委員会」の管理下に置かれることとなつた。該委員会は国際聯盟によつて任命せらるるイギリス、フランス、イタリー、ギリシア、ルーマニア及び日本の代表者より成り、海峡地帯に対して主権を行使し、自己の国旗を有する。

トルコの亜細亜領土のうち、パレスティナ及びメソポタミアは、イギリス委員統治の下に置かれる。パレスティナには、ユダヤ人の国家が創建せらるべきも、現住アラビア人の正当なる権利を無視してはならぬ。エジプト、スーダン及びキプロス島に対するトルコの主権は正式に否定せられ、更めてイギリスの保護領となつた。アラビアはトルコより分離せられ、ヒジャズは完全なる独立国家として承認せられた。

リバノン山脈の西、テイロよりアレキサンドレッタ湾に至るシリアの沿海地帯、及び之と相接しアダリア湾に至るまでのシリシア地方は、フランスの委任統治領となつた。南アナトリア即ちアダリア及びコニア、並にヘラクレア炭田地方はイタリーの勢力範囲と定められた。そは当分トルコ主権の下に置かれるけれど、統治はイタリーによつて行はれる。スミルナ及びその広大なる背後地は、ギリシアの統治下に置かれる。ロドス島を除くドデカネス諸島もまたギリシアの有となつた。アルメニアは独立すべく、クルヂスタンには自治を許された。リバノン山脈以東のシリアを独立国とし、ヒジャズ国王フサインの第三子ファイサルをして之に君臨せしめる。

かくてトルコの版図は、僅にアナトリアの一部に限られ、其上殆ど公海への通路をさへも失つた。そは海峡地帯、スミルナ地帯、イタリー勢力範囲、フランス勢力範囲によつて封鎖せらるる上、トラビゾンまでもアルメニア領となつたので、トルコは殆ど良港なき短き海岸線を黒海に於て有するだけとなつた。

セーヴル条約は、更にトルコから殆ど一切の武力を剝奪した。トルコの常備軍は、僅に七百名の皇帝親衛隊に限られた。治安維持並に少数民族保護のために、三万五千より成る憲兵隊を置くことを許されるが、また国境を警備するために、山砲兵及び技術部隊を許されない。其外には重大なる騒擾の場合、憲兵隊を援け、また国境を警備するために、山砲を有する一万五千の特別護民軍の設置を許される。また戦車、毒瓦斯、焼夷弾等の一切の近代科学武器の使用、並に弾薬の輸出入を禁ぜられた。海軍は砲艦七隻、水雷艇七隻に制限せられ、陸海軍とも航空隊を設けることを禁ぜられた。

トルコの財政も外国の支配を受けることとなつた。即ち英仏伊三国の代表者一名づつより成る財政委員会が設けられ、トルコは発言権のみを有する一名の委員を之に参与せしめ得るに過ぎない。此の委員会は、トルコ資源の維持及び増殖に最適と認むる措置を取り、又トルコの予算及び財政上の法例規則の施行を監督する。

かくてセーヴル条約は、完全にトルコの独立を奪ひ去つた。トルコは、政治的にも、経済的にも財政的にも外国に従属することとなり、トルコの主権はトルコ人の手より離れて、数々の他国人によつて組織せらるる「委員会」の掌裡に移つて了つた。

四　ムスタファ・ケマルの生立ち

「賢き予言者たちによつて、トルコの運命は既に尽きたと、幾度も幾度も宣言された。それにも拘らずトルコは生き長らへて行く」――名高き回教学者スタンリ・レーンプールは其著「トルコ」の中に斯く述べてゐる。世界戦の直後、世界は今度こそトルコの星は永久に地に墜ちたと信じ、セーヴル条約を以て其の瀕死の病軀に最後の止めを刺せるものと考へた。さり乍ら世界の「賢き予言者たち」は、此度もトルコを誤診した。トルコは決して死ななかつた。雷に死なかつたのみならず、却つて猛然として瀕死の床から起ち上つた。而して、凛然たる意気を以て、悲壮なる戦を内外の敵に挑み、荘厳なる勝利の路を歩み初めた。

此の窮乏・困憊・淪落のどん底に於て、能く国民を鼓舞し、激励し、指導し、鞭撻して、遂にトルコ復興の偉業を成就せしめたる英雄は、取りも直さずムスタファ・ケマル其人である。吾等は先づ簡潔に彼の生立を辿るであらう。

一八八〇年は、亜細亜に取りて芽出度き年である。アラビア神国の建設者イブン・サウードが、砂漠の都リヤードに呱々の声をあげたのは此年であつた。而してわがムスタファ・ケマルも、また此年三月十三日、サロニカの由緒あ

る家に生れた。父アリ・リザは、初め収税吏を勤めて居たが、後に材木商に転業した。母ズベイダは、かつたが、極めて信心深き婦人であつた。ムスタファ・ケマルは、其の幼時を回想して、唯だ一事のみ明瞭に刻まれて居ると言ふ。それは彼の就学に関する両親の意見の相違であつた。何事も信仰本位の昔気質の母は、彼を寺院附属の学校に入れたいと言ひ、西欧思想の流を汲める進歩主義の父は、教育の基礎を哈蘭に置く学校を好まず、科学を基礎とする新しき学校に入学させた後、幾くもなく西欧教育を施すシェムシ先生の私塾に転校させた。ケマル曰く「母は兎にも角にも自分の希望が入れられ、信心を遂げさせられたので、転校に不服を唱へなかつた。蓋し母は何事よりも儀式を重んじて居たのだから」。

然るに父アリ・リザは間もなく死んだので、母はサロニカの家を畳み、其子を伴ひてサロニカを距る数里の農村ラザサンに住む叔父の家に移り住んだ。ムスタファは此の農村で楽しき二年を過ごし、十一歳の少年となつた時、母方の叔母の一人が彼の教育を引受けることとなり、サロニカに帰つて中学校に入つた。然るに田園の不羈奔放に慣れたるムスタファは、学校の規則づくめを悦ばず、教師に対しては不作法、同窓に対しては我侭であつたが、或る街頭で同級生の一人と摑み合の喧嘩を初めた時、通りがかりの一教師が彼に激しく鞭を加へたので、彼は憤然として家に帰り、決して学校に復らうとしなかつた。それは入学してから一年も経たぬ時のことである。

彼の叔母は、此の乱暴なる少年に学資を貢ぐことを拒んだ。ラザサンの叔父は、学資の要らぬ陸軍の学校を勧めた予てより剣と軍服に心惹かれて居たムスタファは、喜んで此の勧めに従ひ、サロニカの幼年学校に入学した。一中学教師の鞭打が、斯くして彼の最適の路に向はしめることとなつた。学校の成績は優秀で、特に数学は抜群であつた。ムスタファ・ケマルといふ彼と同名の数学教官は、彼を教官補佐に推し、初年級の数学を担任させた。而して彼自身と区別するため、ケマルといふ名前を彼に与へたので、爾来ムスタファ・ケマルと呼ばれることになつた。ケマルとは「抜群」

の意味である。

彼は其名の如く抜群の成績を以て、一八九七年サロニカの幼年学校を卒業し、直ちにモナスティルの士官学校に入つた。恰も此年クレタ島に於て屢々繰返され来し回基両教徒の争闘まだ勃発し、ギリシアは基督教徒救援を名として兵をクレタ島に上陸させたが、列強之に干渉し、該島は列強の兵力によつて占領されたので、トルコ軍の動員が行われ、物情騒然たるに至つた。予てより皇帝アブドゥル・ハミッドの政治に対して不満を抱ける憂国者は、外患の加はるに連れて一層其の不満を深刻にした。わけてもモナスティルを中心とするバルカン地方は、最も不穏の空気に包まれ、有為なる青年は皆な改革の志を抱いて居た。多感なるムスタファ・ケマルが斯かる雰囲気の間に、次第に革命的精神を養つて行つたことは何の不思議もない。彼は学校の休暇毎にサロニカに帰省したが、常にドミニコ派の修道僧について フランス語を学習した。其間に彼はヴォルテールやルソーの革命文学、ホップスやJ・S・ミルの政治経済に関する著作を耽読した。総て此等の書籍は、厳罰を以て禁止されて居たが、それは唯だ青年の読書欲を唆るだけであつた。

彼は学生の間に在りても異彩を放つて居た。彼の同窓生は当時の彼について下の如く物語る——「彼は常に群を離れて独り居り、何人とも親交を結ばなかつた。但し、彼は決して不親切でも不愛想でもなく、寧ろ快活で且繕はざる愛嬌を具へて居た。而して最も著しき一事は、彼自身は決して出しやばりでないに拘らず、吾等が不知不識の間に彼を推し立てて居ることであつた。彼は多く読んだ。而して一層多く考へて居た。彼は読書に費した時間の三倍を、読みたる書籍について考へるために費した」。かくて彼は此の学校をも抜群の成績で卒業し、コンスタンチノープルの陸軍大学校に少尉として入学した。

汚き港町サロニカに生れ、静かなるラザサン、退屈なる田舎町モナスティルに生長して、今や二十歳となれるムス

タファは、首府コンスタンチノープルの繁栄と歓楽とに心奪はれ、暫くは放蕩に身を委ねたが学生に立帰つた。時に皇帝の圧制と秕政に対する反抗は、青年の間に益々昂まり、革命の気運た。陸軍大学校内にも、ムスタファも此の祕密結社に加盟した。会員は生命を賭して革命を遂行すべきを盟ひ、激越なる文書を回覧して互に志気を鼓舞し合つた。彼はルコを皇帝の圧制と外国の凌辱から救はねばならぬことを高調せる幾多の文章や詩歌を発表し的を同じくせる他の祕密結社とも連絡を取り初めた。然し乍ら斯かる運動は、最も緻密なる探に入らずには居なかつた。或日会員相集まりて、新加盟者の宣誓式を行ひつつありし時、一群ひて、一網打尽に彼等を捕縛し去つた。わけてもムスタファは、最も危険なる人物と見做され君府監獄の独房に三箇月監禁された。皮肉なことには、彼が牢獄に繋がれた丁度其日に、大尉に昇進の辞令が下つた。

或る日のこと、彼は陸軍大学校長イスマイル・パシャ・ハッキの前に召喚された。将軍は彼治運動にたずさはらぬこと、軍務に精励して皇帝に忠義を尽すべきことを厳命し、彼にシリア其日の夕刻、直ちに警官に護られてシリア行きの汽船に乗せられ、母に暇乞ひする時間も与へて彼はダマスコの騎兵聯隊に追ひやられたが、彼は決して革命の志を棄てなかつた。ダマスコの青年将校も、制政治に大なる不満を抱いて居た。其上政府は彼等に俸給を支払はなかつたので、一層彼等の士官学校の同窓ムフィッド・ルフティとダマスコ聯隊で邂逅し、協力して祖国会支部を設立し組織を拡大した。彼は革命の中心たるバルカン地方と連絡を図るため、大なる危険を冒してサ事が幾くもなく密偵の探知する所となり彼に対して逮捕状が発せられたが、諸友人の苦心によつてダマスコに帰還するを得た。而して彼の同窓ムフィッド・ルフティが、彼を追究せる官憲に向つて、彼は決して

ダマスコを去つたことがないと証言したので、僅に事なくして済んだ。

さり乍ら彼はサロニカに還りて運動する意図を棄てなかつた。而して首府に在る諸同志の第三軍団参謀として、サロニカに転任することが出来た。然るにサロニカには「統一進歩党」と呼ぶ有力なる革命団体が組織されて居た。マケドニアに在るタラート等の指導せる剽悍なる野心家エンヴェル、其弟ニアジ、横暴なるジェマル、改宗ユダア人ジャヴィッド、無鉄砲なるタラート等に対して、尊敬も好意も持てなかつた。其上彼等の言論は空疎、その計画は粗漏に見えた。彼は此等の指導者等に対して、恰も教師が生徒に対する如き態度に出で、毫も仮借せざる批判を浴びせかけたので、次第に彼等から敬遠されて居た。而して彼もまた彼等の下風に立つことを欲しなかつた。学生時代に於けると同じく、統一進歩党に於ても、彼は超然として独往した。

一九〇八年七月革命の烽火を挙げたアブドゥル・ハミッド帝の即位記念日を期し、統一進歩党はエンヴェル兄弟の号令の下に、突如革命の旗上げであり、ムスタファは全然計画に関与して居なかつたが、皇帝に対する不平は国内に充満して居たので、此の乾坤一擲の賭博が見事図に当り、軍隊内に多くの呼応者を得たので皇帝は忽ち譲歩して憲政の復活を宣言した。此報一度び伝はるや、過去二十年に亙りてアブドゥル・ハミッド帝のために国外に逐はれ貴族や大官が、先を争うて帰国した。彼等は巧みに年少革命士官等を庶し、自ら統一進歩党の指導者となり、陰謀術策を肆まにして政権を握らんと焦つた。かくてニアジはアルバニアに於て暗殺せられ、エンヴェルはドイツ大使館附武官としてベルリンに派遣せられ、ムスタファ・ケマルはトリポリ軍隊検閲のため北阿弗利加に派遣された。

然るに此の革命の混乱に乗じ、オーストリアはボスニア及びヘルゼゴヴィナを侵略し、ブルガリアは独立を宣言し、

アルバニア及びアラビアには騒擾が起つた。国民は此の不始末を統一進歩党の責に帰せんとした。皇帝は直ちに仮面を脱ぎて其敵を倒すべき機会を捉へ、国民に向つて革命政府は回教並にカリフ制度を廃止せんとするものであると誣ひ、且兵士を煽動して革命に参加せる将校を殺させ、首府に新設せられし統一進歩党本部を蹂躙させ、急ぎ新内閣を組織した。革命党は救援をマケドニア軍司令官マフムード・シェフケット・パシャは、参謀として卓越せるも、将軍としては断行力を欠ける武人であつたが、トリポリより帰れるムスタファ、ベルリンより帰れるエンヴェル、及び其他の部下の青年将校に動かされ、遂に軍をコンスタンチノープルに進めたので、反革命運動は一挙に蹉跌し、皇帝は位を廃された。此間に処して最も華々しく振舞つたのはエンヴェルであつたので、彼は一朝にして国民的英雄となり、ムスタファは其影に蔽はれて多く人目を惹かなかつた。彼は其の同志の出世を他にして、再び軍務に精励し、また戦史の研究に心を潜めた。而して一九一〇年には、アリ・リザ将軍に随行してフランスに赴き帰来サロニカ陸軍士官学校の校長に任命せられ、次でサロニカ歩兵第三十八聯隊長に任命された。此頃から人々は漸く彼の人物を知り初めた。多くの年若き将校が彼の周囲に集まり、彼を指導者と仰ぐやうになつた。而も軍隊内に於ける彼の声望が昂まり、彼に対する将士の尊敬信頼が加はるに及んで却つて官憲の嫉視猜疑を挑発し、秘密結社を結んで不軌を図るものと取沙汰されたので、陸相マフムード・シェフケット・パシャは彼の行動を監視するため、一一年春、彼を陸軍省に転任せしめた。

時にコンスタンチノープルの形勢は混沌として居た。空気は陰惨であつた。統一進歩党の領袖等は、秘密に会合して陰謀を事とし、内閣は頻々と更迭した。内政改革の実は毫も挙がらず、列強の強圧は益々加はつた。而して此年の秋に至り、イタリーは予てより老トルコに於ける自己の分前として渇望し来れるトリポリに出兵し、其の沿海地方を占領した。此の侵略はトルコの上下、就中青年将校を憤激せしめ、ムスタファ、エンヴェル等は、皆な北阿弗利加の戦

地に向つて出発することとなつた。而もイタリーは逸早くダーダネルス海峡を封鎖し、海コは海路軍隊を輸送し得ざるに至り、前線に到達せんとする将校は苦心惨憺せねばならなン新聞通信員シェリフ・ベイと偽名し、露国汽船に乗リポリ国境に達した。此処にはエジプト軍隊が厳重にロンドなるため、アラビア人の仮装は直ちにばれたがるトルコ軍人に満腔の同情を抱いて居たので、事なくナ港に上陸せるイタリー軍と戦ふこととなつた。時にスウルに在つたが、エンヴェルも此処で軍を指揮して居二年早く、既に中佐となつて居た。時にトルコ軍はイ起つてトルコに味方した。そのためにイタリー軍は、た。かくて伊土両軍が北阿に対時しつつありし時、一ルカン諸国、また起つてトルコを攻めたので、トルコ政府は、急遽イタリーと和議を結び、トリポリの独立取りも直さず之をイタリーに献上することである。

ムスタファは急ぎ故国に帰らんとした。而も海路は敵のため鎖されて居たので、フランアを経て黒海に出で、十二月初旬漸くコンスタンチノープルに達する事を得た。此時トルあつた。トルコ軍は全戦線に於て敗北した。セルビア軍は破竹の勢を以て南下した。ギリ二万四千のトルコ兵を捕虜とした。ブルガリア軍は首都を距る僅に三十粁のチャタルジャ線に迫つて居た。トルコ艦

隊はギリシア艦隊のためにダーダネルスに閉ぢ込められて居た。首府の周囲には無数の避難民が雲集し、飢ゑと寒さに斃れて行つた。コレラやチフスが猖獗を極めた。それにも拘らずトルコの政治家等は、依然として政権争奪に没頭し、政府には非常時の国家を指導する抱負も覚悟も無かつた。

ムスタファはプライルの戦線に於てブルガリア軍と対抗中なりし一師団の参謀長として、ガリポリに赴任した。プライルはガリポリ半島の最狭部に位し、此地一たび敵の掌裡に落ちなば、敵軍は直ちにダーダネルスを支配して亜細亜トルコに渡り、コンスタンチノープルを孤立せしめるであらう。ムスタファがプライルに到着すると殆ど同時に、ブルガリア軍は名高きサブフ将軍の指揮の下に、猛烈なる攻撃を開始したが、トルコ軍は頑強に抵抗を続けて一歩も退かなかつた。かかる間に休戦となり、次で列強の和平調停となつたが、トルコの国論は二つに分れて互に激しく相争つた。即ち首相カミル・パシャ以下の穏健派は、如何なる犠牲を払ひても平和を希望し、青年将校の最大多数は、断乎として戦争継続を主張した。陰謀や暴動が例によつて猛烈に行はれ初めた。

この混乱の最中にエンヴェルがトリポリから帰国した。彼は直ちに統一進歩党の幹部を召集し、陸相ナジム・パシャを殺し、首相カミル・パシャ以下の閣僚を辞職せしめ、反対党に徹底せる弾圧を加へ、同志タラート及びジェマルと共に、一挙にして政権を掌握した。新政府はバルカン諸国の提案せる和平条約を一蹴し去り、重囲に陥りつつありしアドリアノープルをブリガリア軍より解放すべく力戦したが、遂に敗れてアドリアノープルは陥落し、彼等が倒せるカミル・パシャ政府と同一条約の下に和議を結ばねばならなかつた。而もトルコに取りて幸ひなりしことは、戦勝に酔へるバルカン諸国が、勝利の獲物について争奪を始め、一九一三年六月、ギリシア、セルビア聯合軍とブルガリア軍との交戦を見、次でルマニアが突如ブルガリア国内に侵入した。トルコは此機に乗じてアドリアノープルを回復するを得た。

サロニカでの往年の同志は、今やトルコ最大の権力者となつた。タラートは而してエンヴェルは陸相である上に、王女を娶りて宏壮な邸宅に豪奢の生活を営み、権勢並ぶスタフファは、漸く陸軍中佐に進級し、その同志からは猶介不羈として敬遠せられ、世人もまつた。但し此の三頭政府は、一切の困難と戦ひ乍ら、昂然たる意気を以てゝ重きを置かなかつた。彼等の最も必要を感じたのは、トルコ陸軍の改造再建であつた。而してエンヴェルはン・フォン・ザンダース将軍に委ねた。

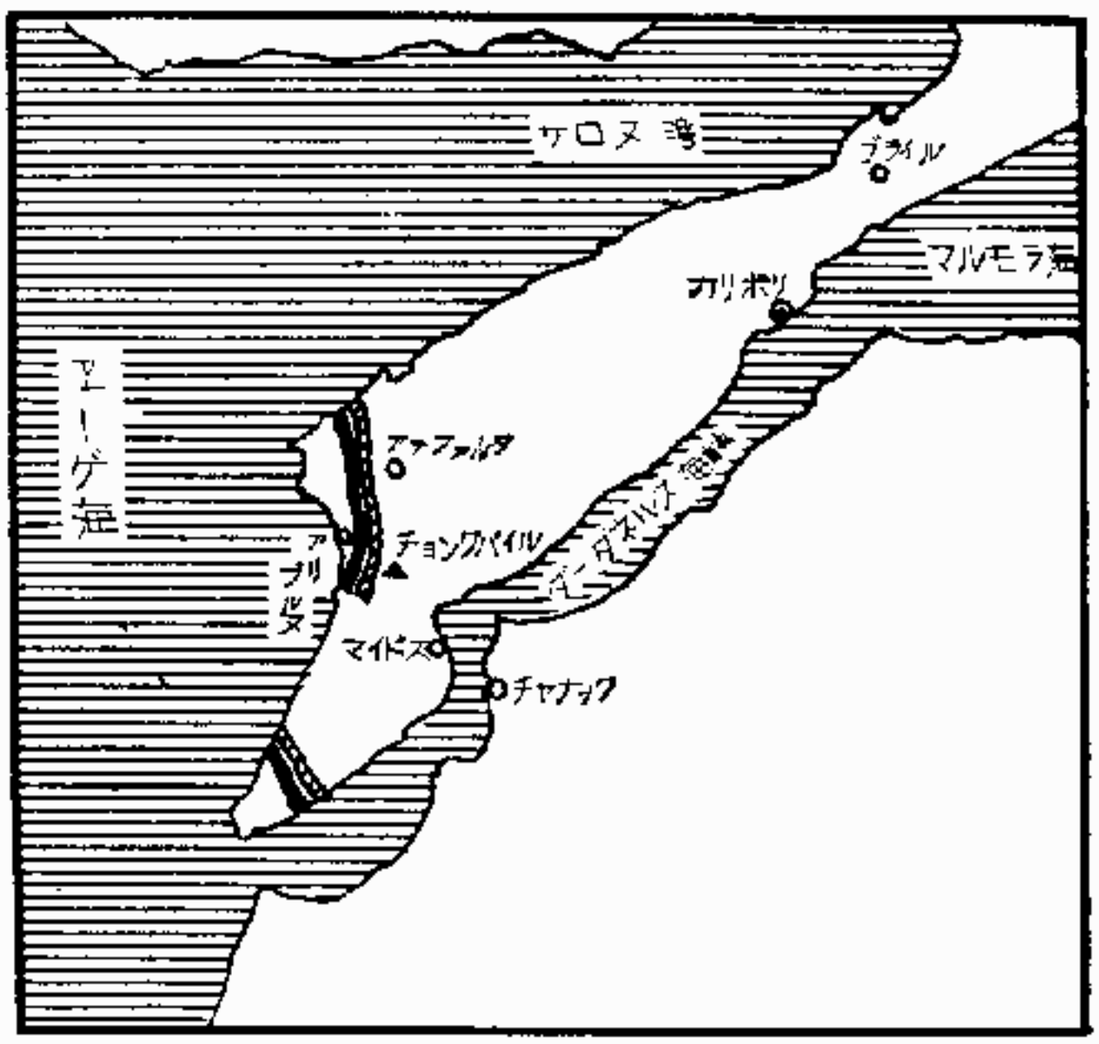
此事はムスタファを激怒させた。彼はトルコ独立の礎たる軍隊を、外国人の手に委ねることを以て、忍ぶ可からざる国辱だとした。彼は多くの軍人並に政治家に向つて、政府の決議に抗議せよと説いた。彼はジェマルを訪ひて其非を極論した。彼はエンヴェルにも会見を求めたが拒絶された。遂に政府は此の厄介なる軍人をとしてソフィアに逐ひやつた。

彼がソフィアに於て謂はば配所の月を眺めつつありし時、世界戦が勃発した。彼はトルコ不利とした。彼はトルコ政府に向つて中立を守るべきことを以て、彼の進言は失意者の偏見として顧みられず、トルコもドイツ軍が早急に参戦することを竹の勢を以てパリに向つて進撃中なりしを以て、トルコ政府は遂に聯合諸国を敵として起つに至つた。而も一旦参戦と決したる以上、ムスタファは独墺側に勝算なしと判断し、屢々本国政府に向つて中立を守るべきことを進言した。さり乍ら時恰ンヴェルに向つて、其の願望を拒んだ。彼は再びエンヴェルは彼のソフィア駐在を必要なりとして、出征する覚悟を定め、将にソフィアを去らんとせる時、コンスタンチノープルより召還の命が到着した。

是より先きエンヴェルは、ロシア軍と戦ふため、自ら軍司令官としてコーカサス戦線に出征し、首府では参謀総長ハ

ッキ・パシャが軍務を見て居た。時に英国は海陸協力してガリポリ攻略を企てて居た。ムスタファの非凡の才能を知れるハッキ・パシャは、ソフィアに打電して彼を招致し、リマン・フォン・ザンダース将軍に推挙したので、将軍はガリポリ半島南半の諸部隊の指揮権を彼に与へた。流石に将軍は直ちに彼の俊敏を看取し、抜群の軍人として大なる信頼を置き初めた。ムスタファ自身もまた下の如く述べて居る――「リマン・フォン・ザンダースは、模範的な上官であつた。吾等の意見は屢々相違したが、一旦彼が命令を下せば、其の遂行を予が正しと信じて行ふがままに任せた」と。然るにコーカサス戦線に惨敗して帰れるエンヴェルは、直ちに彼の職を免じてマイドスに待機中の第十九師団長に任じ、前線から退かしめた。彼はエンヴェルの処置に激怒したが、ザンダース将軍の慰撫によつて忍耐した。

かくてトルコ軍及び聯合軍が、互に決戦の準備を急ぎつつありし時、ムスタファは濠洲軍がアリ・ブルヌに上陸しチョンク・バイルの占領を企てつつありしことを知つた。此の高地はダーダネルスの鍵であり、従つて首府への関門である。此地一たび英軍の手に帰せば、コンスタンチノープルへの路が開かれる。それ故に彼は命令を待たずして濠洲軍を攻撃し、其の進出を阻止した。此の神速果敢なる行動は、君府の運命を救へるものとして最も感謝せらるべきに拘らず、エンヴェルは激しく之を非難したので、ムスタファは甚だしく憤慨し、二度まで辞表を提出したが、二度ともザンダース将軍の慰撫によつて思止まつた。やがて一九一五年八月六日、聯合軍はトルコ軍の占遽せる丘陵地帯に向つて、猛烈なる総攻撃を開始した時にトルコ軍の一部隊はムスタファ之を指揮し、他部隊はドイツ将軍カンネギーサー之を指揮して防禦に当つたが、カンネギーサー将軍が重傷を負ふに及んで、ムスタファは両部隊を指揮して戦つた。而して英軍は援軍の到着によつて更に攻撃を新たにしたので、ムスタファを招致し、戦線の諸部隊を統一して単一の軍団となし、其の指揮を彼に委ねた。彼はアルタの総司令部にムスタファを招致し、戦線の諸部隊を統一して単一の軍団となし、其の指揮を彼に委ねた。彼は優勢なる敵軍と激戦する勇躍して此の重任を負ひ、名高き英国のハミルトン将軍と雌雄を決することとなつた。



こと三箇月、此年十二月、遂に敵軍をガリポリ半島より掃蕩した。英軍の戦死者四万三千、傷病者十六万二千、仏軍の戦死者一万、傷病者三万七千に達した。謂ふところの「ダーダネルスの悲劇」である。

彼のコンスタンチノープルに凱旋するや、国民は漸く彼の真価を認めダーダネルスの救主、君府の救主、アナファルタの英雄と讃へて、その勳功に感謝が、若干将校と共にエンゲル暗殺を企てた廉で絞刑に処せられた。エンゲルは、ムスタファも此の陰謀に荷担したのであらうと邪推した。若し些かでも証跡があつたなら、彼は直ちにムスタファの首をも絞めたであらう。彼を罪に陥れることが出来なかつたので、エンゲルは先づ彼を十六軍団司令官とし、次でディアルベキルの第二軍団司令官とした。

自動車を馳せ、馬に乗りて、ムスタファはコーカサス戦線に遠ざけて第れぬ惨ましき状態に在つた。前年エンゲルは、ザンダース将軍を指揮し、進んでアナトリアを撃たんとしたが、飢寒と疾病とに多士気全く沮喪し果てて居た。エンゲルは実にムスタファをして此の難局に当らしめたのである。唯だロシアに勃発せ

る一九一七年の革命が、トルコを一時此の窮地から救つた。ロシア軍は次第に引上げて、何時とはなくトルコから影を消した。ムスタファは、此機に乗じてヴン以下の被占領地を回復し、バトゥムに向つて進軍した。

然るに、斯くしてロシア側よりの危険が辛うじて除かれたと殆ど同時に、ムスタファは全軍を率ゐて即時シリア戦線に急行せよとの命令を受けた。蓋し該地方に於て、大規模の攻撃を準備しつつありしイギリス軍と戦ふためである。当時イギリス軍は、既にバグダードを占領し、モスルに向つて進みつつあつた。其上エジプトに於て大軍を集結し、パレスティナ及びシリア攻略を企てて居た。トルコは之に対抗するため、ドイツ将軍ファルケンハインをシリアに急派し、アレッポに総司令部を置きて新軍を編成せしめた。ムスタファは、最初の参謀会議に於て、夙くもファルケンハインと意見の衝突を見、殊に其のバダダード攻撃とスエズ運河襲撃作戦に対して、痛烈なる批判を加へた。ファルケンハインは憤怒して激語を発し、ムスタファは辞職を申出た。ファルケンハインは彼を軍法会議に附せんとしたが、エンヴェルは之を宥めて、再び彼をディアルベキルの旧司令部に派遣せんとしたが、彼は之をも拒絶したので、遂に「健康のため」といふ名目の下に休暇を与へることにした。

ムスタファは暫く、老母と共に君府に住んだ。彼は殆ど無一文であつたので、海相ジェマルが生活費を貢いだ。かくの如きこと三箇月、一九一八年春に至り、トルコ皇太子ヴヒデッディンの公式ドイツ訪問の議が決せられ、ムスタファは其の随行を命ぜられた。エンヴェルの動機は、之によつて一つには彼を君府より遠ざけ、又一つには反独的なる彼にドイツ陸軍の威力を目撃させるためであつた。皇太子一行はドイツに到着して、ヒンデンブルク元帥並にルーデンドルフ将軍の接待を受けた。ムスタファはドイツ軍隊の各般の施設を仔細に見学し、その作戦を慎重に聴取した。彼は密かに皇太子に向つて、ドイツに勝算なきことを、此時既に断言している。

さて訪独旅行より帰るや、ムスタファは激しき病気に襲はれて、数週間床に就き、更に医師の勧告によつて、最初はギーンに、次でカールスバードに転地した。七月に至り皇帝ムハムマッド五世長逝し、皇太子、位を継いでムハムマッド六世となつた。君府に於ける彼の諸友、及び新帝の侍従武官長に任ぜられたるイゼットパシャが、書面によつて熱心に彼の帰国を促したので、彼は病軀をおして七月下旬にコンスタンチノープルに帰つた。

彼は訪独旅行中に新帝の篤き信頼を受けて居た。此度彼が帰国するや、新帝は希有の鄭重を以て彼を遇した。それ故に彼は憚るところなく意見を奏上した。彼はエンヹルを免職し、及びドイツ軍人が、トルコ軍隊の指揮権を握つて居る限り、皇帝は一個の傀儡に過ぎざること、エンヹルを免職し、ドイツ軍人を解傭して、急ぎドイツとの同盟を放棄し、直ちに単独講和を断行するに非ずば、トルコは必ず滅亡に瀕すべきことを、皇帝に向つて切言したるに於て、皇帝は彼に向ひ「タラート及びエンヹルと此事に就いて相談しつつある。皇帝はエンヹルの威嚇に屈したのである。其後二週間を経て皇帝は彼を宮中に召し、親ら彼をシリアの軍司令官に任命した。控室にはドイツ軍人を交へたる多数の将校が居た。皇帝はエンヹルの眼を見つめ、而して言つた——「お芽出度うエンヹル君。君が勝つたのは名前だけのものだ。僕の聞くところでは、シリア軍とは、立派な復仇だ」。

一九一八年八月下旬、ムスタファはシリア戦線に到着した。彼を悪めるファルケンハイン将軍は此春ドイツに帰国し、リマン・フォザレに置いて全軍を統べて居た。彼はリマン・ザンダース将軍が、総司令部をナザレに置いて全軍を統べて居たが、兵力は定員の十分の一にも充たず、士気は沮喪し、糧食弾薬は欠乏し、悪疫は猖獗を極めて塹壕を守つて居た。優勢なる新鋭の英軍に対して、勝算は絶無であつた。加ふるに彼は着任

後幾くもなく病に罹り、病床より軍を指揮せねばならなかつた。九月十八日、彼は辛うじて離床し得るに至つたが、英軍は其の翌日からトルコ軍に十倍する兵力を以て攻勢を開始した。トルコ軍の陣地は忽ち粉砕せられ、全線に亙り浮足立ち、退却はやがて潰走となつた。一面に於ては英国騎兵に追撃せられ、他面に於てはアラビア遊撃軍の奇襲を受け、トルコ軍は完全に崩壊し去つた。かくて北方に敗走すること四百粁、アレッポ附近に至つて、ザンダース将軍は漸く雪崩の如きトルコ軍の逃足を止めることが出来た。而して全軍の指揮を更めてムスタファに委ね、アレッポ及びシリア北端の防禦に当らしめた。初めは彼はアレッポ南方の高地に拠つて英軍の進出を防いで居たが、アラビア軍のために後方を脅かされたので、アレッポを棄てて北方十五粁のカトゥムに陣し、山岳によつて敵と対峙した。敵の再三の攻撃は其の都度撃退された。而して此線こそはトルコが死守せる最後の一線となつた。何となれば此の対陣中に、トルコ政府は休戦条約を結んだからである。

一切のドイツ軍人は本国に帰還を命ぜられた。小さき町アダナの一旅館に於て、ムスタファは南部トルコに於ける全軍の指揮権をザンダース将軍から引継いだ。そは沈痛悲壮なる場面であつた。将軍は最早彼の上官に非ず、彼の客人となつたのだ。両人は互に相許し、相敬して居た。将軍は下の言葉を以て彼と訣別した――「予は貴下がアナファルタに於て戦へる時から貴下を知つて居る。予は最初より貴下の才幹を認めたることを誇りとする。吾等は屢々相諍つたが、而も相許す友人となつた。予の指揮権を貴下の如き軍人の手に渡すことは、予に取つて最後の慰めである。」

トルコは降服した。而もムスタファは戦意を棄てなかつた。休戦条約によつて英軍はアレキサンドレッタを占領せんとしたが、ムスタファは之を峻拒した。英国は首相イゼット・パシャを強要し、電話を以て其の明渡しを彼に命令させた。ムスタファ答へて曰く「貴下は膝を其敵に屈するも可、予は寧ろ敵に蹂躙せられんことを欲す」と。かくて彼は陣地を堅め、部下を四方に派して義勇兵を募り、敵軍のトルコ侵入を防ぐ準備に没頭した。

かかる間にコンスタンチノープルに於ては新内閣が組織せられ、彼の旧友フェティ、ラウフ提督、フェウジ将軍等の入閣を見たが、彼は例によつて無視された。然るにけて親英主義の宰相イゼット・パシャが皇帝と意見る以て切に彼の上京を促した。ムスタファは初めてせんとしたので、イゼットはムスタ

彼が首府に到達せる時、テウフィク・パシャは既に宰相となつて居た。統一進歩党は政治家は依然として朋党比周して居た。或者は英国の委任統治を、或者は仏国のそれを主張して居た。ムスタファは先づテウフィク・パシャを倒して強力内閣を作るため、政治ら彼等はムスタファを恐れて、容易に彼と結ばんとしなかつた。それ故に彼は直接皇帝に謁し、議会を解散して強力内閣を組織し、列強をしてトルコが尚ほ厳然として存立し、不法に対して抗争する意気あるを悟らしむべきことを力説し、且彼自身の怒りを買ふことを恐れて、彼を入閣せしめなかつた。

かくて議会の解散と内閣の改造とは、竟に何の好果をも齎らさなかつた。国内に漲る不安と不満は、次第に深刻になつた。コンスタンチノープルには幾多の秘密結社が組織せられ、聯合軍によつて警備せられし兵器倉庫から、武器弾薬を盗み出して、之を奥地に送らんと企てた。地方に於ては、統一進歩党の地方支部を中心として、庇亦幾多の愛国団体が結成せられ、聯合軍のトルコ支配に抵抗する準備を始めた。而して陸軍次官イスメット、参謀総長フゥウジ、海相ラウフ等が、密かにムスタファと手を握りるキアジム・カラ・ベキル将軍と気脈を通じ、聯合国将校のトルコ軍武装解除に抵抗せしめ、其の一切の命令を抗拒せしめた。ムスタファは最も慎重に行動したので、表面はトルコの運命に忍従し、皇帝の政策を容認

せるものの如く見えた。それでもイギリスは、決して油断しなかつた。彼の名前はそのブラック・リストに載せられ、適当なる機会に直ちに逮捕してモールタ島に追放せらるべき危険人物の筆頭に数へられて居た。

さてイギリスは、トルコ国内に於ける不穏の形勢を看取し、早期に之を鎮圧する必要を認め、皇帝をして急ぎ断乎たる処置を執らしめるために、自身を代表して現地に赴き、軍隊の武装解除並に解散を強行せしめ、且統一進歩党の地方支部弾圧を敢行せしむべき人物を求めた。宰相並に陸相は、共にムスタファ・ケマルを推したが、イギリス側は容易に賛成しなかつた。宰相は下の如く説明した――「奥地の不穏は決して民意の発現に非ず、統一進歩党員やエンヴェル残党の煽動によるものである。トルコ国民は何事よりも平和を熱望して居る。ムスタファは統一進歩党の一員ではあるが、エンヴェルとは決して相容れぬ敵であつた。其上彼は奥地に於て最も声望を博して居る。当面の重任を帯ばしめるのに、彼以上の適材を求むべくもない」。イギリスは遂に承諾を与へた。ムスタファは、モールタ島の牢獄に投込まれる代りに、北部トルコ軍検閲使兼東部トルコ総督に任命された。

ムスタファは、参謀総長ジェワッド・パシャと会見し、暗号電報によつて自由に君府と通信し得る処置を講じ、五名の幕僚を従へてポスフォラスを出帆した。時に一九一九年五月十六日、海は荒れて波高く、老朽せる小汽船パンデルマ号は、木の葉の如く弄ばれたが、難航三日にして目指すサムスン港に着いた。

宰相ダマッド・フェリッド・パシャは、果して彼を適材として適処に就かしめたのか、又は彼を首府より遠ざけるのが本意であつたのか。此事に就いてはムスタファ自身が下の如く説明して居る――「恐らく諸君は訊ねんとするであらう。予を君府より放逐するためにアナトリアに派遣せる人々が、如何に爾く広汎なる権限を彼に与へたのかと。返答は簡単である。彼等は予がサムスンに赴きて、該地方の不穏の状態を現地より報告し、且之に対することの意味を知らなかつたのだ。彼等は予がサムスン港に着いた

して適当なる処置を講ぜねばならぬといふ口実を設けた。予は之に対して、そのためには特別の権限を賦与されねばならぬことを指摘した。此事には異議を挿むべくもなかつた。予は此の問題を、当時参謀本部に居りし諸幕僚と論議したが、彼等は或る程度までの事の真意を忖度せるものと思ふ。予の地位を定めたのは彼等である。但し此の地位に伴ふ権限に関する訓令は、予自身の口授を其侭書取れるものである。陸相シャキル・パシャは、書類を一読して署名を躊躇する如く見えた。さればこそ其の署名は読みも難きほど微かである」。かくて彼はコンスタンチノープルを出発せる時、既に「全世界が完全に其の主権と独立とを承認する新トルコの創設」を堅く覚悟して居たのである。

五　独立戦争

一九一九年五月十九日は、ムスタファがサムスンに上陸してアナトリアの土を踏みたる日である。新しきトルコが少くもムスタファの魂の中で、確実に産声を揚げた此日は、トルコ人に取りて最も記念すべき日なる上に、偶然にも十九が三つ重なつて居るので、特に「三重の十九日」と呼ばれて居る。ムスタファは直ちに回天の偉業に着手した。彼は先づ軍隊の信頼と支援とを得るため、四方に打電して目ぼしき将校に呼びかけた。当時アナトリアに於けるトルコ兵力は六個軍団を算へたが、軍団とは名目のみで、一個聯隊の兵力は僅に数十名を算し、従つてアナトリアの全兵力を合せて二万内外に過ぎなかつた。加ふるに其等の諸部隊は、皆な数十里を隔てて諸方に散在し、之を結ぶ鉄道なく、良好なる道路なく、唯一の交通機関たるアナトリア鉄道及びバグダード鉄道は、共に聯合軍によつて占領され且管理されて居た。この悲惨なる情況に拘らず、多くの軍人がムスタファの志業に共鳴し、聯合軍の横暴に対して最後まで抗争する決意を堅めた。

また祖国の悲運に憤怒せる民間の有志も、既に述べたる如く、各地に団体を組織して救国のために起たんとして居

た。ムスタファは此等の団体の指導者とも聯絡をつけた。当時トルコ国民の殆ど総ては、永年の戦闘に疲弊し、無残なる敗北に落心し、一切の希望を失ひ尽して、喪家の狗の如く頭を垂れて居た。然るにムスタファのサムスン上陸に先つこと四日、即ち一九一九年五月十五日、ギリシヤ軍がスミルナを占領し、五百のトルコ軍を死傷せしめ、二万を捕虜としたことが、次第に四方に知れ渡つた。実に此事が電雷の如くトルコ人の魂を撃つた。臣隷の如く蔑視し来れるギリシア人、無能軽薄のギリシア人が、彼等の主人公となるが如きは、決して在り得べきことでない。而して聯合国が、小亜細亜の真珠ともいふべきスミルナ地方を、ギリシアに与へんとするに至つては、最早彼等の標榜する正義に如何なる信頼をも置き得ない。トルコ人は慨然として呼号した——「一切は忍ぶべし、断じてギリシア人のみは！」と。いまや彼等は其の垂れたる頭を昂げて、ムスタファの言葉に耳傾け初めた。救国運動に国民的組織を与へんとせる彼の企図が、斯くして可能の曙光を見たので、彼は下の如き檄を四方に飛ばした——「祖国危し。中央政府は其の任務を果たすに堪へず。唯だ国民全体の意志と力とのみ、能く祖国の独立を擁護し得べし。依つて茲に国民会議をシヴスに開くに決す。各地皆な三名の代表者を派遣せよ。此の計画は之を厳祕に付すべし」。

さり乍ら斯かる運動の祕密が、長く保たれる道理はない。コンスタンチノープル政府は英国の強要により、六月二十三日内相アリ・ケマル・ベイの名に於て、ムスタファ・ケマルは其職を免ぜられたること、従つて彼の命令に聴従すべからざることを、全国に向つて布告した。そのために同志並に国民の間に狐疑逡巡する者を生じたが、ムスタファは万難を排して運動を継続し、七月三日エルゼルムに赴いた。エルゼルムには、此年三月三日「東部諸州国権擁護団」支部の設立を見、一群の愛国者が熱心なる救国運動を起し、夙くムスタファと気脈を通じて居たが、いまや全市民及び軍隊は、歓呼して彼の到着を迎へた。彼は先づ此の精神的準備成れる土地に、東部諸州会議を開催して、国民運動の核心を作るに決し、その準備に全力を注いだ。

是より先きコンスタンチノープル政府は、屢々電報を以て彼に帰京を命じたが、彼は固より之に応じなかつた。七月八日、政府は遂に彼を一切の官職より罷免するに至つたが、殆ど同時に彼からも辞職の旨を打電した。此の前後の心境を、彼自ら下の如く語る――「吾等の目指す仕事は、役所や制服の蔭に隠れて、祕密に行ひ得る性質のものではない。或時までは夫れも可能であつたが、其時は既に去つた。今後吾等は堂々公開の場処に於て、国民の名に於て吾等の声を揚げ、国民をして至心に此声に共鳴せしめねばならぬ。予は此の大業を果たすために選ばれたが、若し事成らずば、悲劇的なる運命を甘受せねばならぬ。公然予と事を共にするは、即ち予と運命を共にする事となる」と。彼は同志に向つて覚悟のほどを披瀝し、彼を指導者として生死を共にするや否やを問うた。同志の殆ど総ては、欣んで彼を指導者と仰ぎ、其の命令に従ふべきことを約した。

幾多の困難を経てエルゼルム会議は七月二十三日に開かれ、二週間に亘る論議の後、下の諸原則を議決した。一、民族的境界内のオスマン帝国瓦解の場合は、国民一致協力して外国の占拠又は干渉に抵抗すること。二、政府が国民の独立及び国土の保全を擁護する能力なき場合は、如上の目的を遂行するため臨時政府を樹立すること。三、政府が国民の意志を主権として確立すること。四、国民の力を集中して支配の原動力たらしめ、国民の意志を主権又は社会的平等を阻害する如き特権をキリスト教徒に賦与せざること。五、政治的主権又は社会的平等を阻害する如き特権を拒否すること。六、委任統治又は保護権を拒否すること。七、全力を尽して速に国民会議を開催し、且之をして政府の行動を監督せしむること。

会議の結果は全国に伝へられ、大なる感動を国民に与へた。此の会議は、東アナトリアの代表者を、アナトリアのほぼ中央に位するシヴァスに集めて、トルコ国民会議を開催することとなつたが、今や一歩を進めて全トルコの代表者を、アナトリアのほぼ中央に位するシヴァスに集めて、トルコ国民会議を開催することとなつた。ムスタファは斯くして其の望める方向に歩を運動を導くことを得たが、同時にコンスタンチノープル政府の弾圧も次第に加はり、代表者等は或は間道を撰び、

或は夜陰に隠れ、警察の眼を忍びつつ四方から集まらねばならなかつた。ケマル自身もエルゼルムからシヴスに到る途上危く憲兵隊の手に捕へられんとしたが、迂路を取りて難を免れた。

シヴス会議は、一九一九年九月四日から九月十一日に亙り開催された。彼と事を共にし来れる最も有力なる同志ラウフ提督等が、恐らくムスタファに対する嫉妬から、彼の議長就任を妨げんとしたが、大多数の代表者の投票によつて彼が議長に選ばれた。前回の場合と同じく、議論は百出したが、ムスタファの決心と誠意と手腕とが、歩々代表者等の心を動かし、遂に若干の変更を以てエルゼルム決議に同意せしめた。而して従来の「東部諸州国権擁護団」を拡張して「アナトリア・ルーメリア国権擁護団」を組織した。ルーメリアとは欧羅巴トルコの事である。

コンスタンチノープル政府は、シヴス会議を好機とし、ムスタファ以下の諸代表を一網打尽に逮捕を命じた。其上シヴス市を襲撃せしめんとの計画を探知せるムスタファは、一隊を急派してマラティアを逆襲し、此処に集結せるクルド軍を四散せしめて同市を占領した。アリ・ガリブは、南方イギリス軍駐屯地帯に逃亡したが、周章の余り最も大切なる忘物をした。それは君府との間に取交はされたる一切の秘密文書である。此の文書を入手せるムスタファは、シヴス襲撃が政府の命令によれる確証を握つた。国民会議並に諸軍団司令官は、一斉に皇帝に打電して宰相ダマッド・フェリッド・パシャを糺弾し、即刻之を罷免すること、及び至急議員選挙を行ひて国会を再開すべきことを要請した。彼等は其の指定せる日時までに何等の回答にも接しなかつたので、一九一九年九月十二日、遂に一切の関係をコンスタンチノープルと断絶するに決し、ムスタファ・ケマルの名に於て之を全国に布告した。まさしく彼等は「独立」を宣言したのである。キアジム・カラ・ベキル将軍は、

此の布告は国民会議又は代表委員会の名に於て為さるべきもの、ムスタファ・ケマルの名を以てするは越権だと抗議した。彼は此の非難に対して、此事は責任の所在を明らかにするため、祕密会議の決議によつて為せるものだと答へた。但し其後も此の正直無骨の老将軍と彼との間に屢々意見の衝突があり、両者の関係は次第に冷かになつて行つた。

さて政府は遂に屈服した。十月二日ダマッド・フェリッド・パシャは辞職し前陸相アリ・リザ・パシャが代つて宰相となり、昨日までは叛逆者たりしムスタファ及び其の一党との妥協を講じ、彼等の要求を容れて総選挙を行ひ、国会を召集することとなつた。此時ムスタファは皇帝に対して、皮肉にも「国民の名に於て」謝意を表した。総選挙は国民会議派の大勝に帰し、ムスタファ自身もエルゼルムから代議士として当選したが、何処に国会を召集すべきかに就いて激しき意見の衝突を見た。政府は固よりコンスタンチノープルを主張したが、ムスタファはアナトリア奥地の都市を主張した。そのために政府は、海相サリフ・パシャをアマシアに派遣して、ムスタファと折衝せしめたが、ムスタファは自説を固持して譲らなかつた。然るに代議士に当選せる彼の同志が、次第に君府説に傾いて来た。彼等は今や正当に選挙せられたる国民の代表者として、叛逆者の汚名を雪がれたることを喜び、首府の国会議事堂に於て、皇帝の是認の下に堂々と国事を議することを欲した。甚だしきは向後は君府国会を以て救国運動の本舞台とすべく、従つて国民会議を解散すべしと唱へる者さへあつた。かかる次第で一九一九年十一月十六日、シヴスに開かれたる幹部会議に於ては、ムスタファの熱心なる説得も其の甲斐なく、君府説が遂に勝利を占めた。

ムスタファは、如何なる誘惑と陥穽とが、君府に於て彼の薄志弱行なる同志を待ち受けて居るかを熟知して居た。彼はアナトリアに於ける国民運動を一層強化して、やがて当面すべき難局と戦ふべく、此年も将に暮れんとする十二月二十七日、運動の本部をシヴスよりアンゴラに移した。此時もキアジム・カラ・ベキル将軍はアンゴラ移動に反対

したが、既に非常の覚悟を決めたムスタファは、敢て之を断行した。而して彼は新代議士を此地に招致し、議会内に於て彼等が執るべき行動に就いて仔細に訓示し、ラウフを院内委員長に推し、且彼自身はアンゴラに留まりて本部を守るが、必ず彼を議長に選挙すべきことを求めた。

越えて一九二〇年一月十九日、トルコ帝国の最後のものとなれる議会が、コンスタンチノープルで開かれた。議会はムスタファが要慮せる如く、妥協気分に充ちて居た。ラウフの動議により、同志は彼を議長に選ぶことを止め、穏健無難のレシャッド・ヒクメット・ベイを選んだ。但し一月二十八日の議会に於て、議会はエルゼルム及びシヴス国民会議が決議せる原則、即ち彼等の「国民盟約」を堅持すべきことを可決した。此の決議は、実際は単に形式的のものであり、議員の多数は徹底して之を遂行する決死の覚悟を抱いて居たのでない。それにも拘らず此の決議は、正面から聯合国の意図に挑戦せるものとして、痛く彼等の憤怒を買つた。彼等はトルコ皇帝並に政府に対して、頓に圧迫の手を加へ初め、先づ国民運動者に好意を有する陸相ジェマル・パシャの辞職を余儀なくせしめた。而も此事は優柔なる議員に対する好箇の鞭撻となつた。そはアンゴラより来るムスタファの間断なき激励と相待ち、彼等の敵愾心を鼓舞し、彼等の奮起を促して、再び国民運動の正しき軌道を踏ましめる逆縁となつた。いまや君府の同志等は、漸く議会を舞台とする活動が祖国を救ふ所以に非ざることを悟り、着々戦闘準備に取りかかつた。彼等はムスタファの命令に応じ、兵士と武器と戦費とをアナトリアに送り始めた。将校の一団は、ガリポリの一武器庫を襲ひ、聯合国が反過激派のウランゲル将軍に与へることに決めて居た武器薬弾を掠奪して、悉く之をアナトリアに送つた。かくて一切の武力抵抗の禁止が、ロンドン及びパリから絶対に要求されて居るに拘らず、スミルナ一帯に遊撃隊の出没止まず、シリシアに於けるフランス軍は次第にトルコ軍のために圧迫せられ、先づマルシュより退却し、次でウルファより逐はれ、シリシア東部はトルコのものとなつた。議会に於ける国民会議派も、之に応じて次第に勇気を回復し、三月七

日優柔不断なるアリ・リザを辞職せしめ、海相サリフ・パシャをして代つて宰相たらしめた。

聯合国は最早默視し得なくなつた。カーゾン卿は、三月十日英国上院に於て、「吾等は君府に於て是以上愚弄せらるるに堪へず」と疾呼した。かくて三月十六日、聯合国軍隊は隊に君府の軍事的占領を敢行し、ルソン将軍は、ラウフ・ベイ、フェテイ・ベイ以下の議員を逮捕して之をモールタ島に送致し、次に議会を解散した。越へて四月五日、聯合国は其の傀儡としてダマッド・フェリッド・パシャを選び、再び彼を宰相たらしめた。の傀儡政府は、直ちに特別軍法会議を開き、ムスタファ及び其の主なる同志に対し、叛逆者として死刑を宣告した。其上に彼等は宗教裁判所から破門の宣告を受けた。そは取りも直さず彼等を回教の敵と宣告せるものなるが故に、彼等を屠ることは雷に罪悪に非ざるのみならず、却て回教徒の神聖なる本務となる。事実ムスタファは屢々暗殺者に狙はれ、彼等の凶手に斃れたといふ噂まで誠しやかに伝へられた。ムスタファ・サンギルと名乗れる暗殺者の一人は、イギリスの間諜であつたが、陰謀発覚して捕へられ、一九二一年五月、悉く其の罪状を告白した。

彼は印度ベナレス生れの回教徒で、齢は三十余歳、幼くして英国に連れ行かれ、イギリス国王並に印度総督のために忠誠を尽すべきことを誓ひて教育を受け、オックスフォード大学卒業後は、エジプトに於ける国民運動を偵察するとして盛んに活躍せる間諜であつた。彼はトルコ皇帝が毎月イギリスより幾何の金額を受けつつあるかを告げ、若しムスタファにして英国と握手するならば、七百万弗を与へられるだらうと言つた。之を聞いたムスタファは一自分の値段がそれほど高価とは思はなかつた」と微笑しながら言つた。彼はトルコ皇帝、ダマッド・フェリッド以下の閣僚並に君府駐在イギリス武官の依頼により、アンゴラに来つてムスタファ暗殺を実行する手筈であつたと言つた。而して一彼等は何故に汝を選んだか」といふ訊問に対し、驚くべき返答を彼は与へた——「それは予がアフガニスタンに

於て、此度よりも一層危険なる任務を立派に果したからである。アフガン王ハビブラー・カンを殺したのは自分である」。かくて彼は一切を白状し去れる憂美として「予は回教の名門の出であるが、家名を汚したくないから、実名だけは追窮せずに欲しい」と言つた。従来ハビブラー王は、その親英主義を悪める親独派の手に斃れたるものと信ぜられて居た。若しムスタファ・サンギルの此の告白が事実なりとすれば、当時漸く擡頭し来れる中亜回教聯盟運動の闘士たちが、ハビブラー王を盟主に戴かんとして居たので、之を喜ばざりしイギリスが、彼をして毒手を揮はしめたものとせねばならぬ。而もイギリス官憲は、ハビブラー王を殺したのは、王の進歩主義を悪める反動的宗教団体の一味であると称して居る。

さり乍ら聯合国が、敗残のトルコは鎧袖一触にも値せずとせることは、大なる誤算であつた。彼等の君府占領は、既に燃えつつありしトルコ国民の敵愾心に油を注いだ。彼等は今更の如く皇帝並に政府の無力を憤慨し、自ら蹶起して祖国を護らねばならぬことを痛感した。ムスタファは、此の国民的興奮に乗じ、逸早く三月十九日全トルコに対して、国民議会をアンゴラに召集する旨を布告した。而して聯合国側及び政府の激しき妨害ありしに拘らず、総選挙は遂行せられ、四月二十三日の金曜を期し、三百五十名の議員より成る「トルコ大国民議会」が開かれることとなつた。

寂しき田舎町アンゴラは、俄然としてトルコの政治的中心となつた。ひとり国民議会議員のみならず、君府を見棄てたる軍人や官吏、学者や新聞記者、さては富豪までが、陸続としてアンゴラに入込んだ。ムスタファは倦むことなき熱心を以て、集まり来る議員たちに其の政治的理想を説明し、また当面の急務を説明した。而して既に議会開会以前、彼は殆ど総ての議員を説破して、下の要領を納得させた。第一には新に政府を組織すべきこと。第二に大国民議会は同時に立法機関

と行政機関とを兼ぬべきこと。第四に議会は執行委員を選びて行政を担任せしむべく、議長は該執行委員を統裁すべきこと。

必要なる事前工作を了りたる後、第一回トルコ大国民議会は、予定の如く四月二十三日を以て開かれ、ムスタファは其の議長に選ばれた。此日は新トルコの紀元節として、爾来トルコの祝祭日となつて居る。議事は大なる波瀾なく順調に運び、上述の諸提案は尽く可決せられ、四月二十九日には、コンスタンチノープル政府は聯合国の俘虜なるが故に之を承認せざる旨を声明し、翌三十日、新トルコ建国を欧羅巴列強に通告した。次で五月二日、新法律によつて十一名の執行委員即ち閣僚を選び、茲に新トルコ政府の成立を見た。此時ムスタファは、君府より来りて彼の運動に参加せる少壮陸軍大佐イスメット・パシャ——時に齢三十五歳——を挙げて参謀総長の要職に就かしめた。此の人事はファウド・パシャ及びラフェット・パシャの如き老将軍から烈しき反対を受けたが、ムスタファは断乎として所信を敢行した。但し勇将フェウジ・パシャがイスメット抜擢に同意し、己れは欣んで国防相就任を受諾したので、此の不平も事なく鎮まつた。而してムスタファの人選は決して誤らなかつた。イスメットは幾くもなく単に軍人としてのみならず、同時に政治家として抜群の才幹を示し、フェウジ・パシャと相並んで、ムスタファの最も大切なる股肱となり、現に彼の後を継いでトルコ共和国第二代大統領となつて居る。

コンスタンチノープルは、決して此の「叛逆」を黙視しなかつた。そは前述の如くムスタファ以下に対して死刑を宣告するのみならず、武力を以て国民運動を弾圧するため、一切の手段を講じた。そは全国に向つて「帝位と神域を護れ」と呼びかけ、純朴なる国民の忠義と信心とに訴へた。君府に踏み留まれる将校をして所謂「カリフ軍」を編成し、アナトリア西北部を襲はしめた。使者をクルヂスタンに派して、クルド諸族に一揆を起させた。暴動はアナトリアの諸地方に勃発し、アンゴラの近くまで攻寄せんとした。かくて加へて六月下旬からはスミルナに拠れるギリシア

軍が攻撃を開始し、国民軍は敗北して西アナトリアの広き地域を奪はれた。イギリス軍も相次いでムダニア及びパンデルマに上陸した。かくてアンゴラ新政府は、国民議会に於てさへ痛烈なる非難攻撃を浴びせられた。

かかる間に聯合諸国がトルコに強要せんとする平和条約の内容が次第に知れ渡つた。而して八月十日遂にセーヴル条約の締結を見た。若し此の条約の諸項目が、其通りに履行されるならば、トルコの国民的存在は滅亡し去らねばならぬ。運命は常にムスタファを最後の窮地に陥れ、然る後に彼のために血路を開く。皇帝及び宰相が、甘んじてトルコに対する死刑の宣告に等しき此の条約を結べるを見て、国民は激悲して起つた。六百年来彼等は支配民族であつた。彼等は断じて奴隷民族たるを肯んじない。諸処の内乱は次第に鎮まつた。去就に迷へる国民は漸く決意した。彼等はムスタファ・ケマルの旗風を仰ぎ、彼と共に祖国の危急を救ふべく進んで「ケマル党」となつた。東トラキアに於て国民運動に呼応せるジャファル・タヤル将軍の部隊は、コンスタンチノープルの背後に迫り、同時にアリ・ファウドの率ゐる部隊は、イスミッドを攻撃して、ボスフォラス海峡の岸に進出し、亜細亜側から首府を脅すに至つた。時に君府に於ける聯合軍の兵力は僅に二千に過ぎず、若し国民軍が南北より挟撃を敢てするならば、到底之に対して勝算は無かつた。かくて彼等は万一に備へるため、一切の撤退準備を整へ、金角湾頭には運送船が烟を吐いて何時でも出帆し得る手筈を整へた。

パリに於て平和会議の円卓を囲みつつありし列強の政治家は、事の意外に驚愕した。バルフォア卿が匪賊の頭目と侮蔑せるムスタファが、今やトルコ人を号令して聯合軍をトルコより駆逐し去らんとするのである。若しも此の匪賊を跋扈跳梁せしめるならば、彼等が描ける美しき世界新秩序は、之によつて蹂躙せられ、彼等が摑まんとせる獲物は雲散霧消するであらう。如何なる犠牲を払ひても、これは弾圧せねばならぬ。然らば如何にして之を弾圧するか。此処で吾等は翻つて当時の欧羅巴列強の国情を顧みねばならぬ。

先づイギリスに取りては、ムスタファよりも遥へ揺がさんとした。即ちロシアの過激派軍が、イコーカサスを赤化し、更にペルシアに進出して猛し去らんとする。同時にインドに於ても排英の火ルランド独立運動鎮圧のためにも、復員後に残れる僅少の陸軍を用ゐねばならなかつた。イ倦き果てた。再び動員して兵を東方に出だすが如きは、当時のイギリスに取りて絶対に不可能事であつた。然らばフランスは何うか。シリシアに占拠せるフランス軍は、既にトルコ国民軍のために撃破せられ、アンゴラ政府との間に休戦協定を行はねばならなかつた。そは「アナトリア叛徒」が列強と結べる最初の条約である。其上シリアの委任統治は、アラビア人の反抗によつて困難を極め、ライン河畔並に阿弗利加に於てもまた事繁かつたので、兵をトルコに用ゐる余力などは有り得なかつた。

かくてムスタファ征討のために戦はんとする者は、唯だギリシアあるだけであつた。二十年来大ギリシア帝国の夢を抱き、その実現のために肝胆を砕いて未だ曾て倦むことを知らざるヱニゼロス首相は、世界戦に於て実に千載一遇の好機を見た。彼の智謀と胆略とは、ギリシアを最も小さき犠牲によつて最も大なる獲物を得せしめた。セーヴル条約によつて与へられたるものを、実際に獲得する力あるものは、唯だ彼のみであるかに見えた。ギリシア軍は夙く既にスミルナを占領し、トルコ国民軍を撃退して、バリケシル、ブルサ、さてはウシャクを略取し、ほぼ西北アナトリアを征服した。列強はギリシアを用ゐる外に途なかつた。英払は武器其他の軍需品を豊富に供給した。戦場に経験を積みたる英国将校が作戦を指導した。一方斯くの如く西アナトリア戦線を強化すると同時に、ギリシアは七月二十日、更にロドストに一個師団を上陸せしめ、トラキアのトルコ国民軍を撃破して司令官ジャファル・タヤル将軍以

下殆ど全軍を捕虜とし、僅にコンスタンチノープルの周囲を除くトラキア全部を占領した。

斯くの如き外患は、更に内憂を伴つた。蓋しスミルナを繞るギリシア軍との戦闘は、これまで主として民軍によつて行はれて来た。民軍の最大なるものは、一九二〇年に小農民を糾合して組織せられたる「緑軍」であり、多分に共産主義的なる理想を掲げ、本部をクタヒアに置き、剽悍のエドヘム兄弟によつて率ゐられて居た。そは勇敢にギリシア軍と戦ひ、反動的騒乱を鎮め、アンゴラ政府の確立に貢献するところ大であつたが、次第にアンゴラを無視して独立自由の行動を取るに至り、国家内に更に一国を造らんとする危険を生じた。然るに他方参謀総長イスメット及び国防相フェウジの才幹と努力とにより、トルコ正規軍の再建が着々進捗し、陣容頓に整ふに至りて、緑軍との間に軋轢衝突を招いた。それは傲慢なるエドヘム兄弟が、イスメットの号令に服することを拒んだからである。ムスタファは、彼等を説得し、慰撫し、懐柔するために全力を尽したが、遂に無効に終つたので、止むなく彼等を叛乱者として糾弾せねばならなかつた。レフェットの指揮せる正規軍は、此年十二月二十九日、緑軍の本拠クタヒアを占領した。敗走せるエドヘムは、翌一九二一年一月五日、全部下を率ゐてギリシア軍に投じた。この内乱を好機として、ギリシア軍は直ちに翌一月六日より攻撃を取り、プルサよりエスキ・シェヒルに進出して、此の重要なる鉄道地点を奪はんとしたが、一月九日イノェニュに於てトルコ軍のために撃退された。この勝利は、軍事的には左程深刻なる打撃を敵軍に与へなかつたけれど、トルコの民心を鼓舞せる点に於て甚大なる意義があつた。そはギリシアに対する最初の打撃なるが故に、第一回イノェニュ勝利として、新トルコの歴史に黄金の文字を以て書かれて居る。此の勝利の後にムスタファは直に緑軍の撃滅を命じ、一月十一日より二十二日に亘る猛烈なる追撃によつて、遂に全軍を捕虜とした。

是より先き東方コーカサスの南部に於ては、イギリスの支援の下に、アルメニアが独立を宣言して居た。セーヴル

条約に従へば、新建せらるべきアルメニア国は、従来の露領地域と広大なる土領地域とを含み、黒海沿岸バトゥムより裏海沿岸バクに至る大国たるべきであつた。イギリスは露領アルメニア及びバクに軍遂を駐屯させて居たが、過激派勢力の増進により、近東とロシアとの間に緩衝国を創設せんとせし計画も画餅に帰し、一九二〇年六月初旬、最後の英軍がバクを撤退した。やがてセーヴル条約の締結を見たが、ムスタファは固より之を無視し、キアジム・カラ・ベキル将軍をしてアルメニア攻略に従はしめた。英軍撤退によつて孤立無援となれるアルメニアは、最早トルコの敵でなかつた。進撃は九月二十三日を以て始められたが、アルメニア人は夙くも十一月上旬、力尽きて休戦を乞ひ、十二月三日のアレキサンドロポル条約により、トルコ領内を去りてトランスコーカサスの小地域に退いた。然るに数日ならずしてロシア過激派軍がエリワンに進出し、アルメニア共和国をソギエト聯邦の一に併合した。

アルメニアに於ける此の成功は、二重の意味に於て甚大なる利益を新トルコに与へた。第一には之によつてアンゴラ政府は後顧の憂を除かれ、全力を西部戦線に注ぎ得るに至つた。第二に革命トルコの唯一の同情者たりしロシアと接壌し、容易に其の援助を仰ぎ得るに至つた。ロシアより供給せられる軍需品によつて、トルコ正規軍は迅速に強化された。

翻つて君府を顧みれば、国民運動弾圧に失敗せるダマッド・フェリッド・パシャは宰相の位を退きてテウフィク・パシャ之に代り、国民の信望ありしアーメッド・イゼット・パシャ及びサリフ・パシャがそれぞれ内相及び海相として入閣した。新政府は直ちにアンゴラと妥協交渉を開始し、内相及び海相をアナトリアに派し、一九二〇年十二月五日ビレジックに於てムスタファと会見せしめた。ムスタファは両人に対して、大国民議会議長として自己を紹介したる後、卿等の資格は何ぞと訊ねた。サリフ・パシャは自己を海相と名乗り、イゼット・パシャを内相として紹介した。ムスタファは、己れはコンスタンチノープル政府を認めざるが故に、斯くの如き政府の大臣と論議するを得ずと

答へた。然し乍らとにもかくにも両者の間に意見の交換が行はれた。而してムスタファは両人をアンゴラに案内した。此の会見は何等具体的結果を見なかつたが、ムスタファの地位が漸く確立し来れる証左となる。而して列強もまたアンゴラ政府を無視し得なくなつた。即ち一九二一年二月下旬に開かるべきロンドン平和会議は、トルコ及びギリシア代表者の出席を求めた。ムスタファは大国民議会以外に、如何なる政府の存在をもトルコに於て認めずして、コンスタンチノープルが平和会議に参加することを強硬に拒絶したが、イタリー外相スフォルザ伯の斡旋により、別個にアンゴラ代表を会議に招致することとなつたので、外交部長ベキル・サミは尋常一様の外交官なりしが故に、ムスタファの如く大胆不敵なるを得なかつた。彼は密にロイド・ジョージに向つて、若しイギリスが列強のトルコ占領を断念せしめるならば、トルコを以て過激派に対する緩衝国たらしめんと提議し、却つて英首相の爆笑を買つた。かくて一行は何等得るところなくして帰国したが、如何なる天の悪戯にや、此の会談筆記がモスクワのチチェリンの手に入つた。チチェリンは之を一読して大に憤り、トルコはロシアの援助を受けて居り乍ら、斯くの如き行動に出づるは許し難しといふ意味の強硬なる抗議をムスタファに提出した。ベキル・サミは直ちに罷免された。

かかる間にギリシア軍は、熱心に攻撃を準備しつつあつたが、三月に入りて再びエスキ・シェヒル奪取の目的を以て南下し来つた。イスメットは、またもやイノェニュに於て敵を待受けた。敵の攻撃は三月二十八日に始まり、激戦三日に亙りて、勝利は殆ど敵のものとなつたが、三十一日に至り、土軍の力戦苦闘によつて遂に敵を撃退するを得た。名高き第二回イノェニュ勝利である。但しギリシアは此の敗北によつて挫折しなかつた。そは国家の全力を挙げて最後の決戦の準備に努め、国王コンスタンチノス親ら陣頭に立ち、七月上旬進軍を開始し、先ずアフィヨン・カラ・ヒサルを取り、次でクタヒアを攻め、西アナトリアの鍵ともいふべきエスキ・シェヒルに迫つた。イスメットの指

揮するトルコ軍は、装備に於て遥に大なる敵軍を迎へ、七月十日以来悪戦苦闘を続けた。十八日にムスタファはアンゴラより来りて戦線にイスメットを訪ひ、精細に状況を研究せる後、全軍をサカリア河の東岸に後退せしむべきことを命じた。かくて七月二十五日夕、トルコ軍はエスキ・シェヒルの要衝を棄ててサカリア河畔に退却した。ムスタファは国民議会を説得して、己れを総司令官に任命せしめ、且三箇月間議会の有する全権力を己れに委任せしめ、八月十二日フェウジを伴ひて戦線に赴き、同月二十三日より二十二昼夜に亘る力戦の後、完全に敵軍を撃退した。九月十三日にはサカリア河以東にギリシアの一兵だも残らなかつた。国民は此の会戦に対して、非常なる恐怖と憂慮とを抱いて居た。多くのアンゴラ市民は、何時でも避難し得るやう家財を纏めて戦戦兢々として居た。然るに今や彼等は救はれた。此月十九日、国民議会は彼を元帥の位階に叙し、ガジの称号を与へた。ガジとは不信者を撃破せる将軍に与へられる回教徒至高の栄誉ある称号である。

サカリアの勝利は独りトルコ人を驚喜せしめたるのみならず、全世界を驚かした。彼はロシア、アフガニスタン、印度、亜米利加、さてはフランスやイタリーから雨の如き祝電を浴びた。さり乍ら彼は飽く迄も冷静であつた。此の一戦は、見事にギリシア軍の進撃を阻止し、トルコを滅亡から救つたものであるが、決して致命的打撃を敵に与へたのではない。ギリシア軍は仮令敗れたとは言へ、其の兵士は味方に劣らず勇敢に戦つた。彼等は依然として西アナトリアを占拠して居る。トルコの兵力を以てしては、直ちに之を追撃することは思ひも寄らぬ。そのためには兵力を補充し、装備を改善せねばならぬ。そのためには時間を要し、物資を要し、金を要し、わけても国民の協力を要する。彼は勝利と賞讃とに酔ふ暇を有たなかつた。唯だアンゴラ政府の強化のために、彼の国際的立場は俄然有利になつた。フランスはフランクリン・ブイヨンをアンゴラに派遣して彼と和平交渉に当らしめ、十月二十日両国の間に祕密条約の締結を見、フランスはシリアに対する要求を放棄し、シリアとの国境を協定した。ト

ルコは之によつてシリア戦線に配置せる八万の兵力を省き得たのみならず、フランスは更に四万の兵力装備に要する軍需品の供給を約束した。其上彼はイタリー及び亜米利加からも武器を購入し、之に要する費用をモスコーから借りた。而して全力を挙げて国民を軍旗の下に集めた。

然し乍ら国内の一致協力は決して容易でなかつた。時を経ると共に人々はサカリアの勝利を忘れ、ムスタファの声望を嫉視し始めた。国民議会の有力なる議員等は、ムスタファに対抗するため「第二党」と称する団体を結び、彼の政策を非難した。其の指導者は、彼の最初からの同志で、曩にアンゴラに帰れるラウフ提督であつた。彼はイギリスの議会政治を以て理想的政治機構と考へ、トルコの政治を英国的に改革せんことを望んで居たので、其の根本主義に於てムスタファと相容れなかつた。而もムスタファに対する反対は、独り第二党からのみ来るのでない。重要なる問題が提起される毎に、議会では常に激しく議論が行はれた。或者は、サカリア会戦後多くの日月を経たるに、何故に便々として軍事行動を開始せぬのかと怒号した。ムスタファは、総攻撃の準備が如何にして整へられつつあるかを、納得の行くまで説明せねばならなかつた。一九二二年春、聯合国が休戦を提議し来れる時は、和平論者が声を高くして之に応ずべしと主張した。彼はトルコの国力が充実せざる限り、決して名誉ある平和は望まれぬとして、断乎之を排撃した。またムスタファが軍総司令官として、長く絶大なる権力を握ることは、彼の反対者の最も欲せざるところであつた。任期は三箇月と定められたので、満期毎に投票によつて再任された。第三回の改選は一九二二年五月に行はれたが、其時彼は病床に在りて議会に出席出来なかつた。而して議会は彼に此の権能を委ねることを否決した。翌日彼は病を推して議会に臨み、現に敵軍と対峙しつつある前線のトルコ軍が、総司令官を欠くといふが如きことは、決して在り得べからざることだと力説し、再び投票によつて賛否を決せしめた。開票の結果、反対せるもの十一、賛成せるもの十五、再選に賛成せるもの百十七、三たび

彼は総司令官に選ばれた。其後三箇月を経て七月に至り、又もや此事が問題となつたけれど、此事は戦争の準備既に成り、近く総攻撃を開始するに決して居たので、何人も声高くは彼の重任に反対し得なかつた。但し議会に於ける反ムスタファの空気が、依然として濃厚なりしことは、七月十二日の議会に於て、ラウフが議長に当選せることによつて知り得る。

さてサカリアより敗退せるギリシア軍は、北はアフィヨン・カラ・ヒサル及びドゥムルプナルに、南はエスキ・シェヒルに大軍を集結して、厳重にトルコ軍の進出に備へて居た。ヴニゼロス去りて後のギリシア政界は、群小政客の権力争奪の舞台となり果て、政府は英国の援助により、戦はずして平和を結ばんことを希望してゐた。総司令官ハドヤネスティ将軍は、政争に没頭して戦線を顧みざる政治家の陰謀によつて任命されたものであり、空しくスミルナの珈琲店で日を暮らして居た。而して前線の塹壕に起臥する兵士に対しては、被服・食糧・弾薬の配給も十分でなかつた。軍隊も銃後の国民も、総て戦意を失ひかけて居たのである。

時は一九二二年八月下旬、サカリア会戦より丁度一年、アナトリア高原の残暑尚は烈しきころ、ムスタファは満腔の自信を以て総攻撃を準備し、極秘裡に作戦計画を了り、八月二十六日払暁を期して砲火を開いた。此の日及び翌二十七日の戦闘に於て、ギリシア軍は散々に破られた。八月三十日には、ドゥルム・ピュナルに敗北せるギリシア軍は完全に土軍のために包囲せられ、参謀長トリビクス将軍、副参謀長ディオニス将軍以下、軍隊の大部分が捕虜となつた。九月一日、ムスタファは名高き下の号令を下した――「兵よ、汝等の目標は地中海に在り。進め！」。かくて土軍の一隊はエスキ・シェヒルの敵部隊掃蕩のために前進し、主力はスミルナを目指して前進した。アフィヨン・カラ・ヒサルからスミルナまでは約三百粁の道程である。潰滅せるギリシア軍は、土軍の追撃を受けながらも、途上の町々

村々に火を放ち、掠奪殺戮を肆まにしつつスミルナに迫り着き、先を争うて船に乗つた。スミルナ駐在の聯合国領事等は、使者をムスタファに派し、此町を還附すべきにより、市民の保護を完うせられたいと、数々の注意事項を提示した。ムスタファは一誰の町を誰に還附するといふのか」と一喝して外国の余計な容喙を斥けた。而して九月九日、トルコ軍の先鋒は、何等の抵抗を受くることなくしてスミルナに入つた。之を率ゐたるシュクリュ・ナイリ将軍の乗馬は、捕虜となれる敗将トリピクスのもとであつた。此時より僅に十日を経たる九月十八日には、アナトリアにギリシアの一兵をも留めなかつた。

ムスタファは些かも追撃を弛めなかつた。スミナル及びブルサを奪回せるトルコ軍は更に北上して海峡を渡り、一挙トラキアよりギリシア軍を駆逐せんとした。しかも其為には聯合国が定めたる「海峡地帯」を通過せねばならぬ。かくてギリシアを破れるトルコは、ギリシアを後援せる列強と面々相対することになつた。列強の強硬なる抗議に拘らず、ムスタファは敢然として軍を進めんとした。英国ハリントン将軍は、君府に於ける聯合国の軍隊を動員し、土軍が渡らんとせる海峡の欧亜両岸を防備した。戦争は殆ど避け難く見えた。英国首相ロイド・ジョージは、英国並に自治領諸国に向つて開戦を促し、ルマニア及びユーゴスラギアに参戦を求め、且聯合諸国に向つてダーダネルス海峡に軍隊の増派を求めた。然し乍ら列強は彼の呼びかけに耳を藉さなかつた。英国民自身が激しく反対の声を挙げた。世界は最早戦ひに飽いたのである。かくてフランスの調停により、聯合国側の諸将軍とトルコ側代表とが、マルモラ海岸の小さき都会ムダニアに会合して善後策を商議することとなつた。ムスタファはイスメットを全権に選び、トラキアの還附並に聯合軍の君府撤退を強硬に主張せしめた。論議一週間の後、聯合国側は終に譲歩し、一九二二年十月一日未明、ムダニア公会堂の狭き一室に於て、敵味方の諸将軍が休戦条約に署名した。ムスタファが国民盟約に於て主張せる「民族的境界内の全国土」は、かくして見事に回復されることとなつた。

此の対土政策の失敗は、ギリシアの支持者たりしロイド・ジョージ内閣を失脚せしめた。イの主義政策を見棄て、ボーナー・ローの保守党内閣を歓迎した。大帝国建設の夢破れしギリシネに革命起り、国王コンスタンチノスは廃せられ、太子ギオルギオス王位を嗣ぎ、曾て国外に再び迎へられ、而して首相グナリス以下四大臣及びハドヤネスティ将軍は、敗戦の罪を以て死刑に処せられた。

六　サルタン及びカリフの廃止

ムダニア休戦条約の締結により、武力による独立のための闘争は、トルコの勝利を以て殺落はやがて開かるべきローザンヌ会議に待たねばならぬ。此の会議に新トルコを代表して、列強にふさはしき外交上の勝利を収め得る者は誰か。げられ、そムスタファ、ユスフ・ケマル、リザ・ヌル三人の人選に就いて盛んに議論が闘はされ議を排しては三人の誰をも適任者と考へなかつた。彼を全権に指名した。イスメットは、としたので、遂に此の重任を受諾した。

然るに聯合国は、単りアンゴラ政府に対してのみならず、コンスタンチノープル政府に対しても亦た、ローザンヌ会議に代表を派遣すべきことを求めた。イギリスが、如何なる魂胆から斯くの如き処置に出でたかは明瞭でない。アンゴラ政府の否認に拘らず、名目だけは依然としてコンスタンチノープル政府も存続して居るので、其の招待は単に形式的なる国際儀礼であつたかも知れない。或はまた之によつて新たにトルコに内訌を醸さしめんとせる狡猾なる計略であつたかも知れない。若し後者なりしとせば、イギリスは其の期待せるところと全く反対の結果を招いたことと

なる。何となればイギリスは、之によつてムスタファが予てより意図せる皇帝廃止に絶好の機会を与へ、却つて新トルコの強化を促進したからである。

ムスタファは、当初より新トルコの共和制を企図して居た。彼は一切の旧き制度を葬り去らねば、トルコの更生が断じて不可能なることを堅く信じて居た。さり乍ら彼の同志の多くは、斯くの如き徹底せる革命を好まなかつた。わけてもラウフ・ベイやレフェッド・パシャは、彼の理想を急進過激として恐れて居た。ムスタファが全ギリシア軍をアナトリアより掃蕩してアンゴラに凱旋せる時、ラウフは一日彼及び最近モスクワに使ひして帰れるファウド・パシャを、レフェットの家に招待した。其の席上にてラウフは、ムスタファに向ひ、彼が君主制並にカリフ制を廃止する意図を有すと伝へらるるが、真偽果して如何と質問した。彼は先づ之に対するラウフの意見を知りたいと言つた。ラウフは直ちに答へた——「予の祖父並に予は、サルタンのパンを弁護しようとは思はぬ。彼は廃せられ、他のものが代らねばならぬ。然し乍ら予は総ての真実のトルコ人と共に、サルタン、カリフに忠誠を誓ふ。加ふるに何人も覬覦すべからざる至尊の地位に立つ者を奉戴することは、国家を安定せしむる必須の条件である」。此の返答は、恐らく大多数のトルコ人の意見を代表せるものであつた。レフェットは直ちに之に賛成した。ファウドは、国内の事情を明かにせずとの故を以て、賛否を明言することを避けた。ムスタファは時未だ到らざるを看取し、彼もまた異論なしと告げた。ラウフは、世人の誤解を解くために、議会に於て此事を声明せよと希望したので、彼は翌日の議会に於て、君主制並にカリフ制を廃止するの意図なしと言明せねばならなかつた。

かくて彼は其の所志を貫くために、機会の到来を待たねばならなかつた。而して其の機会は、彼の予期せるよりも早く来た。それはレフェット邸の会合ありてより僅に一週間の後、イギリスが平和会議使節の派遣を皇帝に求めたことである。此事は皇帝の側近を除く全トルコ人を激怒せしめた。コンスタンチノープルに於てでさへ、皇帝を弁護す

る一記者アリ・ケマルが、白昼、倶楽部の一室から街頭に引摺り出され聯合国警官の面前に撲殺された。皇帝の侍者宰相及び閣僚は、室内に潜んで居ねばならなかつた。従つてアンゴラに於ける憤激は言語に絶した。議会に於ては忿怒に燃えたる議員等が、声を限りに咆哮した――「コンスタンチノープル政府は何者だ。トルコを救うために何をしたか。何の顔あつて招待を受けるか。宰相も閣僚も皆な犬だ、謀叛人だ、馬鹿皇帝の幣間だ。トルコの政府はたつた一つ、吾々の国民議会の外に政府は無い！」

ムスタファ・ケマルが、白昼、倶楽部の一室から街頭に引摺り出され聯合国警官の面前に撲殺された。皇帝の侍者宰相及び閣僚は、室内に潜んで居ねばならなかつた。従つてアンゴラに於ける憤激は言語に絶した。議会に於ては忿怒に燃えたる議員等が、声を限りに咆哮した――「コンスタンチノープル政府は何者だ。トルコを救うために何をしたか。何の顔あつて招待を受けるか。宰相も閣僚も皆な犬だ、謀叛人だ、馬鹿皇帝の幣間だ。トルコの政府はたつた一つ、吾々の国民議会の外に政府は無い！」

ムスタファは断乎として決意した。彼は第一にラウフ・ベイを招き、端的に下の如く告げた――「事茲に到りては君主制とカリフ制とを分離し、直ちに君主制を廃止する外はない。君は議会に於て、起つて同意を表明して欲しい」。

ラウフは彼の気魄に圧され、黙々として首肯した。ラウフが室を去らぬ前に、同じく招かれたるキアジム・カラ・ベキル将軍が入つて来た。ムスタファは将軍にも同様のことを求めた。

ラウフは彼に求められたる如く議会に於て行動した。彼は皇帝廃止の日を国民祝日と定むべしとさへ言つた。而も真に非常の事なるが故に、流石に熱狂せる議員も、容易に賛否を決し兼ねた。十月三十日より十一月一日に亙りて、議会では激しき討論が行はれた。議案は委員会に付託された。その委員会でも議論は果てしなく続いた。遂にムスタファは委員長に向つて発言を求め、椅子の上に突立ちて大声疾呼した――「諸君！　主権又は統治権は、空理空論によつて得られるのでない。オスマンの児等がトルコ国民を支配する権利を獲得し、六百年間その支配を維持したのだ。いまトルコ国民はその簒奪者に背き之を坐るべき所に据ゑ、現に自ら主権を行使して居る。これは現実の事実だ。国民の手に此の主権を握るべきか否かを知ることは、最早吾等の問題ではない。問題は既に実現せらるる事実を確認すること。此の真実を声明することである。但し予は此の問題の理論的一面に就いても説明するであらう」。而して彼は詳細なる説明を与へ

た。委員会は納得した。議会は此日を以て皇帝の廃止を議決した。

廃帝は此の決議に拘らず、尚カリフとコンスタンチノープルに止まらんとした。而も国民議会は叛逆者として廃帝を特別裁判に附すべきことを決議したので、一九二二年十一月十七日払暁、廃帝は遂に少数の従者を伴ひて密かに宮城を脱し、英国軍艦マラヤ号に乗じてモールタ島に亡命し、次でサン・レモの別荘に移り住んだが、数年の後に病死した。新カリフには廃帝の甥アブドゥル・メジッドが選ばれた。

トルコ皇帝がコンスタンチノープルを脱走してより僅に三日、即ち一九二二年十一月二十日、ローザンヌ平和会議が開かれた。此の会議はカーゾン卿を議長とし、十二箇国の代表之に列席したが、結局カーゾン卿とイスメット・パシャとの一騎打であつた。カーゾン卿は軀幹長大、双肩に大英世界帝国の全威厳を載せ、教師の生徒に対するが如き態度を以てイスメット・パルコ代表に臨んだ。而も短身無奇の年若きトルコ代表は、毫も其の教師を畏れなかつた。彼は飽く迄も冷静に、聞かんと欲するだけを言ひ、寸分も其の主張を枉げなかつた。彼はトルコが徹底して列強と対等の地位を与へられるに非ずば、如何なる和平をも結ばんとしなかつた。例へば彼は治外法権の撤廃を求めた。カーゾン卿は日本の例を引きて、若干の過渡期を置かねばならぬと主張した。彼はトルコが国家の根本権利を外国に制約されるよりは、寧ろ戦争を続行すべしと答へた。かくて会議は三箇月に亙るも何等決する所なかつた。カーゾン卿は遂に自ら筆を執りて其の最後の要求を文書に認め、之を精確にフランス語に翻訳し、何人も聴き誤り得ぬやうに発音の稽古を積んだ上に、之をトルコ委員等の前で読み上げた。然るにカーゾン卿が此の面倒な骨折仕事を終へて彼等を睨一睨した時、トルコ代表イスメットは、耳に手を当て乍ら冷然として言つた。

「耳が遠いので聴取れませんでした。どうぞ今一度読んで下さいませぬか」。

時の汽車でローザンヌを引上げると怒号して、部屋を出てしまつた。イスメットが旅館に引上げると、フランス全権

委員等が遽しく彼の後を追うて来た。時計の針は八時を指して居た。カーゾン卿の出立までに尚ほ一時間ある。彼等は此間にイスメットを妥協せしめ、会議の決裂を防ぐために全力を尽した。さり乍ら彼等の如何なる威嚇も懇願も竟にイスメットを動かしえなかつた。一方カーゾン卿は、ローザンヌの停車場で、刻々進み行く時計の針を見詰め乍ら、心密かにイスメットが彼を引留めるために駈けつけるだらうと期して居た。案に相違してイスメットは停車場に其姿を見せなかつた。カーゾン卿は最も不機嫌で此町を去つた。かくしてローザンヌ会議は決裂し、一九二三年二月初旬、イスメットもまた帰国の途に就いた。

さてトルコに於ては、サルタンとカリフとは、五百年このかた一身同体であり、トルコの君主は、同時に政治的並に宗教的支配者であつた。トルコ人は未だ曾て此の二つを別々に考へたことがない。従つて国民議会がサルタン廃止を断行し、且仮令カリフを立てたとは言へ、一切の世俗的権利を之より奪ひ去れることは、国民の多数に深刻なる衝動を与へた。殆ど総ての宗教関係者及び彼等の感化の下に立つ篤信者は、ムスタファを以て回教を冒瀆するものと憤慨した。かくして彼はラウフを中心とする従来の立憲君主党の外に、此等の宗教団体をも敵とするに至つた。

自然の径路としてコンスタンチノープルが、反ムスタファ運動の策源地になりかけた。ムダニア休戦条約の後、首府の統治は国民政府の手に移り、レフェット・パシャが総督に任ぜられて軍政を布き、名高きハリデ・エディブ・ハヌムの良人アドナン・ベイが之を輔佐することとなつた。而もコンスタンチノープルには、一切の過去の亜細亜建設者が尚ほ揺曳して居る。此処はカリフの座所であり、廃帝時代の権門名家の住処である。其等の名門は、皆な高位高官を奪はれ、仮令蔑視されぬまでも、明白に無視されて居る。彼等がアンゴラに対して敵意を抱くことに何の不思議もない。加ふるにレフェット及びアドナンは、決してムスタファの真実の同志に非ず、却つてラウフの党与であつた。彼等がアンゴラの過激派に対して常に加へる非難は、コンスタンチノープルで多くの共鳴者を得た。レフェットの如きは、

最もカリフに親近し、自派の目的のために之を利用せんとした。

かかる時に当りてローザンヌ会議は決裂し、イスメットは空しく帰国した。ムスタファは、ラウフ派の強硬なる反対を斥けて、イスメットを講和会議の全権に任じたのである。然るに彼は竟に敗れて帰つた。トルコは又もや干戈を取つて起たねばならぬのか。ラウフ派はムスタファを打倒すべき絶好の機会が来たと考へた。国民議会に於いては、囂々たる論戦が実に九日に亙り、イスメットに対する攻撃は、痛烈を極めた。唯だ反対党には巧妙なる作戦なく、統一ある指導がなかつた。それ故に攻撃は徒らに多岐に亙り、乱射する矢数は夥しけれど、遂に致命的打撃を与ふるを得なかつた。結局彼等は、平和会議を再開せしめて必ず目的を遂ぐべしといふムスタファの言質を得て満足する外なかつた。

さり乍ら議会に於ける反対党の勢力は次第に強くなつた。ムスタファは、彼の意図する改革が、此の議会によつては到底不可能なるを見た。三月三十一日深更、彼は閣僚及び有力なる同志を召集して必要なる準備を了し、翌日突如議会を解散して新に総選挙を行ふべきことを提議し、その通過を見た。かくて一九二〇年このかたトルコを支配し来れる第一国民議会は、一九二三年四月二日を以て終焉を告げた。

解散及び総選挙の提議が、容易に議会を通過したのは、反対党が来るべき選挙に於て多数を占め得べしと信じたからであつた。但しそれは彼等の大なる誤算であつた。ムスタファは決して勝算なくして戦はなかつた。彼は議会解散に先ちて、既に強固なる自己の政党を築くべき基礎を置いて居た。而して其の政党は、単に院内に於ける浮動する与党に非ず、実にトルコ全土に亙りて緊密なる組織を有する団体たるべきものであつた。彼は是くの如き基礎を既に此年の新春の旅行中に置いたのである。彼は此年一月十四日アンゴラを立ち、西アナトリア巡回の旅に出た。彼はエスキ・シェヒル、ブルサ、イスミッド、スミルナ、バリケスリの諸地に於て、適宜の建物に国民を集め、長時に亙りて

彼等と談話を交へた。彼は国民に向つて、何の腹蔵もなく質問せよと求めた。数々の質問に答へるため、時には七時間に亙る講演をした。国民の最も知らんとする所は、ローザンヌ会議の主権とカリフ制度、両者の関係、及び彼が意図しつつある政党に関してであつた。彼は懇切丁寧に総ての問題に対して説明を与へた。但しカリフ制度及び其他の宗教問題については、彼は単純にして保守的なる地方人を刺戟することを虞れて、決して本心を打開けなかつた。唯だ彼はカリフ制度を弁護する汎回教主義の宣伝が、意外に広範囲に亙りて行はれつつあるを知り、汎回教主義が「決して実現されぬユトピア」なることを極力説得に努めた。「トルコは全回教圏を統一し且指導するといふ如き幻想を追うて居る時ではない。新トルコは先づ自己の生存と確立とに、全霊全力を注ぐ可き時だ」。

政党のことも到処で質問を受けた。彼は既に前年十二月七日、国民党といふ名称の下に一党を組織する意図ある旨を公表して居た。彼は全国の愛国者に向つて、時到らば相結んでトルコ復興のために協力せよと呼びかけて居たのである。此度の旅行に於ても、彼は到処で国民に告げた――「吾等の組織を支持せよ。敵は強く、戦は未だ終らない。叛逆者は尚ほ国内に充ちて居る。吾等の組織のために準備し、予を助け、予に従へ。吾等は団結してトルコを確乎たる礎の上に置かう。トルコは、吾等のトルコは、諸君の鮮血によつて奪回せるものである。此のトルコを、吾等の組織の中に集めよ。国民及び国民党をして、の敵に対して勝たねばならぬ。祖国を愛する総てのトルコ人を、吾等のトルコ人と言へば収税吏の外に知らざりし彼等に取りて、ムスタファが其姿を見せるだけでも、既に大なる感激であつた。その偉大なる救国者が、彼等と膝を交へて語るのである。彼等が勇躍して彼に忠誠を誓へることに何の不思議もない。彼等は喜んで国民党に加入すべきことを約束した。ムスタファは、実に是くの如き準備を以て選挙に臨まんとするのである。

恰も之と時を同じうして、ローザンヌ会議が四月九日から再開されることとなつた。ムスタファは、激励の言葉を

以て全権イスメット一行を旅立たせる後、已れは渾身の力を以て総選挙に没頭し初めた。総綱領に賛成し、且その実現に努力することを誓はねばならぬ。然る後に彼等は国民党の名に於て候補者に指名される。彼の宣言並に説明は、トルコ全土に於て大なる信頼と同情とを博した。国民党の綱領に反対し、又はムスタファ個人に反対する候補者は、全く当選の可能がなくなつた。かくて心底からムスタファに共鳴せる者も、又は議員になりたいために共鳴を見せかけた者も、皆な国民党員として候補に立つたので、総選挙はムスタファの絶対的勝利を以て終つた。

かかる間にローザンヌ会議は、屢々破局に瀕しながらも続行せられ、樽俎折衝三箇月余にして、遂に新トルコの歴史に光栄ある一期を劃すべき平和が結ばれた。新トルコの四箇年に亙る善戦健闘は、その高貴なる努力にふさはしき平和を以て終局を告げた。一九二三年七月二十四日、イスメットの奮闘により、ローザンヌ条約が調印せられ、八月二十四日議会によつて批准されたのである。此の条約によつてトルコは、一九一九年七月エルゼルムに於て確立せる目的を見事に成就した。新トルコの領土は、欧羅巴に於ては、アドリアノープルを含むマリッツア河以東の地を回復し、欧羅巴よりトルコを駆逐せんとせる列強の宿望を画餅に帰せしめた。亜細亜に於ては完全にアナトリァを其の領有とした。外債はバルカン諸国及びトルコより分離せる亜細亜諸国への配分によつて、その負担額が著しく軽くなつた。海峡は開放されるけれど、トルコは委員会の議長として優越なる地位を占めた。国防其他セーヴル条約に規定せられし制限は除かれた。而して治外法権は撤廃された。今やトルコは、厳密なる意味に於て完全なる独立国家として更生した。

然るにローザンヌ会議進行中より、予て対立関係にありしイスメットとラウフとの間が、次第に軋轢の度を加へて来た。その原因はムスタファが婉曲に「心理的性質の動機」と指摘せる如く、イスメットに対するラウフの嫉妬からである。

であつた。既に述べたる如く、ラウフは平和会議の全権たらんことを熱望し、イスメットを外相兼全権大使に任じ、ラウフをして首相の地位に留まらしめた。イスメットはローザンヌに於ても、屢々首相の悪意ある措置によつて自ら全権の重任を負はんことをムスタファに要求したが、ムスタファは之を斥け、イスメットは調印に先ちて条約の内容を首相に報告し、其の訓令を悩まされたが、七月中旬に至りて会議漸く終り、イスメットは直ちにムスタファに訴へた。ムス請へるに拘らず、三日を経ても何等の返電に接しなかつた。よつて彼は七月十八日事情をムスタファに訴へた。ムスタファは直ちに返電して、彼の勲功に対する満腔の感謝を吐露し、条約に署名すべきことを命じた。此の命令に対するイスメットの次の答電は、人の心を打つものがある——「予が難局に陥る毎に、閣下は常に予を救ふ。希くは此の数日の予の苦悩を察せよ。閣下は既に大事を成し、また大事を成さしむる人なり。閣下に対する予の景慕は、今や一層を加へたり。予の最も親愛する兄たり且首領たる閣下よ、予は遥に閣下の双眼に接吻を送る。一九二三年七月二十日、ローザンヌにてイスメット」かくして七月二十四日、条約の調印を終つた。ムスタファは直ちに至深の感謝を籠めたる祝電をイスメットに送つたが、ラウフ首相は素知らぬ顔をして居た。而してムスタファに促されて漸く打電したが、一言もイスメットに対して感謝を述べなかつた。

やがて全権一行はローザンヌを発して帰国の途に就いた。国民は彼等の勲功を讃へ、謝意を彼等に表明すべく、其のアンゴラ帰着を鶴首して待つた。然るに一行到着の日が迫れる時、首相ラウフは、議会副議長アリ・ファウドを伴ひてムスタファを訪ね下の如く言つた——『予はイスメットと顔を合はしたくない。予は彼を迎へに行きたくない。許されるなれば彼のアンゴラ到着以前に、シヴス方面に出立し、選挙区を巡回して来たい』。ムスタファは言下に其の不都合を詰り、首相として又イスメットを歓迎せねばならぬと言つたが、彼は断じて承知しなかつた。ムスタファは、苟くもラウフが首相たる以上、かくの如きことは決して許されぬと言つたので、ラウフは辞職することになつた。内

相アリ・ベイが、代つて首相となつた。其後アリ・ファウドもまた副議長を辞し、第二軍検閲使として議会を去り、第一軍検閲使となつた。外患一たび去れば、必ず内訌を生ずる。誠に古今東西の悲しむべき通則である。

アンゴラの内訌に拘らず、ローザンヌ条約の条項は着々履行されて往く。一九一八年より、前後五箇年に亙りてコンスタンチノープルを占領せる聯合軍は、此年十月二日より撤退を開始した。十月六日には、アナトリアの剛毅朴訥なる農夫より成る「鋼鉄師団」が、歩武堂々入都した。かくてコンスタンチノープルは再びトルコの有となつたが、再び此地を政府所在地とすべきや否やに就いては賛否の議論囂々として起つた。レフェット以下の若干議員は君府説を主張して猛烈なる運動を開始した。ムスタファは地理的位置及び国防的考慮から、飽く迄もアンゴラを主張した。而して一九二三年十月十三日、激しき討議の後、アンゴラを通過した。

此事ありて幾くもなく、フェティ・ベイ内閣に対する非難攻撃が、頓に議会内に激しくなつた。そは恐らく若干の議員が、自ら閣僚たらんとの野心を抱き、そのために先づ内閣倒壊を企てたのである。此等の野心家は、容易にラウフ一党の傀儡となり、事毎に内閣の処置に反対又は妨害したので、首相以下閣僚皆な困惑し屢々辞職を申出て居た。而して此の敵対的態度は、十月二十五日議会がラウフを副議長に、サビット・ベイを内相に選挙せることによつて、最も露骨になつた。蓋し両人ともムスタファ及びイスメットの執拗なる反対者である。

是くの如き紛糾の根原は、閣僚が議会の選挙によつて決せらるることに在る。この禍根を除かねば、同様の紛糾が今後も繰返されねばならぬ。ムスタファは此の禍根を除くべき時が来たと考へた。而して之を断行するに決した。

議会がラウフを副議長に、サビット・ベイを内相に選挙したのは、十月二十五日であつたが、即日ムスタファは自邸に首相以下閣僚を招致し、下の如き手筈を定めた。首相以下閣僚全部が辞職する。辞職せる閣僚は、仮令議会で再

選されても決して入閣してはならぬ。新内閣の組織は、議会の野心家どもの手に之を一任する。来る道理はなく、又若し出来たとするも其の内閣が国民を満足せしめる道理がない。組閣が不可能の場合は、会は混乱に陥るであらう。その混乱に乗じてムスタファが一刀両断の解決を試みる。この手筈に従ひ、閣僚全部が署名せる下の辞表を議会に提出した――「内外に対して遂行すべき重大にして至難なる諸問題を有利に解決するため、トルコは議会の絶対的信任を博する強大なる内閣を必要とす。依て吾等は、一切の方面に於て議会の協力によつて支持せらるる内閣の出現を望んで、茲に辞表を提出す」。

事態はムスタファの予想せる通りであつた。右の辞表を受理すると共に、議員等は数個の団体に分れ、それぞれ鳩首して閣僚の人選に取りかかつた。而も凝議二日に亙りて、且国民に歓迎せらるる如き閣僚の顔触れを揃へ得なかつた。最後に国民党幹部会が候補者名簿を作つたが、執れの団体も議会全体の賛成を博し、執れの候補者も推薦を受諾する気配がなかつた。ムスタファは此の形勢を見て、十月二十八日夜、イスメット、キアジム、フェティ、外四名を自邸の晩餐に招き、食事中に彼等に向つて「明日吾等は共和国を宣言しよう」と告げた。一同は異議なく賛成した。食後イスメットのみ後に残り、ムスタファと共に夜を徹して法案を起草した。翌十月二十九日、国民党は午前十時より幹部会を開き、また閣僚候補の銓衡を蒸し返した。而して此度も異論百出して止まる所を知らなかつたので、遂に使をムスタファ邸に派して彼の出席を求めた。彼は幹部会に臨んで、解決の方法を発見するため、一時間の猶予をかへよと告げ、其の時間を利用して態度不明と思はるる幹部を一室に招き、携へ来れる法案を示して具さに説明を加へ此外に難局打開の途なしと告げ、略ぼ彼等の同意を得た。而して午後一時半に再開せられたる幹部会の席上、起ちて下の如く宣言した――「親愛なる同志、諸君が当面する此の難局が、何故に将来されたかには、総ての諸君が既に熟知して居ることと思ふ。禍根は実に組織に在る、現存の制度に在る。わが憲法に従つて内閣を組織せんとする毎に、吾

等各員は常に内閣並に閣員の選挙に参与する義務がある。今や此点に関して吾等が当面する難関を排除すべき時が来た。前回の議会開会中も、吾等は同一の難関に逢着した。諸君は此の制度が常に幾多の紛糾を招くことを認めるであらう。諸君は此の困難の解決を予に求めたるが故に、予は予の信ずる解決案を茲に提出する。そはトルコの政体並に性質を規定する憲法の若干部分を改正することである。予の提案が容れられるならば、強固確実なる政府を組織することが可能となる」。その法案とはトルコの政体を共和国とすること、任期四年にして重任を妨げざる大統領を置くこと、大統領は首相を任命し、首相が閣員を選任することを主眼とするものである。若干の論争の後、此の法案は幹部会によつて可決された。ムスタファは既に之によつて勝利を得たのである。かくて国民党幹部会を閉ぢたる後、直ちに議会が開かれ、憲法改正は共和国万歳の高唱によつて可決せられた。次で大統領の選挙が行はれ、ムスタファが満場一致を以て当選した。而してイスメット・パシャが首相に、フェティ・ベイが議長に選任された。法案が可決されたのは一九二三年十月二十九日午後八時半、ムスタファが大統領に選ばれたのは同日午後九時四十五分である。此事は即時全国に報道せられ、四方の町々で発せられた百一発の祝砲が、殷々として深夜のトルコに鳴り轟いた。爾来十月二十九日は、合衆国の七月四日、又はフランスの七月十四日に相当するトルコの建国節となつた。

共和国の宣言は、全トルコを通じて歓呼の声を以て迎へられ、到処に盛大なる祝賀行進が行はれた。唯だコンスタンチノープルだけは、大なる不満と不安の色を示した。蓋しトルコを共和国とし大統領を元首として戴くことは、必然カリフ制を如何にすべきかの問題を惹起するが故である。而してムスタファが早晩カリフ制を廃止する意図を抱けることは、既に多くの人々に知られて居た。かくて君府の反アンゴラ党は、此の機会に於て内外回教徒の宗教的感情に訴へ、カリフ擁護を標榜してムスタファを倒さんと企てた。ラウフ、アドナン、レフェット、さてはキアジム・カラ・ベキル及びアリ・フェウドの両将軍まで此の運動に参加した。彼等の或者は屢々カリフに伺候して、教主に対す

る崇敬を全回教圏に誇示した。わけてもラウフは、コンスタンチノープルの一新聞紙上に「政体の変更によつて国家の利益が擁護せられ、また国民の要求が満足せらるる如く信ずるは、重大なる過誤である」と声明して、暗に共和国宣言に反対した。其他の諸新聞にも、カリフを擁護する論説が盛んに発表された。

やがてラウフが、議員の間に同志を求めるため、君府からアンゴラに乗込んだ。但し彼の陰謀は直ちに看破せられ十一月二十九日国民党はイスメットを議長として会議を開き、ラウフを召喚して彼の行動に対する説明を求め、且彼の国民党に対する態度を決すべきことを求めた。彼はイスメットの痛烈なる質問に対して、しどろもどろの答弁しか出来なかつた。而してイスメットは彼に向ひ、若しカリフがトルコの政治に干渉するが如きことあらば、之を叛逆行為と看做して断乎たる処置に出づべきことを告げた。而もラウフの言明は決して本心より出でたるものに非ず、コンスタンチノープルに於ける言論は、依然として反アンゴラ的であつた。イギリスは例によつて此の内訌を利用せんとして、印度回教徒の名に於てカリフ擁護の一文を君府の一新聞紙上に公開せしめた。而もイギリスの此の術策は、痛く国民党を激昂せしめ外国の傀儡たるべき危険あるものとして、一層カリフに対する反感を昂めた。

ムスタファは、カリフを廃止すべき時が漸く迫れるを知つた。而も之を断行するためには、軍隊の意向を知らねばならぬ。彼は一九二四年一月、陸軍大演習を好機としてスミルナに赴き、滞留二箇月の間にカリフ存廃についての軍隊の意見を探り、青年将校及び兵士の大多数が、カリフ廃止に賛成なることを確めた。恰も此時、カリフはアンゴラ政府に向つて、現在の歳費を以てしてはカリフとしての位置と面目とを保ち難しとの理由を以て、経費の増額を要求して来た。ムスタファは断乎として此の要求を斥け、カリフが金曜謁見の華美なる儀式を行ひ、列強使臣と交際する

が如きは、全く無用のことなるのみならず、カリフがトルコ共和国並に国内に対し、恰も英国君主が印度教徒に対する地位、又はアフガニスタン国王がアフガン人に対する地位と同様なる地位を占むるは、許し難き誤謬であるとした。かくて彼はイスメット、フェウジ及びキアジムと凝議の末、遂にカリフ制度廃止を断行するに決した。

ムスタファは二月二十三日スミルナよりアンゴラに帰り、三月一日国民議会を開いた。その開会の演説に於て、彼は政教分離を徹底せしむる必要を力説し、翌二日国民党総会に於て党員の賛成を求め、翌三日の議会に政教分離に関する三法案を提出し、討論五時間の後、遂に大多数を以て其の通過を見た。そは完全に新トルコを過去と絶縁せしめ国民主権意志の代表者たる政府をして、其の絶対の権力を宗教的方面にも確立せしめたるものである。

第一の法律はカリフ制度を廃止し、且カリフ及びオスマン王族を永久にトルコより放逐し、無償を以て其の財産を没収した。ムスタファは斯くして国内に於ける不平党がカリフ又はオスマン王族を擁立して不軌を図らんとする危険を排除した。第二の法律は聖法を司る聖教庁並に一切の聖法裁判所を廃止し、且喜捨財団省をも廃止した。之によつて一切の宗教的施設は国家の支配の下に立ち、教役者は悉く政府の監督を受けることとなつた。第三の法律は一切の宗教学校を廃止し、国民教育の統一を確立した。向後トルコには唯だ普通学校あるのみにして、宗教学校の存在を許さない。教役者の養成のためには、国家が「導師及宣教師学校」を新設する。而して政府の認可なくしては何人も教職に就くことを許されない。

此の劃期的法律が議会を通過せる翌三月四日の朝、君府総督は一隊の警官を率ゐてドルマ・バグチェ宮殿に到り、カリフに命じて玉座より降らしめ、即刻トルコより退去すべきことを命じた。一時間の後、カリフは二妻一子を伴ひ、自動車にてチャタルヂャに送られ、此処に待受けたる汽車に乗りて、永久に故国を後にせねばならなかつた。千三百年の長き伝統を有する制度、欧羅巴の眼には東洋の権

威と荘厳との権化の如く見えし制度、回教徒の眼には万古不動の法城の如く見えし制度が、間に撥無せられた。而もカリフ、アブドゥル・メジッド其人は、決して積極的に反共和国彼は教養高き温厚の君子にして、権力や支配よりは、読書や絵画を好み、自ら並々ならぬ絵は青年時代よりボスフォラスの宮殿奥深き処に起臥し、口善悪なき君府社交界に於てさへかつた。その選ばれてカリフに即位してよりは、心を抱いたことがない。唯だ彼は立派なるカリフ家の心を牽きつけた。悲しき運命が、此の善人を

此事あり条に於て幾くもなく、四月二十日にトルコ共和国憲法が発布せられ、共和制の礎は確コ語とす、而も其の第二条には「トルコ国の宗教はトルコ国は共和国なり」と宣言したが首府をアンゴラとす」と規定して、回教をトルコ国教として居たが、其後一九の決議によつて、前記第二条より「宗教を回教とす」の一句を削除し、また同第十六条「大統領」の項の末尾にある宣誓「アラーの名に於て」を「吾が名誉にかけて」と改め、茲に完全に国家と宗教とを分離し去つた。

さてカリフ制廃止が、深刻なる衝撃を内外に与へたことは、想像するに難くない。而しもや此の機会に於て彼を倒さんと企てた。而して其の指導者は取りも直さずラウフ・ベイて以来、彼はキアジム・カラ・ベキル、アリ・フアウド、レフェット等と共に、ムスタファく続けて居た。彼等は其の目的を遂げるためには打倒の運動を倦むことなキル将軍は、第一軍検閲使就任以来、以前の管区なりし東部諸州を巡回し、またアリ・フアウド将軍は、前述の如く

政治に関心を失へりとの口実の下に第二軍検閲使となりて赴任し、共に反共和思想を軍隊内に鼓吹するに努めた。一方ラウフは、議会に於ける「第二党」を率ゐ、各地に秘密結社を組織し、保守主義者や不平家によつて組織せられし同類の諸団体と聯絡を取り、且コンスタンチノーブル及びアダナに於て発行せらるる有力なる諸新聞を味方とした。恰も此時、モスル問題を繞りて英土両国の関係頓に緊張し、同地方のネストリウス派基督教徒は、イギリスに味方して騒乱を起したので、トルコ軍隊は其の鎮圧のために出動した。然るにイギリスは、不当にもトルコに対し最後通牒を発して恫喝を試みた。ムスタファは臨時議会を召集し、止むなくんばイギリスと戦ふ覚悟を以て、断乎其の要求を斥けた。反ムスタファ党は、政府が困難に当面して危機に陥れるを好機とし、四日に亙る質問演説によつて猛烈に政府を攻撃し、調査委員会の設置を提案してイスメット内閣の信任を問はんとしたが、一九票に対する一四八票の多数を以て否決された。而も此事ありてより反ムスタファ党は最早秘密裡に其の陰謀を続け得ざるに至り、茲に其の仮面を脱ぎて「共和進歩党」の名称の下に、国民党と対立する別個の政党を組織し、宣言綱領を発表した。

此の新政党は、トルコ国民に向つて実に下の如く呼びかけた――「吾等はカリフ制の再建を要望する。吾等は新しき法律を必要としない。吾等は回教聖法を以て満足する。吾等は従来の宗教学院、その教師、その弟子を保護する。吾等に味方せよ。カリフ制を廃止せるムスタファ党は、回教を破壊し去らんとする。彼等は諸君を宗教なき民たらしめんとして居る」。そは正しく共和と進歩とに反する最も保守的なる思想を宣伝するものにして、目指すところは国内の反動的並に狂信的分子を糾合して、ムスタファ及び其一党を打倒する以外に何ものもない。而も革命は新旧勢力の急激なる交替なるが故に、常に多数の失意者・落伍者・不平家を出ださざるを得ない。トルコの場合も固より此例に洩れぬ。かくて独り頑迷固陋なる宗教家のみならず、サルタン時代の高官、青年トルコ党の残党、当初はムスタファと事を共にしたが、今は酬いらるること少なしと怨む不平家が、皆な新党に拠つて志を遂げんとした。

ムスタファは、初めは穏便なる処置によつて、反対党を慰撫する意図であつたらしい。即ち病気を好き口実として彼とは特別の間柄であり、従つて嫉視の的なりし首相イスメットを辞職せしめ、フェティ・ベイをして之に代らしめたのも、反対党と妥協の途を見出だすためであつたと思はれる。然るに翌一九二五年二月、クルド人の叛乱勃発するに及び、ムスタファは決然として其の妥協的態度を一擲した。

クルド人は、イラン・ゲルマン民族の一支族にして、その血液も言語も共にペルシアに近く、トルコ人とは唯だ宗教を同じくするだけである。彼等はティグリス、オイフラート両河の上流、山嶽重畳の間に住み、牧畜及び狩猟に従事し、幾多の部族に分れて各自の君主を戴き、山嶽民の常として剽悍好戦にして独立不羈、而も容易に宗教的狂熱を燃え立たせる。クルヂスタンは、セーヴル条約に於て一独立国たるべき筈であつたが、ローザンヌ条約によつて否認せられ、其の北部はトルコ領となり、南部はイラク領となつた。カリフ制度の存続せる間、クルド人は何等不穏の兆を示さなかつた。而もアンゴラ政府が一挙カリフを廃し、相次いで非回教的法律を発布するに及び、彼等は容易に反ムスタファ党に煽動せられ、聖教擁護・カリフ制復興を高唱して、大規模の叛乱を起すに至つた。

叛乱の首魁シャイク・サイドは、ヴン湖の西方ゲンジの名門にして、アブドゥル・ハミッド皇帝の一子セリムをカリフに即位せしむべきことを標榜し、トルコ全土に蹶起を促した。全クルヂスタンが彼の号令に応じて起ち、トルコの東部諸州全般が不穏になつた。而して此度もまた叛乱の蔭にイギリスの魔の手があつた。イギリスは夙くよりトルコを弱めさせるためにクルド人を利用して来た。世界戦中にはローレンス及びノエルが、彼等を煽動してトルコの背後を脅した。セーヴル会議に於て彼等に独立を約束した。此度もイギリスは彼等に武器を供給して居る。イギリスはモスルと其の石油を欲する。而してモスルの鍵を握る者はクルド人である。モスル問題を有利に解決するために、イギリスは機会ある毎にクルド人を利用する。

ムスタファは叛乱鎮圧のために五個師団を動員したが、敵は崎嶇嶮難なる山地に出没するが故に、討伐は困難を極めた。議会は政府の無能を攻撃し、そのためフェティ・ベイが辞職して、イスメットが復た首相となつた。ムスタファは、クルド叛乱の背後にイギリスあることを国民に告げ、トルコを危急より救叛徒と通謀する反ムスタファ党に対する反感を煽つた。例によつてムスタファは民心を掴んだ。トルコひ得る者は「背勝」ムスタファの外になしとして、国民は一斉に彼に味方した。かくて叛乱は二箇月にしてた。叛徒を審理するために特別裁判が開かれ、首魁サイド以下四十二名の族長が、ディアル・ベキルに於て死刑に処せられた。サイドが死刑を宣告せられし時、彼は裁判長アリに向ひ「予は汝を憎まない。汝及び汝の主人は、神に呪はれて居る。総ては神前に行はれる最後の審判の日に清算されるであらう」と言つた。裁判長アリは、冷頭アリと呼ばれ、最も忠実なるムスタファの党与であり、常に愛嬌ある微笑を湛へながら最も峻烈なる判決を下した。彼は此時もいつも乍らの微笑を以てサイドの言葉を聴き、親しげに点頭し乍ら之を絞首台に送つた。之と同時にムスタファは宗教を政治的目的に利用し、国家を危地に陥れたる廉を以て、厳酷なる弾圧を反対党に加へ、共和進歩党の事務所を悉く閉鎖せしめ、若干の領袖を監禁し、反対党諸新聞紙の発行を停止せしめ、名高きタニン新聞の主筆アサイン・ジャヒッド・ベイを終身禁錮の刑に処した。

然るに翌一九二六年六月、スミルナに於てムスタファ暗殺の計画が露顕した。此月十七日ムスタファはスミルナに赴くこととなつて居た。到着に先だつこと二日、挙動不審なる三人の男が警官によつて捕へられた。彼等は数個の爆弾と、曽て国民議会議員たりし反対党の一員ジヤ・フルシッドの書翰を所持して居た。而して取調の結果、彼等がムスタファ暗殺を企てて居たこと、及び彼等の背後に有力なる共謀者あることが明かになつた。スミルナ及びアンゴラに於て特別裁判が開かれ、広範囲に亙りて逮捕令が執行された。キアジム・カラ・ベキル、アリ・フアウド、レフェ

ット等も拘引された。裁判の結果、トルコの新政体並に近代化を悪める反動主義者、立憲君主制を固執する往年の青年トルコ党の有力者、ムスタファの同志にして後に意見の相違、又は個人的嫉妬から彼と離反せる人々が、此の陰謀に関与して居たことが知られた。ムスタファ自身の言葉を藉り来れば、「共和国の諸の敵が、卑劣なる方法を以て最後の手を打つた」のである。かくて以前の青年トルコ党領袖五名を含む十八名の首謀者が死刑に処せられた。キアジム・カラ・ベキル将軍等を初め、大多数の被告は無罪放免となつたが、多年に亙りてムスタファと対抗し来れるラウフ、アドナン、及び其妻ハリデ・エディブは、十年間国外に追放されることとなつた。

クルド叛乱の連累者たりし故を以て、共和進歩党は信を国民に失ひ、ムスタファ暗殺計画の暴露によつて、青年トルコ党の残類は亡び去つた。若干の共和進歩党員が尚ほ議席を占めて居たとは言へムスタファに刃向ふ勇気は無い。与論は総てアンゴラによつて指導せられ、国民は政府に従順になつた。やがて一九二七年秋、第二次国民議会議員の任期は終り、九月に総選挙が行はれることとなつた。ムスタファは数々の苦き経験によりて、彼の意図せる改革が徹底して実現せらるるまで、反対党の存在を許さぬ決心をした。彼は自ら総ての議員候補者を選定し、且之を当選せしめた。それ故に第三次トルコ国民議会議員は、事実に於て悉く大統領より任命せられるものであり、之を選挙といふは便宜のためのカムフラージュに過ぎぬ。そは万国の議会史に於て類例なき出来事であり、かくしてムスタファは、完全なるトルコの独裁者となつた。

七　新トルコの建設

「予は敵に勝つた。予は国に勝つた。予は民にも勝ち得るであらうか」。まことに此の言葉の如く、ムスタファは国に勝つた。彼は旧き政治の全機構を破壊し、君主国を民主国となし、専制国家を国民国家となし、教会と国家を分離

し、サルタンとカリフを逐ひ、オスマン帝国との一切の関係を払拭し去つた。而して彼は之を妨ぐる内外の敵と悪戦苦闘して遂に最後の勝利を得た。而も彼の戦ひは決して之を以て終つたのではない。彼は進んで民と戦はねばならぬ民と戦ふとは、民のために戦ふことである。民のために戦ふとは、トルコ文化のために戦ふことである。そは一切の戦ひのうちの最も高貴なものであり、同時に至難なものなるが故に、ムスタファ常勝の自信を以てして、尚且「予は民にも勝ち得るであらうか」と嘆じて居る。さり乍らムスタファは、決して此の戦ひに而を背けんとしなかつた。彼は実に下の如き覚悟を以て此の戦ひに臨んだ。

「一切の偉大なる運動は、国民精神の至深処から流れ出るものでなければならぬ。国民精神は一切の力と偉大との源泉である。此の国民精神の昂揚によつて、吾等は此国をトルコの名に値する誉れある国とせねばならぬ。トルコは言葉の完全なる意味に於て文明国とならねばならぬ。そのために吾等は、トルコ本来の文化を長養すると同時に、進んで外国の文化を学ぶであらう。一切をトルコ的に考へ、トルコ的に見ることによつて、飽く迄もトルコ精神の独立を護持しつつ、吾等は亜細亜と欧羅巴から、其の最上のものを摂取するであらう」。

彼は此の目的を遂げるために、先づ其の国民を教育せねばならぬ。それ故に彼は教師が生徒に対する如き態度を以て国民に臨んだ。但し此の教師は、鞭を手にすることを忘れなかつた。説得に応ぜぬ生徒は、彼の鞭打を受けねばならぬ。彼は先づ国民のトルコ帽着用を禁止するに決した。トルコ人は百年以前にターバンを棄て、ギリシア人に倣ひて紅トルコ帽を被り初めた。爾来此の帽子は、トルコ人と不可分のものとなつたが、ムスタファは之を以て「吾等の頭上に坐する無智・狂信及び進歩と文化に対する憎悪の象徴」となし、その着用を禁止することによつて、一面には過去との絶縁を形式の上に実現し、他面には外国人の嘲弄軽侮を排除せんとせるものにして、明治維新に於ける吾国の断髪令と其の精神を一にする。而も之を実行するに当りてムスタファが取りたる手段は、遺憾なく彼の面目を躍如

たらしめる。

彼はトルコ帽禁止が、烈しき反対を招くべきことを熟知して居た。事は徐ろに運ばれねばならぬ。彼は先づ自身の護衛兵に庇附帽子を被らせた。彼等が格別の反対もしなかつたので、更に之を他の軍隊に及ぼし、遂に全軍隊に着用させることとし、且特別の訓示を発して、庇附帽子が従来のトルコ帽に比べて晴雨ともに便利なることを説明した。兵士は何等抗議することなく、唯々として之を着用した。

軍隊に不平なしと見るや、彼は国民に向き直つた。彼は黒海沿岸を旅行中、カスタムニと呼ぶ小さき町に滞在し、一日市民を呼んで集会を催したが、故らにパナマ帽を戴いて臨席した。彼等の最も景仰する偉人が、最も軽蔑する異教徒の帽子を着けたる姿を見て、気も顛倒せんばかりに吃驚せる市民に向ひ、ムスタファは諄々として、トルコ人は文明開化の民にならねばならぬこと、トルコ帽は野蛮の看板なることを訓示し、彼等もまた彼に倣へと勧告した。爾来彼は旅行の度毎に、到る処同様のことを繰返したが、殆ど何等の効果もなかつた。そこで彼は法律を以てトルコ帽着用を禁じた。而して法律発令の三日目から、警官を各都市の辻々に立たしめ、容赦なくトルコ帽を押収せしめた。然るに国民の反抗は意外に猛烈であつた。多くの町々では、怒れる民衆のために警官が殴打された。予てより新政府に不平なる宗教家が、此機に乗じて民衆を煽動した。議会に於てはヌレッディン・パシャが、トルコ帽着用の禁止は憲法が保障する個人の自由を束縛するものとして、痛烈なる非難を試みた。ムスタファは、断乎としてヌレッディンを議会から放逐し、更に彼の行動を叛逆行為なりとして軍法会議に附した。

ヌレッディン・パシャは、ムスタファの夙くよりの同志として、独立戦争に勲功ある将軍の一人である。此の革命の元勲さへ仮借なき刑罰に処せらるるのを見て、国民の抵抗は次第に鎮静した。国民は種類の如何を問はず帽子を求めた。あらゆる帽子がトルコ人の頭を飾つた。スミルナ附近の或村では、農村が追放せられしアルメニア商人の倉庫

の内に、多くの婦人帽を発見した。彼等は羽毛やリボンで飾られた帽子を戴き乍ら野を耕した。コから姿を消した。

一九二六年、回教会議が聖都メッカに開かれた時、ムスタファは此の改革を全回教圏に知らせるためエディプ・セルゼットをトルコ代表として派遣した。此の会議には中央亜細亜・亜弗利加・アラビア・印度・マレー諸国から、哈蘭の一字一句を聖視する敬虔なる回教徒が参集する。短軀、肥満、赭顔の吾がエディプは、欧風帽子を戴きて彼等の間に乗込まねばならなかつた。彼が一命を完うして帰国し得たのは、偏にムスタファの勢威によるものであらう。

彼はまた此の機会に於て、国民を煽動してトルコ帽禁止に反抗せしめたる宗教団体に鉄槌を加へた。彼は宗教講社に解散を命じ、托鉢僧の根城なる僧院を閉鎖し、其の財産を国家に移し、信者の喜捨によつて衣食せる托鉢僧をして一般市民と同じく自ら働きて生計を営ましめることとした。

男子のトルコ帽着用禁止と同時に、女子の面帕（ヴェール）廃止もまた奨励された。ムスタファは法律を以て婦人服装の西欧化を定めはしなかつたが、女子は外出に際して必ず面帕を用ふべしとの古来の厳格なる掟は廃止せられた。此事に対しては大なる反抗を招かなかつた。唯だ婦人のうちには露頭を好まぬ者ありて、面帕廃止後は一時ターバン風に色布で頭を掩くことが流行した。この流行も、ムスタファが上流婦人に向つて、天与の美しき装飾である頭髪を隠すことは婦人として在るまじきことだと説得し、先づ彼等から此の古風な装飾を止めさせたので幾くもなく廃れて仕舞つた。

やがてトルコの女子は一般に欧風服装を着用するやうになり、儀式の折には肩と腕とを露はして出席するを恥ぢざるに至つた。

もとトルコの女子は、完全に家庭内に幽閉されて居た。彼等は一切の社会的生活から隔離せられ、公けの集会や祭礼に姿を現はすことを許されなかつた。読み書きを習ひて学問することさへ、婦人には無用のこととされて居た。第

二十世紀初頭から、トルコの覚醒せる婦人等が、女子の権利擁護のため、或は精神向上のため、して婦人運動を続けて来たが、彼等の善戦健闘は、新トルコ共和国の出現によつて、初めて勝利の実を結んだ。新トルコは、一九二六年の法律によつて、女子の家庭及び社会に於ける正当なる地位を保障し、男子と同じく一個の人間一個の国民として之を待遇するに至つた。而して一九三〇年には、市町村会議員の選挙並に被選挙権を女子に与へ、更に一九三五年には、二十一歳以上の女子に国会議員の選挙並に被選挙権をも与へた。

トルコの女子、わけてもアナトリアの農婦たちは、右の如き待遇を受けるに適はしき勤功を独立戦争の間に立てて居る。サガリア会戦の砌、トルコの一将校が負傷せる二人の女子の傍に立てる一兵士を見た。何故に戦線に女子を伴へるかとの訊問に対し、兵士は下の如く答へた――「私が連れて来たのではなく、彼等が無理について来たのです。今日私は近頃配られたモーゼル銃を肩にして戦線に向はうとすると、私の猟銃をもつて一緒に行くといふのです。私は厳しく之を禁めたが両人は何としても承知しませぬ。しまひに母は怒り出し、お前を此世に産んでやつたのは此母ではないか、此母はお前の指図を受けぬと言つて、遂に一緒に戦場に出たのです」。而も是くの如きは唯だ此の母子のみではなかつた。幾多の農村の女子が、男装して男子と共に戦つた。弾薬や糧食を荷ひて輜重の任務に当つた。一農婦の如きは、嶮しき山路を馬車で弾薬を運びつつありし時、馬が脚を折りて斃れたので、附添ひ来れる二人の子供と力を協せ、自ら其車を牽いて戦線に弾薬を届けた。さればこそアンゴラに於ける台座には、大砲の側に跪けるアナトリア農婦の姿を刻んで居る。ムスタファは彼等の勲功に酬いたのである。

彼は叙上の風俗改革を断行すると同時に、トルコ法制の改革をも断行した。単りトルコと言はず、総ての回教国に於て、国民の公私一切の生活を規範するものは、取りも直さず予言者マホメットの言葉である。行政も司法も財政も経済も、総て千三百年以前の遊牧民を支配する掟によつて縛られて居る。此掟を破ることは、取りも直さず神を涜す

ことなるが故に、時代は移り思想は変つても、掟だけは万代不易である。かくて回教法典は回教諸国の進化を阻止する万里の長城となつて来た。尤もトルコに於ては、時勢の変化に迫られ、既に一八六八年新に民法を発布して宗教法の欠陥を補つたが、身分及び相続に関しては、一般回教法を踏襲して毫も改むるところ無かつた。其後一八七六年に発布せられたるトルコ憲法は、四民平等、人身の不可侵、教育の自由等を保障したが、是亦、身分及び相続に関しては、依然旧法に則つた。然るに今やムスタファは、政教分離の必然の行程として、トルコ法制の根本的改革に着手し立法の範として欧羅巴最近の法律を選ぶこととした。先づ民法はスヰス民法を最良のものとして之を採用した。民法草案が討議せられし時、ムスタファは委員等に向ひ、若し諸君が一々の条文について丹念に議論を闘はすことになれば、完了は何時の日か知るべくもない、如かず丸呑みにせんにはと言つた。かくてスヰス民法を殆ど其儘トルコ語に翻訳して、トルコ民法が出来上つた。同様に刑法は之をイタリーに、商法は之をドイツに倣つて制定した。かくて従来の宗教法は完全に葬り去られた。

暦及び時間制もまた改められた。即ち一九二六年一月一日を期し、回教式太陰暦及び日没より起算する時間制を廃して、国際的太陽暦及び時間制を採用し、且従来トルコの休日は金曜日なりしを日曜日に改め、回教紀元一三四二年を一九二六年と定めた。

さて叙上の諸改革よりも一層重大なる文化的意義を有するものは、実にアラビア文字との訣別である。ムスタファがトルコ帽着用を禁止した時、或者は冷笑して言つた——「頭の外側を変へても肝心の中味を何うするか」と。まことにムスタファ自身が国民党代表者会議に於て「見よ、諸君の前には其の八割が文盲なる人民の群が居るでないか。斯かる恥づべきことが何処にあるだらう」と嘆じたる如く、トルコ国民の大多数は、読むことも書くことも出来なかつた。而して其の最も重大な原因の一は、アラビア文字の使用であつた。彼は「数世紀以来トルコ人の頭脳を束縛せ

る不可解なる記号から解放されねばならぬ」と覚悟し、アラビア文字を廃してローマ字を採用するに決した。一九二七年秋、政府はコンスタンチノープル大学文学部長を委員長とするローマ字調査委員会を設け、国字変更の調査を急がしめた。委員会は翌一九二八年八月十五日に報告書を提出したが、政府は翌々日に夙くもローマ字採用を決議し、直ちに軍隊、官吏、銀行会社員、商店員、車掌等にローマ字を講習せしめ、且国民全般に其の普及を図るため「ローマ字入門」を出版した。此の小冊は一週以内に六十六万部を売り尽したと言はれる。ムスタファは自ら街頭に立つてローマ字の学習を民衆に勧めた。彼は自ら白墨を執りて黒板にローマ字を書いた。道行く人を捉へてローマ字を習つたかと訊ねた。

かくの如き準備の後、一九二八年十一月一日、第三次トルコ国民議会開院当日、ムスタファは内治外交に関する演説中、国民進歩の礎たるべき先決問題として、従来の如き難解のアラビア文字を棄て、小なる努力と短期の学習によつて容易に読み且書き得るローマ字を採用すべきことを述べ、かくして「トルコ語に新しき生命を与へることにより第三次国民議会は、単りトルコ歴史に於てのみならず、実に人類の歴史に於て特筆せらるべきものとなる」と説き、また「文盲なる吾が同胞を救ふために一教師となることの精神的満足が、吾が全身に横溢する」と叫んだ。彼の国字改革案は満場一致を以て可決せられ、十一月三日、十一条より成る法律の発布を見た。かくてトルコは、翌一九二九年一月一日より、新トルコ文字としてローマ字を採用することとなつた。

之と伴ひて十一月十一日、その施行細則が閣令として発布された。即ち全国に国民学校を設けて国字を学習せしめる。大統領自ら総裁となり、閣僚が幹事となりて、此の講習の徹底を期し、四十歳以下十六歳以上の男女を、悉く入学せしめ、毎日一時間以上、二箇月乃至三箇月授業する。教場には学校・寺院・官庁・倶楽部・サロン・カフェ等を使用する。原則として小学校教師が教員となるが、必要に応じて中等教員以上の者をも之に充てる。警官・憲兵・公

吏・組合・団体・企業者を監督員とする。二十人以上の人員を使用する工場又は団体は、自ら使用人に新国字を習得せしむる義務がある。かくの如くにしてムスタファは、トルコから文盲を駆逐するために、国家の全力を挙げて戦つた。因に新トルコ国字は、二十九字より成るトルコ式ローマ字であり、標準語としてコンスタンチノープル方言を、発音式に綴るものである。

このローマ字採用は、打見たるところ西欧主義への追従の如くなるに拘らず、其実は最も健全にして且熱烈なる国民主義の発露であつた。蓋しトルコ民族のイスラム改宗は、啻に彼等をしてアラビア文字を採用せしめたるに止まらず、必然多数のアラビア語又はアラビア的表現を国語の中に導入した。また彼等が詩文の範をペルシアに取りしため多数のペルシア語も国語の中に入込んだ。第十九世紀末葉に於ては、トルコ文語の七割はアラビア語、二割はペルシア語、本来のトルコ語は実に僅に一割に過ぎぬと言はれた。然るに今やムスタファは、ローマ字の採用によつて形式的にアラビア、ペルシア的束縛を断絶すると同時に、進んでトルコ語のうちから外国的要素を駆逐し、同意義のトルコ語を以て之に代へんと決心した。即ち国字改革の次に、国語改革を続行せんとするのである。而して此の目的のために一九三二年七月十二日、トルコ語調査会が設立せられ、ムスタファ自ら其の総裁となり、古代トルコ語の復活、外来語の淘汰、学術語のトルコ化、現代国際語の採用等によつて、国語の純化並に確立に努力しつつある。但し国語改革は、決して国字改革の如く簡単に行ひ得べき性質のものではない。そはトルコ国民の精神的発達並に充実と歩調を共にして、今後も一層不断の努力が続けられるであらう。

ムスタファの国民主義は、トルコ史研究の奨励によつて、一層陸離たる光彩を放つた。トルコ語調査会の設置に先だつこと一年、既に一九三一年四月十五日、ムスタファはトルコ史の一切部門の研究、乃至トルコ民族関係史料の蒐集を目的とし、彼自身総裁となり、全国の史学者を網羅して、トルコ史調査会を組織して居る。而して此の調査会の

監修の下に、夙くも一九三二年には、トルコを中心とせる世界史――一層適切に言へば世界史に於けるトルコ民族の位置と功業とを明かにするトルコ通史、即ち「歴史」四巻が出版された。

予はムスタファのトルコ史研究奨励を見て、吾が明治維新以後に於ける政治家の国史に対する態度に想到し、省みて忸怩たらざるを得ない。予は此点に関して、史学者三上参次博士をして語らしめたい――「……歴史を学べば小学校の初めから外国歴史であつて、日本歴史は教へて貰へなかつた。……大学の予備門即ち後の高等学校に於て、明治十六年に初めて一遍に一時間、新井白石の読史余論を教科書として国史を教へられましたが、これが高等学校程度の学校に於て、国史を教へられた嚆矢であります。それも独逸語の御雇教師グロート氏が、予備門長杉浦重剛さんに向つて、各国とも此の程度の学校では其国の歴史を授くるものであるのに、此の学校にはそれがないのは甚だ不思議であると注意したので、予備門長が成程と思はれ、そこで私共のクラスから国史を置かれたのであります。若し滔々たる其の当時の人々であつたならば、其の忠告も或は容易に受入れられなかつたでありますが、……西欧の採るべき所は大胆迅速に採り乍ら、トルコ民族本来の面目を飽く迄も発揮せしめんとする点に於て、ムスタファの識見は寧ろ維新元勲の上に在る。」

新トルコの精神を、国民全体に徹底せしむることは至難の業である。而も改革に対する国民の理解と協力なくしては、新トルコの理想は実現せらるべくもない。それ故にムスタファは、国民教育の振興に肝胆を砕いた。既に述べた如く、彼は総ての宗教学校を閉鎖した。単りトルコと言はず、一切の回教諸国に於て、国民の上に偉大なる精神的勢力を揮へる宗教階級が、その頑迷と保守とを以て事実上少年並に青年の教育を独占し来れることが、世界文明国に比して回教圏の進歩を少くとも二世紀遅れさせて来た原因の一つであつた。それ故に回教諸国の目覚めたる知識階級

は、夙くより宗教階級の精神的支配に対して戦を挑んで居た。そはカトリック教会とスコラ学者に対して挑める戦と同一轍である。曽て青年トルコ党が政権を握れる時、彼等は教育改革を以て主要政綱の一としたが、竟に之を実現するを得なかつた。今やムスタファは、屢々企てられて而も行はれざりし教育改革を、何の躊躇もなく断行した。彼は「全トルコ人の国民的・共和的・世俗的教育」を標榜して、初等教育を義務的とし、範をヨーロッパ諸国の最良のものに採れる教授案並に教科書により、総ての小学校に於て全国の児童に一様の教育を施すこととした。而して小・中学教育は主としてフランスを模範とし、専門教育・技術教育はドイツ及び其他諸国を模範とした。教員養成のために多くの師範学校が建てられ、アンゴラには高等教育学校が建てられたが、ドイツ人及びオーストリア人が最も多い。大学もまた次第に近代化された。

ムスタファは下の如く述べて居る——

「吾等の偉大なる目的は、国民を文明と繁栄との最高水準にまで引上げるに在る。そは啻に其の外貌をも根本的に改革を遂行せる大トルコ国民の飛躍的理想である。此の理想を出来得る限り短期間に実現するためには、思想と行動とが、手を携へて前進せねばならぬ。此の分野に於ける成功は、唯だ組織的なる計画と、効果的なる実行によつてのみ獲得される。それ故に文盲は絶滅されねばならぬ。吾等の全体的改革事業並に国家の新機構が要求する専門家養成のためには、国民が能く国家の理想体系を把握し、また之を他に説明して、次の世代の国民に浸透せしめ得べき新施設を必要とする。そは文部省に課せられたる重大任務である。トルコ青年層の胸奥に、またトルコ国民の知識の中に、いま予が叙べたる原則を澄刺と保持せしむることが、大学並に高等教育機構に課せられたる最高任務である。

この目的のために吾等は、トルコ国を三大文化地域に区分することから出発する。西部地域に於ては、チノープル大学に着手せられたる改革が、一層厳密に遂行せられ、完全に近代的なる大学がアンゴラ大学が設立せられねばならぬ。中央地域に於ては、出来るだけ速にアンゴラ大学を有するに至るべき近代文化中心地ン湖岸の景勝地に、一切の種類の初等学校と、後に行に移らねばならぬ。此の成果多き企図が、東部諸州の青年に与へる文化は、共和国政府のであらう」。

学校教育を補ふため、またはこれを徹底せしめるため、ムスタファは更に「国民館」の創設を実行した。此事は、一九三一年五月十日の共和国民党第三回大会に於て決議せられ、翌一九三二年に先づ十四の地方中心都市に開設せられた。国民館は九部より成り、第一は国語・文学・歴史部、第二は芸術部、第三は演劇部、第四は体育部、第五は社会経済部、第六は民衆講習部、第七は図書館及び出版会及び展覧会部、第八は農村生活刷新部、第九は博覧部である。各部の活動は、会員中より選ばれたる三名乃至五名の委員より成る委員会によつて指導せられ、部委員会代表者より成る中央委員会が、全体の活動を統率して居る。

国民館は年々其数を増し、一九三三年には五五、一九三四年には八〇、一九三五年には一〇三、一九三八年には二〇九に達し、会員の数は百万を超えた。一九三七年度に於て、国民館主催の各種の集会に参加せる人数は、実に六百六十四万余であつた。トルコ国民の教養は、国民館を通じて日に高められつつある。是くの如き施設は、決してムスタファの独創でない。吾国の青年団の如きは、設立の趣旨に於て殆ど同一轍である。それが吾国の青年団の如きは、設立の趣旨に於て殆ど同一轍である。それが上に偉大なる効果を挙げ、吾国に於ては殆ど有意義なる貢献をして居ないのは、一に指導者の相違に因る。

さてトルコ民族が真個の独立を確保するためには、国民経済の確立を必須の条件とする。それ故にムスタファは、

サカリア戦勝によつて独立の第一歩を踏み出だせる時、夙くも国民に向つて下の如く告げて居る――「同胞よ、吾等は光栄ある勝利を得るに非ず、経済的・科学的・文化的に得らるべき勝利である。而もそは決して銃剣によつて得らるるであらう。吾等の軍隊によつて今日まで獲得せる勝利は、決して吾国を真の幸福に導くものでない。軍事的勝利の栄光に酔ふ勿れ。いざ新しき経済的勝利に向つて準備しよう！」かくて、ローザンヌ条約締結を転期として、トルコの新しき経済的生活が始められた。そはトルコ国民経済の自立を目標として、外債を整理し、外国資本を駆逐し、国内産業の近代化によつて経済的独立を実現するために、金剛の努力を揮ひ初めた。

列強はトルコの経済的更生に対して何等の期待をかけなかつた。儻倖によつて勝利を得ても、其の軍人どもが経済的改革にも成功すべしとは、彼等の決して信じ得ぬことであつた。殊に新共和国が、従来トルコ国民生活の経済的部門に主要の役割を勤めたるギリシア人並にアルメニア人を国外に放逐せることは、トルコの経済的改革に対して自殺的行為なるかに考へられた。さり乍ら此等の両国人は、決して世人が考へる如くトルコ経済に貢献して居たのではない。彼等は成程欧洲諸国の会社商店の手代となつて居たので、欧土貿易に主要なる役割を勤めた。而も彼等は、正直なるトルコ農民に欧洲貨物を売附けて其の代価を受取り乍ら、彼等の主人に対しては時として一厘も支払はず、多くの場合は極めて僅少を支払つた。其際彼等は常に純朴なるトルコ農民を泥棒なるかの如く罵るので、甚だしくトルコの評判を悪くした。彼等は此の狡猾なる手段によつて、二重の巨利を貪つて来た。蓋しトルコ農民は現金を所持せざるが故に、欧貨に対して農産物を提供した。此の物々交換に際し、トルコ農民は欧貨に対しては法外の高価を要求せられ、農産物の価格は極端に値切られた。而してトルコの輸出並に輸入貿易は彼等の独占に帰した。そのためにトルコ農民は年々貧窮の底に沈み、ギリシア人及びアルメニア人は急速に富んで来た。かくてギリシア人及びアルメニア人が、トルコの経済的生活に於て勤めたる役割は、多くの人々が考へるとは正反対に、実はトルコに取りて経済的に

も又道徳的にも極めて有害であつた。従つて彼等を国外に放逐せることが、トルコの経済改革の支障となる道理はない。

ギリシア人及びアルメニア人に搾取せられ、歴代サルタンの苛斂誅求に悩み、列強によつて市場を支配せられ、且一九一一年このかた連年不断の戦乱に国力を消耗し去れるトルコを、従来の半植民地的経済状態より脱却せしめ、国民経済の自力更生を図ることは、真に難中の至難事であつた。而もムスタファは、国民に向つて下の如く告げた——「銃剣によつて征服せるものは、竟には鋤によつて獲得せる者に、其の地位を委ねることを余儀なくされる。剣を使ふ腕は疲れるが、鋤で耕す腕は日毎に強くなり、年毎に国土の所有を確実にする。国民的支配は経済的覇権によつて堅確たらしめねばならぬ。独立の唯一の基礎、その最も強力なる下部構造は経済である。軍事的・政治的栄誉は、若し経済的勝利を伴はずば、断じて永続せぬであらう」。而して国民生活の自余の部門に於けると同じく、適切と大胆とムスタファは、欧羅巴資本の侵入が、必然に政治的勢力の扶殖を伴ふことを熟知せるが故に、最初より其の支配に対して挑戦した。彼は法律によつて、トルコに設立せられたる一切の外国商社に、トルコ資本参加を必須とした。煙草の如き国際商品は、之を国家管理の下に置いた。特殊の工業に対しては、機械輸入の関税を免除し、必須品の運賃を三割引にし、最も重要なる工業に対しては、最初十年間租税を免じ又は減じた。有史以来最初のトルコ国立銀行が設立せられ、イギリス系オットマン銀行及び其他既存外国銀行の特権は漸次縮小された。

外国よりの財政的援助を期待し得ざりし新トルコの経済政策は、必然国家資本主義的ならざるを得なかつた。トルコは実に此の主義に則りて、一九三四年第一次五箇年計画を樹立し、各種の工業を興して国内必需品の自給自足を図

り、次で第二次五箇年計画を樹立し、更に産業四箇年計画によりて、鉱産物の開発、交通機関の発達に力を注ぎ、世界の予想を裏切りて、着々目覚ましき成果を挙げた。

トルコ国民の七割を占むるものは農民である。ムスタファは既に一九二二年三月一日の国民議会に於て下の如く宣言した――「誰がトルコの所有者であり支配者であるか。言ふまでもなく真個の生産者たる農民である。それ故に最も安寧と幸福とを享受すべきものは農民に外ならぬ。共和国の経済政策は、此の原則を追求するであらう」。而して此の宣言は最も忠実に遂行された。サルタン時代に国家の主要なる財源であり、同時に農民の最大の苦悩なりし十分一税は、一九二五年二月十七日の法律によつて廃止された。農業銀行を設立し、容易なる条件で貧農に貸附を行つた。都市と農村とを結ぶ道路を改修した。農村に猖獗を極むるマラリヤの駆除に力を注いだ。農科大学以下の農業学校を新設して、農業教育の根本的改造を断行した。農事試験場を設置して、農民に実物教育を施した。かくしてトルコ農業は、堅実に復興の途を辿りつつある。

さてトルコに於ては、従来名のみ用ひて姓即ち家族名が無かつた。一九三四年六月に制定せられたる法律により、一切のトルコ人は、必ず名の後に姓を附けねばならぬこととなつた。一九三四年十一月二十四日、トルコ国民議会は、ムスタファのためにアタトュルクの姓を選んで之を贈つた。アタトュルクは「トルコの親」を意味し、ムスタファの姓として、これほど適切なるは無い。彼は実に総ての意味に於て新トルコの親であつた。

八　むすび

一九三八年十月二十九日、トルコは共和国成立第十五周年紀念祝賀式を挙げた。実に此の十五年の間にトルコは身

も魂も一新された。そは帝国から共和国となり、専制政治から民主政治となり、宗教の支配から理性の支配となり、コンスタンチノープルからアンゴラに移り、男女は同権となり、一夫多妻は一夫一妻となり、陰暦は陽暦となり、アラビア文字はローマ字となり、トルコが激刺として登場となり、トルコ帽なく、ハレムなく、旧きトルコの面影は払拭し去られて、新しき高向上の一路を進んで行く。此の非常なる革新は、鋼鉄よりも堅きムスタファの意志によつて遂げられた。彼は他人が十年を要する仕事を一年、一年を要する仕事を一月でやり遂げた。昔は織田信長の功業を讃へて「天下速成（そくじやう）」と言つた。この讃辞は直ちに移してムスタファに加へ得る。

而も此の紀念祝賀式の時、彼は既に病床の人であつた。国民の面上には此の歓ばしき日にも、一抹の暗雲が漂つて居た。病気は持病の肝臓病である。而して国民の切なる祈願も其の甲斐なく、翌十一月十日午前九時半、ムスタファは五十八歳を以て遂に長逝した。死後に開封せられた遺言状は、此年六月十二日附を以て、彼の総ての財産を国家に寄贈して居た。

試みに新トルコ建国者ケマル・アタトュルクと、アラビア神国建設者イブン・サウードとを比較せよ。年を同じくして生れたる此等両人の英雄は、聰明と果敢と精力とに於て共通に抜群である。そのために両者は共に偉大なる将軍であり、同時に偉大の政治家であり得た。さり乍ら前者の偉大の源泉は、透徹無比なる理性であり、後者のそれは熱烈真摯なる宗教的信仰である。イブン・サウードは常に神より課せられたる使命のために戦ひ、その最初の加護を神に求めた。然るにケマル・アタトュルクは、飽くも自己を信じ、自己の力を信じた。る間に、彼は昂然として「吾死なばトルコ死ぬ可し」と明言して、自己の雙肩にトルコの運命を荷つた。而して彼の曇りなき理性は、常に驚くべき精確を以て現実を認識し、之に対して適切誤りなき処置を執つた。彼はまたイブン・

サウードと異なり、決して厳格なる道徳的生活を営まなかつた。彼の起居は一般に不規則であり、大いに踊り、時として夜を更かした。彼の結婚並に離婚は、能く彼の面目を躍如たらしめる。

一九二二年初秋、一挙ギリシア軍をアナトリアより掃蕩し去れる彼は、長駆してスミルナに入り、一旦トルコ軍司令部の汚ない一室に落着いた。然るに比の戦勝者の最も予期せざる者が、此処で彼の来るを待ち構へて居た。彼女はパリ人に劣らぬ見事なフランス語で、其父の邸宅をトルコ軍司令部として提供したいと申出た。最初彼は此の意外なる提議を斥けたが、委細の事情を彼女から聴くに及んで、遂に其の招待に応じた。

ラティフェは、ムアメロン・チャキ・ベイと呼ぶスミルナの豪商の女で、若くしてフランスに遊び、英・仏・独語を流暢に話し、其頃は法律を学んで居た。此年の夏、あたかもトルコ軍がギリシア軍に対して攻勢を取り初めたころ彼女はフランスの旅からスミルナに帰着したが、両親は戦禍を恐れて何処へか避難し、町は混乱を極めて居た。当時尚はスミルナを占領して居たギリシア軍は、彼女をトルコ側の諜者と疑ひ、兵士を以て其家を囲み、厳重に外部との交通を遮断し、且必要と認むれば直ちに逮捕すべしと威嚇した。ラティフェは、身に迫る危険を知つて居ながら、敢て脱走しようともせず、僅に数名の僕婢と共に、毅然して丘上の宏壮なる邸宅に踏み留まり、一日千秋の思ひで、トルコ軍の入城を待ち焦れて居た。彼女がロケットに蔵めて肌身離さぬ写真の主が、今や常勝の歩みを此町に進めたのである。彼女は喧騒を極むる都心の塵まみれの司令部が、休息と静養を必要とする「常勝将軍」の宿たるに適せずとして、郊外に在る彼女の家に招かんとするのである。

所謂「独立戦争」を通じてムスタファと辛苦艱難を共にし、此時も従軍して彼と共に在りしハリデ・エディプ女史は、其著「トルコの試煉」の中に、目撃したままに当時の情景を述べて居る——「ムスタファ・ケマル・パシャは、

遂にラティフェ・ハヌムの客となつた。彼女の家は戦火から最も離れ且最も安全な場処に在つた。……吾等は蒼々とした海を見下ろす美しきトルコ風の庭園を通つて進んだ。ベランダに登る階段及びベランダ自身までも常春藤、藤、素馨（ジャスミン）、薔薇などで鬱蒼と包まれて居た。黒衣を纏へる小形の婦人が、階段の上で吾等を迎へた。齢は二十四歳とのことであつたが、落着いた物ごしは遥に年上に見えた。その優しい挨拶は、威厳と古風な淑（しとや）かさを兼ね具へて居た。彼女は頭髪を黒いベールで覆ひ、顔も体も円味を帯び、且引緊つて居た。その堅く結んだ薄い唇は、やや女らしくなけれど、異常なる体力と意力とを示し、その目は此上もなく美しく、強く輝き、また叡智が閃いて居た。

ムスタファは暫く座を退いた後、礼服に着換へて帰つて来た。彼は金髪を綺麗に後に撫で付け、いつものやうに金色の眉毛を逆立て、内心の満足に両眼を輝かせながら、数々の飲物を満載して居るテーブルの側に立つた。ラティフェは私と並んでソーファに腰かけて居たが、始終彼から目を離さなかつた。彼女は彼に魂を奪はれて居たし、彼はあらさまに彼女に愛を示した。二人を相牽く強烈なる人情の交流が、此夜を澱刺たるものたらしめた」。

ムスタファはラティフェに向つて、彼の希望や計画を語つた。彼はまた無上の聴手であり、稀有の応対者であつた。回教の信仰を護り乍ら、西欧の儀礼を弁へ、新しき学問を修めたるラティフェは、、ムスタファが心密かに描いて居た理想的トルコ婦人、解放せられ、教育せられ、訓練せられしトルコ婦人が具ふべき一切の性質を完備して居るかに思はれた。彼は青年時代から異性に対して無頓着であり、また恋愛沙汰に耽るには余りに忙しかつた。彼は同僚が婦女子に騒ぐのを見ては「君は女と遊ぶが善からう、僕は馬の方が可愛い」と言つて居た。そのムスタファが、一見してラティフェに心奪はれたのだ。

彼女の邸宅に滞在中、彼女はムスタファに取りて絶好の秘書でもあつた。勝利の跡始末に列強との交渉が輻輳せる際のことゝて、彼女の語学が別けても役立つた。ハリデ・エディブは、恐らく若干の嫉妬も手伝つて、屢々ムスタフ

ァを揶揄した。ムスタファが「彼女はロケットの中に僕の写真を入れて居たぞ」と欣んだのにィヴは「トルコの女の半分は、皆な貴方の写真を肌身に着けて居ます。然し夫れは別に貴方に恋慕してなく、トルコを救つてくれた貴方に対する感謝からです」とたしなめた。但し彼の情熱は、ぐらゐで冷める筈がなく、彼女を知りて五日目に、彼は早くも彼女を吾有とせんとした。然るに「常勝将軍」は、憤然と式を挙げたる後ならでは彼の希望を容れ難いと、断乎として彼の要求を拒絶した。一敗せるして翌日彼女の邸宅を去つた。其後五週間、彼からラティフェに何の音沙汰もなかつた。彼女はムスタファとの恋愛の経緯は最早解消せるものと諦め、再びパリに赴いて法律の勉強を続ける準備をして居た。

其間ムスタファは、アンゴラで政務に忙殺されて居た。一日彼は突如旅行の用意を命じた。でアンゴラを出発したが、何人も行先を知らなかつた。彼は迂路を取りてスミルナに赴き、驀地にラティフェの家に至り、端的に結婚を申込んだ。思ひがけぬムスタファの出現に瞠目せるラティフェの返事も待たで、彼は言ひ足した――「即刻結婚式を挙げよう。虚礼は一切ぬきだ」と。而して事は其の通りに行はれた。二人は直ちに新婚の旅に出た。世界は初めてムスタファの妻帯を知つて驚いた。

此の数年間、ムスタファの身のまはりを世話して来たのは、フィクリーと呼ぶ彼の従妹であつた。フィクリーは真実な優しい少女で、密にムスタファに想ひを焦がし、まごころ籠めて彼に事へて居たが、そのうち肺結核に罹つた。ムスタファは、ラティフェとの結婚を決意してスミルナに赴く前フィクリーを独逸ミュンヘンの病院に旅立たせた。此時ムスタファと一緒に彼女を停車場に見送つたハリデ・エディブに従へば「彼女は始終泣き崩れて居た」。而してエディブ夫人に向ひ「パリに四五日滞在して美しい衣裳を求めませう」と言つた。夫人は更に下の如く述べて居る――「フィクリーさんを見たのは、之が最後であつた。ミュンヘンの病院で彼女に附添つて居た一婦人は、彼女の衰弱、

彼女の涙、ケマルの結婚を聴いた時に彼女が気もそぞろに口走れる悲しい恋物語を私に告げた。ミュンヘンのトルコ人たちは、彼女に最早、前途がないと知つた後は振りかへりもしなくなつた。彼女は病気は癒らず、心に痛手を負ひて、唯だ一人の親切な婦人に見送られてミュンヘンを去つた」。

斯様に一人の可憐の少女を犠牲にした此の浪漫的な結婚は、二人に取つて決して幸福なものでなかつた。二人ともに余りに強烈な自我を有し、余りに不屈な意志を有せるが故に、互に相譲りて一体となることは不可能であつた。ラティフェは、数百年間圧へつけられたトルコ婦人の全精力が、彼女に於て一時に爆発したかと思はれるやうな活動的女性であり、且秀でた頭脳を有つて居た。彼女は有らゆる仕事に興味を有ち且其のたづさはる総ての仕事に通暁した。かくて彼女は、社会問題は言ふに及ばず、政治問題にさへも容喙し、且自己の意志を貫かうとした。而もそれは彼女よりも一層強烈なる意志を有するムスタファの断じて許し得ぬところであつた。ムスタファの彼女に対する愛情は幾くもなくして冷め、やがたが、ムスタファの妻としては決して適当でなかつたラティフェは勝れたる女性ではあつて離婚するに至つた。彼は其後また娶らず、アンゴラ郊外チャンカヤの邸宅に独身生活を送つた。

ラティフェとの結婚以前、サカリア戦勝直後、彼は其母ズベイダを君府からチャンカヤに迎へた。ズベイダは齢既に七十に達して居たが、丈高く骨格逞しく、顔色は乳の如く白く、その輪郭は強くはつきりして居た。ハリデ・エディブに従へば、彼女は純白の衣を纏ひ、純白の頭巾を被れる典型的なるマケドニア婦人であつた。ズベイダに取りて彼は小学校の腕白小僧時代と同じムスタファであり、その当時と同様に「彼を愛し、彼を叱り、その腕を容赦なく叱りつけて指図其子が三冨を叱咤すると同様の峻烈さを以て、其子の家政を見て居た可憐なるフィクリーを叱咤した。老齢のために視力は衰へ、多くの病気を煩つて居たので、概ね蒙蒲団の上に坐して日を送つた。アンゴラは彼女の気に入らず、生れ故郷のサロニカを恋ひ焦がれ、其子が此町を敵から奪回するまでは、決して新しい衣裳を身に

着けぬと頑張つた。ハンス・フロェムブゲンの言葉に従へば「母と子とは、宛も親善なる二大強国の如く相隣りて生活した。両者とも各自の国境を尊重したが、若し他が此の国境を越えんとする場合は、直ちに衝突を見た。両者とも事を成さんとし、勝利を得んとする決意に燃えて居た。ズベイダは祈禱し、ムスタファは計画した」。やがて母はスミルナに転地して静養することとなつたが、一九二三年一月、其子が国民議会に於ける彼の反対派と悪戦苦闘しつつありし時、遂にスミルナに於て長逝した。彼女のムスタファに対する最後の命令は、わがためにサロニカを奪回せよといふことであつた。

ヒットラー又はムッソリニが、紆余曲折の路を辿れると異なり、ムスタファは当初より唯一筋の路を邁往した。但し其路は、彼等のそれに劣らず嶮難を極めた。彼等をして其の嶮難を突破せしめたるものは、実に彼等の自身に対する金剛の信念、同志に対する不動の信頼、時代並に人心の透徹せる認識、旧秩序を無視する敢然たる勇気、志業に対する驚くべき堅忍、及び、滾々不尽の精力である。ムスタファは、ヒットラーのギジョンと直覚とを欠いて居る。而も其の旺盛なる精力に至つては、真に超人的と呼んでよい。彼の生活を熟知せるハリデ・エディブは、実に下の如く言ふ――「彼の周囲には、知性と徳性とに於て彼に優れる者あり、また教養と学問に於て遥に彼の上に出でたる者もある。而も彼等のうち何人もヴイタリティの一点に於て、彼と匹敵し得る者はない。恐らく彼の人格は、平凡なる万人の性質の一部づつを集めて成れるものなるが故に、一層厳粛円満なる性格、又は一層深奥なる智慧の所有者よりも却つて善く民衆を支配し得たのであらう。総ての人が疲れ果てた時に、当初と変らぬ潑剌さを以て、室の真中に立つて話し続けて居た彼の姿が、今でも私の眼前に彷彿する。其時、私は自ら斯く問うたことをも記憶して居る――何と驚くべき人であらう。これは人間の姿を取つた自然力とでも云ふものであらうか。この怖るべき旋風は、トルコ国民が其の目的を遂げた時に、何うして鎮まるのであらうかと」。

当面の仕事が無い時には、彼は其の精力を議論と併の教義、その初期の歴史を熱心に研究して、宗教階級成れる時、彼は共和国民党大会に於て、独立戦争の経緯と国民革命の遂行について精細な説明を与へた。そは世界に於てまさしく空前であり、恐らく絶後なるべき、実に四十万語の長演説であるが、その草稿を彼は四十八時間ぶつ通しで一気に作り上げた。幾人かの秘書が疲れ果てて交代したが、彼は最後まで凛然として居た。

アンゴラの大議事堂に於て、彼は熱心なる聴衆を前にして演説を始めた。そはラヂオによつてトルコ全国に放送された。風雨のために二日目から放送は不可能となつたが、演説は六日に亙つて続けられた。極めて明晰に、極めて論理的に、而も事実其者に具はれる戯曲的多彩を以て、完全に其の聴衆を魅了した。而して実に下の如き言葉を以て其の長広舌を結んだ——

「諸君！　予は此の叙述に於て、国家の進路既に尽きたりと思はれた一個の偉大なる国民が、如何にして其の独立を回復せるか如何にして科学の最新の成果の上に一個の民族的・近代的国家を創建せるかを示すために心を砕いた。吾等が到達せる此の成果は、苦難の数世紀より学べる教訓の賜物であり、わが愛する祖国の土を紅に染めたる血潮の賜物である。予は此の神聖なる宝を、トルコ青年の掌中に置く。トルコ青年よ！　諸君至高の本務は、国民的独立を擁護することである。これこそは諸君の生存の、また諸君の将来の、唯一無二の礎である。この礎は諸君至高の宝を蔵する。将来に於ても国の内外に於て、此の至宝を諸君より奪はんとする非謀が現れるであらう。万一諸君が諸君の独立及びトルコ共和国を脅かされるやうな場合に立ち至らば、諸君は其の本分を尽すために、諸君の置かるる境遇及び条件に左右されてはならぬ。境遇や条件は甚だしく不利であるかも知れぬ。諸君の独立及びトルコ共和国を亡ぼさんとする敵は、振古未曽有の強力を以て臨むかも知れぬ。彼等は其の武力と謀略とを以て、

祖国の一切の城砦と武庫とを奪ひ去るかも知れぬ。更に最悪の場合を想像すれば、是くの如き非常時に際して、国内に於て政権を握るものが過誤を敢てし、敵の傀儡となり、甚だしきは彼等の個人的利害を敵の主要目的と合致せしめるかも知れぬ。かくて国民は極度の窮乏に陥り、破滅の淵に沈淪するかも知れぬ。トルコ青年よ！　実に是くの如き場合に陥りても、敢然として独立と共和国とを救ふことが諸君の任務である。此の大業のために必要なる力は、実に諸君の血管に流るる鮮血の中に漲つて居る」。

彼は自ら此の言葉通りに戦ひ抜いた。それ故に彼はトルコ青年に向つて斯く要求することが出来る。吾等はトルコ青年が、彼の此の教訓に忠誠ならんことを希望して止まぬ。彼の長逝を発表せるトルコ政府の公文は、下の一節を以て結ばれて居る。吾等は其の一節を以て此の小篇をも結ぶであらう——

「今日吾等が其の永眠を悼む吾等の偉大なる統領アタトュルクは、常にトルコ国民を信じて居た。而して其の信頼に励まされて、彼の偉業を成就した。彼は満腔の信頼を以て、此の偉業を偉大なるトルコ国民に遺した。青年トルクは永遠に此の無比の遺産たる共和国を護り、偉大なる故人の跡を踏んで邁往するであらう。ケマル・アタトュルクは永遠にトルコの歴史の中に、またトルコ人の魂の中に生きるであらう」。

レザーパフラギ皇帝

一　レザー・カン出現以前

ペルシアは、幾度となく異民族のために征服の憂目を見た。それにも拘らず、ペルシア人恰も昨日のことの如く考へて、自ら誇り且慰めて来た。例へばナスルッディン皇帝の逸話として、下の如きことが伝へられて居る。一八四八年より一八九六年まで、殆ど半世紀の長きに亙りてペルシアに君臨せるこの皇帝が、一日ギリシアの一政治家を引見せる時、その最初の挨拶は「ギリシアがペルシアに対する旧怨を忘れて欲しい」という言葉であつた。而も過去数十年乃至数百年の間、ギリシアとペルシアとの間には如何なる葛藤も、紛糾もなかつたので、此の近代ギリシアの政治家は、果して何を意味するかと思ひ惑つた。然るに皇帝自身は、親らダリウス、ザークセス諸帝の後継者を以て任じたるが故に、実に二千数百年以前の祖先のために、その遠征を弁解せんとしたのである。

かくの如きは単りペルシア人のみならず、古に栄えて今に衰へたる多くの東洋国民に共通する悲惨なる特性の一つである。彼等は幾度となく異民族のために征服された。而も彼等の異民族は、概ね彼等が野蛮人として軽蔑せる蒙昧の民であつた。その野蛮人のために彼等の国は亡ぼされた。而も彼等の主人となれる野蛮人は、いつとはなく却つて其の征服せる民族のために同化せられ、彼等の文化とその伝統とを吾がものの如く尊重するやうになる。是くの如き歴史を繰返す間に、其の民族の昔ながらの伝統は歪められ乍らも綿々不断に護持されて来たが、民族其者は、敢然として外

敵に抵抗する反撥力を失ひ、国家独立の礎たるべき愛国的感情を稀薄にした。かくて彼等は、一面に於て過去の栄華を讃美し誇負し乍ら、他面に於て現実の屈辱を意に介しない。彼等は強力者の前に其膝を屈することを恥ぢず、唯だ一日の安きを偸む生活に甘んずる。

之をペルシアに見よ。カジャル王朝治下のペルシアは、第十九世紀を通じて、間断なく欧羅巴の政治的並に経済的蠶食を受けて来た。夙く既に一八二六年、ロシアはトルクマンチャイ条約によつて、コーカサスの豊かなる諸地方を此国から奪つた。一八五七年には、イギリスがアフガニスタンの西部を此国から失はしめた。ペルシアはイギリスの無法に対して戦はんとしたが、遂に如何ともし難かつた。恰も此時、後にアリアン人種優秀を力説せる人種哲学を提唱して其名を世界に知られたるゴビノー伯が、フランス公使館参事官として、テーランに駐在して居た。彼は具さに当時のペルシア国情を目睹して、平素は過度に矩先の偉業を誇るペルシア人が、現前の国難に対して全く無関心なることに驚き呆れて居る。ゴビノー伯の記するところによれば、ペルシア政府は国民を激励して侵略者と戦へと号令し、教師たちはイギリスに向つて聖戦を布告した。然るにペルシア国民は、曾に政府の号令に応ぜざりしのみならず、教師たちの聖戦呼ばはりを嘲弄し、わけてもテーラン商人は、晩かれ早かれ英軍が征服者として入都するものと諦め、専ら其の商品を高価に彼等に売付ける算段に没頭して居た。

かくしてペルシア国民の大多数は、空腹を充たすに足る食物あり、時に酔ふべき阿片さへあれば、大なる不平なしに其日を送つた。カジャル家の諸君主は、生活の享楽に余念なく其の豪奢に要する費用を際限なく外国から借りた。世界戦の前年に於て、ペルシア皇帝のイギリスに対する負債は三百二十五万ポンド、ロシアに対する負債は千三百五十万ルーブルに達して居た。英露両国は、殆ど如何なる抵抗をも受くることなしに蠶食の歩みを進め、一九〇七年八月三十一日、密に露都に於て協約を結び、肆(ほしいまま)に各自の勢力範囲を定めて、一朝にしてペルシアの地図を塗替へて了

つた。爾来ペルシアの国運は、淪落の一路を急ぐだけであつた。一九一一年、ペルシア政府に招かれて財政整理の重任に当り、着々改革の実を挙げたる事が英露両国の忌諱に触れ、在職僅に八箇月にして恨を呑んで帰国せる米人モルガン・シャスターは、満腔の義憤を下の言葉によつて洩らして居る――「唯だマコーレーの史筆、ヱレスチャギンの彩管のみ、能く此の没落に伴へる急転の場面を、如実に描出し得るであらう。場面場面に於て、二個の文化高き、而して基督教国と自称する国家が、真実と体面と礼節と而して法律とを標榜して、緩急如意の役割を演じた。少くも其のうちの一国は、自国の政治的欲望を遂げるため、而してペルシアをして到底革新の希望なからしめるため、最も野蛮なる惨虐を敢てするに躊躇しなかつた」。英露の掌裡に飜弄せられたるペルシアは、全く名目のみに独立国となり果てた。政府は彼等の傀儡に過ぎざるが故に、其意に満たざる内閣は随時之を倒し甚しき時は毎月内閣の更送を見た。従つてペルシアの政治家は、自主独立の精神を失ひ尽し、唯だロシア公使又はイギリス公使の臣隷として、彼等の頤使に甘んじた。かくの如き淪落行程の只中に、第一次世界戦が勃発したのである。

ペルシア政府は、世界戦に於て局外中立を宣言した。さり乍ら聯合国も同盟国も毛頭、此国の中立を念頭に置かなかつた。ペルシアは世界戦の始より終まで、両交戦団体の戦場として、悲惨なる戦禍を嘗めさせられた。雙方のプロパガンダが悪辣に行はれ、雙方の黄金が湯水の如く撒かれた。ペルシアの政治家は、或は其身を聯合国側に売り、或は同盟国側に売り、甚だ屢々雙方に売つた。世界の国々が金の欠乏に四苦八苦せる大戦最中に、テーランのバザールだけは、金貨よりも紙幣が歓迎される有様であつた。

一九一七年の露国革命により、ペルシア後門の狼は退却したが、前門の虎は一層残酷なる猛威を振ひ、一九一九年八月九日、暴力と黄金とを以て此国を威圧し籠絡して、遂に英波条約に調印せしむるに至つた。この条約は「飽迄もペルシアの保全を念とし、その独立を尊重す」と標榜しながら、ペルシアの行政を補佐する官吏を英国より送り、ペ

ルシアの軍隊を英国将校の手によつて改編し、内政改革の目的を以て英国より借款し、鉄道建設及び其他の交通機関改善に関して英国と協力し、且英国の手によつて関税改革を行ふべきことを約束せるものであり、実にペルシアを以て完全に大英世界帝国の一部たらしめんとせるものである。さればこそ当時のフランス新聞は、此の条約を以て「過去五年間、印度並にエジプトの防波堤を築かんとして、イギリスが払へる一切の努力のうち最も重要なる成績を挙げたるもの一」として羨み且嫉んだ。而して此の恥づべき条約に調印せる首相ヴォスケッダウレー以下三人のペルシア政治家は、実に七十五万トーマンの黄金をイギリスから貰つたのだ。

如何に国家の興廃に無関心なるペルシア議会は、ロシアの宣伝によつて排英精神と国民的自覚とを喚起せられたが故に、是くの如き条約に協賛を与ふる道理なく、政府もまた之を議会に提出する勇気が無かつた。かくて折角の英波条約も、正式に批准せらるることなくして空しく中有に迷ひつつありし間に、ペルシア政府の優柔不断を怒れる英国外相カーゾン卿は一九二〇年六月に至り、従来ペルシアに与へつつありし毎月の補助金交付を止めたので、首相ヴォスケッダウレーは其職を辞し、急遽、欧羅巴に逃避せねばならなかつた。

ヴォスケッダウレー及び其他の親英政治家群がペルシア政局の舞台より退場するや、直ちにセパダリアザムを首班とする親露内閣の出現となり、ソヴエト公使館と新条約の交渉に入つた。セパダリアザムは、前首相にも優る腐敗せる老政治家であり、多数の黄金をロシアから貰つた。ロシアの撒ける黄金は、恐らくイギリスの撒けるそれに劣らぬであらう。かくして買収し得たる露波条約は、一九二一年二月二十六日モスクワに於て調印されたが、其の精神は旧露帝国がペルシアに対して取れる侵略政策を放棄し、且旧露帝国の締結せる一切の条約を廃棄し、全く対等の独立国家としてペルシアを待遇せるものであつた。かくの如き条約の締結にさへ巨額の賄賂を必

要とせることは、殆ど吾等の不可解とするところである。当時のソヴエト大使ロートシュタインは実に下の如く語る——「ペルシア政治家は、誰からでも金を受取る。今日はイギリスから取り、明日はロシアから、またはフランスからまたはドイツから、または其他の国から取る。但し彼等は、金を受取つたからとて何事をもしない。仮令六度ペルシアを買収しても、ペルシアは決して何国の手にも落ちぬであらう。ペルシアは何うにもならないのだ。それ故にペルシアは、結局健全だと言う可きであらう」。

而も是くの如き「健全状態」は、心あるペルシア人に取りて、最早堪へ難きものとなつた。腐敗せる売国政治家どもを葬れといふ要求が、真摯なる青年並に一部の軍人の間に、火の如く燃え立つた。而して此の革新運動の中心指導者は、テーランの新聞「ラード」の主筆サイェッド・ズィアエッディンであつた。彼は当時齢三十三歳、未だ嘗て英露に其身を売らず、腐敗貴族と何等の因縁を結ばず、何人も其の清廉と愛国的熱情とを疑はなかつた。彼は少数の同志と相謀りてクーデタの断行を企て、そのためにコサック兵団を用ゐるに決した。

コサック兵団は、一八八二年、ナスルッディン皇帝の時、当時次第に醸成せられつつありし人民の反抗に対し、皇帝が一身の護衛に備ふる目的を以て、露国陸軍大佐チャイコフスキをして編成せしめたもので、爾来、露国軍人によつて指揮されて来た。一九二〇年、デニキン軍の敗退後ボルシェヴキ軍がアゼルバイジャンに侵入してソヴエト共和国を此地に建設するや、コサック兵団は其の征討のために派遣せられたが、却つてボルシエヴキ軍の撃退するところとなつた。此の敗北のため、露国将校は悉く放逐せられ、ペルシア将校の手によつてコサック兵団の改編を見るに至つたが、此時最も才幹を示したのが、レザー・クリ其人であり、兵団改組と共に佐官に昇進し、カスィム・カン及びマスド・カン両将軍の下に、兵団の最も有力なる指揮者の一人となつた。

当時コサック兵団の大部分はカズギンに駐屯してゐたが、ズィアエッディン及び其の同志は、予てよりマスド将軍

と脈絡を通じて居たので、クーデタの計画を打明けて将軍の同意を得た。将軍はカスィム及びレザーと凝議の上、一九二一年二月二十日深夜を期してテーランに進軍するに決し、二千五百人より成る革命軍の指揮をレザーに委ねた。

レザーは欣んで此の重任を負ひ、途上何等の抵抗を受くることなくしてテーランに進軍し、カズギン門より市内に入つた。スウェデン人を司令官とする憲兵隊が多少の抵抗を試みたが、その敵し難きを知りて直ちに降服したので、二月二十一日払暁には、殆ど総ての主要官衙を占領し了つた。当時テーラン駐在中なりし英国財政委員の一人J・M・バルフォアは、一夜の間に革命の行はれしことを、朝食の時まで知らなかつたと語つて居る。ペルシア皇帝は生命の危険をさへ感じたので、何等の抵抗を試みることなく、総てを成行きに任せた。かくて即日、セパダリアザムは逐ひやられて、ズィアエッディーンを首班とする内閣が組織せられ、マスド・カンは陸相となり、カスィム・カンはテーラン総督となり、昨日のレザー・カンは、一八七八年三月十六日、マザンダラン山間の一邑サワードクフに生れた。両親は貧しくあつたが、地方の名門であると言はれる。マザンダランは一方カスピ海によつて限られ、他方嶮峻なるエルブルズ山脈によつて護られたる山地なるが故に、アラビアよりの奔潮も、蒙古韃靼の波濤も、共に此地には押寄せ得なかつた。マザンダランが完全にペルシア帝国の一部に織込まれたのは、実に第十七世紀初頭、アッバス大帝の時のことである。それ故にマザンダランでは、ペルシアの如何なる他の地方に於てよりも、イランの血液が純潔に保たれて来た。レザーの脈管にも、純潔なるイランの血が流れて居る。さればこそレザーは、後にペルシアの帝位に登れる後、国号をイランと改め、帝位継承者をイラン種の母より生れたる皇太子に定めたのである。

彼は二十五歳のころ、一兵卒としてコサック兵団に入つたと言はれるが、その以前の生立ち、乃至其後の閲歴は殆ど知られて居ない。但し彼は軀幹抜群に長大、容貌また雄偉なるが故に、単に其の風貌のみを以てしても優にコサッ

ク同僚を威圧するに足りたであらう。一九一九年、ジェンガリ族の叛乱征討に際し、彼は尚ほ一下士官であつたが、其の勇武を以て人目を惹いた。一九二〇年には士官に昇進して居たが、コサック兵団改組に際して非凡の才幹を示しそのために「テーラン進軍」の指揮者に選ばれたのである。

二　レザー・カンの出現

レザー・カンが彗星の如く其姿をテーランに現わしたのは、齢四十三歳の時である。高き教養とてもなく、些かの政治的経験もなく、コサック兵団以外には殆ど其名を知られざりし武骨なる一軍人が、やがてペルシアの救国主となるであらうことは、恐らく当時、何人も考へ及ばぬところであつた。一兵卒より出身せる彼が、一躍、陸軍総司令官に任ぜられし其事さへ、既にペルシアの上流階級をして驚魂駭魄せしむるに足りた。恐らく彼等は、レザー・カンが此の異類絶群の寵遇に感激し、唯々諾々新内閣のために犬馬の労に服することと考へて居たであらう。然るに、事実は忽ち彼等の想像を裏切つた。新内閣の主人は決して首相ズィアエッディンに非ず、実にレザー・カン其人であつた。

彼は陸軍総司令官としてペルシアの武力を掌握しつつ、政府に向つて一切の重要政務に対する発言権を要求した。彼は軍隊の増員改善のために経費を要求した。革命に反抗する貴族の弾圧には彼自身之に当るべきことを要求した。ズィアエッディン政府は、従前のそれと異なり、真向に国民主義を標榜せるが故に、イギリス又はロシアの援助を得べくもなかつた。従つて政府は、否応なしにレザー・カンの武力と其の鉄石の意志とに頼らなければならなかつた。新政府は何よりも先づ必要なる政治費用を算段せねばならなかつたが、国庫は空乏であり、徴税は全く不可能であつた。レザー・カンは首相に強要して、豪富を擁せる貴族たちを逮捕せしめた。英波条約調印者の一人フィルズ親王及

び其父を初めとし、新政府樹立後の数週間内に、多数の貴族が牢獄に投ぜられ、その財産の一部又は全部が没収された。此等の貴族は、多年英国の走狗なりしが故に、心密かにイギリスは決して彼等の没落を坐視せぬだらうと予期して居たのに、英国公使館は唯だ「厳重なる抗議」を提出するだけで、積極的行動に出でようとしなかつた。

此の非常手段によつて当面緊急の費用を弁に入れたズィアエッディンは、直に政治的改革に着手し官庁から無用の冗員を罷免し、出来得る限り有能正直の者を挙用せんとした。彼は前内閣と同じく、英波条約廃棄を宣言したが、大心は英国の援助の下に財政再建を望んで居たので、該条約によつてイギリスが獲得すべき利益を個々に分譲して、その好意を買はんとした。然し乍らカーゾン卿は、頑然として該条約の全面的承認を強要し、ズィアエッディンの提議に耳を藉さうとしなかつた。かかる間に四方よりズィアエッディンに対する反抗の火の手が挙がり初めた。ソヴエト公使が彼の親英的態度に不満を抱いた。軍隊の将校が彼に反抗した。迫害せられたる全貴族が彼を呪つた。王族の弾圧に憤慨せる皇帝も彼を憎んだ。彼の立場は至難になつた。

この形勢を看取せるレザー・カンは、四月三日、辞職をズィアエッディンに迫り、カヴメス・サルタネーを首相に推し、自ら陸相に就任した。新首相は、曽てコラサン総督たり、事を以て鉄窓裡に繋がれて居たのであるが、今やレザー・カンの推挙により、牢獄より一躍して台閣の首座を占めることとなつたのである。この政変によつて、ペルシアの政治的実権が、レザー・カンの掌裡に在ることが、初めて内外に明白になつた。而して人々は、此の無学なる武人の独裁の下に、ペルシアの悲運と不幸とは、一層甚しくなるだらうと悲んだ。然し乍ら此の悲観は当らなかつた。

レザー・カンは、陸相兼陸軍総司令官として、先づ軍隊の改造並に叛乱諸部族の鎮圧に全力を注いだ。当時のペルシアは、実に混沌乱離を極めて居た。西方に於てはルリスタンの諸部族が、公然政府に叛旗を翻して居た。北方に於

てはロシアの後援を恃めるクチュク・カン其他の叛軍が、勢威を逞しくして居た。東南に於てはバルチスタンが相変らず不穏であつた。西南に於てはモハメラーの君主が、イギリス庇護の下に殆ど独立して居た。北に於てはテーラン政府の威令を四方に普からしむるに非ずば、ペルシアの統一と復興とは、竟に望むべくもなかつた。かくて彼は先づ軍を北方に進め、クチュク・カンの勢力を覆して、アゼルバイジャンを平定した。次で彼はクルド、ルリ、バクティアリ、カシガイ其他の剽悍好戦の諸部族の武装解除に着手した。此等の諸部族は、皆な遊牧又は半遊牧を事とし、各自の族長の下に独立不羈の生活を営んで来た。彼等はテーラン政府に納貢することとなつては居たが、それは唯だ名目のみであつた。彼等のうち最も頑強なるはルリ族であり、従つてルリスタンの武装解除は極めて難事であつたが、レザー・カンは一九二三年より之を強行し、数年を費して其の目的を遂げた。

レザー・カンがペルシア統一のために北伐南征しつつありし間に、首府テーランでは相変らず政治的陰謀が繰返され、そのために内閣は三度も更送した。レザー・カンは、愚なる首府の政局に風馬牛の態度を取り、専ら戦陣の間に汗血を灑いで居たが、一九二三年十月に至り、曽て彼によつて挙用せられし前首相カヴメス・サルタネーが、彼を暗殺せんとする陰謀を企てて居ることを知るに及び、此月三十一日、自ら首相となりて新内閣を組織し且陸相並に陸軍総司令官を兼任した。而してアフマッド皇帝は、一切の責任を避けるため、興亡の岐路に立つ国家を後にして、翌月欧羅巴に旅立つた。

いまやレザー・カンの勲功は普く国民の間に認められ、その勢力は政府の一切の方面を支配するに至つたので、若し彼が性急軽率の人間であつたなら、恐らく既に此時にペルシアの主権者たらんとしたことであらう。ペルシアに於ける彼の地位は、打見たるところトルコに於けるケマル・パシャのそれに酷似して居た。而してシャーの非愛国的行動も、またサルタンのそれと酷似して居た。さればこそ翌一九二四年初頭から、ペルシアに於ても共和国運動が頓に

擡頭した。議会に於ける革新党は、憲法を改訂して政体を変更すべしと主張した。恐らくロシアの煽動を受けたるムハムマッド・アルリ・カリッスィの一派は、共和国建設を目的として総選挙を行ふべしと唱へた。此年三月には此の問題を繞り、議会に於て激烈なる議論が闘はれた。革新党は三月二十一日、即ち回教紀元一三〇三年正月元日を期して共和国宣言を断行すべく、猛烈なる運動を行つた。議会に於ける殺気立ちたる空気は、テーラン市民にも波動して、暴動及び同盟罷業の勃発を見るに至つた。

レザー・カンは、ペルシアの国情が決してトルコのそれと同じからぬことを知つて居た。ペルシアに於ては、回教教師団の国民に対する勢力が、トルコに比べて遥かに強大である。その教師団は、トルコ共和国がカリフ制を廃止して一般国民も、また彼等に動かされ、共和国を非とする意志を示し初めた。彼等は断乎として政体変革に反対する。而してテーランを去りて聖都クムに赴き、全国民の尊信を博する此地の教師等と談合し、ペルシアに於ける共和国建設は、回教の精神に悖る旨を声明せるのみならず、新聞紙其他に於て、此事に就いて論議することを禁止した。而も熱狂せる議会は、彼の声明に耳傾けず、喧々囂々して止まなかつたので、彼は一切の官職を辞して、四月八日ルーデンに赴いた。彼の諸将軍は、テーランに進軍して議会を蹂躙すべしと壮語した。議会は急ぎ代表者をレザー・カンの許に派し首府帰還を懇請せねばならなかつた。かくして彼はテーランに帰りて再び政権を握ることとなつた。而して先づフランスより購入せる近代武器を以て、其の軍隊を強化した。

三　ペルシアの統一

さてペルシアの西南部クズィスタンは、世界に名高き石油産地であり、且そのためにペルシアの最も富裕なる地方

である。その住民の大多数はアラビア人であり、最大の勢力を揮へるはモハメラーの首長カザルである。イギリスは夙く既に一九〇五年、カザルと契約を結んでクズィスタンの豊富なる油田を確保し、英波石油会社を設立して其の開発を初めた。爾来、此地は単りペルシアと言はず実に世界に於ける最も富める地方となつた。之と共に首長カザルの収入も増し、紅海より裏海に至る西南亜細亜全体を通じて、如何なる君主も彼の如く豪富を擁せるはなかつた。

英波石油会社の送油管はシャッタルアラブ河口のアバダンに終り、此処より英国汽船によつて印度洋に運び出される。此の大切なる送油管を防護するために、世界戦の勃発と同時に、イギリスは印度軍を派遣してイラクの南部を占領した。英波石油会社の利権は、もとよりテーラン政府との条約によつて獲得せるものであるが、モハメラー首長カザルは、実際に於てシャッタルアラブ河の全左岸、及びアフワス以南のカルン河可航下流を支配して居るので、イギリスは別個にカザルと条約を結び、カザルの領域を侵す敵に対して、武力援助を約束して居た。

カザルは至深の関心を以てレザー・カンの擡頭を注視して来た。彼はテーラン勢力の昂潮が、己れの領域を侵すべきことを恐れたが、ペルシア統一の偉業が、レザー・カンの号令の下に着々進められるのを見て、不安は次第に深刻になつた。事実、一九二四年の夏頃にはペルシアの自余の地方は殆ど皆なレザー・カンの旗風に靡き、中央の威令に服せざるものはクズィスタンだけとなつた。カザルはレザー・カンを蹉跌せしむべく、数々の陰謀をめぐらした。彼はペルシア議会をして其の「独裁者」に反抗せしむべく、巨額の黄金を議員の間に撒いた。或はルリ諸部族に援助を与へて、レザー・カンの武装解除に抵抗せしめた。但し彼は起つてペルシアと戦ふことを敢てしなかつた。テーランの政府が彼に向つて租税滞納を督促せる時、彼はペルシア臣民としての納税義務を承認し、且その義務を履行すべき旨を約束した。然し乍ら此事ありてより彼の策動は頓に活潑になつた。一九二四年夏にはバクティアリ諸部族並にカシガイ諸部族を煽動し、武器及び黄金の援助を約束して叛乱を起さしめんとした。かくて九月に入りて西南ペルシア一

時に、不穏の空気が漲り初めた。十月にはバクティアリ部族が遂に諸処に蜂起して叛乱を起すに至つた。

バクティアリ人はペルシアに於ける最も有力なる民族の一つであり、従来テーラン政府と親密なる関係に在つた。彼等のうちの有力なる諸族長は、或は宰相となり、或は閣員となりて帝国の政治に参与して来た。ムハムマッド・アリ王治の裏側に突し、国民党が起つて之と戦へる時、之を援けて勝利を得せしめたのは、実にバクティアリの豪族アサド家の力であつた。カザルは恐らくバクティアリ諸族をして、新しき「独裁者」と戦はしめんとしたのであらう。

而もアサド家の一族は、レザー・カンの護国運動の熱心なる協力者であり、其の当主は此年八月に組織せられたるレザー・カンの新内閣に入りて逓信大臣に就任して居た。それ故にバクティアリ諸族の鎮定には、アサド家が其任に当ることとなつた。

さてカザルの策動の背後には、イギリスの手があると信ぜられて居た。モハメラーとイギリスとの間に結ばれたる条約は周知のものなるが故に、兵をモハメラーに用ゐる者は、当然イギリスを敵とせねばならぬと考へられた。少くともカザル自身は、一旦緩急あれば必ずイギリスの武力的援助を受くべしと信じて居た。而も総て其等の顧慮は、毫もレザー・カンの決意を妨げなかつた。十一月六日、彼は敢然としてカザルを叛徒と宣告し、二万二千の軍隊をクズィスタンに向つて進発せしめ、自らイスファハンを経てシラーズに赴いた。此勢に怖れて、バクティアリ諸族は殆ど戦はずして屈服した。カザル自身のアラビア軍は、遥に優勢なるレザー軍に対して、全く戦意を失つた。而して最も期待せられたるイギリスは、如何なる援助をも与へなかつた。万策尽きたるカザルは、レザー・カンに打電して将来の忠誠を誓つた。彼は之に対して、電報による降服を受諾せずと答へ、シラーズよりペルシア湾頭ブシール港に出で此処より砲艦パラギ号に搭乗して西北に航し、十二月五日ナセリ港に到りて投錨した。戦慄せるモハメラー市民は、美々しく街頭を飾りて歓迎の意を表した。首長カザルは、翌十二月六日、其の諸子息及び叛旗を翻せるバクティ

アリ族長の一人を伴ひてレザー・カンの面前に至り、跪拝して無条件に降服した。一方彼のタンを征服し、ペルシア帝国は玆に従前の国境線を回復した。而して彼は此の光栄ある遠征の帰途、イラクに赴いてシア回教徒の至聖の都カルバラに巡礼し、然る後に一九二五年一月、威風堂々としてテーラン に凱旋した。市民は歓天喜地して彼を迎へた。彼の声望は絶頂に達した。此の国民的英雄を見るために、市民は毎日群を成して彼の門前に集まり、その出入を根気よく待ち構へた。而して彼の偉大なる体軀、凛乎たる容貌、厳然たる態度は、市民の英雄崇拝心に十分なる満足を与へた。

クズィスタン遠征及びカザル降服は、国民に深刻なる感激を与へ、且強大なる自信を鼓吹した。かくて此年五月アストラパードのトルコマン族が、マザンダラン及びコラサンに侵入せる時は、意気軒昂たるペルシア軍のために一挙撃退されて了つた。また之と相前後して、バクティアリ、カシガイ両部族の徹底的検閲を強行し、悉く其の武器を押収して叛乱の禍根を絶つた。武装解除に反抗せるカシガイ族の有力なる族長ソラテッダウレーは、捕へられて獄に投ぜられた。此の年の夏、レザー・カンは普く国内を巡視したが、到処、熱狂的なる歓迎を受けた。かくてペルシア統一の偉業が、此年の秋までにほぼ成就された。

四　レザー・パフラヴィ皇帝の即位

さてペルシアが浮沈の瀬戸際を彷徨しつつありし間に、皇帝アフマッドは果して何を為して居たか。此の短軀肥満の快楽主義者は、世界戦の直後、ペルシア国民が名状し難き戦禍に悩みぬいた上に、猖獗を極めたる流行性感冒に襲はれ、死屍途上に横はる惨状を呈して居た一九一八年に、無法にも穀物の買占めを行ひて価格を暴騰せしめ餓死線上に彷徨せる国民の懐より搾り上げた黄金を携へて、其年の夏、欧羅巴に豪奢なる旅行を試み一九二〇年に帰国したが

国家の政務は棄てて顧みなかつた。一九二三年十一月に前述の如く皇帝は欧羅巴再遊の途に上つた。国内ではレザー・カンが軍を北方に進めてアゼルバイジャン鎮定に肝胆を砕きつつありし時、皇帝は欧羅巴美人と腕を組みてドーギル海岸を散歩して居た。レザー・カンがクズィスタンを征討して、ペルシアの最も富裕なる国土を皇帝のために克服せる時、皇帝自身はニースやカンヌで果てしなき歓楽に酔つて居た。国民は皆な彼を憎んだ。それにも拘らず此の狡猾なる青年は、レザー・カンが汗血を濺ぎて成就せる功績を、己れのものとして享受せんと望んだ。彼は未曽有に統一せられたるペルシアに帰りて王者の栄華を味はんと欲したのである。そのために彼はテーランのカジャル党を動かし、密かに彼のために運動せしめた。彼は議員の或る者を買収し、議会をして彼の帰国を請願せしめんとした。此の提案は議会に於て否決されたが、彼はそれにも懲りず一九二五年十月一日、首相レザー・カンに対し、近く帰国の途に就くべしと通告した。此の通告に接したるレザー・カンは、皇帝に向つて帰国を歓迎すべき旨を答へ、同時に全国に向つて此事を布告した。

レザー・カンは、決してペルシア帝国の皇帝となることを断念したが、なかつた。彼は一九二五年二月、即ちクズィスタン遠征より凱旋して幾くもなく、広汎なる軍統帥権を議会より賦与せられ、ペルシア国内に於て最早何人も武力を以て彼に反抗し得ざらしめた。而して此年八月、民心の彼に帰せることを確実に知り得たので、帰来密かにカジャル王朝廃止の準備を進めて居た。東部を巡視して、民心の彼に帰せることを確実に知り得たので、帰来密かにカジャル王朝廃止の準備を進めて居た。宗教界は決して積極的に此事に賛成せぬであらうが、共和制に対する如き猛烈なる反抗を試みぬであらうことは確実でであつた。かかる時に当つて前記の通告が到着したのである。

この通告はアフマッド皇帝の自ら掘れる墓穴であつた。皇帝帰国の報一たび伝へられるや、国民は勃然として憤慨した。カジャル王朝打倒運動は、先づアゼルバイジャンに於て最初の火の手を挙げ、やがて四方に燃え移つた。皇帝

帰国阻止の請願がレザー・カンの周囲に蝟集した。彼は時機の正に熟せるを見、十月二十八日、議ャル王朝廃止案を提出した。僅に五名の議員が勇敢に此の議案に反対したが、若干の討議の後に大多数の賛成を以て可決せられ、十月三十一日次の如き宣言が発表されたしー

「国民の福祉のために、ペルシア国民議会は、カジャル王家の主権を廃止し、憲法及び其他の法律の限界内に於て臨時統治権をレザー・カン・パフラギに委任す。恒久的なる政体の決定は、追つて組織会議によつて成さるべし」。

此の宣言は直ちに全国に通告された。即日レザー・カンは皇太子をグリスタン宮殿より逐ひ、カズギンを経てバグダードに送致した。皇太子は南仏ニースに悠遊せるアフマッド廃帝の許に辿り着き得るだけの旅費を与へられた外、何物をも持出すことを許されなかつた。

やがて組織会議が召集された。議事はレザー・カンの筋書通りに進められた。十二月十三日、組織会議はレザー・カンは皇帝の位に即くべきことを決議し、翌十四日に解散した。十二月十五日、彼は憲法の遵守を宣誓し、翌十六日、全国に新皇帝の即位を布告した。国民はパフラギ家万歳を高唱して、此の公布を歓迎した。王朝の更送が、是くの如く平和裡に行はれたことは恐らく東西の歴史に其例を見ないであらう。

戴冠式は翌一九二六年四月二十五日に挙行と決定された。其間の数箇月を、彼は主としてパフラギ王家の典範を定めるため、及び戴冠式の大典準備のために費した。一九二六年二月二十五日、当時六歳の少年ムハムマッド・レザー・パフラギが皇太子に立てられた。皇太子の母は、他の一夫人と共に皇后と宣せられた。二人の皇后は、全く同等の地位と待遇とを与へられる。

彼は即位式に際して、カジャル王家伝来の帝冠を戴くことを欲しなかつた。それ故に彼は、パフラギ王家の新しき帝冠として、黄金と金剛石とを以て飾られたる豪華なる冠冕を造らせた。而して戴冠式に使用すべき玉座は、名高き

孔雀玉座と定められた。此の玉座は、勇武無雙のナディル皇帝が、印度に遠征してモーガル帝国の首都デーリを陥れた時、分捕品として持ち帰れるモーガル王家の玉座である。かくて、一九二六年四月二十五日、恐らくナディル皇帝以来其比を見ざりし荘厳なる戴冠式が、国民歓呼の裡に挙行された。二十五年以前の一コサック兵は、今や神を地上に代表する「諸王の王（シャー・イン・シャー）」となつた。而も此事は、決して僥倖に恵まれて贏ち得たるに非ず、実に自身の才幹と勤功とによつて正当に獲得せる報酬である。

五　軍事並に財政の改革

レザー皇帝の戴冠式直後ペルシアに遊べる米国記者ギンセント・シーアンは、雑誌「アジア」に数々の文章を発表したが、一九二七年之を「新ペルシア」と題する一巻に纏めて刊行した。彼は此書の第十章に於て、レザー皇帝を袁世凱に比して「彼等の経歴は酷似し、彼等の成功も正に同一である」となし、実に下の如く論じて居る——「レザーと袁世凱との類似は、それだけで止りさうもない。蓋し武力によつて指導せらるる国家は、その根柢に於て不健全である。その行きつくところは、古代ローマ及び近代支那に見る如く、解体と乱離とである。袁世凱の没落と死滅、及び彼が支那に遺せる恐るべき混沌は、数年ならずしてペルシアに於ても繰返されるであらう」。

予言も是程までに外れると一の愛嬌となる。レザー皇帝を袁世凱に比することが、既に甚だしく当を失して居る。而してペルシアの其後の歴史は、完全に彼の予言を裏切つて、ペルシアは啻に混沌乱離に陥らざるのみならず、レザー皇帝の号令の下に、健実に復興の一路を辿りて今日に及んで居る。レザー皇帝は、ブロッケルマンが言へる如く、時代に遅るること百年なりしペルシアを、十年の間に追ひつかせた。

シーアンは、レザー皇帝が武力を以てペルシアを建設し且統治することを非難して居るが、て居ない。サー・ウイリアム・グレゴリー曰く「東洋に於ては、政治運動の主体は、常に軍人である。能く其の目的を遂行すべき統一と勇気とを有する。其他の人民は、殆ど不平さへも洩らし得ずに、毛を剪られ肉にせらるる羊の如くである」と。吾等は此言の真実なるをトルコに於て見、アラビアに於て見た。ペルシアもまた決して例外でない。されればこそレザー皇帝がテーラン政局の舞台に登場してこのかた、ペルシア統一並に統治の基礎条件として、最も其力を籠め来りし一事は、実に軍隊の強化であつた。吾等は先づ「テーラン進軍」以前に於けるペルシアの軍備を一瞥するであらう。

今世紀の初めに於てペルシアの常備軍ともいふべきは、約六千の兵力より成る一コサック旅団にして、ロシア将校の指揮の下に置かれた。この軍隊は規則正しく俸給を支払はれ、北部諸州に於ける騒乱及び反帝室運動鎮圧の任に当つた。テーランにも若干の聯隊があつたが、経費欠乏のため次第に兵力を減じた。一九一一年にはスウェデン将校によつて憲兵隊が新に編成せられ、地方の治安維持に当つた。一九一五年には其の兵力は約八千を数へた。一九一六年に至りペルシア政府は英露両国の強制により、コサック兵団を増員し、且南部ペルシアに於てイギリス将校の下に南波ライフル兵団の編成を許可した。此時より一九二〇年に至るまで、ペルシアの大部分は諸外国軍隊の占領下に置かれた。かくて一九二一年のクーデタ当時に於けるペルシア兵力は、実に下の如く貧弱微力なるものであつた。コサック師団、兵員一万四千。テーラン中央旅団、兵員二千。憲兵隊兵員一万二千。外に諸州総督の編成せる地方軍若干。

レザー・カン陸相は、直ちに陸軍改造に着手し、一九二四年にペルシア陸軍を改編して五個軍団及び一独立旅団となし、軍団司令部をそれぞれテーラン、タブリス、ハマダン（後にケルマンシャー）イスファハン（後にシラーズ）に置き、独立旅団司令部をギランに置いた。然るに一将軍の下に強大なる部隊を置くの不利と危険とを感じ、一九二

七年より再び改編を行ひ、現在に於ては之を三個軍団及び十個独立旅団となし、其の兵力は十万に達した。ペルシア陸軍は、固よりソヴエト軍の侵略を防ぐに足らず、またはトルコ軍の攻撃にも堪へぬであらう。然し乍ら之をレザー皇帝即位以前に比ぶれば、全く面目を一新し、その兵員に於て、並にその装備に於て、ペルシア国家の統一を強化しその治安を維持するに足るものとなつた。彼は此の充実せる武力を背景として、歩々ペルシアの政治的改革を断行した。

サー・アーノルド・T・ウィルソンはレザー皇帝について下の如く言つて居る――「レザー・カンは生れ乍らの軍人である。而も彼は幾くもなく政治家の技倆をも獲得した。……アッバス大帝以後の諸君主と異なり、彼は軍事的改革が、若し広範囲に亙る財政並に行政上の革新を伴ふに非ずば、竟に無益に終るべき事を熟知して居た」と。彼の批評は正しい。レザー皇帝の第一関心事は軍隊であつたが、その改善充実の為には、必然紊乱を極めたるペルシアの財政を再建せねばならなかつた。

一九二一年二月のクーデタありて幾くもなく、ペルシア政府は財政顧問を米国に求め、幾多の紆余曲折を経て、一九二二年十一月、A・C・ミルスパウ博士一行のテーラン着任を見た。当時のペルシアには、全然財政の統一なく、大蔵省は唯だ地租と、国有地よりの収入と、言ふに足らぬ若干の直接税とを徴収し、之を大蔵省自体の経費に充てるに止まり、其他の諸省はそれぞれの歳入を各自に支出して居た。例へば陸軍省はテーラン州の租税及び全国の間接税を自省の収入とし、工部省は鉱山・森林・漁猟・電話及び利権賦与による収入を自省のものとし、遙信省は郵便電信料を自省の収入とし、各省随意に之を使用した。警察による罰金は内務省の、其他の罰金は司法省の、旅券及び査証の手数料は外務省の、授業料は文部省の収入であつた。而していづれの省も、其の収支について何等の報告をも大蔵省に提出しなかつた。関税はベルギー人顧問の手に委ねられ、是亦全く大蔵省から独立して居た。

是くの如き事情の下にペルシアに於て財政の統一を実現することは真に至難の業であつた。各省は皆な従来の特権を固持し、その収支に就いて大蔵省の監督を受けることを欲しなかつたので、財政刷新は必然、諸方面からの猛烈なる政治反抗を予期しなければならなかつた。而してミルスパウ博士が能く此の至難事を遂行しペルシア財政再建の礎を置き得たのは、彼が当時の陸相レザー・カンと提携し、その全幅の援助を得たからである。そのためにミルスパウ博士は、一英国人が指摘せる如く、恰もクローマー卿がエジプトに於て揮へる力をペルシアに於て揮ふことを得た。彼が如何に偉大なる権力を揮へるかは、下の如き二三の事実によつて容易に揣摩し得るであらう。まづペルシア政府の一切の官吏は、首相より下は小使に至るまで、彼の手より其の俸給を受けた。彼の許可なくしては、如何なる高官も国庫の金を使用することが出来なかつた。彼の署名なしには、如何なる小切手も通用しなかつた。

是くの如き権力は、賄賂授受や公金費消が日常茶飯事なりしペルシアに於て、財政改革を断行するために欠くべからざるものであり、之を与へられたがために着々目的を遂げて行つたのである。然し乍ら外国人又は外人団に、是くの如き非常の権力を行使せしむることは、やがてペルシア人の自尊心を挑発し初めた。彼等の不平と反感とは次第に昂まつた。ミルスパウ博士の四年の任期が終らんとする頃より、彼の権力を制限すべしとの声が四方より起り、政府もまた任期更新の条件として、従前の契約を改訂し、財政顧問は大蔵大臣の監督下に置かるべきことを交渉した。而もミルスパウ博士は頑として之に応じなかつたので、交渉は遂に決裂し、彼及び彼以下の米人顧問団は、一九二七年任期満了と共に大なる功績を残してペルシアを去つた。彼の著書「ペルシアに於ける米人の労作」は、啻に彼等の努力の跡を知り得るのみならず、ペルシア政界の表裏、ペルシア国民の心理、ペルシア国情の真相を知り得る点に於て、ペルシア研究者に取りて好個の資料である。

六　交通の改善

軍事的行動のために、政治的統一のために、並に経済的発展のために、最も重要なる条件の一つは、言ふまでもなく交通機関の整備である。カジャル王朝時代に於て、ペルシアの道路は荒れるが儘に委ねられた。世界戦前に於てペルシアには一台の自動車もなく、馬車を通ずる路すら僅少であり、貨物の輸送は殆ど全部、駱駝・馬・騾馬によつた。然るに世界戦の末期に至り、イギリス軍隊が作戦上の必要より、西部ペルシア及び南部ペルシアの道路を新造又は改修し、初めて自動車交通を可能ならしめた。レザー・カンの政権を握るに及び、一層方を道路網の建設に注ぎ、即位後五年にして、夙くも自動車を通ずる一等道路二一九五粁（鋪装せず、また季節によつて多少困難なれど、一年を通じて自動車往復可能なるもの）、二等道路九五五六粁（石及び小石を敷きたるもの）、合計一三九五〇粁に達し、今日に於ては既に二万粁を超えて居る。其等の道路網のうち、レザー皇帝が其の愛する故郷マザンダラン州に、数時間を以て到達し得るため、首府テーランよりカラジを経、デマーワンド山脈を越えて裏海沿岸チャールスに至る自動車道路は、わけても見事なものである。この道路のうち、チャールス峠は積雪のために九月より五月まで通行不能となるので皇帝は峠を貫くトンネルを開鑿せしめた。此等の新道路を馳駆する自動車数も、いまや二万台を超過し、旅客及び貨物の運転を激増せしめた。

皇帝はまた数十年来の懸案なりしペルシア縦断鉄道計画を、万難を排して実現した。彼がミルスパウ博士を援けて遂行せんとするペルシア財政革新の根本原則は、徹底せる節約及び外債排除の二つなりしが故に、鉄道建設に要する巨額の費用は、之を国内に求めねばならぬ。かくて彼は、一九二五年五月、その首相時代に、茶及び砂糖に新税を課して、之を鉄道建設費に充当するに決した。茶はペルシア人が酷愛する飲料にして、殆ど生活必需品とも言ひ得る。

それ故に茶及び砂糖に課税することは、国民の最も喜ばざるところであつたが、その消費量が甚大なるだけ、有利なる財源でもあつた。彼は此の課税を断行することによつて、毎年五千万リアールの収入を予想して居たが、実際は期待せるよりも遥に多く、一九三三、四年度の如きは、実に其の倍額即ち九千八百万リアールに達した。而して此の財源によつて工事は着々進められた。

ペルシア縦貫鉄道は、裏海東南隅の一港バンダル・シャー（皇帝港の意味、旧名エンゼリ）より起り、斜に此国を貫きてペルシア湾西北隅の一港バンダル・シャープル（皇太子港の意味、旧名コル・サム）に至るものにして、延長一四三五粁、地質を異にし、高度を異にし、気候を異にする諸地方を走る。テーラン以北を北部線、以南を南部線と呼ぶ。北部線のうちバンダル・シャーよりシャヒに至る一二七粁は、マザンダラン州の豊沃卑湿なる不健康地帯を西北に走り、シャヒより南折してエルブルズ山脈の嶮嶂を突破し、南面の山腹フィルズ・クフに達する。両駅の間一三〇粁に過ぎざるに、トンネルの数六十八を算へ、鉄橋の数もまた夥しい。シャヒの高度は僅に海抜一六四呎であるのに、ドゴル駅南のトンネルは海抜六九二九呎の高さに在るが故に、実に百粁の間に六七六五呎の差がある。従つて此間の鉄道は世界に於ける難工事の一に数へられ、沿線風光の絶佳もまた世界屈指と称へられる。線路はフィルズ・クフよりハブレルード谿谷の描ける如く美しき景色の間を降りてペルシア中央高原に出で、砂漠を西に走ること二〇四粁にしてテーランに達する。北部線の開通せるは一九三七年六月五日にして、全長四六一粁、首府より裏海沿岸までの所要時間は十五時間である。

亜細亜建設者

バンダル・シャープルより起る南部線は、ペルシア湾頭よりほぼ一直線にクズィスタンの曠野を北上すること約二四〇粁にして、ザグロス山麓サレハバードに達する。この曠野は曽て肥沃繁栄の地であつたが、河流の変向と運河の崩潰のために、砂漠化して了つた。サレハバードよりはアビ・ディス河及びアビ・ケザル河の狭き谿谷を辿りて

名だたるザグロス山脈の嶮難を超えるのであるが、其の最も嶮難なる区域六〇粁の間には、百五十のトンネルを穿ち多数の鉄橋を架けねばならなかつた。曽て此の地方を旅行せるラミントン卿は「あの戦慄すべき嶮路を通る鉄道が敷設されようとは、夢にだも想はなかつた」と述べて居る。線路は此の谿谷を出でて中央高原を東北に進み、サルタナバード及びクムを経てテーランに至る。高原は概ね不毛の砂漠であるが、処々に沃地ありて農村が点在する。かくて十年の日月と、約三千万磅の巨費を以て、裏海とペルシア湾とが鉄道によつて結ばれ、一九三八年八月二十六日、芽出度く全線の開通を見た。

此の鉄道は決して経済的に有利なものでない。当分のところ、其の収入は辛うじて運転費と保線費とに充てるに過ぎぬであらう。而も此の偉大なる事業の遂行は、覚醒せるペルシア国民精神の強烈なる表現であり、レザー皇帝の理想主義、高邁なる識見、及び不屈の勇気によつて実現を見たるものであり、その国民に与へる感激は、深刻にして偉大である。そは現に軍事的並に政治的に深甚の意義を有するのみならず、国内産業の発展と資源の開発とに伴ひて、必然、経済的価値を加へる。

かくてレザー皇帝即位後十五年にして、ペルシアの交通機関は飛躍的に発達し、往来は空前に安全になつた。一九三七年に此国を旅行せるドイツ人ワルター・ヒンツは「今日ペルシアを旅行する欧羅巴人は、ドイツの状態に比ぶべき交通の絶対安全に驚く」と言つて居る。而して従前は追剝の出没のために殆ど一個の冒険ともいふべかりしペルシア旅行を、是くの如く安全ならしめるためには、レザー皇帝が創設せる「護路兵団」の力による。全国の街道に、若干の距離を置いて、概ね小高き処に建てられ、庭園に囲まれ、屋上に緑白紅の金獅子旗を翻せる番所があり、一人の番所長と四名の護路兵が駐屯して居る。鮮藍色の制服制帽を着け、見る目に快感を与へる此等の護路兵は、正規軍の一部として陸軍大臣の配下に属し、不断に道路を警戒し、旅行者に保護と便宜とを与へて居る。

七　産業の奨励

皇帝が産業の発達に力を注げることは言ふまでもない。第一に農産物の増額を図るために頓に未墾地が開拓された。棉花栽培が盛んに奨励された。クズィスタンでは甘蔗栽培が始められた。裏海沿岸地方では従来多額の米を産して居たが、今や米の外に煙草・茶・桑の栽培が奨励された。一九三四年までに、二百万本の茶の苗木が農民に配布せられ、ラーヒジャンに茶研究所を設けて其の栽培を指導した。同時に政府は若干の農学校及び模範農場を開設して国民の農業知識の向上を図つた。

開墾地の拡大は言ふまでもなく農産物の増加であり、他は遊牧民の定着農民化である。蓋しペルシアの遊牧民は、不羈剽悍にして政府の命令に服せず、随処に出没して旅人を劫掠し、常に国内の治安を紊して来た。新政府が土地開墾を強行するや、彼等は其の牧野を侵さることを怒り、激しく反抗を試みたが、政府は近代武器の力を以て着々之を掃蕩した。その帰順せるものは農耕に従ひ始めた。かくて曽ては群盗の巣窟なりし海東南のトルコメン高原に於てさへ、多くの定着農民を見るに至つた。加之、真面目なる牧畜業者は剽悍なる遊牧民の襲撃掠奪を免れ、僅少の牧者を以て多数の羊又は牛を牧し得るに至つた。

新開地に対する農業移民も極力奨励された。例へば一九三七年には隋部ペルシアのブシール附近に於ける帝室所有地が、無償にて農業移民に分与された。而して移民には種子・農具及び必要の場合には資金をも貸与する。此の資金は皇帝が創設せしめたる農業銀行よりするものである。

皇帝はまたペルシアを外国の経済的羈絆より出来るだけ脱却せしむるため、農業の上層構築として、国内工業の発達に全力を注がしめた。当然の順序として、先づ日用品の製造を奨励した。そのための原料は国内に豊富なるに拘ら

ず、従来は大部分を外国よりの輸入に仰いで居たのである。工業発達のために少からぬ貢献ありしは、国営学校より帰れる技師の努力によつて、工業は短期間に長足の発展を見、今日では大規模の工場数が五十を超えるに至つた。現在の九製糖工業が、既に国内需要の三分の一を充たして居る。之に次では紡績業が年々盛んになりつつあり、燐寸・石鹸・香水・皮革・紙・硝子工場が続々創立された。此の国内工業の発展は、直ちに外国貿易に反映して、その激増を見た。

八　文化の啓発

国民の心身両面に於ける向上のために払はれたる努力も、また極めて真剣であつた。一九三七年にはテーランに五個の新病院が建てられ、且全国に二十以上の病院・助産院・無料診療所・診察所が新設された。同年テーランの近郊シャーハバードに、ペルシア最初の肺結核療養所も建てられ、タブリスには精神病院が建てられた。種痘もまた強制的に施行されることとなつた。かくて僅々十数年間にペルシアの死亡率は、実に半減するに至つた。

また宗教階級の執拗なる反対に拘らず衣服の改良も実行せられ、いまやペルシア人の服装は殆ど欧羅巴風となり、ターバンと長衣を着用する者は僅に回教教師だけとなつた。加之、婦人の被衣も遂に影を潜めるに至つた。而してペルシア皇帝は、ケマル・アタトュルクと異なり、法律によつて一挙に之を断行せず、徐ろに機運の熟するを待ち、巧妙なる模範によつて之を改めた。

一九三六年一月八日、レザー皇帝は女子師範学校の開校式に臨御した。其時、皇帝は皇后及び二皇女を同伴した。君主が婦人を伴ひて公けの儀式に臨むことさへペルシア史上に空前の出来事であるのに、皇后及び二皇女は、被衣な

き洋装にて現はれたのである。而して学校では、文部大臣が同じく洋装せる夫人と共に皇帝一行を迎へた、皇帝は、女子が人口の数にも入れられざりし時代は既に過ぎ、いまやイランの婦人は、啻に家庭に於て従前の女子よりも善き母とならねばならぬのみならず、社会に於ても一個の人間として本務に尽さねばならぬことを訓示した。

諸大臣や富豪たちが、此の破天荒の実例に倣つた。彼等は茶会又は晩餐会を催ほし、主人と主婦は自由に招客と歓談した。主婦が被衣を脱せることは言ふまでもない。かくて数月ならずして、テーランの平民婦人も皆な被衣を棄てるに至つた。地方もまた首府に倣ひ初めた。シア回教の聖都クムに於てさへ、聖ファーティマ寺院の院長が、被衣を取れる夫人を伴へる従僧全部と共に、敬虔なる信者を引見した。かかる周到なる準備工作の後、時に被衣を着けて往来する婦人あれば、警官が訓戒を与へて之を取去らしめることとなつた。長き歴史を有する被衣は、是くして全く葬り去られた。

被衣は人格を無視せられたるペルシア婦人のシンボルであつた。それ故に之を除去することは、取りも直さず婦人の人格を認めることである。一九三五年に先づ結婚法が発布せられ、女子の可婚年齢を十五歳以上と定め、次で一九三七年之を改正して女子の可婚年齢を満十六歳以上、男子のそれを満十八歳以上と定めた。此の結婚法によつて、結婚せんとする男女は互に他の健康証明を要求し得ることになつた。女子は財産分離を請求し、適当なる扶養及び待遇を請求する権利を与へられた。不当なる扶養又は虐待を受くる場合には、女子は離婚を要求し得ることとなつた。そは疑ひもなくペルシア女性史上に於ける劃期的出来事である。

従前は全く社会から隔離され、ハレムの中に幽閉されて居たペルシア婦人が、今や国家の一員として公の舞台に働き得ることとなつた。一九三五年にはイラン婦人聯盟が結成され、皇女が其の名誉総裁となり、女子の心身鍛錬を目的として活潑なる活動を開始した。そは講習会を開きて知識の普及を図り、運動会を催して体育を奨励し、裁縫・手

工及び育児法の講習を行ひ、其他、孤児院を初め各種の社会施設を創立した。而して官庁又は銀行に於て女子を雇傭することは、今や何人も怪しまざる尋常事となつた。

教育の普及もまた目覚ましくある。例へば一九二二年には、ペルシア全国を通じて僅に六百十二の学校を算へるに過ぎなかつたが、一九三五年には既に五千三百三十九校に達し、今や一万に垂んとしてゐる。皇帝はペルシア歴史に於て初めて義務教育制度を布き、七歳より十三歳までの総ての児童を就学せしむることとした。一九三五年以来は、男児女児の混合教育をも行はしめた。同年に卒業せる八八七四名の生徒中、二二五三名は実に女児であつた。

一九三六年二月五日、ペルシア最初の綜合大学がテーランに創立された。大学は医学部・法学部・神学部・理学部・哲学部・工学部の六科より成り、一九二〇年に創立せられたる高等師範学校をも其の附属とした。高等師範学校は教員養成と共に女部省官吏の養成を兼ねて居る。大学以外に各種の専門学校も設立せられた。而して政府は毎年百名の留学生を欧羅巴に派遣して居る。またペルシア固有の技術を修得する工芸学校が建てられ、伝統の芸術を伝承せしめんとして居る。其外に皇帝は一九三五年、ペルシア語の調査、その純化を目的として翰林院を建てた。役員は二十七名より成り、毎週一同会合して国語改良を議して居る。其他の多くの施設と同じく、是また恐らくトルコに倣へるものであらう。

九　対外関係の調整

皇帝即位してより十五年、其間にペルシアは真に驚嘆すべき政治的統一、経済的発展、及び文化的向上を遂げた。而も此間に於て、ペルシアは三度、対外関係の緊張を見た。而して皇帝は三度とも見事に之を解決した。

問題の第一は石油に関するイギリスとの衝突である。ペルシアの石油は、世界周知の如く、英波石油会社の掌裡に

堀られ、且この会社の最大の株主は英国海軍省である。一九一一、二年の産油額は僅に四百万四千瓲弱であつたが、一九二六、七年には実に四百八十万瓲に達し、其後、新油田の発見に伴ひて産額は頓に激増し、今日に於ては千百万瓲を超過するに至つた。而して此の会社より納入する歩油金は、ペルシアの最も大なる財源の一つであつた。然るに一九三二年に至り九三〇年度のペルシア政府歳出総額は約八百万磅であるが、歩油金は百万磅に達して居た。然油価低落が主なる原因となりて、歩油金は僅に三十万磅に激減した。

そはペルシア財政に対する、深刻なる打撃であつたが、之を導火線として国民積年の排英感情が爆発し、イギリスの経済的侵略を呪詛する声が頓に昂まつた。皇帝は此の国民的感情の昂潮に乗じ、一九三二年十一月二十六日、突如英波石油会社に対し、一九〇一年ダースィに許可せる石油利権一切を取消すべき旨を通告した。その理由とするところはダースィ契約当時、ペルシアには合法的政府なかりしを以て、該契約は無効なりといふに在つた。ダースィ契約による利権は六十年であるので、満期までに尚ほ三十年を余して居る。会社は此の晴天の霹靂に吃驚し且憤慨したがペルシア政府と折衝の結果、問題の解決を国際聯盟に委ねた。而して其の解決案に基き、一九三三年四月三十日、ペルシア政府と英波石油会社との間に新契約の締結を見るに至つた。そは

一、従来の契約面積五十万方哩を、一九三八年まで二十五万方哩とし、期限を六十箇年とすること

二、送油管敷設の独占権を廃棄すること

三、販売又は輸出石油に対し、一瓲につき四志をペルシア政府に支払ふこと

四、六十七万一千磅を株主に配当せる残余の二割をペルシア政府に支払ふこと

五、一般積立金を配当に使用する場合は、ペルシア政府に二割を納付すること

六、最初の十五箇年は毎年二十二万五千磅、其後は三十万磅を納税すること

七、出来得る限りペルシア労働者を雇傭すべきこと等々

を定めたるものにして、問題はペルシアのために極めて有利に解決された。而して相手がイギリスなりしだけ、皇帝の断乎たる処置は、深甚なる感激をペルシア国民に与へた。

第二は東方国境に関して紛糾を生じたが、一九三五年春に至り、バルチスタン並にアフガニスタンとの間に、境界協定が成立した。而して後者はトルコの調停によつて成れるものである。

第三は一層紛糾せる境界問題が、ティグリス・オイフラート両河の合流してペルシア湾に注ぐシャッタルアラブ河に関して、イラク国との間に起つた。之は多年に亙る懸案であり、両国の関係に屢々緊張したが、一九三七年七月八日、所謂サダーバード協定の成立により、一挙その解決を見た。サダーバードは、永遠の雪を戴くデマーワンド山脈の尽くるところ、嶮峻なるトウチャル山麓、テーラン北方約四里に位し、皇帝の避暑宮殿の所在地である。此の協定はペルシア、トルコ、イラク、アフガニスタン四国を堅固に結び、互に不侵略を約束せるものであり、此の協定のためにサダーバードは一朝にして世界に其名を知らるるに至つた。是より先き一九三三年十月、ペルシアは既にトルコ及びイラクとも条約を結んだのであるが、いまやサダーバード協定によつて、新興四回教国の堅き握手を見たのである。わけてもトルコとペルシアとは、一は回教のスンナ派を奉じ、他はシア派を奉じて、数百年に亙る仇敵の有様であつたが、一九三三年波土条約締結の翌年、レザー皇帝は親らアンゴラに赴き、ケマル・アタトュルクを訪問して腹心を布いたので、積年の宿怨が茲に一掃された。

一〇　むすび

明治維新の場合と同じく、ペルシア新帝国もまた、一面に於て急激なる文

明開化政策を敢行すると共に、他面に於て、復古即ち国民精神の昂揚に全力を注いだ。

テーランの街頭からペルシア語以外の外国語が取り去られた。一九三五年には国号をイランと改めた。もと此国をペルシアと呼べるは、其の南部の大州の名ファルス即ちパルスより来れるものである。古代諸王朝は此地より起りしが故に、欧羅巴ではギリシア時代より此国をパルス又はペルシアと呼んで来た。

いまや皇帝は此国本来の正しき名前に復したのである。但し此国の公用語は、イラン語に非ずしてファルス語なるが故に、国語は依然としてペルシア語と呼ばれるであらう。またペルシア湾は、ファルス州の岸を洗ふによつて爾く名づけられたものであり、イラン人自身が「ファルス湾」と呼び来れるものなるを以て、歴史的並に地理学的に見て之をペルシア湾と呼び続けることが正しいであらう。

今やイラン帝国の隅々まで、レザー皇帝の恩威は隈なく行はれて居る。国民は頽廃衰微のイランを、其の強烈なる意志と無限の精力とを以て、復興向上の一路を登らしめつつある君主に対して、満腔の信頼と愛情とを抱くと共に、深刻なる畏怖の念を抱く。此点に就いてワルター・ヒンツはいみじくもレザー皇帝をアッバス大帝及びペトロ大帝に比べて居る。まことに彼の言葉の如く、此等の三偉人は、其の性格並に功業に於て、著しき類似を有する。

彼等は皆な、其の国家が衰亡の岐路に立てる時に出現した。而して、其の全人格の威力と大なる犠牲とによつて、まづ其国を外敵の圧迫から解放した。アッバス大帝はトルコ及びウスベク人の、ペトロ大帝はスウェデンの、レザー皇帝は英露両国の脅威より、それぞれ其国を救つた。

彼等はまた、一面外敵の脅威と戦ひ乍ら、他面国内に於て武断政治による徹底的革新を行つた。而して三者とも外国の経済的羈絆を脱するため、主力を工業の奨励に注ぎ、且些かも躊躇することなく外国の長を採つた。其の経済計画の遂行に際し、全体の利害のために容赦なく個人の利害を犠牲にせることも、また彼等に共通して居る。彼等は皆

な金剛の意志と、決断力と、時代の動向に対する洞察とを兼備して居る。彼等の精力は超人的であり、事に当つて疲るることを知らない。

例へばレザー皇帝は、毎朝五時に起床すると言はれる。彼は第一に宮相、次に陸相、次に参謀総長、次に必要に応じて他の大臣と亦を議する。皇帝に召されたる者は、昼夜を問はず十五分以内に伺候せねばならぬ。かくして一刻を惜みて終日政務に励精する。彼は断じて怠慢を赦さない。一日彼は突如一兵営を訪ひ、その衛生状態の不良なるを見た。多くの士官及び軍医が懲罰を受けた。微恙のために閲兵式に列せざりし故を以て、陸軍大臣が罷免された。

皇帝の私生活に就いては多く知られて居ない。但し皇太子に関して極めて厳格なる、同時に極めて慈愛深き父なることだけは確実である。

或年の夏、皇太子はチフスに罹り、一時危篤に陥つた。皇帝はサダーバードの避暑宮殿に滞在して居たが、皇太子の病褥に在りし数週間は、殆ど政務を見ずに憂悶した。時に皇太子は、士官学校に通ふ便宜のため、傅育官と共にグリスタン宮殿に住んでゐたのであるが、皇帝は毎朝テーランに自動車を駆り時として朝六時から終日、皇太子の病床について居た。而も彼は決して皇太子を甘やかすことがなかつた。彼は皇太子の教育に全力を注ぎ、その訓練は甚だ厳格である。学課は実に朝より夕に達し、半は軍事上並に体育上の鍛錬に、半は君主として必要なる諸多の学問の修得に充てられる。即ち歴史・数学・科学・回教教義・ペルシア語・アラビア語・フランス語・イギリス語等である。

此事に関してジョン・ガンサーは、其著「亜細亜の内幕」の中で興味ある言をなして居る。彼曰く「彼の長子ムハムマッド・レザーは、君主の本務について注意深く訓練されて居る。彼は太子を酷愛し、その教育に至深の注意を払ふ。それは東洋の他の君主と著しき対立を示す。例へばイラクのファイサル王や、エジプトのファウド王は、其の太子をして王位を継がしめんと欲するに拘らず、二三の点に於て太子の教育を無慚にも閑却した。東洋の君主は、其の国

家と家族とを念頭に置き乍ら、両者が畢竟一つなることを忘れて居る。唯だレザーのみは例外である。彼は其の太子が、聽て当面すべき偉大なる仕事に対し、太子を訓練すべく、一切の方法を講じて居る」と。

イラン復興の礎は既に置かれた。吾等は是くして育て上げられたる皇太子が、他日其父を辱しめざる皇帝として、イランの興隆を実現せんことを禱るものである。

ガンディ出現

一　はしがき

伝ふらく、古へ印度に栄えたるクル王国に於て、先代の百王子と先々代の五王子とが、従兄弟の間柄であり乍ら、互に鎬を削りて権勢を争ひ、確執多年の後、遂に戦端を開くに至つた。時に毘紐天の権化クリシュナは、正義の五王子に存するを見、日頃勇武の誉高かりしアルジュナに自ら第三王子アルジュナの軍師となりて、敵の不義を討たしめんとした。然るに到するや、選ばれんとする突嗟の際に、一念端なく同族が、両軍の旗鼓既に相見え、矢石将に飛ばて正義の戦士たる身なるに拘らず、善戦健闘のこころ頓に挫け、全く戦意を失ひ去つた。

此時彼がクリシュナに披瀝したる衷情は、非戦主義・平和主義・無抵抗主義・人類愛主義などと名づけられて、今日吾等の周囲に時めく思想である。アルジュナは言ふ――「予は勝利を願はず、王位も歓楽も望まない。王位何ものぞ、歓楽何ものぞ、将又生命何ものぞ。予は之を得るために同族を殺さうと思はぬ。仮令三界の主権を得ん為なりとも、予は彼等を殺すことを欲しない。吾敵は、貪欲に心奪はれて、一族相闘ふの罪悪を意識せずとも、予は其の深重なる罪業たることを知つた。同族を屠るは、正法を滅ぼすことである。正法滅びなば、非法、世を支配するに至るであらう。非法の支配は地獄である。予は武器を抛つて戦意を捨てる。仮令吾敵が抗を試みざる吾等を殺したとて、邪悪を犯すよりは可い！」言ひ放ちて彼は手にせる弓箭を投げ棄て、身を戦車

の台座に投じて嗟嘆した。

かかる感情に従ふことは、女子に寛恕すべくして、戦士に許容せらるべくもない。クリシュナは、立所に之を叱咤した――「アルジュナ！　此の危急の時に際し、かかる悲観が何処から汝に来たのか。そは己れを汚すもの、天国の門を鎖ざすもの、体面を失ふものである。沮喪してはならぬ！　そは汝に適はしくない。卑しむ可き怯心を去つて起て！」と。されどアルジュナは、尚ほ「憂ふ可からざるを憂ひて、聰明に似たる言をなせる」が故に、クリシュナは彼の問ふに任せ、螺鼓鳴り響く戦陣の間に人生の意義、天意の帰趣、自覚の原理を提示した。而して此の問答によつてアルジュナは見事に心裡の葛藤を一刀両断し去り、青天に白日を仰ぐが如く歓呼して曰く――「吾は安住せり、吾が疑惑は去れり、吾は主の言に従つて戦はん」と。かくて彼は、凛然たる意気を鮮かにし、三軍に号令して悪戦苦闘すること十有八日、屢々一生を九死に脱し、芽出度く勝利の凱歌を挙げた。

印度の古典薄伽梵歌は、此のクリシュナとアルジュナの対話篇である。そは戦陣危急の間、端的に生死巌頭の問答なるが故に、動もすれば無用の長広舌に失する印度諸典とは似もやらず、雄渾透徹なる思想を、最も簡潔に要約せる点に於て、既に万緑叢中の紅一点である。宜なるかな、印度復興の諸先覚をして、其魂に荘厳なる国民的理想を樹立し、加ふるに万難屈せざる気魄を養はしめたる上に於て、与かつて最も力ありしもの、此の薄伽梵歌の右に出づるは無い。げに薄伽梵歌は、何時の世、如何なる国と言はず、正義に拠つて不義を討たんとする真実なる戦士にとりて、珍重至極の聖典である。

さて此の希有の古典は、其の一節に於て下の如く説く――「仮令劣機ならんとも、己れの本然（タルマ）を尽すは、巧に他の亦然に倣ふに優る。己れの本然に倣ふは長れねばならぬ」と。（註一）こはカントによつて初めて明確なる論理を与へられたと言はれる「道徳は模倣を許さず」との道徳的原則を、逸早く確立せるものである。個人

にもあれ、国民にもあれ、苟くも道義的生活を営むものに在りて、自己に忠にして斃れることは、却つて絶後に蘇る機縁となり得るが、他に追従して一時の功を挙ぐる如きは、所謂枯葉の秋風に捲かれて天上に舞ふと等しく、やがて浮ぶ瀬もなき死滅に終らざるを得ない。

このことは、印度復興を批判する上に、最も肝心なる公準の一である。否な独り印度と言はず、総じて国民運動の成敗を卜すべき最後の準拠は、実に此の珍重すべき原則でなければならぬ。孰れの国の国民運動にせよ、若し夫れが模倣的であり、輸入的であり、直訳的であるならば、仮令一時の成功を得るとしても、其の成功は竟に成功せる自殺たるに終るであらう。之に反して若し其の運動が、深く国民本来の精神に根ざし、運動の各部門に於て、躍如たる国民性の発露を認め得るに於ては、晩かれ早かれ、其の壮心烈志を実現せずば止まぬ。

之を当面の印度に就て見るに、現代印度に復活せる印度精神の荘厳に随喜し、ギヤーカーナンダの門に入りて修行者となり、其名をニヴェーディタと改めて印度の為に献身せる殊勝なる一英国女性は、今を距る三十年以前、其の深刻なる印度的自覚を、女子に適はしき感情の高潮を以て、既に下の如く述べて居る(註二)——

I believe that the present of India is deep-rooted in her past, and before her shines a glorious future.

empires, in the learning of scholars, and the meditation of saints, is born once more amongst us, and

its name to-day is Nationality.

I believe that the strength which spoke in the Vedas and Upanishads, in the making of religions and

O Nationality, come thou so me as joy or as sorrow, as honour or as shame! Make me thine own!

私は信ずる、吠陀とウパニシャドに現れ、諸々の宗教と帝国との創造に現はれ、学者の研究、聖者の諦観に現れた力が、再び吾等の間に復活した。而して今日は其方を国民精神と呼ぶ。

私は信ずる、印度の現在は、深く過去に根ざし、また印度の行手には、光栄ある未来が輝いて居る。

ああ印度国民精神よ、歓喜にてもあれ、栄誉にてもあれ、悲哀にてもあれ、恥辱にてもあれ、私に来格せよ！

を爾のものとせよ！

最後の一節は、寧ろ不要の詠嘆であるが、それは婦女子の常として暫く勘辨せねばならぬ。其の根本に於て、まさしくニヱーディタは正しきものを把握して居る。印度に於ける国民運動が、果して是くの如き正しき自覚に拠つて立てるものとすれば、実に吾等をして随喜感嘆の外なからしむるものである。蓋し印度復興とは、往々にして沙汰せらるる如く、印度の近代化または西欧化を意味するものでは断じてない。張公酒を飲むも李公は酔はぬ。西欧に可なるもの、直ちに印度に可なりとするさへ、既に以ての外の周章狼狽である。如何に況んや西欧を泥酔せしめ、目も当てられぬ醜態を演じさせたる悪酒を将来して、之を印度に飲ませようとするなどは、思ひも寄らぬ荒涼の沙汰と言はねばならぬ。印度復興とは、印度に内在する昔ながらの生命が、芽出度き春に回り会ひ、新しき力を帯びて捲土重来することである。そは印度其者の「本然（ダルマ）」の復活たるべくして、断じて他の「本然（ダルマ）」の追従たることを許されない。日蓮既に説破すらく「法は必ず国を鑒みて弘む可し。彼の国に好かりし法なれば、此の国にも好かるべしとは思ふ可からず」と。宗教猶ほ且然り、社会組織・国家制度の如き、尚更のことなるは言ふ迄もない。復興印度の原則は、取りも直さず改造日本の原則なるが故に、吾等は特に此の一事を明確にして置かねばならぬ。

さて予に取りて印度復興は確実疑ふ可くもない。若し予の観る所に大過なくば、ニヱーディタの精神は、実に印度に於ける国民運動の精神なるが故に、其の拠つて立つ所は正しくして強い。而して復興印度の行手を阻む金城鉄壁は朝たに一つ夕べに一つ陥落しつつある。加ふるに軈て出現すべき新しき世界其者が、切に復興印度を要望しつある。世界は、崇高雄渾なる文化の母たりし印度精神が、再び現代に蘇り来り、今将に没落の路を急ぐ西欧文化に代るべき

新世界文化の創造に、其の全力を傾到せんことを翹望しつつある。

サー・ジョン・スィーリ、其の名高き「英国膨脹論」に於て、既に夙く憂慮して曰く「若し印度に於て、若し其の国土をも共通なる国民的感情が起り初めるならば、仮令積極的に外人を駆逐せんとの希望を抱かぬまでも、保有する外人に助力することを恥辱と感ずるに至らば、殆ど其日から吾が印度帝国は無きものとなるであらう。吾等がイタリーに於て見たる如き国民運動が、万一印度にも起るならば、英国はオーストリアほどの抵抗も能くせずして直ちに其の力を失ふであらう」[註三]と。げに此の先見は今や事実として現はれて来た。印度の独立が一年の後か十年の後か、或は三十年を要するかは、天のみ能く之を知る。吾等は唯だ其日の必ず来る可きことを信ずれば足る。

予の是く言ふは、決して好む所に俟しての沙汰に非ず、従つて主観的に判下せる独合点の類ひでない。予は先づ印度文明の種々相を探りて、印度精神の意義と価値とを尋ね、次いで現代印度覚醒の根拠を明かにすべく、印度精神の意義と価値とを尋ね、次いで現代印度覚醒の内面的径路を辿り、進んで其の国民運動が、今や本質に於て紛れもなく印度的となれる事実を示し、是くして印度精神の復活、従つて印度復興の確実性を、徐ろに論証し行くであらう。

（註一）　薄伽梵歌三の十二。高楠博士は、予が自己の「本然」と訳せる **Dhdrma** を「本務」と訳し、アンニ・ベサント夫人また之を **Duty** と英訳して居る。さり乍ら予はアラビンダ・ゴーシュが之を **Law of one's own being** と英訳せるの最も適確なるを思ふ。かく訳してこそ、此の一節は初めて突々たる神采を帯ぶ。

（註二）　ニヴェーディタの本名は **Margaret Noble.** 掲ぐる所は一九〇九年週刊雑誌 **Karmayogin** に発表せる短文 **A Daily Aspiration for the Nationalist** 中の三節。いま収めて **Aurobindo Ghose, The Ideal of the Karmayogin** の末尾に載せらる。

（註三）　**Course II, Lecture III, How we govern India (Macmillan's Colonial Library** 版二一七頁）

はしがきを終へて本論に入る。最初に着手せんとするは印度精神の闡明である。之に就て先づ想起せらるるは、ヘーゲルの「歴史哲学」に於ける印度論である。「歴史哲学」は、佶屈なるヘーゲルの諸著作中、妙に筆致雅潤である。彼は極めて繊細に、而も濃かなが、わけても印度を叙する一段の如き、神韻縹緲として正に詩人の墨を摩して居る。彼は印度其者に見ると言ふ。まことにヘーゲルには珍らしき道草なる詩趣を溌へて、女性にのみ認められる「此世ならぬ美しさ」を叙し来り叙し去れる後、此種の美しさは、其の最も掬すべき相に於て、之を印度其者に見ると言ふ。まことにヘーゲルには珍らしき道草なれば、誰しも釣込まれて暫く彼と共に徘徊せずに居られない。而も読者が、心長閑に千紫万紅を眺めんとすれば、何事ぞ天地を寒煙荒草裡に葬り去る下の言葉に会ふ――「此種の美は、仔細に之を眺め、且人格の尊厳並に自由と云ふ概念に拠つて点検すれば、一見して痛く心惹かれしだけ、それだけ一切の点に於て竟に無価値なるを見出だすであらう」(註一)。かくてヘーゲルは、印度の世界観を、全然抽象的なる汎神論、思想の汎神論に非ず空想のそれであるとした。

さて印度を是く観るものは、独りヘーゲルのみでない。印度研究はヘーゲル以後、真に巨人の歩武を以て進歩せるに拘らず、印度の出世間主義、其の形而上的傾向に驚魂せる西欧学者は、恰も之を以て印度精神の全体なるかの如く判断し、殆ど千篇一律に下の如く結論する――「現世を無明の長夜と遠離し、偏へに抽象的・形而上的・宗教的無限にのみ心奪はれ、非現実的にして非具体的なることが、実に印度文明の本質である」と。

印度文明の精華と云ふべき仏教を、存分に翫味し得る宿縁芽出度き吾等より観れば、斯かる断案が一面に偏局せる依怙の沙汰なることは、之を看取するに難くない。固より印度文化の一切の方面に於て、豊かに宗教的精神が漲つて居ることは事実であり、印度思想の一部に、濃厚なる厭世的傾向あることも、また明白なる事実である。而も之を

二　印度精神の種々相

以て印度の全体なるかに考へることは、巨象の長大なる鼻に心奪はれ、象とは鼻のことなりと速了するに等しい。拒むべからざる事実は、印度文明が啻に精神的方面に於てのみならず、知識的方面に於ても、将又実践的方面に於ても決して他国に劣らぬ偉大なる発達を遂げたと云ふことである。

ただ玆に以ての外の顛倒は、印度人自身が一時西欧学者の顰(ひそみ)に倣ひ、印度は宗教・哲学・乃至文学・芸術に於て世界に誇り得るものを有するも、其他は総て之を西欧に師事し模倣せねばならぬとしたことである。後節に述べんとする如く、第十九世紀の印度は、実に欧羅巴崇拝の時代であり、従つて欧羅巴模倣の時代であつたが、幸に今や一陽来復し、漸く独自の明晰なる眼光を以て印度の過去を照顧し、西欧学者の見解が、甚しく自他を誤れることを知り得るに至つた。而して印度人を麾いて、如是の正見・正思惟に導きたる先覚の随一は、アラビンダ・ゴーシュ其人を推さねばならぬ。

固より印度文明の本質が精神的であると云ふことは、明白疑ひを容れざるところである。印度の社会組織に於て、宗教階級が最高地位に置かれたことが、既に何よりの実証である。印度人は既に吠陀時代に於て逸早く万象の背後に潜む一如を把握し、次で「Aham Brahma asmi 我は梵なり」と云ふ金剛不壊の真理を証悟した。正統印度の精神的要求は、実に此の真理を現実の生活の上に実現すると云ふこと以外に無い。百花繚乱の印度哲学・印度宗教は、精緻なる論理と周到なる修行とによつて、如法に人間の理智と意志とを鍛錬し、一切の不完全を脱却して自我を完成し、かくして梵に帰一するを究竟の目的とせる点に於て、悉く其の嚮ふ所を一にする。換言すれば印度の教法は、数ふるに遑もなかるべき諸多の法門に分れて居るとは言へ、総じて解脱を理想とせざるはない。

此等の法門は「ダルシャナ」と呼ばれる。ダルシャナとは「ドリシュ」即ち「見る」と云ふ語根より出でたるもの、人生観・世界観などと云ふ場合の「観」に当る。而して其の「観」には、肉眼を以て見ると、知性の眼を以て見

ると精神の眼を以て見るとの三がある。(註二) 哲学・宗教のダルシャナは、第三の精神的直観にしてのみ可能とされた。此の精神的文化の一面に於て、印度が特異の地位線することによつて開かれたる霊眼を以てしてのみ可能とされた。此の精神的文化の一面に於て、印度が特異の地位を世界史上に占むることは、学者の挙説し尽して既に余蘊なきところである。

さり乍ら、之が印度精神の全体ではなく、また全体であり得る道理がない。富士の高根が裾野なくして雲表に聳ゆるものに非ざる如く、精神の百花また地上を離れて空しく爛漫たるものでない。印度が精神的直観を重んじたことは印度人を没理性的なるかに誤解する原因の一つとなつて居る。而も世界に於て最も早く論理学と認識論との発達した国は印度であり、既に二千年の往昔に於て、実に三十二の学、六十四の術を学習して居た。まことに印度の理智は深刻にして且豊麗、総合的にして且繊細である。単に阿育王時代より回教時代に至る間に現はれたる無量の知的所産を一管するだけでも、最早や驚魂駭魄に値する。此等の資料は、漸く近年に至つて学者の研究する所となつたが、其の明かにされたものは、現に存在する文献の真に一部であり、且現存の文献は曽て存在せるものの其のまた一部なることを忘れてならぬ。記憶によるか、又は損じ易き貝葉に書写された其等の著作は、年月の経過と共に失せ去りしものも夥しい。それであるのに、現存の文献だけを以てしてさへ、尚ほ且世界の孰れの国にも比儔を見ざる豊富なものである。而して其の研究の範囲は、認識論・論理学・文法・修辞学・言語学・天文学・数学・医学・薬学・建築学・造船学より、惹いて一切の社会的科学・実践的科学に及んで居る。即ち政治・経済は言ふまでもなく、絵画より舞踏に至る一切の芸術、生活に必要なる一切の事項、例へば馬の飼育法、象の調御法の如き、甚しきは性欲並に性交の方法に至るまで、悉く一個の学術として其の術語を有し、其の専門著述を有して居た。当時の印度精神は、一面には飽くを知らぬ好奇心、一切を知悉せずんば止まざらんとする欲求と、他面には綜合統一の精神、即ち知り得たる一切を整正し組織せんとの欲求に燃えて居た。(註三)

加ふるに印度は、異常なる実践的精力、滾々不尽の創造力を有して居た。B・K・サルカル君が、解説せる「シュクラニーティ」一巻を読んだだけでも、社会的・政治的方面に於ける印度精神の活躍を窺ひ得て余りある。(註四)まことに印度は息むことなく、疲るることなく、無限の豊富と多様とを以て、民国・帝国・宮殿・寺院・都市・城塁・乃至数々の団体、差し上げ来れば際限もなかるべき現実の施設を創造して居る。印度人に実行の能力なしなどと言ふは、根も葉もなき放言である。

試みに西紀前第四紀の著書とせらるる「アルタ・シャーストラ」を繙けば、綱挙がり目張れる印度政府の行政組織の叙述がある。そは十八省に分れて居るが、一例として軍務省の組織を見るに、軍務局・海軍局・陸軍局・歩兵局・騎兵局・象軍局の六門に分れ、三十名の幹部より成る。孔雀王朝の創立者、印度のナポレオンと呼ばるるチャンドラグプタ大帝の常備軍は、歩兵六十万、騎兵三万、象兵九千、戦車衆多と算せられて居る。是くの如き大軍を組織編制して国防外征の為に用ひたる国民を、偏へに出世間的、非実際的と謂ふは、根もなき誣言と言はねばならぬ。

また印度の羅馬とも云ふべきパータリプトラの都市計画及び其の行政を見よ。市は幅二哩半、長さ九哩にして、囲繞するに城壁を以てし、城門六十四、壁上に聳ゆる大小の塔五百七十とあるを見ても其の規模の雄大を知るに足る。市の三十長老、相会して市政の衝に当り、六局によつて事務を分掌した。一は市民の工芸を管轄する工芸局、二は入国する外人に関する事務を取扱ふ外事局、三は歳入其他の目的の為に出産死亡を明かにし今日の戸籍事務を取扱ふ統計局、四は商業及び度量衡を管轄する商業局、五は製造業を管轄する工業局、六は税務局である。法顕の南海寄帰伝を繙いても、印度の市制が甚だ発達して居たことを立証する幾多の記事がある。

またラダクムード・ムケルジ教授の周匝精到なる研究によつて、上代印度の海外発展の事実も、漸く明白になつて来た。(註五)印度の船舶は、ユダア・エジプト・ローマの諸国と盛んに貿易を営み、印度洋並に多島海に幾多の植民地を経

営し、商業的利益を収めると共に、印度の芸術と詩歌と信仰とを弘布した。ムケルジ教授に拠れば、上代印度の造船術並に航海術は、意想外の発達を示し、能く三百乃至八百の船客を容るるに足る巨船を造り、其の最大なるは千五百の船客を収容し得たとのことである。

西欧の批評家は、上代印度の彫刻、建築、乃至其他の芸術を論ずるに当り、常に其の過度に豊満濃厚なるを指摘して居る。而して此の一点に於ては、枯淡閑寂を愛する一日本人として、予もまた同感至極である。さり乍ら此事が、欠点なるにせよ、是くの如く表現されることが、実に印度に漲れる豊満なる生命、創造し享楽して足るを知らず倦むを知らざりし活力の、必然の成果として承認するの外はない。

次に印度精神の特徴として、純知的なると、実践的なるとを問はず、総じて其の極端まで徹底させねば止まぬと云ふことである。印度精神は、一切の極端に於て、其の極端に於ける理法を求め、且之を実現すべき方法を求める。此の傾向は随処に之を認めることが出来る。例示すれば印度の唯心論は徹底して唯物論である。其の思想には秋毫の妥協なく苟合ない。宗教的信仰に於ても、或者は自力の絶巓に上り、或者は他力の九地に下る。日常生活に於ては奢侈贅沢の限りを尽す者の傍に、樹下石上の無一物生活を楽しむ者がある。帝王の権力其の絶頂に達せる時これと相並んで「王者よ、汝は民に奉仕する者に非ずして何ぞ」と嘯く者が居る。孤節万山の峭嶂を渡り、歩々鮮血に染めて只管悟道に精進し、眼中また花鳥風月なき修行者ありと思へば、他方には五欲の歓楽を肆まにし、五官の経験の有らん限りを嘗め尽す以外、他に人生あるを知らざる極端なる享楽主義者が、嬉々として酔ひ且歌つて居る。

而も茲に珍重至極とすべき一事は、印度精神が当初の激刺たる力を失はざりし間は、此の極端に奔馳する特質さへも、印度精神の他の特徴なる綜合的傾向によつて、見事に牽制されて居たことである。これあるが為に、其の旺盛な

る享楽主義を以てしてさへ、今日の西欧に見るが如き社会的放縦に陥らざるを得た。印度精神は端に走りながら、他面に於て、能く全体としての統一調和を破らしめざる統制の力を具へて居たのである。

吾等は、印度精神を点検し来りて、其の深奥なる精神主義、其の透徹せる知力、其の旺盛なる実行力を指摘した。いま之を印度文明史の上に迴れば、精神の時代先づ現はれ、理智の時代に次ぎ、更に実践の時代が来た。而して此の時代の次に、ヘーゲルが知らざりしたる理智の時代が来た。そは精神的真理の光に照らして、事物の奥に横はる理法を闡明せんとしたる時代であつた。而して其後を承けて、是くして把握せる理法を、現実生活の上に実現せんと努めたる実践の時代が来た。而して此の時代こそ印度文明の黄金時代であつた。此等の文化の種々相を、一層詳細に叙述することは、他日世に問ふことある可きに止めて、吾が論歩を進めねばならぬ。(註六)

さて青天一碧、赫灼たる烈日の下に、鬱密深沈として繚乱たるサンスクリット文明を満開せしめたる後、漸く萎微凋衰の域に入りかけたことは是非もなき次第であつた。此の衰兆は、第一に現実生活に対する努力の減退、創造の歓喜に対する気力の薄弱となりて現はれ、第二には自由なる知的探究の終焉、科学的・批判的精神の銷磨となりて現れた。而して第三には、印度の精神主義其ものが、最早昔日の昭々たる光輝を失ひ、寥々たる個人の魂の裡に、消えなんとする炎を僅かに護持されるに過ぎなくなつた。印度が英吉利のために征服されたのは、実に是くの如き時である。

吾等は、序を以て茲に一言して置く。印度に歴史なしとは、多くの学者の沙汰する所である。なるほど、古代印度の文献は正しくある。なるほど、古代印度の文献は、単に編年史と云ふ意味ならば、是く主張するは正し若し謂ふところの歴史

臘・維馬の古典の如く、王朝の隆替、戦争の勝敗、総じて所謂歴史的事実の本末を年代順に物語つて居ない。故に「印度にはヘロドツスなく、一のツキヂデスなく、また一のリヰなく、一のタキツスなし」とするは必ずしも誤りである。(註七)さり乍ら、若し此事を以て、印度には国民生活の記録なかりしかに思ふならば、是れほど顚倒の沙汰はない。古代印度の文献は、文化の進歩、人心の発達に関して、極めて明瞭なる、而も一貫連綿たる叙述を含んで居る点に於て所謂「歴史」と銘打たれる他国の古典よりは、遥に意義あり価値ある歴史である。各々の時代に於ける文献は、実に夫々の時代に於ける印度生活の最も澈刺たる縮図であり、物心両界に於ける彼等の生活を、吾等の眼前に彷彿せしめるのである。それ故に、時代を遂うて印度古典を渉猟することは直ちに四千年に亙る印度文明史を辿ることである。加ふるに古代印度の文献は、石に刻まず紙に書かず、実に人間のこころ其者に銘記されて来た。吠陀は言ふも更なり其他数々の聖典を記憶暗誦することが、古より今に至るまで人間無上の聖行と考へられ、一語一節を誤るさへ赦し難き大罪とせられて、師弟相承し父子相伝して昔ながらのまま今日に及び、恐らく今後も永久に然るであらう。

(註一) ヘーゲル「歴史哲学」レクラム版一九六―七頁。

(註二) 印度哲学者は、認識の方法を智原と名付け、現量・比量・聖言量の三とした。現量とは感官による知覚、比量とは論理的思惟による認識、聖言量とは聖者の体験を通しての真理把持、即ち精神的直観である。

(註三) 印度人の科学的業積を知るべき無上の好著に Rajanendranath Seal, The Positive Science of Ancient India があ る。外にサルカル君の著書に Hindu Achievements in Exact Science あると聞くも、未だ読むことを得ない。

(註四) Sacred Books of the Hindus 第十三巻としてアラバベードの Panini Office より出版せらるるアラバベードの Panini Office より出版せらるる Kumar Narendranath Law, Studies in Ancient Hindu Polity が ある。

(註五) Radhakumud Mukerjee, A History of the Indian Shipping and Maritime Activity 此書は全く前人未墾の野を拓いて随喜驚嘆の外なからしむる収穫を挙げたるもの。古代印度史の権威V・A・スミス教授の如き、之に向って最上

級の讃辞を棒げて居る。

（註六）　印度文化全般に亙る著述としては、予の知る限りに於て今日尚ほ R. C. Dutt, A History of Civilisation in Ancient India の右に出づるは無い。但し種々相の一々に就ては幾多の良書がある。

（註七）　E. J. Rapson, Ancient India 一五―一六頁。

三　国民運動の根拠をなせる宗教的覚醒

事物の真相を洞察する眼光に於て、常に予を推服せしめたる仏人リシャル君が、四年に亙る滞在の後に日本を去らんとする頃、一日予に向つて語るらく、日本の少年少女の顔が、此の四年の間に著しく欧化して来たと。而して其の理由の一つを、洋服の流行に帰して曰く「物心不二、衣裳を借りれば魂も自ら乗り移る。自分の魂が出来上つて居れば、移つて来た魂を追払ふことも出来るが、生憎く子供には其力が無い」と。果して然りとすれば、英国に征服された印度が、啻に政治的のみならず、精神的にも其の奴隷たらんとせることに何の不思議も無い。

蓋し英国が将来し、且強要せる西欧文化は、印度に取りて全く新しき異類の文化なりしが故に、物心両界に亙りて深甚なる刺戟となつた。その各方面に及ぼせる影響の一々を挙説することは、予の当面の問題でないが、玆に予の論歩を進める上に於て、特に挙示せねばならぬ影響の随一は、之によつて印度人の間に、西欧崇拝者・西欧模倣者の輩出したることである。而も此の傾向が、当時先覚者と呼ばれ、新人と呼ばれたる人々に於て最も顕著であり、且其の動機が、まさしく愛国の至情に出でたりしことは、最も注目に値する。彼等は、印度を英国治下の屈辱より脱せしめるためには、之を「近代化」する以外に別途なしと考へた。彼は、印度に対するイギリス人の批判を、其侭に承認した。彼等は、流石に中世印度の文明を以て、全く無価値なるものと信じ、悉く其の遺風を掃蕩せんとした。彼等は、流石に

上代印度に対して高き誇負を感じ、且彼等の主張に有利なる例証を之から採らうとしたが、而も竟に其の至高精神を把握することなく、唯だ彼等の欧化せる理性に翻訳し得るものだけを珍重し、然らざるものは総じて惜気なく之を拋棄した。彼等は英文学の形式・思想・精神を如実に輸入して新印度文学を建設しようとした。彼等は第十九世紀英国の民主主義を無上の政治的理想とし、西欧の社会思想並に社会制度を採用して、直ちに印度を改革せんとした。

此の印度欧化の傾向は、其の目撃者たるV・チロルが「印度不安」の中にいきいきと描き出して居る——「三十年以前、予の初めて印度に遊びし頃は、欧羅巴教育を受けたる印度青年は、少くとも知識的には忠誠の民たらんとして居た。彼は雙手を挙げて西洋の知識の木実を拠ぎ取つた。或者は英文学、殊に英詩の熱心なる研究者であつた。彼等はワーヅワース詩社、ブラウニング詩社と云ふやうなものを組織して居た。或者は英国史を学びてミルトン、バーク又はジョン・スチュアート・ミルに政治的感激の泉を汲み、或者はカント、シュレーゲル、乃至はスペンサー、ダーキンの忠実なる学徒であつた。孰れにもせよ、教育ある印度青年の最大多数は、西欧思想を讃美し、仮令、全然印度伝統の思想信仰を放棄し、又は心密かに之を侮蔑して居たのでは無かつたにしても、兎にかく印度在来の信仰習慣を改め、之を西欧の夫れと調和せしめようと苦心した。彼等は往々にして英人を悪んだが、而も心中之を尊敬し且崇拝した。彼等は英人が余りに高慢なるを快しとしなかつたが、而も是れには当然なる理由があると思つて居た」(註一)。チロルの著書が出版されたのは一九一〇年であるから、茲に三十年前と云ふは、一八八〇年前後のことである。

予は更に印度人自身をして、当時に於ける英国崇拝の有様を物語らしめる——「英人は新聞を読む。そこで印度人も自分たちの新聞を始めた。英人は倶楽部や教会に集まる。そこで印度人も同様のものを始めた。英人は酒杯とビフテキを採つた。彼は、得々として其の先生を真似た。彼は其の服装を採り、其の葉巻とパイプを採り其の酒杯とビフテキを採つた。彼は印度生活を蔑すみて、英吉利化されることを誇りとした。彼の眼には、一切の印度のものが悉く愚劣に映じた。印

度人は未開人であり、其の宗教は迷信の巣窟である。彼等は不潔の民であり、其の風俗習慣は野卑である。彼等は不合理にして、人間の本性は自由であると云ふことを知らない。かやうな調子で英人は一から十まで印度人の模範となつた。若し英人が教会に行つて聖書を読めば、彼等また之に倣つた。彼等は万事英人の如くならんことを欲したのである」。(註二)

第十九世紀後半の印度に全盛を極めたる此の欧化運動は、予が繰返し述べたる如く、薄伽梵歌に戒むるところの、他の本然に追従せる邪道なりしことは、言ふ迄もない。唯だ其の動機は、兎にも角にも印度の復興を念とする愛国心に存し、且其の言行が、端なくも真個の復興運動を激成する逆縁となりたる点より見れば、此の運動もまた決して無意義のものでなかつた。歴史の原則は、古今東西に共通である。予は今日吾国に於ける所謂新人の諸運動に対しても全く同様の見解を抱くものである。

第一に此の運動は、久しく長夜の眠に堕ちて居た印度人の理性を呼び醒まして自由なる知識的活動を復活させた。第二には既に醗酵力を失ひ尽したるかに見えし古代文化の裡に、新しき観念の酵母を投じた。第三には印度の過去に対して、全く新しき見方を教へた。第四には彼等の苦々しき猿真似に憤激せる、保守的印度国粋主義者の出現を促した。総じて此等の結果が、相寄つて正しき印度覚醒の因縁となつたのである。

さて印度に於ける真個の偉大なる運動は、常に新しき精神運動わけても新しき宗教的活動を以て始められて来た。この事は、印度史を知る者の直ちに首肯する所である。現代印度の歴史に於ても、復興印度の曙光が、先づ宗教運動に現れたことは、寧ろ非宗教的である。然るにも拘らず、印度が之に刺戟せられて、先づ宗教的に覚醒せることは、最も鮮明に印度精神の特色を躍如たらしめるものである。

印度の新人諸君が、異常なる熱心と精力とを以て、印度の西欧化に努力せる時、彼等とは類を異にせる一群の先覚其魂に昔ながらの印度精神を護持せる一群の先覚は、下の如く考へた――「印度は改造せられねばならぬ。印度はまさしく思想と制度の両面に於て徹底せる革新を必要とする。而もそは必ず精神的根拠の上に立ち、且初めより宗教的動機並に形式を採らねばならぬ」と。是く考へることが、孰れの国如何なる世にも、普遍なる妥当性を有するや否やは、自ら別個の詮議を要するが、少くとも現代印度に於ては、此の思想並に運動が印度自身の本然（ダルマ）に拠れる正しき復興運動の先駆をなした。ラーム・モハン・ロイのブラーマ教会、ダヤーナンダ・サラスワティのアーリヤ教会、ラーマクリシュナの伝道団、及び此等の運動に刺戟せられて印度教内に起れる信仰の復活、総じて是等の宗教運動が、復興印度の魁をなせるものである。

親ら印度国民運動の最も主要なる役割を勤め、内外両面の経緯を知悉せるラージパト・ライの如きも、明白に此等の宗教運動の意義を認めて、下の如く特筆して居る「此の英吉利化の傾向に驚き、ラーム・モハン・ロイ其他若干の人々が、起つて此の風潮と戦はんと決心した。彼等は一時、効を挙げたが、大勢は如何ともすべくなかつた。されど此為に、少なからぬベンガル人は、能く英化の風潮に抗し、其の英国的教育に拘らず、自己の宗教と自己の風習とを固守した。彼等は幾多の欠陥を印度の社会に認めたけれど、徒らに之を破壊し、又は西欧に模倣することを堅く拒んだ、かくてベンガル人の間に、国民的傾向を帯びたる一群の同志が現はれ出でた。ブラーマ教会の創設者ラーム・モハン・ロイは実に近代印度の最初の国家建設者であつた」[註三]と。

而して此の印度精神の宗教的覚醒を、最も深刻鮮明に具現せるものは、ギェーカーナンダ其人の出現であつたとせねばならぬ。高き英国的教育を受け、明朗鏡の如き頭脳と、玲瓏玉の如き人格とを以て、カルカッタの花なりし年若きギェーカーナンダが、一念発起して求道聞法の人となり、眼に一丁字なき苦行者――異国思想の影だになく、専ら

印度伝統の道徳により、如法に修行して得道証悟せる聖者の前に、至心に合掌し跪拝して、良師に会ひ得たる宿縁の茅出度きに随喜せる其姿こそ、げに印度復興を象徴せる希有の瑞兆でなければならぬ。ベンガル青年の魂に、初めて真個の革命的情熱を鼓吹せるものは、既に述べたる西欧崇拝の最も能弁なりし革命論に非ず、却つて直接政治とは風馬牛なるかに見えたるギヤーカーナンダの精神的感化であつた。

是と相並んで特筆せねばならぬのは、アーリヤ教会の興隆である。ダヤーナンダ・サラスワティは、信仰の解放、良心の自由、個人的判断の価値の確立、教会制度の羈絆より個人を脱出せしめたる諸点に於て、正に印度教のルーテルと呼ばるべきものである。[註四]時は一八七九年十一月十七日、ベナレスに於ける印度教徒の大会に臨んで、いま印度に行はるる多神教は、自ら盲目にして群盲を導かんとする婆羅門僧の迷信に基く虚偽の宗教なること、種姓制度は、分業の原則に基けるものに非ざること、婦女子をして今日の如き境遇に置くは印度本来の精神に背くこと、印度の宗教家は、理智と情操とに偏して、剛健尚武の鍛錬を重んぜざるが故に、人をして柔弱に流れしむることを指摘して、汝等吠陀に復る可しと獅子吼せる彼の颯爽たる英姿は、さながらにウオルムス会議に於けるルーテルのそれである。

彼は其の純一なる一神の信仰を以て、信者に求むるに厳格秋霜の如き戒律を以てし、教団に鼓吹するに軍隊的精神を以てした。此の戦闘的宗教が、印度青年に国民的自覚を鼓吹せるは言ふ迄も無い。印度政府の如きは、実にアーリヤ教会を以て、宗教の仮面を被れる革命結社なるかの如く恐れたのである。吾等は、アーリヤ教会の面目を彷彿せしめるために、教会が如何にして其の信徒を養成しつつあるかを叙述せねばならぬ。そは吾等に向つて深刻なる暗示を与へずば止まない。

恒河の上流、ハルダワルを距る約五哩、遥かに万古の雪を戴くヒマラヤ連峰を望む小高き丘の上に、一九〇二年、

アーリヤ教会の長老ムンシ・ラームが建立せる学院（グルクラ）がある。そはラーム自ら院長となり、師と共に、約三百名の学生を薫陶する神聖なる道場である。学生は六歳より十歳までの少年を採り、不邪淫・随順・清貧の三事を宣誓せしめ、悉く学寮に収めて厳に世間より遠離し、鍛錬陶冶実に満十六箇年に及ぶ。其間、学生は婦女子と接見するを得ず、一族の父兄さへ一年二回学院を訪ひ長老同席の上で其の子弟を見ることを許されるだけである。講師は皆な諸大学を卒業せる敬虔篤学の士で、衣食を給せらるる以外何の報酬をも受けない。学生は徹底して共同の生活を営み、一切のもの皆な共有であり、父兄保護者よりの贈物に至るまで、悉く之を平等に分配する。特に力を体育に注ぎ、武道の鍛錬は前後十六年を通じて最も厳格を極める。その満十四歳に達するまでは、専ら印度伝統の哲学・宗教・文学を教授し、十五歳に達して初めて英語を教へ、西欧の科学を教授する。そは印度古来の修行の要諦と、西欧の新しき教育法とを兼ね行ふ当代無類の学校である。今やパンジャブには、此外にも同制度の数箇の学院が建立せられ、幾多の純一真摯なる青年が、真個印度の戦士たるべく薫陶されて居る。これは実に頼母しき新印度の基礎を築き上げつつあるものに非ずして何ぞ。此の一事、以て印度に於ける宗教復活の面目を躍如たらしめて余りある。（註五）

（註一）Valentine Chirol, Indian Unrest 二四頁。
（註二）Lajpat Rai, Young India 一一一—三頁。
（註三）同上一一一頁。
（註四）D. N. Banncrjea, India's Nation Builders 七八頁。
（註五）アーリヤ教会に関してはライ氏の好著 The Arya Samaj がある。また前述チロルの「印度不安」一一四—五頁、同じくバネルジ「印度建国者」中のダヤーナンダの伝記参照。

四　文芸哲学に現はれたる印度精神の復興

印度の場合に於て、宗教的覚醒は、常に国民精神の根本的覚醒を意味する。他国の民ならば「卿は何人か」と訊ねる場合に、印度は即ち「卿は何教信者か」と問ふのに徹しても、容易に彼等の宗教的特性を看取し得よう。故に一度び印度が宗教的に覚醒し、而して其れが真実の覚醒であるとすれば、やがて一切の精神的・知識的方面に於て、同じく覚醒を見ずには止まぬ道理である。果せるかな同様の瑞兆は、躍を接して先づ文学芸術の方面に現はれた。散文に於けるバンキム・チャンドラ・チャッテルジ、韻文に於けるラビンドラ・ナート・タゴールは、それぞれ各自の領域に於て、先づ陸離たる印度的光彩を放つた。而して叙上三者が、共にベンガル人であることは、印度人のうち、最も芸術的天分に豊かなるものは、ベンガル人なるが故に外ならぬ。

ベンガル文学が、西欧文学殊に英文学の模倣を以て始まれることは、既に述べたるところである。而も国民的意識の擡頭するにつれ、ベンガル文学者も、また次第に模倣と追従とを斥け、固より外国文学の感化は拒むべくもないが能く之を印度精神に同化し、立派に自己のものたらしめるに至つた。バンキムは、独創的な識見と、豊麗無比の詞藻とを以て、印度文学の為に新路を開拓せる第一人者であり、其の小説「歓喜殿」は、独立自治の思想を印度青年に鼓吹せる点に於て、維新志士に対する「日本外史」の役割を勤めた。そは英国が初めて印度侵略の根拠を築きたる頃、之を掃蕩せんが為に苦心惨怛せる印度青年志士の善戦健闘を叙したるもの、その結構に於てスコットの伝奇小説より暗示を得たと言はれて居る。印度の革命歌として愛誦せられ、彼等の熱血を湧かしめつつある「母国万歳」の歌は、実に彼の作にかかる——

Hail Motherland !

Bande Mataram !

In Thou art my muse, Thyself my creed,
Thy temples one and all, Mother !
In thee my heart and soul ;
In mine arm Thou art strength !
And in my limbs the spirit Thou ;
Thine the images bodied forth
From Thyself heart's devotion;

タゴールの詩に就ては、恐らく此処に紹説するの要を見ない。彼は其の昂潮せる神秘的感情、其の味識せる精神的経験、其の透明清澄なる理智の閃きを、或は端的に、或は絢爛に、或は婉曲に歌ふ。而も総ての場合に於て、タゴールの詩には、ベンガル人の魂に特有なる天女の如き幽なる物優しさを湛へて居る。予は彼の詩を読む毎に、少くとも印度精神の一つの特色なる「微妙柔輭（みめうにゆうなん）の相」を身に沁みて感得せざるを得ない。いま印度詩人としてのタゴールの片鱗を窺ふために、印度を讃頌せる彼の一詩を下に引用する——

O Thou, who charmest all mankind !
O Thou, whose hands are ever bright
With ray serene of pure sun-light !
Mother of fathers and mothers !

With the blue deep's waters thy feet ever washed,
Thy scarf of green ever waving in breeze,

Sky-kissed on high thine Himalayan brow,
Crowned white thy head with tiara of snows.
First in thy firmament appeared the dawn,
First rose soma-chants in the holy groves,
First were revealed in thy forest abodes
Wisdom and virtue and poesy's self.
Ever beneficient! glory to Thee!
From thee flows food to countries far and wide;
Jahnavi and Jumna, streams of thy love;
Giver of sweet sacred milk, O Mother!

是くの如くにしてバンキム及びタゴールは、紛れもなく印度精神の復活を文学の方面に於て立証せるものである。

さり乍ら印度文学が、今後も彼等の開ける新路が、印度文学の進むべき最も正しき路なるや否やに就ては、幾多疑問の余地を存する。アラビンダ・ゴーシュの如きは、両者を以て等しく唯だ黎明を告ぐる声となし、将来の印度文学は、一層印度的なる相をとる可きことを論じ、既にタゴールと別箇の路を歩み初めたるベンガル詩人の一団を挙げて居る。

例へばサトエンドラ・ナート・ダッタの如き、同じくベンガル詩人であり乍ら、タゴールとは全く別箇の路を進む随一人である。タゴールが印度の過去を詠嘆し、印度の未来に恍惚するに対して、ダッタは即ち印度の現実を直視して歌ふ。彼は印度の為に憤り、嘆き、悲しむ。彼は其の同胞を叱咤し、激励し、慰藉する。印度国民運動史の一切の

出来事が、彼の詩魂に訴くた。例くは今を距る二十五年前、南阿に於ける印度移民問題初めて勃発し、ガンヂィ其の首領として起てる時、彼は印度国民の激悲を色読して下の如く歌つた——

Ah, there, the guileless children of Ind,
Lured by the immigration-agents' snares,
Deprived of home and of self-respect robbed,
Beyond the seas abide in foreign lands.

また此等無辜の印度人を率ゐて戦くるガンヂィの英姿を描いて下の如く歌ふ——

Firm is their leader like the tree upright,
His soul flourishes by conquering grief;
On his own shoulders he bears the thunder,
Thus is their success guaranteed of course.

または一九〇四年、二十一歳を以て夭折したる天才詩人サティス・チャンドラ・ロイの詩は、青年印度の激刺たる活力を歌へるもの。試みに下の一詩を読むも其の旺盛果敢の気魄に満ちたること、ベンガル人の詩とは思へぬほどのものがある——

Whither haven't I been—in quest of man, real man,
Whose spirit is free to receive world's all impress,
Light and deep,—who feeling one with every atom,
Senseless, sentiment, can rise up to an infinite All!

Powerful-armed like that fisher-boy
Into life's ocean he throws himself down,
Abrupt, dives deep, and elbowing billows,
Heaves most gleefully with laughter again;
Confident-smiling he casts the net of work,
And "up the fish must" he muses, patient frow'd.
No doubt he is in love with terror deep!
How else can he smile amidst troubles of the sea?
Here is life, my friend, life, the joyous life!

さて絵画に於けるアバニンドラ・ナート・タゴールは、文学及び詩に於けるバンキム及びタゴールよりも、一層明確に、印度芸術の進路を指示せるものである。彼の芸術は、飽く迄も精神の芸術である。その志すところは、印度精神の種々相を、線と色とによつて彷彿せしめんとするに在る。そは堅確に把握せる理想、明瞭に認識せる観念、心ゆくばかり味へる神秘を、最も有効に表現せんとする努力である。彼及び彼の門下の絵画が、予に与へる感じは、奈良朝時代の吾が仏像が与へる夫れと全く類を同じくする。而して彼が其の芸術を大成するに当り、日本画の研究によつて最も多く啓発されたと云ふことは、興味ある事実と言はねばならぬ。(註二)

さて翻つて哲学的方面を見れば、アラビンダ・ゴーシュの出現によつて、印度は初めて真個の国民哲学者を得た。彼の哲学は、二十年に亙る欧羅巴留学の間に得たる西洋哲学の驚く可き蘊蓄と、豊富深刻なる自己の精神的経験とを以て、薄伽梵歌の思想を闡明し開展して、周匝なる体系を与へたるもの。印度青年の魂に、正しき国民的自覚を喚起

し、従つて革命的精神を奮興せしめたる点に於て、彼の人格並に言論の如く深刻強大なりしはない。既に述べたる如く、宗教・文学・芸術の諸方面に於ける運動が、印度復興の拒み難き実証であり、且間接に国民主義的自覚を促がしたことは事実である。また言論文章によつて印度の国民主義を力説したる幾多の思想家ありしことも事実である。さり乍ら、未だ曽て何人も吾がゴーシュの如く直截明確に、而も深奥なる根拠に立ちて、印度国民の自覚を促がしたものは無かつた。

彼は青年に向つて告げた――「真個の印度人にして初めて能く一切を信じ、一切を断行し、一切を犠牲にし得る。故に諸君は先づ印度人とならねばならぬ。アーリヤの思想、アーリヤの性格、アーリヤの生命を再び掴得せよ、諸君の知識又は感情を以てに非ず、驀地に之を諸君の生命に掴得せよ」と。

彼はまた下の如く教へた――「第十九世紀の印度は、政治的解放、社会的改革、宗教的復興を求めた。而も此等の努力は、印度民族の精神と歴史と使命とを無視して、徒らに西欧の動機と方法とを学び、欧羅巴的なる繁栄と勢力と進歩とを招来し得ると考へた。それ故に一切の努力が竟に失敗に終つた。第二十世紀の印度は此の悲惨なる経験に鑑み、英国化せる第十九世紀印度の目的と興想と方法とを悉く放擲せねばならぬ。印度は堅確に自己の路を歩みて、独立せる生命と文化とを実現し、世界の面前に於て、欧羅巴が終に解決し得ざりし政治的・社会的・経済的・道徳的問題を解決せねばならぬ。此の目的を遂行する方法と力とは、之を印度自身の魂の衷に求めねばならぬ」と。

彼の教義は、カルマヨーガ――行(ぎょう)による実現である。其の根本精神は、王陽明が「知は行の始、行は知の成るもの聖学は唯是れ一個の工夫のみ」と唱へたると、全く同一轍である。この行の哲学は、寂静無為を以て高尚なるかに考へたる印度人に向つて、単なる思索瞑想の無価値なること、行為こそ思索の実現且完成なることを教へた。彼は森林

に退く隠遁独善の生活を斥け、人は一切の成敗を超越して神聖なる英雄的行動に終始すべきを説いた。而して此の思想は、多数の印度青年に強烈なる実行的意志を鼓吹した。(註二)

アラビンダ・ゴーシュは、印度精神の哲学的復活を示すもの、其の思想は復興印度の為に哲学的基礎を完成せるものである。恰も此時に当り、外には日露戦争に現はれたる強烈なる日本精神が深甚なる感激を印度人の魂に与へたるあり、内にはベンガル州両分問題が多年鬱積せる印度人の不平に俄然として爆発の導火となりたるありて、茲に印度復興は明白に政治的——従つて革命的となつた。換言すれば印度精神の自治的覚醒が所謂革命運動として現はれた。

（註一）　本章の叙述は月刊雑誌「アーリヤ」一九一七年に連載されたアラビンダ・ゴーシュの「印度に於ける新生命」と題する論文、同「近代評論」に現はれたる諸家の論文又は紹介、及びサルカル君の「亜細亜の未来主義」中の諸論文、殊に其の「青年印度文学の諸思潮」（同書三〇八—三二六頁）に負ふ。

（註二）　アラビンダ・ゴーシュの哲学を知る最上の著作は彼が月刊「アーリヤ」に連載せる三大篇 **Essays on tha Gita, Synthesis of Yoga, Life Divine** である。予が断金の友ポール・リシャル君はゴーシュと義兄弟の契あり、君のゴーシュ論は載せて予の旧訳「第十一時」の中に在る。

五　印度に於ける政治的覚醒の行程

かくして印度精神の復活は、先づ宗教に現はれ、次に文学芸術に現はれ、更に哲学に現はれて、竟に政治に現はれた。故に其の運動は、之を表面に現はれたる相に就て言へば、英国の印度統治を掃蕩せんとする政治運動に外ならぬけれど、奥深く其源を探り往けば、実に物心両面に於て、完全に「イギリス」——従つて「欧羅巴」の支配を脱し、徹底して「印度」の独立を求むる心に根ざして居ることを知るであらう。

さて排英運動は、其の初めて起るや憤怒・憎悪・復仇の感情の勃発であつた。此等の感情は、自身に於て決して嘉

すべきものでない。而も天は其の意思の実現のために、一切の善巧方便を用ひ、能く悪を転じて善とし、禍を転じて福とする。此の場合に於ても、此等の激越なる感情ありてこそ、印度は其の政治的生活から、長年に亙る無為苟安を駆逐し、代ふるに熱心と健闘とを以てするを得た。そは少くも感情の方面に於て、政治に於ける英国勢力を葬り去つた。

前に述べた如く、アバニンドラ・ナート・タゴールの絵画は最も純一に印度精神を具現するものと言はれて居る。然るに其のアバニンドラ・ナート・タゴールの絵画に就てさへ、日本及びペルシアの影響が、仮令亜細亜的であるとは言ひ乍ら、尚ほ且エキゾーティクなる調子を画面に漂して居るとすれば、印度の政治運動が、其の擡頭の初めに於て、少くとも其の運動方法が、範を西欧革命運動に採れることは、寧ろ尋常のことと言はねばならぬ。勇敢なる革命の諸戦士は、或は社会主義者の運動に倣ひ、或は虚無党の嚇殺主義に学び、印度政府の水も漏らさぬ監視、秋毫も仮借せぬ弾圧の下に、蛟を踏み難を渡つて健闘した。

現代印度の政治運動を語るに当り、先づ述べねばならぬことは、チロルが「印度不安の父」と呼べるパール・ガンガ・ダル・ティラクの偉業である。彼はデッカン高原に拠つて昔ながらの印度精神を護持せるチトパヴン婆羅門の保守主義に革命の情熱を鼓吹し、ボムベイ及びプーナを中心とし、其の主裁する両新聞「マラタ」及び「ケサリ」に筆執り、愛国排英の思想を宣伝した。デッカンのマラタ族は、第十七世紀に出世して回教徒の征服に抗し、敵将アズファル汗を欺き殺して其軍を粉砕し、強大なるマラタ帝国の建国者となれるシヴジに対して深甚なる崇拝の念を抱く。ティラクは彼等に国民的自覚を促し、其の尚武敢為の気象をいやが上に作興するために、一八九五年、シヴジの誕生日を期してライガル市に其の盛大なる紀念祭を行つた。一青年は此の紀念祭の式場に下の如き讃頌をシヴジの霊に捧げた——

吾等もまた果断事に従ふことシヴジの如くならん
汝等剣と盾とを執れ、吾等は起つて敵の頭を斬ること算なからん
国の為の戦ひに吾等は生命を賭す、而も敵の血を流さずば止まざらん

次に一婆羅門学者起つて下の如く述べた――「回教皇帝に其膝を屈してならぬと云ふ啓示を受けた此の偉人を、敢て殺人者と呼ぶは誰ぞ。偉大なる本務を果たすために小節を顧みざりし故を以て、吾主シヴジの聖像の前を非難するは誰ぞ。仮令シヴジにして更に恐るべき五罪又は五十罪を犯したりとするも、予は吾等は失へる独立を回復すべく戦ふもの。而して此の羈絆を断ち得るは、一致団結の力のみ之を能くするであらう。而して彼に動かされたる二青年は、翌々一八九七年、プーナの街頭に二英国官吏を射殺して革命の血祭に上げた。ティラクの感化は、此等の言論によつて明白に知られるであらう。

ティラクの感化は、此等の言論によつて明白に知られるであらう。而して彼に動かされたる二青年は、翌々一八九七年、プーナの街頭に二英国官吏を射殺して革命の血祭に上げた。ティラクは此事に坐して囹圄の人となつたが幾くもなく放免された。此時に彼れの為に百方奔走して其の放免を早からしめたる者は、実に近代東洋学者の随一たるマクスミュラー博士其人であつた。何故に博士は此の激烈なる危険思想家の為に骨折つたか。曰くティラクは、其の寧日なき政治的運動の間に、実に印度精神の源泉たる吠陀の研究に没頭し、其の業績を発表せる両著作の如き、正に世界学界の珍として驚嘆せらるる処のものであり、推しも推されもせぬ世界的サンスクリット学者と認められて、其の学問を以てマクスミュラー博士と親交ありしが故である。此の非尋常なる天才の活動によつて、西南印度に捲き起されし風雲は、一九〇五年のベンガル両分問題の時に愈々物凄きものとなり、東の方ベンガルの革命青年と相呼応して血腥き雨を降らすに至つた。

ベンガル青年は、固より此の「印度不安の父」の思想によつて動かされて居た。而も彼等をして一斉に奮興せしめ

たる革命のパン種は、既に述べたる如くアラビンダ・ゴーシュの哲学であり、彼等の運動を実際に指導せる者は其弟バリンドラ・ゴーシュであつた。日露戦争に感激し、ベンガル分割問題に憤激せる青年は、バリンドラ・ゴーシュを盟主として、一九〇六年の頃、アヌシラン・サミティと呼ぶ革命秘密結社を組織し、排英興印の為に一身を捨てることを誓つた。彼等の覚悟のほどを知る為に、予はアヌシラン・サミティの入社誓言を下に掲げるであらう——

『某甲、梵天・カリ母神・父母・教師・長老及び生国の前に跪き、恭しく誓言す。某甲、サミティの事業を奉行するに当つては、一切の犠牲を払ふに躊躇せざる可し。某甲、若し此の誓言に忠ならず、また此の誓に背くことあらば、長へに梵天・カリ母神・及び大聖衆の極罰を蒙むらん、誓言仍而如件。』

彼等は母神カリに向つて、下の如き願文を読誦した。決死の青年、密室に相会し声を揃へて之を読誦したる物凄き光景を想像せよ——

嗚呼、華鬘を捨てて髑髏を戴く母神チャムンダー！　爾は何れに行きしぞ

嗚呼、大憤怒相の母神よ！　爾を熱愛する児等、爾を苛(さいな)み、悪魔、印度を灰燼となせり、其の恐ろしき虐政をもて

悪鬼、爾の児等を苛み、悪魔、印度を灰燼となせり、其の恐ろしき虐政をもて

来れ、来りて彼のチャンダとムンダを永劫に罰せよ！

カンヂよ！　来れ、来りて彼のチャンダとムンダを永劫に罰せよ！

ベンガル革命の父バリンドラ・ゴーシュは、一九〇八年に起りし名高きムザッファル事件に連坐して、終身の重刑に処せられ、印度独立の暁まで、生きて天日を仰ぎ得ぬ身となつた。而も彼によつて創立せられたる結社は、彼の受難によつて却つて真剣熱烈なるものとなり、多くの決死尽忠の青年を同志とし、不屈不撓の戦闘的団体となつた。

次には尚武的宗教アーリヤ教会の発祥地パンジャブに於て、此の宗教が喚起したる国民的自覚を政治運動に導きた

るラージパト・ライが居る。印度に於て最も実行的なるパンジャブ人が、ライ其他の先覚者によつて排英思想を鼓吹せられ、一九〇七年の初め、地租徴収の争が導火線となりて暴動の勃発となるや、ライは其の騒乱の首魁と目せられ突如捕へられて緬甸に護送せられ、裁判を受けず従つて罪名も告げられずに牢獄に投ぜられた。然るにライは其の豊富なる学識、其の熱誠なる社会事業によつて、独りパンジャブと言はず、実に、全印度の最も信頼好愛せる先覚の一人なりしが故に、彼に加へたる政府の処置は、全印度の激昂を招き、これが為に頓に排英の気運を煽るに至つた。

かくて国民運動は、マラタ、ベンガル、パンジャブの三中心から、次第に全印度に拡まつて行つた。其の運動の方法は、西欧に於ける革命運動のそれと全く同一であり、暗殺をもつて威嚇し、言論文章によつて煽動し、軍隊に宣伝して其の叛乱を使嗾し、かくして贏ち得たる力を糾合し、機運の際会を待つて事を挙げんと企てて居たのである。

世界戦の勃発は、彼等に取りて真に千載一遇の好機であつた。かくて彼等は米国に在りし同志ハル・ダヤルの下に組織せられたる革命団と遥に策応し、軍隊を味方として多年の宿願を成就すべく、苦心惨怛を極めたりしに拘らず、ラホールの陰謀乃至ベナレスの陰謀、皆な中道にして発覚し、遂に事を成すに至らずして止んだ。さり乍ら之を以て彼等の運動が全然失敗なりしかに考ふるは皮相の見である。此等の悲劇ありしが故に、排英の精神、革命の熱情は、実に非常なる速度を以て昂まり且弘まつた。

而して此事は、他面に於ては英国政府をして頓に印度の形勢に戒心せしめ、ローラット以下五名の委員を任命して革命運動の真相を精細に調査し、且之を最も有効に取締るべき法律を立案すべきことを命じた。彼等はカルカッタ及びラホールに於て、必死の努力を以て調査に従事した。而して事態の真に容易ならざるを知了した。故に彼等は、臨むに峻厳秋霜の如き法律を以てするに非ざれば、印度の将来は到底平安を期し難しと認め、茲に名高きローラット法案を起草し、一九一八年七月、詳細なる報告を発表するに至つた。

ローラット法案は、印度政府が曽て戦時非常法として発布し、戦争終結と共に必ず撤廃すべしと約束せる印度国防条例を、叛乱条令の名称を以て永久的のものたらしめ、官憲に与ふるに、苟くも英領印度に於て、安寧秩序を害する危険ありと認むる者は、其の何人たるを問はず、また裁判を経ることなく、直ちに之を逮捕・監禁又は投獄するの権力を以てするものである。此の法案は固より印度人を激昂せしめずば止まなかつた。その帝国立法会議に上程せらるるや、心ある印度人は、悉く起つて反対運動を開始した。

此時パンジャブの最も繁栄なる町の一つにして、市民の示威運動と軍隊との衝突を見、ダイヤー将軍の命令の下に発射せられたる機関銃によつて、僅かに十五分の間に、五百の市民殺され、二千の市民負傷した。此のアムリッツァル事件と呼ばるる英国の残虐が、印度の全民を悲激せしめたことは言ふ迄もない。

形勢是くの如き時に、更に油を排英の熱火に注げるものは、実に聯合国の対土条約である。英国首相ロイド・ジョージは、初め印度に於て回教兵士を徴募するに当り、戦争が如何に終結するにせよ、必ず土耳古の回教宗主権を保全すべきことを、世界の面前に於て、印度七千万の回教徒に約束した。然るに一九一九年のセーヴル条約は、明白に前年の約を破りしものである。此の悪むべき不信は、従来寧ろ親英的なりし回教徒を駆りて、俄然排英運動を開始せしむるに至つた。回印両教徒は、英国の陰険なる政策によつて、常に反目し確執し来れるもの。両教の先覚、夙に之を憂ひ、屢々之が和合に努力したるも成らず、世界戦以来やや協力の傾向を助成し得たりしも、十分には思はしくなかつたのが、此事の為に積年の争ひ一朝にして和らぎ、両教徒は茲に初めて提携して排英運動に当ることとなつた。これは印度を念とする者の非常なる重大事として慶賀せねばならぬところである。

世界戦を転期として、印度の国民運動は、前後全く其の面目を異にする。印度革命の諸先覚者は、概ねラホール及

びペナレス事件に連坐して或は刑死し、或は囹圄の人となり、或は国外に亡命した。而して其等の燦然たる星が姿を隠した時、日輪の如く印度国民運動の上に輝き初めたのが、取りも直さずモハンダース・カラムチャンド・ガンディ其人である。ローラット法案反対運動以来、其の中心指導者として、従前の諸先覚の功業を紹ぎ、而も全く別箇の方法を以て英国と戦ひを初めたる者はガンディである。予は次章に於てガンディ出現の意義を探るであらう。

六　ガンディ出現の政治的意義

印度に於ける革命運動が、復活せる印度精神の政治的発現である限り、自余の方面に於ける復興運動が然る如く、やがては西欧的色彩を離脱し、徹底して印度的となるべき筈のものであつた。若し然らずとすれば、彼等の執れる西欧革命主義は、一層強力なる英国の西欧権力主義の前に、所詮覇を脱がなければならぬ。而も予が上来叙述したりし如く、印度の政治的覚醒は、深く而して堅く印度精神の根本的覚醒と相結ぶが故に、決して長く西欧的たることを許さるべきものでなかつた。果たせるかな此の論理は、ガンディの出現によつて事実となつた。

ガンディは往々にして「印度のトルストイ」と呼ばれ、米国の宗教家J・H・ホームス博士の如き、彼を以て再臨せる基督と讃へて居る。さり乍ら予の観る所に誤りなくば、ガンディの偉大は端的に政治家としての偉大である。予は彼の哲学に於て毫も新しきものを見出さない。彼の文章は、直截平明にして不要の舞文を事とする印度人の間に在りて、まさしく希有の異彩であるとは言へ、其の包むところのものは印度伝統の思想に外ならぬ。此点に於て彼は到底アラビンダ・ゴーシュの周匝雄渾に及ぶべくも無い。

彼の徹底せる禁欲簡易の生活は、欧米人の最も驚嘆するところであるが、印度に於ては決して珍とするに足らぬ。一切の物欲を斥け、樹下石上の生活に甘んずるは、啻に印度苦行者の間に随処これを見るのみならず、思想に於ては

極端なる西欧崇拝、実行に於て徹底せる叛乱主義を鼓吹せる革命家ハル・ダヤルさへ、其の生活の禁欲的なる点に於ては、殆どガンディィと択ぶところなかつた。彼は社会学の講師として、米国スタンフォード大学に教鞭を執つて居た頃でさへ、カラーもネクタイも着けず、跣足のままで大学に出入して居た。而して米国に移住せる貧困なる印度労働者と生活を共にして居た。それ故に、生活の簡易純一なることが、決してガンディィを印度に重からしめる主要の条件と思うてはならぬ。

唯だ夫れガンディィの偉大は其の組織統一の力に在る。ガンディィ一度び実際運動の指導者として印度民衆に臨む時、彼の一言一行は悉く厳浄の光を放ち、能く老幼賢愚の衆生を化導すること、恰も竜の慶雲を興して一切に雨ふらすが如くなるを見る。此の一点に於て現代印度に彼と比肩すべき何人もない。

政治とは、打算と権謀とを以て、権力を争奪し翫弄することでない。それは宗教が提示する人間の本体を発揮し、道徳が教へる人間の本務を完うするために、最も適切有効なる生活様式を創造して行くことである。ガンディィ自ら「予は政治家の面を被る宗教家なり」と言つて居るが、予は彼を以て「政治家として現はれたる印度精神」と呼ぶの一層剴切なるを信ずる。彼の真理護持運動は、英国の印度統治が、印度に於ける万悪の本源なることを指摘し、絶対に之と手を絶つべく、民衆を指導して印度政府に宣戦せることによつて、明確紛ふべくもなき政治運動となり、玆に従来の倫理運動乃至宗教運動とは、全く別箇の意義を現じ来り、かくして最も広汎且深刻なる政治的覚醒を、印度人の魂に喚起したのである。

「吾等は英国政府と戦ひの門出にある。英国政府の政治は悪魔的なるが故に、吾等は之に向つて挑戦する。吾等は之を掃蕩せんが為に起つ」。「英人諸君は、吾等をして誉れある公けの戦場に於て戦ひ得ぬものたらしめた。而も勇敢なる魂の戦ひの路は、尚ほ吾等の前に開かれて居る」。斯くの如きは実にガンディィ自身の言葉である。かくて彼は非暴

力・非協同の二大綱領に拠つて英国の印度統治に宣戦した。其の戦ひが武器の力を以てすると、魂の力を以てするとは、政治運動たる上に些かの本質的問題でない。

此事は、青天直ちに白日を指す如く明白なるに拘らず、世上のガンディ讃美者、概ね却つて此の一点を閑却し、しく彼の精神家としての偉大を説く。宛も夜光の杯に満々たる葡萄の美酒を眺めながら、含有アルコホル分幾プロセントと感嘆する類ひである。ガンディの思想を其の政治運動より抽象して、徒らに真理の護持を説き、非暴力と非協同とを説くだけでは、仮令富樓那の弁舌を以てするも、国民は決して歇はず又舞はぬであらう。

近来ややもすれば日本の改造を志す者のうちに、熱心なるガンディ崇拝者を見る。その多くはガンディの運動を所謂精神運動と解して曰く、先づ何よりも魂の革新が必要だと。魂の革新の必要なるは、葡萄酒にアルコホル分が必要なると等しく確実なる事実である。而も単に夫れだけの事ならば、必ずしもガンディの出現を待つまでもない。世上幾多の善知識、既に説得して懇切を極む。若し夫れ日本に於て真にガンディたらんとする者は、イギリスを悪魔の帝国と看破せるガンディの政治的洞察を以て、日本に於ける万悪の根源が、果して何ものなるかを具体的に把握せねばならぬ。而してガンディの真摯・無畏・熱誠を以て、之を明らさまに国民の眼前に突きつけ、且ガンディの驚くべき組織統制の力を以て民衆を指導し、敢然として其の不義の本源と戦はねばならぬ。

英雄頭を回らせば即ち神仙、予はガンディに於て其の実例を見る。暫く予をして彼れの為人を語り、其の何故に印度民衆に帰依せられ、如何にして彼等を政治的に覚醒し、且如何にしてイギリスと戦へるか語らしめよ、そは権謀術数以外、また政戦の途あるを知らぬ吾国の政治家に対して、好箇の一大鉗鎚たり得る。

先づガンディが、印度に於て絶大の勢力を有して居ることは、世界の悉く承認して疑はぬところである。彼の到る処、民は堵を成して迎へる。一度び演壇に立てば、常に数万の聴衆を呼ぶ。田舎の無智なる農民は、堅く彼の神通力

を信じて疑はず、彼が行へる奇蹟として数々の物語が誠しやかに伝へられて居る。民衆は皆な彼を呼ぶに「マハート マ」を以てし、殆ど神に近き尊崇の念を以て彼に対する。古今東西の歴史に於て、恐らくガンディの如く偉大なる力を民衆の上に揮ひ得たる者は無い。

而も彼の風采は「憐むべく貧弱」であり、短身痩躯、吹けば飛ばんばかりである。多年の禁欲生活が彼の容貌を憔悴せしめた。講演に臨んでも、立つて弁舌を揮ふに堪へず、椅子によつて僅かに語ることさへある。唯だ一つ彼の眼だけが、彼の広く深く且強き魂の窓たるに適はしく、聖なる光を湛へて輝く。ガンディは其の弁舌に於て世の所謂雄弁家でもない。彼は修辞に無頓着であり、態度に無頓着であり、唯だ諄々とし其の思ふところ、信ずるところを述べるだけである。彼は世の政治家が唯一の武器とする黄金を有つて居ない。迫害に終始したけれど権力の背景は絶無である。

是くの如きガンディが、印度に於ける政治的支配者となつたのは、実に其の崇高なる人格の力による。彼はホームス博士がいみじくも言へる如く、「身を立てること」を念とせず、「身を下すこと」を念として来た。登れば登り得る富と栄誉との路を捨て、汗と涙と血との路を択んで降つた。あらゆる人間の犠牲を払ふ覚悟を抱いて、彼は人生の一切の悲惨と苦悩とを最下層の民と共にした。彼が南阿に於て労働者を指揮した時は、先づ一切の財産と地位と職業とを捨て、徹底して其の導ける苦力と寝食を同じくした。其の運動に際して暴漢の為に殴打せられ、絶息して溝壑の中に転墜して居たのが、危く引上げられて病院に運ばれ、蘇生はしたものの、重傷にて生命覚束なしと思はれた時のことである。彼の諸友が、此の暗殺者を起訴すべきことを勧めたるに対し、彼は実に下の如く答へて居る——「彼を訴へる道理は無い。彼は自ら正しと信じたことを行ひ、自ら正しと信じたことの為に命を投出したのだ。私は彼を頼母しく思ふ。私は彼を憎まない。私は屹度彼を味方にして

見せる」。数月の後、此の暗殺者は、果して最も忠誠なるガンディの随順者となつて居た。彼は牢獄の人となること七度び、殴打されて重傷を負ふこと三度び、五体は惨ましき幾条の傷痕を止めて居る。

印度人は皆善く此等の事実を知る。それ故に徹上徹下、無私・純潔・真摯なる彼の人格を疑はぬ。彼ざるが故に彼の言行に信頼する。彼の政治的勢力の拠つて立つ根柢は、印度民衆の苦悩を躬ら嘗め尽し、之を慰安し之を親撫し、之を済度せんとする大丈夫の慈心悲腸に外ならぬ。此の点に於て彼の印度民衆に臨むは、猶ほ善知識の信男信女に臨むと等しい。

さてガンディの政治運動は、其の掲ぐる理想に於て、西欧の政治運動と白雲万里の懸隔を有し、之が為に人をして、ガンディの運動は宗教運動なりと言はしめるほど、徹底して印度的である。而も此の運動は徹底して印度的なるが故に、初めて空前の政治的成功を得た。

ガンディの政治的理想は言ふ迄もなく「自治」である。而も彼の「自治（スワラージ）」は単に英国の支配より独立することに非ず、実に印度人として一切の邪悪の支配より独立することである。「内心の汚れを除かずしては如何なる自治もあり得ない」。而して此の自治を獲得するために、ガンディは非暴力と非協同とを二箇綱領として、世に名高き「真理護持運動」を開始したのである。吾等は此の運動の本質に就いて、彼自身の言に聴かねばならぬ——

「真理護持とは、予が南阿に於て、南阿在住同胞が満八年に亙りて揮へる力を現はす為に鋳造せる名称である。吾等は此の運動の本質に就いて、彼自身の言に聴かねばならぬ——

「真理護持とは、予が南阿に於て、南阿在住同胞が満八年に亙りて揮へる力を現はす為に鋳造せる名称である。それは当時英国及び南阿に於て消極的抵抗と呼ばれたるに対し、之と区別すべく鋳造したのである。真理護持は真理の力を意味する。予は之を愛の力又は魂の力とも呼んだ。予は真理を求むるには、暴力を其敵に加ふるを許さず、却つて敵を其の錯誤より遠離させねばならぬことを知つた。忍耐とは自ら悩むことである。故に真理護持は苦悩を敵に与へず、却つて自身に与ふることによつて、真理を確立することを意味するに至つた。

「真理護持と消極的抵抗とは、相異なること南極と北極との如し。後者は弱者の武器として案出せられ、一切の形式に於て暴力の使用を排斥する。

「此の主義は決して新しきものでない。そは単に家族的生活の原則を政治的生活に布衍したに過ぎない。然るに前者に最強者の武器として案出せられ、物力又は暴力を用ひることを禁じない。暴力又は暴力を用ひることを常とする。この愛の法則によつて解決されるを常とする。この愛の法則は、真理の法則に外ならぬ。真理なくして愛は紛糾衝突は、愛の法則によつて解決されるを常とする。この愛の法則は、真理の法則に外ならぬ。真理なくして愛はない。真理なき愛は、自国を愛して他国を害ふが如き愛、若き男子の女子に対する惑溺の如き愛である。愛は一切の動物性を超越し、曽て偏することがない。故に真理護持は表面には愛、裏面には真理を読む貨幣に譬へられる。そは随処に通用し、無限の価値を有する貨幣である。

「またそは魂の力と呼ばれる。何となれば若し真理護持者は死が戦ひの中止を意味せず、却つて其の完成を意味するを信ずべきものとすれば、哀なる魂を明確に認めるのは必然のことである。身体は単に自我表現の一つの車に過ぎぬ。故に肉体が敵をして真理を認めしむる妨げとなる時は、真理護持者は喜んで之を捨てる。彼は若し其の肉体を犠牲にすることが敵の意見を変じ得ると信ずれば、喜んで其の肉体を抛つのである。

「真理護持は、選ばれたる少数者にのみ実行が可能だと言はれる。されど予の経験は然らざることを実証する。一度び其の単純なる原則、真理を愛し且苦難に拘らず之を確立すると云ふ原則さへ了解すれば、如何なる人も行ふに難くない。そは他の徳育と同じく、困難であり又容易である」。

ガンディは如是の主義を擁し、英国政治は真理と相容れず、従つて印度に於ける万悪の泉なるが故に、印度人は真理を護持する為に、手を英国と絶たねばならぬとした。印度人は一切の方面に於て英国と協力してはならぬ。之が為

に仮令英国が武力を以て印度に臨むも、決して暴力を以て抵抗してはならぬ。印度は暴に代ふるに暴を以てする矛盾に陥つてはならぬ。その為に如何なる苦悩を吾身に招かんとも」。

「悪に屈服して随順するは、悪と妥協し荷担することである。悪は飽く迄も之に抗し之と戦はねばならぬ。

かくの如き主義並に運動は、当初空論夢想として英人の哂笑する所であつた。然るに事は彼等の想像に反し、ガンディの勢力は燎原の火の如く全印度に広まつた。二十年前、ガンディが不法なるローラット法案に激し、アムリッツァルの虐殺に激し、セーヴル条約の不信に憤りて此の運動を開始するまで、印度の完全絶対なる独立を理想とする者は、所謂革命党の諸子に限られ、多数の有識階級は、大英植民帝国内の一自治領たらんことを目的として居た。一般民衆に至りては、斯くの如き政治問題に対して、概ね無智なるか然らずば風する馬牛であつた。然るに今日を見よ、英国の庇護の下に立つ藩王、英国政府の官吏、及び現在に於て富貴と栄誉とを享有する一部の階級が現状維持を念とする以外、印度人の殆ど全部が一斉に英国統治の根本的排斥を理想とし、既に其魂に於て之を実現して居るではないか。而して此の偉大なる政治的事業は、其の成功の本源をガンディ其人の出現に有する。予はガンディに学べる印度は、晩かれ早かれ英国の鉄鎖を絶ち、希有壮厳なる独立の凱歌を奏するであらう。且其の正しき進路をガンディに学べる印度は、既に政治的に覚醒し、日よつて、最早や決して退転せざるべき印度の政治的復興を確認する。

七　印度復興の確実性

述べ去り来りて、予は略ぼ印度復興の内面的径路を明かにした。更に完璧を望まば、史学・言語学・人類学・植物学乃至其他の科学的方面に於ける現代印度の旺盛なる知的活動――殊に復興印度の科学的精神を具現せるジャガディス・ボースの功績を述べねばならぬけれど、今は唯だ国民生活の最も直接なる発現と見るべき宗教・芸術・哲学・政

治に就いて述べるだけに止めた。而して之によつて略ぼ印度復興の確実性を立証するに足りたと信ずる。

英人故W・W・ピアスン君は予の親しき友であつた。彼は一九〇七年印度に来り、カルカッタに於て教鞭を執り、後に詩人タゴールと親交を訂して其の建立にかかる学院の一長老となり、詩人の日本に来遊するや君も共に来り、詩人去りて後約二年我国に滞留し、其の滞留中に「印度の為に」と題する小著を公けにした。時は一九一八年の夏のことである。彼は此の著書の第二章に「印度は準備成れるか」と題し、語勢を強めて「然り！」と答へて居る。予は印度復興を確信する者、決して予一人の事に非ざるを示すため、又一つには印度の形勢に関する好箇の鳥目観を与へるため、親友の叙述を下に訳出して置く——

「多くの批評家は、印度は自治の準備未だ成らずと云ふ。而も準備の意味如何と問へば、彼等の答ふるところ漠然として捕捉すべくもない。一国が自ら治むる力あるか無きかを知る最も肝心なる公準の一は、其国に治者階級として国政に任ずべき人物ありや否やと云ふことである。印度は、其国に治者階級として居らぬか。断じて、否である。今日の印度は世界の孰れの国にも劣らぬ有識階級を有して居る。

「先づ宗教に於ては印度が偉大なる指導者を生み出す力ある事を疑ふ者ないであらう。ラーム・モハン・ロイ、デベントラ・ナート・タゴール、ギドヤシャガル、皆な第十九世紀に於て社会的・宗教的指導者として異常の力を現はしたる偉人である。如何なる国も彼等に優る宗教家の典型を出しては居らぬ。今日に於ても印度には深奥なる哲学者にして宗教家を兼ねたるアラビンダ・ゴーシュが居る。彼は今や来るべき世界の最大なる宗教的並に社会的指導者の人として印度人の渇仰を受けつつある。

「哲学的思索に於ては、印度は常に世界の教師として認められて来た。故に印度が今日多くの詩人・哲学者・思想家を有することは怪しむに足らぬ。タゴール一家のみでも既に幾多の偉人を出して居る。前世紀にはデベントラ・ナ

ートあり、現在には詩人ラビントラ・ナート、哲学者にして数学者なるドギジェントラ・ナート、芸術家アバニンドラ・ナート及びガガネンドラ・ナートがある。彼等はベンガル詩人及び女士の作品、カルカッタ美術学院の絵画、皆な彼等の流を汲む。ベンガル以外の諸州にも、唯に文学のみならず、歴史・考古学・経済学・政治学の諸部門に於て、有為なる学者が輩出しつつある。今日此等の学者が多く世に知られざるは、其の著作が英語を以て書かれて居らぬ為である。

「さり乍ら印度は、啻に偉大なる思想家・哲学者・詩人を有するのみならず、一切の現代諸国が有する科学者・教育家・医師・操觚者を初め、ラタン・タタ及びR・N・ムケルジの如き企業家を有して居る。科学者のうちでは、化学者P・C・ライ及びマルコニに先だちて無線電信を発見し、自ら発明せる器械によつて植物の感覚を実験しつつある植物学者J・C・ボースの名は、全世界に知れ渡つて居る。さり乍ら仮令其名は知られずとも、科学的研究に多大の不便を感じて居る。若し日本政府が其の国民に与へるほどの奨励と便宜とが印度人に与へられるならば、其の科学界に対する貢献は、日本の夫れよりも遥かに大であらう。

「出版界に於ては土語及び英語の幾多の新聞があり、其の出来栄えは英人が印度に於ける発行するものに比して些の遜色ない。また多数の読者を有する週刊乃至月刊の雑誌も多い。カルカッタで発行されるヘモダン・レビューV及びヘプラバーシVの主筆ラーマーナンダ・チャッテルジ、マドラスのヘインディアン・レビューVの主筆ナタラジャンの諸君は、予自身の親友であり、其の才能と識見とに於て、断じて英米第一流の記者の下に在るものでない。彼等は啻に豊富なる世界的知識を有するのみならず、大なる犠牲と高き道徳的理想の為に其の雑誌を用ゐて居る。

「英國に於て政治家の多數が法律家出身であり、法律家を大臣に擧用することが英國政治の一特色となつて居る。印度に對して如何なる偏見が逞しうせられるにせよ、印度法律家の才能を認めぬ訳には行かぬ。或は侮蔑の語気を以てベンガル人は他の役には立たぬけれど、法律家には適して居るとさへ言つて居る。英國其他の歐羅巴諸國では、法律家たることが政治家たるべき最善の階梯の一つとせられるのに、印度にはラネード・アリ・イマーム、アシュートシ・ムケルジ等の法律家があり、此の方面に於て決して他國の助力を必要とするものでないことを立証して居る。

「教育に於ても、教育者としての最も高い地位が、悉く外國人によつて占められて居るに拘らず、印度は独り学識優秀なるのみならず、其の高徳を以て学生を感化せる多數の教育家を出して居る。バリサールのクマール・ダット、ベンガルのB・Nシール及びP・C・ライ、パンジャブのムンシ・ラーム、デーリのルードラ、ベナーレスのバガヴン・ダース等は、數ふるに遑なき大教育家の二三を擧げただけである。生徒の話す言語も知らず、其の働きつつある國に殆ど何の経験もなき外人教師が、此等の人々よりも有為なる教育家たり得る道理があらうか。

「政治的方面に於ても、印度は偉大なる才腕と高貴なる人格とを具ふる人物を出して居る。彼等は一身を印度の為に献じて、何等物質的報償を期待しない。ゴケールを知る者は、若し彼が英國に生れたならば、グラッドストンやアスキスに譲らぬ宰相たり得たことを認めるであらう。彼の大敵なりしカーゾン卿すら、其の才幹を称揚せざるを得なかつた。またガンディも指導者として無比の天稟を示せる一人である。彼は南阿に住むこと二十年、其の収入多かりし弁護士の職を棄て、専ら印度人の為に一切を犠牲として働いた。彼は能く印度教徒と回教徒を結合せしめて全印度人を一体とし、印度人を奴隷視せる南阿政府其者にまで敬意を払はしめた。若し彼にして独立國に生れたりせば、其の才幹は直ちに認められ、敵意ある政府と戦ふ為に非ず、其國の建設的政策の為に之を用ゐることであらう。

「最後に印度人は行政的能力を欠くと言ふ者があるけれど、事実今日の印度政府に於て、実際行政の衝に当つて居るのは印度人であり、仮令明日英国の代表者が悉く引上げても、印度の行政機関は殆ど何等の変化なしに運転されて行くであらう。唯だ一事の異なるところは、其時の政治目的は、英国と其の植民地とを富ますことに非ず、実に印度の衰退を防ぐに存するであらうと云ふことである。

「是くの如く印度は世界に於て自由なる、また最も尊敬せらるる諸国と、同一の道徳的水準に立ち得る有識階級を有して居る。果して然らば、印度に自治の準備なしとの証言は最早許さるべきものでない」。

予の叙述だけで不安を感ずる人々は、如上のピアスン君の言によつて疑惑の雲を払つて欲しい。印度は現に復興して居るのである。而して此の復興印度は、一切の点に於て印度的である。故に其の創造しつつある文化は、截然として西欧文化と相異なれる印度文化である。世界は長く文化とは西欧文化のことと迷信して居た。而も世界戦及び世界戦後の歴史的進行は、遂に西欧文化の破産を招いた。かかる時に際して、印度精神の復活は、実に二重の意義を有する。第一は外面的に、其の政治的独立が、曾に印度に於てのみならず、禍悪を世界に蒔くイギリスから、一挙にして強国の地位を奪ひ去るべきことである。第二は、内面的に、其の精神的独立が、印度本来の精神に根ざせる新文明の創造によつて、人類向上の為に貢献すべきことである。

「いつの世にてもあれ、正法衰へ非法栄ゆる時、吾れ直ちに自己を現ず！」――これクリシュナがアルジュナに約束せる言葉である。予は信ずる、クリシュナ一度び方向を決着すれば、世界一切の力は、意識すると否とを問はず、悉く率ゐられて、其の定めたる方向に奔流し行く。そは大風興つて海洋に逆巻く波濤の、或時は高く或時は低きが如く、成功と失敗との幾波瀾を繰返すであらう。

イギリスは印度の統一を困難ならしめるため、有らゆる術策を講じて来た。言語は千差万別である。風俗は区々である。信仰の対立は激烈である。イギリスは未だ曽て之を融和し、均斉し、統一し、調停せんとせざりしのみならず、却つて乖離反目を助長して来た。それ故にイギリス統治の没落が、直ちに印度統一国家の出現を意味するものでは断じてない。イギリスの手を離れたる印度が、先づ陥るべき運命は恐らく、乱麻の如き混沌であらう。而も一切の起伏を通して、浪はひた寄せに定められたる方向に進む。印度も竟に独立の実を挙げるであらう。其際に何者にも優りて印度統一のために貢献するものは、ガンディィの偉大なる人格であらう。年少気鋭の闘士は、いまやガンディィの革命戦術に不満を抱いて居るとは言へ、時局更に進んで全土乱離に陥る如きことあらば、印度の民は再びガンディィを導師と仰ぐであらう。印度独立は単純なる政治問題でない。吾等は其の底に潜む深甚なる世界史的意義を明確に認識せねばならぬ。

ジャワハルラール・ネール

―はしがき

印度国民運動に於て、マハートマ・ガンディに次ぐ偉大なる指導者は、疑ひもなくジャワハルラール・ネールである。昨年十月二日を以て古稀の高令に達せる老いたる聖者の後を継いで、やがて印度独立運動の最高指揮者たるべき者は、恐らくネール其人であらう。ジョン・ガンサーは、其著「亜細亜の内幕」に於て、ネールを紹介せる一篇を下の一句で結んで居る――「印度を旅行して到処で受ける最初の政治的質問は、貴下はジャワハルラールに会つたか、彼は何をして居るかといふことであつた」。いまやネールは、それほどまで重きを印度になして居り、その一言一行が国民至深の関心を惹いて居る。それ故にネールを知らずしては、最早今日の印度を知るべくもない。

ガンディとネールとは、互に他を推重し、敬愛して居る。例へば一九三三年五月、国民会議と印度官憲との闘争が極度に激化せる時、ガンディがエラヴダ監獄内に於て三週間断食を行ふ数日前、獄中よりネールに宛てたる下の書翰は、如何にガンディが彼を親愛して居るかを立証する――「事柄の真相が判らぬ自分に何が言へようか。予は未知の国土で道に迷つた感がする。貴下のみが唯一の道しるべで、暗闇を手探りで歩まうとするが、躓いてばかり居る。何事が起らうとも、予の愛情と思想とは、常に貴下と偕に在る」。而してネールもまたガンディに対して至深の敬意を払ひ、彼の生涯に最も深刻なる個人的感化を与へた者は、彼の父モティラール・ネール及びガンディだと言つて居る。それにも拘らず、この偉大なる両印度人は、その性格に於て、またその心性に於て最も著しき対照をなして居る。

まづガンディの性格が徹底して宗教的なるに対して、ネールは飽く迄も理知的である。ガンディは、総て神が考案せる劇中の人物である。シェークスピアの戯曲に現れる人物が、その作者に対して有つと同様の関係を、吾等は神に対して有する」ものである。彼は常に祈禱し、一感応道交するためである。彼曰く「断食潔斎しなければ、予は眼を失へるに等しい。蓋し眼は外界を観るものであり、断食は内界を観るものであるから」と。彼は其の性格並に哲学に於て、紛ふべくもなき印度教徒であるが、基督教に好意を示し、回教にも敬意を払ひ、乃至一切の既成宗教を容認する。彼に従へば、印度は宗教の国なるが故に、決して政治家によつて統一せられることなく、唯だ聖者によつてのみ導かれるものである。

然るにネールは、謂はゆる宗教に対して何等の敬意をも払はない。彼は言ふ――「印度は何はさて置き宗教の国であると謂はれ、印度教徒・回教徒・スィク教徒及び其他が、皆な彼等の信仰を誇り、死を以て其の真実を立証せんとする。而も印度又は他国に於て、謂はゆる宗教、又は少くも既成宗教の現状は予をして嫌悪の念に堪へざらしめる。予は屢々之を非難し、且之を掃蕩し去らんと望んで来た。殆ど総ての場合、宗教は盲信と反動、独断と頑迷、迷信と搾取、既得利益の擁護に味方する。予は宗教には其れ以上の或者が存すること、人間の至深の要求に応ずる或者が存することを熟知して居る。……而も既成宗教は、その過去が如何に在りしにもせよ、今日に於ては概ね真実の内容を失ひ尽せる空虚なる形式に堕して居る」。従つて彼は、専ら精神的方面のみを高調する宗教運動は、決して印度を救ふ所以でないと力説する。一個々の人間が、環境と境遇とを超越して偉大なる精神的高峰に登ることは可能であらう。而も多くの団体又は国民に取りては、内面的向上の途を歩む為に、先づ或る程度の外面的発達を必要とする。経済的事情の犠牲となり、生きんがための苦闘に束縛拳肘せらるる人間が高き内面的自覚に達し得ることは至難である。蹂

躙せられ搾取せらるる階級は、決して内面的に発達すべくもない。政治的並に経済的に他国に隷属し、束縛せられ、搾取せらるる国民は、決して精神的成長を遂げ得ない。かくて内面的発達のためにも、外面的自由を獲得し、且環境を改善もせんとする運動に際して、当面の真個の目的を失敗に帰せしめるやうな手段は取りたくない。ガンディ翁が、手段は目的よりも重大だと言つたのは、此の意味であらうと思ふ。但し其の手段は、目的の達成に役立つものでなければならぬ。然らずば其れは努力の浪費であり、時としては却つて内外両面に於ける一層大なる堕落に陥ることさへある」。従つて彼は、ガンディの非協力運動のみが印度解放の途であるとは考へない。

両者の風貌が、また其の性格の如く違つて居る。ガンディは、ウィル・デューラントの言葉を藉り来れば「銅色の顔と肌と、灰色の坊主頭と、骨張れる頬と、優しい小さな褐色の眼と、殆ど歯の無い大きな口とを持ち、而して更に大きな鼻と痔せた手足とを持てる、亜細亜の最も貧弱な、最も弱々しい男」である。此の醜く弱々しき風貌のうちに最も美しく且強き魂と、最も逞しき精力とを宿して居ることは、更めて附言するまでもなからう。然るにネールは、躯幹長大、眉目秀麗、態度また優雅にして荘重である。彼は平素国民会議制服の白衣を纏つて居るが、そのガンディの帽を被れる姿は、わけても美しく見える。其上ガンサーに従へば、彼は「実物よりも写真が一層立派に見える幸運者の一人である」。

ネールの魂も、また其の風貌の如く清純であるやうに見える。往々にして彼は余りに清廉であり且潔癖であるために、政治家として成功せぬであらうと言はれる。ガンディは定義に拘泥せず、常に妥協し、屢々譲歩し、その目標は不変であるが、その態度は変通自在である。曽て印度回教聯盟の指導者ジンナーは、ガンディが数回に亙つて発表せる「印度独立」に関する七個の互に相異なる定義を列挙し、その孰れが真実なるやを彼に向つて質問した。然るにネ

ールは、飽迄も良心的に定義を作り、厳格に之に従ふ。彼には微塵も芝居気がない。彼は謙遜で慎み深く、語る時には常に控目に物言ふ。政治的集会に於ても、彼の演説は大学教授の講義に似通つて居る。彼は自ら馴々しい態度を取らず、他人の無作法なる差出口をも好まない。彼は群衆に親しみ、群衆もまた彼に親しむ。然し乍ら彼は自分を忘れるほど群衆と親しくはなり得ない。彼自身の言葉によれば、彼は常に群衆の中に居るが、決して群衆のものではない。

ネールは寂寥の人である。彼は中世紀的なる印度に生れ、西欧的教養の下に徹底せる近代人となつた。予は到処に居辛く、何処にも故郷がない」と彼は述懐する。まことにガンサーの言葉の如く、彼は西欧人となれる印度人、社会主義者となれる貴族主義者、民衆指導者となれる個人主義者である。彼は其の複雑なる性格、高貴なる品性、無比の健康、無限の精力、事務の才幹を以て、印度独立の戦士として、前後二十五年の善戦健闘を続けて来た。彼は三十二歳の時に初めて獄に投ぜられてから、下獄実に八回に及び、人生の最盛期を鉄窓裡に過ごした。

彼は一九三一年より一九三三年に至る第六回の下獄の間に、当時十三才なりし愛嬢インディラに宛て百九十六回に亙つて世界歴史を順次に書き送つた。そは後に上下二巻の「世界史瞥見」として出版されたが、菊判一五六九頁の大冊である。而して一九三四年六月より一九三五年二月至る最後の下獄に際し、獄裡の無聊を慰むるため、また現代印度の政局を静に回顧するため、更にまた自らの行動を粛そかに反省するため、一篇の自叙伝を書上げた。そは後に菊判六百頁の一巻として出版されたが、アーキン卿が「何人も此書を読まずしては印度を理解することを得ず」と言へるほど、印度研究上の貴重なる文献である。そは最も誠実なる自叙伝であるのみならず、現代印度の忠実なる物語であり、印度の生活と政治との精緻なる絵巻物である。予は此書に拠つて、ネール及び彼の惨ましき国土に就いて語るで

あらう。

二　生立ち

ジャワハルラール・ネールはカシュミルの名家の裔である。今を距る二百年前、モーガル帝国が既に衰へ初めたころ、梵語及び波斯語の碩学として名高かりし彼の祖先カウルが、名誉と栄達とを求めてカシュミルの山地より豊妖な中原に出で、帝国の首府デーリに居を構へて朝廷に仕へた。其後家運に隆替あつたが、一八五七年の大乱によつて時勢急変するに及び、ネール一家はデーリよりアグラに亡げ、一先づ此町に住むこととなつた。彼の父モティラール・ネールは、一八六一年五月六日、奇しくも詩人ラビンドラ・ナート・タゴールと同年同月同日に、此のアグラの町で生まれた。彼の祖父はモティラールの誕生以前に此世を逝つたので、モティラールよりも遥に年長なりし二人の兄が、多数の家族を擁するネール家を扶養した。その二人のうち、長兄は印度政府の司法部に奉職して諸方に転任したが、次兄ナンドラール・ネールは官職を辞して弁護士となり、初めはアグラに開業し、後にアラハバードに移つたので、ネール一家も彼に従つた。

モティラールは、次兄ナンドラールの愛護と指導との下に成長し、彼と同じく法律を学んで弁護士となつたが、其の明敏なる頭脳と、旺盛なる闘志と、無比の励精とを以て、若年にして夙くも確乎たる地歩を法曹界に占め、年と共に富裕になつた。当時のモティラールは、身も魂も法律に打込んで居た。彼はイギリス人の性格並に生活みならず、徒らに口舌を弄して一事をも成し得ざる印度の政治屋を軽蔑して居た。彼の収入が増加するに連れて、その生活も豪奢になり、且次第に欧羅巴風になつた。ジャワハルラールは、一八八九年十一月十四日、アラハバードに於て是くの如き家庭に生れ

た。彼が誕生してから十一年間、天はモティラールに子を授けなかつたので、彼は由緒ある富家の一人息子として、存分に甘やかされて育つた。

父は彼の十一歳の時、イギリス人F・J・ブルックスを彼の家庭教師に傭つた。ブルックスは、ネール家に止宿して三年間彼を教育せる間に、大なる感化を彼に与へた。彼は読書の趣味をジャワハルラールに教へ、科学に対する興味を鼓吹した。父は其子のために小さな実験室を建ててくれたので、彼等は物理学や化学の実験のために、毎日長い時間を其の実験室で過ごした。

日露戦争が始まつたのは、彼の十四歳の時であつたが、日本の連戦連勝が深刻なる感激を彼に与へた。彼は戦争記事を読むために、日々の新聞を待ち焦がれた。「予は日本に関する多数の書籍を註文し、その若干を読まんとした。日本の歴史は理解し悪かつたが、日本の昔の武士の物語や、ラフカディオ・ハーンの爽やかな文章は予を喜ばせた。国民的思想が予の胸に充満した。予は欧羅巴の羈絆を脱せる印度の自由並に亜細亜の自由を想望した。予は剣を提げて印度のために戦ひ、印度の解放に貢献すべき武勲を樹てたいと夢想した」。

一九〇五年五月、彼は両親に伴はれて英国に渡り、ハロー学校に入学した。彼はドーヴァーよりロンドンに至る汽車中で、対馬沖に於ける日本海軍の大勝を知り、意気の昂るを禁じ得なかつた。ハローでは、ラテン語以外の学課は、彼の学力が遥に同級の英国青年を凌いで居た。彼は其父への手紙の中に、英国学生が如何に愚鈍であるかを書き送り彼等が遊戯や勝負事の外に話題を有たぬことを笑つて居る。

故国印度では此頃より頓に政治不安が昂まつた。英国新聞の故意に貧弱なる報道も、敏感なる遊子の心を傷ましむるに足りた。恰も其のころ、彼は学術優等の褒賞としてガリバルディ伝を貰ひ、貪る如く之を読んだ。「予は印度に於ける同様の偉業自由のための花々しき戦闘を想ひ浮べた。予の心には印度とイタリーとが不思議にも混一された」。

ハロー在学僅に二年にして、彼はケムブリッヂ大学に入り、自然科学の研究を志し、専攻課目として化学・地質学・植物学を択んだが、在学三年間に文学・歴史・政治・経済に関する多くの書籍を読んだ。此頃の彼は尚は未だ確乎たる人生観を有せず、彼自身の言葉によれば「一つには青春の常として、また一つにはオスカー・ワイルドやウォルター・ペーターの感化により一種の漠然たる快楽主義者」であつた。

当時ケムブリッヂ大学には、少なからぬ印度学生が留学して居た。故国の政情が激化し、ティラックやアラビンダ・ゴーシェの活動、ベンガルの排英運動に関する報道が、彼等の感情を煽り立て、殆ど一人の例外もなく革命運動を讃美し、言論は過激を極めて居た。但し彼等の殆ど総てが、卒業後は印度政府の官吏となり、司法官となり、乃至実直なる弁護士となり、「往年の悲憤慷慨家にして、其後の印度政治運動に貢献せる者は殆ど無い」。

而も急迫せる印度の空気は、従来訴訟事件の外に他を顧みざりし父モティラールをして、政治に関心を有たしめるに至つた。此事は甚だ彼を喜ばしめたが、但し父の政見に対しては不満であつた。父は穏健派と行動を共にし、激しく急進派に反対した。彼は何故に父が穏健派に与せるかに就いて下の如く説明する――「彼の明晰なる頭脳は、強硬過激なる言論は、之に相応する行動を伴はずば、畢竟無益なることを看取した。彼は有効なる行動を期待し得なかつた。国産運動及び英貨排斥運動は、彼には成功すべくも思はれなかつた。且此等の運動の背景は、彼と風馬牛なる宗教的国民主義であつた。彼は古き印度の復活などを念頭に置かなかつた。彼は之に就いて何等の同情も理解もなく、却つて種姓制度其他の数々の古き印度の社会風習を徹底して悪んで居た。彼は欧羅巴を尊重し、欧羅巴的進歩を望み、且それは英国との協調によつて可能だと信じて居た。社会的に言へば、一九〇七年の印度国民主義は、明確に反動的であつた。印度の新国民主義は、他の東洋諸国に於けると同じく、必然一種の宗教的国民主義であつた。かくて当時の穏健派は、一層進歩的なる社会思想を代表せるものであつたが、彼等は民衆と何等の接触をも有たぬ少数の上

層群であつた」。

かかる間に一九一〇年彼はケムブリッヂ大学を卒業した。彼は一生の仕事として何を択ぶべきかという問題に当面したが、結局父と同じく弁護士にならうと決心した。彼はロンドンに出でて法律を学び、可もなく不可もなき成績で片端から試験に及第し、二年にして弁護士の資格を取り、一九一二年夏、英国留学七年の後に印度に帰つた。

三　印度の混沌

ジャワハルラールが帰国当時の印度政情は沈滞して居た。ティラックは獄中に繋がれ、有為なる指導者を失へる急進派は弾圧せられ、穏健派はミント・モーレー案によつて去勢せられ、国民会議は其等の穏健派によつて占められて居た。「一九一二年のクリスマスに、予は一議員としてパンキポールに開かれし国民会議に出席した。そは英語に通じたる上流階級の仕事で、モーニングコートと折目正しきヅボンが際立つて目についた。そは実質に於て一個の社交倶楽部であり、何等の政治的昂奮も緊張も無かつた」。

彼はアラハバード高等法院附の弁護士となつたが、法律事務には興味を覚えなかつた。但し彼は此間に多くの英人官吏と接触し、彼等の真実の姿を知ることが出来た。「英人は通例官界に関係ある同種類の印度人とのみ交際し、真実の印度人に接することは殆ど無い。仮令会つても彼等の本心を吐露させることが出来ないのは、英人と言はず印度人と言はず官僚を社会的に優位に祭り上げたが、此の官僚は最も愚鈍で偏狭である。有為なる英国青年でさへ、印度に赴任すると幾くもなく知識と教養の二で無感覚となり、一切の生命ある思想や運動と絶縁する。果てしなく回り来る書類を終日いじくつた後に、彼は運動したり、倶楽部に往つて同僚と雑談し、ウヰスキーを飲み、滑稽雑誌や絵入新聞を読んだりする。……印度人官吏も彼等に優るところ無い。蓋し彼等は英人を手本とする

からである。……此の官僚の雰囲気が、殆ど印度の中流階級全部に浸透し且支配して居る。医師、弁護士其他が此風に化せられ、半官半民の大学の講堂さへも此の空気に満ちて居る。此等の人々は隔離せる世界に住み、民衆は愚か、下層の中流階級とさへも接触が無い」。

かかる間に世界戦が勃発した。「口では英国への忠誠が声高く叫ばれたけれど英国に対する同情は殆ど無かつた。穏健派も、急進派も皆な心密かにドイツの勝利を喜んだ。ドイツを愛する筈はないのだが、唯だ吾等の支配者が膝を屈するのを見たかつたのだ」。やがて印度の政治運動が次第に活発になつて来た。ローカマニヤ・ティラックは牢獄より出で、アンニー・ベサント夫人と共に自治聯盟を結成した。国民会議も稍や活気を帯び、回教聯盟も会議派と歩調を監禁して気勢を殺がんとしたが、それは結局運動を激化させることとなつた。全印度の空気は頓に緊張し、わけても青年は昂奮した。政府は此の形勢に驚き、先づベサント夫人臆病なる穏健派を、続々聯盟から脱退せしめた代りに、勇気ある穏健主義者をして義憤に燃え立たしめ、進んで運動に加はらしめたからである。其の最も有力なる一人が、取りも直さず彼の父モティラールである。

頑強なる穏健主義者たりしモティラールは、其子が動もすれば急進主義に走らんとするを見て深憂を抱いて居た。ジャワハルラールは、決してベンガル青年の如き過激なる革命思想を抱いて居なかつたが、印度の現状を坐視するに堪へなかつた。彼は英国の印度統治に猫の如く屈従するは、個人としても国民としても、忍ぶべからざる不名誉であると痛感し、起つて之と戦はねばならぬと覚悟した。モティラールも穏健派の哲学には不満を感じて居たが、急進派の言動には大なる反感を抱いて居た。彼は総ての事に於て、絶対に他に途なしと確信するに非ずば、決して一より他に移らうとせぬ性格であつた。一歩前進することは、彼に取りて大なる精神的苦闘であつた。而も一たび進めば、彼は断じて後退しなかつた。ベサント夫人の監禁は、終に彼をして政治的に進一歩せしめたが、爾来更に歩一歩前進を

続け、やがて多年歩調を共にし来れる穏健派と袂を別ち、ガンディと共に最も勇敢なる印度解放の指導者となつた。

さて世界戦は、印度工業の急速なる発達を促し、資本階級の富と権力とを増大した。此等の如く幸運に恵まれず、唯景気の潮に乗つて富めるが上にも富まんとして居た。但し大多数の印度人は、亘より彼等のために立身出世の途が拓けんことを切望して居た。彼等は戦時中に起れる数々の政治運動が、必ず大せられ、彼等の負担の軽くなることを待ち焦がれて居た。中流階級の印度人は、憲法改革によつて自治の範囲が一層拡何等かの実を結ぶべきものと期待して居た。大衆殊に貧農階級の間にも、政治的不穏の徴候が萌し初めて居た。回教徒の間には、聯合国のトルコに対する態度について、またカリフ問題について、不満の感情が昂まつて居た。

総じて印度は待つて居た。満腔の希望を以て、而も恐怖と不安の感情を混へ乍ら、印度は待ちに待つて居た。然るに英国の新印度政策の第一回の提案は、革命運動弾圧を目的とせるローラット法案の成立であつた。政府と警察とに対して、「弁護人なく、控訴なく、弁論なし」に、彼等の欲せざる人物を逮捕し投獄する権能を与へんとする此の法律は、有らゆる印度人の憤激を買ひ、最も穏健なる政客さへも之を糾弾した。モハンダース・カラムチャンド・ガンディが、その竜の如き姿を印度政局の舞台に現はしたのは、実に此時である。

ガンディは世界戦中に南阿より印度に帰り、同志と共にサバルマティの道場に住んで居た。南阿に於ける真理護持闘争以来、彼は印度で著名になつて居た。彼は一九一七年には、ビハールのチャムパラン地方で、白人農園主の虐待に苦しめる小作人のために戦ひ、其後グジラートのカイラ地方の農民のためにも戦つた。一九一九年の初頭、彼は重病に罹つたが、それが恢復するかせぬかの時に、印度総督に向つてローラット法案に同意を与へぬやう嘆願書を提出した。此の嘆願が容れられぬのを看て取ると、彼は最初の全印度運動の指揮者として起ち上つた。彼は真理護持団を結成し、ローラット法に対する不服従を団員に命じた。そは明らさまに自ら進んで牢獄への道を歩む運動であつた。

新聞によつて此事を知れるネールは、恰も雲霧を抜いて青天を仰ぐが如く感じた。彼は此道こそ竟には最後の勝利に導く道であると考へ、仰へ難き情熱に燃えて、直ちに真理護持団に加入せんと欲した。然るに彼の頭に三斗の冷水を注ぎかけたるは、父モティラールの態度であつた。父は新しき一歩を踏み出す前に、常に慎重に其の結果を考慮する習慣であつた。父は仔細に真理護持団並に其の計画を検討したが、すればするほど反感を増した。大勢が監獄に行つたところで何になるか、左様な事で政府を圧迫し得るものかと、此の法律家は考へた。其上に彼は、一人息子が入牢するといふやうなことを想つても見たくなかつた。それ故に彼は、ジャワハルラールの真理護持団加入に反対した。而も其子が容易に其志を翻へさざるを見るや、父は直接ガンディをして其子を説かしめたので、ジャワハルラールも止むなく思ひ止まつた。

ガンディの運動は、世界に於て類例なき目新しきものであつた。そは比較すべきものが無きが故に、多くの指導者をして判断に迷はしめ、効果を危ぶましめたのも無理は無かつた。而も一度びガンディが、一九一九年四月六日の日曜日を期して、全印度に亙る罷業、業務停止、及び集会を命じ、茲に謂はゆる真理護持運動を開始するに及んで、その指令は、印度の最も辺鄙なる村々にまで届き、町と言はず、全国の有らゆる人々、有らゆる団体が之に参加した。而して此の運動に続いて数々の事件が連発し、遂にパンジャブには戒厳令が布かれるに至つた。パンジャブは印度の他の部分から隔離せられ、報道は絶え、人民の出入は至難となり、不安と恐怖との幾月かが続いたが、戒厳令の撤廃と共に、パンジャブで行はれたる恐るべき惨事が分つて来た。その最も悲惨なるは四月十三日に起りしアムリッツァルのジャリヤンワラ園の虐殺で、約二千の武器を持たざる民衆が、ダイヤー将軍の指揮せる機関銃のために殺傷された。

パンジャブに於ける非違の数々に対する痛恨が、印度全国に漲り、その実状を明かにするために政府でも国民会議

でも、調査員を任命した。会議側の調査は、主として彼の父モティラール及びC・R・ダースの指導下に行はれ、ガンディも之に協力した。此の調査の間に、ネールは屢々ガンディと会見した。ガンディの提案は、調査員会では常に突飛奇抜に思はれ、屢々其の反対を受けた。而もガンディは巧みに彼等を説得して其の提案を容れしめ、且その結果は、彼の聰明と智慧とを立証したので、ネールは次第にガンディを尊敬するやうになつた。

四　政治的目覚め

さて其頃までに印度に於ける政治運動は、中産階級のそれであつた。急進派も穏健派も、等しく中産階級を代表したが、彼等は現何よりも先づそれぞれの地位の向上を目指して居た。穏健派は主として少数の上層中流階級を代表して居た。工業労働者は、世界大戦にイギリス統治下に利益を得て居るので、如何なる急激なる変化をも好まず、専ら現状を維持せんとし、政府及び大地主とも緊密なる関係を結んで居た。之に対して急進派は、下層中流階級を代表して居た。農民は無智極貧に中に其数を激増したが、僅に二三の都市で組織を与へられて居ただけで、殆ど無力に等しかつた。して其の悲惨なる運命に諦め、彼等の来る総てのもの——政府・地主・金貸・小役人・巡査・法律家・僧侶から搾取され通しであつた。而して英人経営の新聞は言ふまでもなく、謂はゆる「国民会議派」の諸新聞さへも、其実は印度の大地主又は資本家の投資による関係から、労働者や農民に関する記事を殆ど取扱はなかつた。印度の知識階級は、空しく「政治的自由」を叫び、全地に漲る怖るべき貧窮と悲惨とに面を向けようとしなかつた。ネール自身が「一九二〇年に於て、予は全く工場及び田園に於ける労働の状態を知らず、従つて予の政治的見解は完全にブルジョア的であつた」と告白して居る。

然るに此年六月、アラハバード市を距る五十哩の奥地の農民約二百が、ラーマチャンドラと呼ぶ一指導者に導かれ

言語に絶する彼等の窮状を該市の政治家達に訴へる為に押寄せて来た。ネールは此事を聞きて、ヤムナ河の一支流の畔に疲れ果てて蹲踞して居た農民を訪ひ、その世にも憐れな姿を見その切々たる訴へを聴いた。ネールが「此の訪問は、予に取りて一個の天啓であつた」と言つて居るほど、彼等の限りなき悲惨がネールの魂を震撼した。彼は此年及び翌一九二一年に亙り、暇あれば即ち農村を巡回して、具さに農民の実状を視察した。彼自ら語る――「予は数限りなき彼等の悲痛なる物語、次第に増し来る地代の堪へ難き重荷、不法極まる誅求、土地と泥小屋からの放逐、仮借なき打擲、地主の手先・金貸・巡査などの阿修羅どもが四方を取巻いて彼等を餌食とすること、終に辛苦すれども其の作れるものは彼等のものに非ざることを聴いた」。此の経験は後年のネールの政治的進路に重大なる影響を与へた。そは彼をして社会主義者たらしめ、独立運動中心者中の異色ある政治家たらしめた。

ネールが真個の政治的目覚めを体験せる此年の秋、パンジャブ問題とカリフ問題の非違糾弾を目的として、国民会議の特別議会がカルカッタに開かれた。ガンディが、印度は非暴力・非協力を以てイギリスの不義と戦ふべしとの破天荒なる主張をなせるは、実に此の議会に於てである。而も此の新奇なる戦術は、ラージパト・ライやC・R・ダースを初め、殆ど総ての有力なる議員の賛成せざる所であつた。彼等は皆な、此の空前にして無類なる戦に躊躇し、且その勝利を危ぶんだ。有力者のうち、飽くまでガンディを支持したのは唯だネールの父モティラールだけであつた。但し大多数の議員は、皆なガンディの際立てる人格に魅せられ、無条件に之に賛成したので、国民会議は此案を可決し、やがて非協力運動が実行に移されることとなつた。

印度政府は、好むと好まざるとに拘らず、極めて広範囲に亙る印度人の協力に基礎を置いて居る。若し此の協力が撤回され、ボイコットが遂行されるならば、それは政府に対して重大なる脅威であり、それだけ人民の力を増すべき

筈である。それは完全に平和的であるが、決して単なる無抵抗ではない。真理護持は、非暴力的ではあるが、対する抵抗の、厳粛なる様式である。此の戦術は、インド人の気風といみじく適合せるものであつた。ガンディ万歳 **Mahatma Gandhi ki jai**」と関の声を挙げて、此の新しき福音に歓喜した。と運動初期の成功とは、最初躊躇せる指導者の危惧を払拭し、欣んで此の運動に参加せしむるに至つたが、メッド・アリ・ジンナーだけは此時以来、国民会議と訣別し、後には最も反動的なる回教宗派運動の首領となるに至つた。ジンナーは、女詩人サロージニ・ナイドゥが「印度両教統一の大使」と呼べるほど、過去に於て回教聯盟と国民会議との協調に尽力して来たのであるが、ガンディ指導以後の国民会議は、全く往年のそれと本質を異にし、到底彼の気象と相容れぬものとなつたことが、その脱退の動機であらう。

かかる間に、モンテーグ・チェルムスフォード改革案による新しい参事会や議会が出来た。国民会議の穏健派は、此の改革に満足して、喜に会議より脱退せるのみならず、進んで大臣其他の官吏となり、政府を助けて非協力運動並に国民会議と戦ふに至つた。而も民衆は彼等を蔑すみながら憮地に前進した。非協力運動は、実に不思議の力を以て印度人の魂を解放した。臆病なる、卑屈なる、衰へ果てたる民衆が突如、昂然として其頭を擡げ、堂々たる歩武を以て進み、欣然として団体行動を取つた。声を潜むる私語、法律を怖るる婉曲なる語法は跡を絶ち、人々は感じたるままを直言し、言ふも屋上から疾呼した。まこと此年は、印度に取りて非常の年であつた。「其処には国民主義と政治と宗教と神秘主義と熱狂と不思議なる混融があつた。而して長等の総ての背後には、農民の不穏と、大都市に於ける労働運動の擡頭とがあつた」。

ネールは此の運動に文字通り没頭した。彼自ら曰く「予は一切の他の交際や関係、多年の友人、書物、また新聞をさへも棄てて顧みなかつた。予は殆ど家を忘れ、妻を忘れ、娘を忘れた。予は事務所、委員会群衆の中に生活した。

村々に行けといふのが吾等のスローガンであり、吾等は遠く田畑を跋渉して辺鄙なる村々を訪ひ、した」。

ガンディは言ふまでもなく、其他の国民会議の指導者等が、到る処で喚び起せる民衆の熱狂は、動の意外なる発展に愕然たらしめた。七月三十一日、外国製の布の山が、ガンディ自身の手によつて焼かれた。翌八月一日には、偉大なる革命家ティラックの一周忌に当り、国民は彼の遺志を継いで印度の独立を戦ひ取らんとする決意を一層固くした。政府は極度に狼狽し初め、九月に入りて国民会議首脳部の検挙を開始し、アリ兄弟以下の逮捕を見るに至つたが、それは昂まる潮の如き運動を阻むべくもなかつた。政府はまた英国の皇族を招聘し、之によつて印度の民衆を感激せしめ、わけても貴族や地主を籠絡して会議派の運動を支持させまいとした。而も此年十一月十七日英国皇太子がボムベイに到着するや、全市は完全に罷市を実行し、人通り絶えたる街路と閉ざされる窓とを以て之を迎へた。英国人以外の者にして此日の奉迎に参加せる若干の印度人は、民衆の激怒を買ひ、其家を焼かれ、五十余人が殺害された。皇太子の訪へる総ての町々が皆な同然であつた。アラハバードもカルカッタも、死せる都に等しかつた。この成功は、印度民衆をして一層勇敢ならしめ、真向より政府に反抗せしむるに至つた。政府は国民会議義勇隊を非合法と宣言したが、それは却つて民衆を駆りて義勇隊に入らしむるだけであつた。嚇怒せる政府は、遂に意を決して極端なる弾圧に出でた。一九二一年十二月に開始せられたる総検挙の嵐は全印度を風靡し、C・R・ダース、ラージパト・ライ、チャンドラ・ボースを初め、ネール父子もまた捕へられて牢獄に投ぜられた。一般の義勇隊員もまた逮捕され初めた。十二月より翌一九二二年一月にかけて、政治犯人として投獄されたる者が実に三万人を超えた。

唯だ運動の総指揮者ガンディのみには、政府も指を触れんとしなかつた。印度民衆を左右し得る者はガンディ必死の指導なかりせば、弾圧は直ちに全土に亘る暴動に陥る。ガンディの収拾し得ぬ混乱に陥る。彼無くば事態は政府

動を招くであらう。飽く迄も非暴力を説くガンディをあればこそ、運動は叛乱とならずに居る。にガンディを検挙しなかつた。ガンディは、夜となく昼となく民衆を指揮し、鼓舞し、激励しつつ戦ひ続けた。然るに一九二二年二月に至り、ガンディは突如、非協力運動の中止を声明した。

此年二月四日、聯合州ゴラクプールに近きチャウリ・チャウラ村に於て、警察と民衆との間に衝突が起つた。それは警官が農民の集会を襲撃したのに対し、農民が之に反抗したので、警官は銃火を浴びせて彼等を死傷せしめ、弾薬尽くるや、逃げて警察署に立籠つたのを、激昂せる民衆が火を警察に放ち、猛火に駆られて逃出せる警官を殺して之を火中に投げ込んだ事件である。ガンディは、最近の国民会議に於て、彼が最も適当と認むる時機に於て、非協力運動を開始し又は之を終結せしむる権能を賦与されて居た。チャウリ・チャウラ事件を耳にせるガンディは、全印度の国民会議派に対して、即時、非協力運動を抛棄せよとの指令を発し、二月十一日、国民会議委員会は正式に該運動の中止を決議したのである。かくて非協力運動の第一期は終つた。

五　休　戦

ガンディの此の決議は、全英国並に全印度を驚倒せしめた。そは多数の国民運動者を憤激せしめたからである。猛烈なる抗議が四方からガンディに殺到した。獄中に於て之を聞知せるネール父子も、甚だしくガンディの処置を憤慨した。ネールは怒つた——「チャウリ・チャウラは、嘆かはしき事件であり、非暴力運動の精神と全然相容れぬものであるかも知れぬ。而も辺鄙なる田舎の激昂する村民の失策が、自由獲得のための国民的闘争を終止させるとすれば、非暴力抗争の哲学と戦術とには何らかの欠陥がある。吾等は抗争を開始する前に、まづ印度三億の民に、非暴力の暴行が、必然、全運動を終止させるとは何事か。偶然の事件であり、非暴力運動の精神と全然相容れぬものであるかも知れぬ。而も辺鄙なる田舎の激昂する村民の失策が、自由獲得のための国民的闘争を終止させるとすれば、非暴力抗争の哲学と戦術とには何らかの欠陥がある。吾等は抗争を開始する前に、まづ印度三億の民に、非暴力の暴行を絶無ならしむることは不可能である。

理論と実際の訓練を与へねばならぬといふのか。若しそれが可能としても、政府側の反問苦肉の策により、吾等の敵が味方を装ひて暴行を敢てせぬと誰が保証するか」。さり乍ら如何に憤慨してもネールは獄中に在りて如何なる活動も出来なかつた。彼のみならず殆ど総ての有力なる首脳部は皆な囹圄の中に在つた。民衆は九天の上より九地の底に落されたる如く感じた。人々の意気は沮喪し、国民会議派に於けるガンディの人気は衰へた。

三月十日遂にガンディを捕縛し、裁判の結果、之を禁錮六年の刑に処した。

さてネール父子は、共に禁錮六箇月の判決を受けて服役することとなつたが、ネールは三箇月後に釈放されて巴獄した。彼は直ちにアーメダバードに赴きてガンディを訪はんとしたが、その到着以前にガンディは既に獄裡の人であつた。彼はアーメダバードに帰つたが、運動は頓挫し、同志の多くは尚ほ獄中に在つたので、ネールは大なる寂寥を感じた。唯だ不服従運動の中止に拘らず、外国製織物のボイコットだけは、尚ほ国民会議のプログラムの一つとして続行されて居たのでネールは同志と共に厳重にアラハバードの織物商を監視し、外国品の輸入又は販売を阻止するに努めた。然るに官憲は脅迫罪の名の下に再び彼を検挙し、一年九箇月の禁錮を宣告した。かくて彼は出獄後僅に六週間にして、またルックノー監獄に投ぜられた。

一九二三年一月三十一日、ルックノー監獄に服役中の総ての政治犯人が、思ひがけなく釈放された。それは州参事会の努力の結果であつた。ネールは新鮮なる空気、広濶なる天地、街頭の風物、友人との握手を喜んだが、国民会議の状態を知るに及んで忽ち憂愁に襲はれた。非協力運動は中絶し、ガンディは獄裡に在る。国民会議は一委員会を任命して、今後何を為すべきかを考究させた。委員長は長き討議の後、一つの報告を提出したが、そは会議派主脳部内

に互に敵視する二つの党派を対立させることになつた。即ち一は従来の如く非協力プログラムを続行せんとし、他は之を変更せんとするものである。直接行動の失敗の後には、常に合法的運動の主張が擡頭する。印度の場合に於ても会議派首脳部の中に、立法議会を自由獲得の舞台とすべしと主張する者を生じた。そは非協力プログラムの中より、参事会に協力せずとの一項を除き、固より政府と協力するために非ず、之と戦ふために、同志は進んで参事会に入るべしと主張した。所謂「非変更派」の反対に拘らず、此の「変更派」と呼ばれる団体は、遂に「自治党」を組織して一九二三年の選挙に臨み、可なりの成功を収めた。而して自治党の指導者は、実にネールの父モティラールとC・R・ダースの両人であつた。

ネールの父とダースとは、共に法律家であることを除けば、全く異なれる性格の所有者であつた。ダースは法律家であり乍ら、詩人的情熱に燃え、自ら詩作し、雄弁家であり、宗教的であつた。ネールの父は、散文的であり実際家肌であり、宗教に無関心であり、不屈の闘士であつた。然るに彼等は、その対蹠的なる性格に拘らず、相識りてより幾くもなく意気相投じ、やがて断金の間柄となつた。彼等は互に他の欠点を補ひつつ、絶対に信頼提携して党を指導せるが故に、自治党は次第に勢力を加へて来た。それと共に多くの機会主義者・便乗主義者の入党を見たが、潔癖なるネールの父は「吾等は不健全なる四肢を切断するに躊躇せず」と宣言しその宣言通りに不純分子の芟除に努めた。

ダースに屢々ネールに向つて、熱心に入党を勧めた。而もネールは、斯くの如き運動の畢竟無益なるを信じ、決してダースの勧告に応じなかつた。父もまた内心は切に其子の入党を望んで居たが、ネールの性質を熟知せるが故に、敢て勧誘はしなかつた。自治党は幾多の州参事会及び中央政府の立法議会に於てさへ、絶対多数を占むるに至り、議会に上程せらるる有らゆる政府の議案に反対し、大臣の俸給を含む毎年の予算案までが、屢々否決された。然し乍らそれはネールが洞察せる如く、何等政治的に影響を及ぼし得なかつた。議会に於て否決された殆ど総ての法案は、州

知事や総督によつて是認され裁可されたからである。

さてネールは、出獄後数週間ならずして、突如アラハバード市長に選挙された。彼は同時に国民会議聯合州委員会書記長並に全印度委員会書記長を兼ねたるため、二人の同志と共に此国に赴いたが、不法にも直ちに憲兵に捕へられた。ナバ藩王国に於けるスィク教徒の運動を視察するため、彼等三人を叛乱罪とし、それぞれ二箇年半及び二箇年半の刑を宣告した。流石に官憲は数箇月後に彼等を釈放したが、三人とも不潔極まるナバ監獄に於てチフス菌に侵され、出獄後幾くもなくして皆な発病し、就中ネールは一時重態に陥つたが、幸にして恢復した。

ネールの公平にして潔白なる性格は、次第に先輩並に同志の間に重きをなして来た。彼は市長の劇務を見る上に、一九二三年度・一九二四年度の全印度国民会議書記長の重任を負はされた。但し印度の政情は、彼の意図する所と逆行した。一時融和せる印度教徒と回教徒との宗教的対立が、今や反動的に激烈となり、到る処に血腥き衝突を見た。自治党員の或る者は、高官の地位を以てする政府の誘惑に打負けて、独立運動から脱離した。国民会議は何等の具体的方針もなく、無用の党争を事とした。

是より先き一九二四年春、ガンディは獄中に盲腸炎を患ひ、病癒ゆるや無条件で釈放せられ、ボムベイに近きジューフ海浜で静養することとなつた。ネール父子は直ちにジューフに赴き数週間滞在して存分に彼と意見を交換した。父はガンディを自治党に誘致せんとしたが、ガンディはまたネールの抱ける数々の疑問に対しても、何等満足なる解答を与へなかつた。彼の意見は、国民会議の建設的又は社会的改革案を遂行して、辛抱強く国民に奉仕し乍ら、戦期の熟するを待てといふことであつた。ネールは此の態度に不満であつた。単りネールのみならず、多くの知識階級がガンディに倣らず感

じた。かくてガンディの声望は、一時独立運動者の間に落ちたが、一般民衆の彼に対する渇仰は、つた。

かかる間に一九三五年秋に至り、ネールの愛妻カマラが重病に罹り、数月の長きに亙りてルックノーの病院に呻吟した。病癒えて退院するを得たが、医者は保養のためにスイスに転地すべしと奨めた。ネールは此の機会に於て自身の疲労をも癒やし、且渦中より退いて印度の実情を把握したいと考へ、意を決して妻と共に西遊の途に上り、十三年目に再び欧羅巴の土を踏むこととなつた。彼等は居をジュネーヴに定めて静養したが、其間ネールは独伊に遊び、ブルュッセルに開かれし被圧迫民族会議に出席し、更にモスコーを訪ひて新しきロシアを視察した。彼は欧羅巴及び亜米利加を通じて、政治的・経済的・社会的改造の潮が、澎湃として漲りつつあるのを見た。監獄と病床と、而して此度の洋行とが、彼に深き内省と政治的研究の時間と機会とを与へた。彼は、印度の真個の敵は、資本主義発達の産物たるイギリス帝国主義に外ならぬこと、従つてそれは国民主義的立場よりのみならず、社会主義的立場よりも打倒せねばならぬことを確信するに至つた。イギリス帝国主義は、帝国の政治的要求に基礎を有すると同時に、資本家の利益保護に根ざして居る。それ故にイギリス帝国主義者でなければならぬ。彼は従前から農民及び労働者との接触により、単純なる国民主義だけでは印度を救ひ得ないと考へて居たが、今や一層その社会主義的信念を含めて、一九三七年著、約一年半の休養に、心身共に潑剌たる元気を恢復して帰国した。

印度では、ネールが留守中に、M・M・マラギヤ及びラージパト・ライを首領として、自治党に対抗するため「国民党」が新たに創立された。新党は其の政見に於て、自治党より遥かに穏和であり、右傾的であり、且純粋に印度教的であつた。思想に於てはグリーン、J・S・ミル、グラッドストン、モーレーなどの第十九世紀末英国思想に傾向

し、感情に於ては古代印度文化を憧憬せる老いたる国粋主義者マラギヤが、自治党に不満を抱くのは当然としても、ラージパト・ライが新党に加はれる理由は捕捉し難くある。いづれにせよ、国民党成立以来、印度に於ける宗教的対立は一層拍車をかけられ、自治党内の回教徒の或者は脱党し、頑固なる印度教徒の或者は、去つて新党に走つた。一九二六年に行はれたる立法議会並に州参事会員選挙に於て、国民党は大なる成功を収めたが、それは結局議会の政治的雰囲気を低調ならしめただけであつた。

ネールは一九二七年の国民会議が開かれる直前に印度に着いた。純真なる印度青年は、憂鬱なる印度政界の空気に大なる不満を抱き初めて居た。彼等は国民会議の長老たちが、果して印度独立のために最後まで悪戦苦闘を続ける覚悟ありや否やさへ疑つて居た。一方英本国に於ては、一九一九年に実施せられしモンテーグ・チェルムスフォード改革の有効期間十箇年の満了以前に、その統治法の明文に従ひ、該統治法の実績を調査し、且可能なる改善に関する報告を作成せしむるため、サー・ジョン・サイモンを委員長として、七名の英人より成る委員会を任命し、之によつて印度に於ける輿論の鎮静を図らんとした。然るに印度に於ては、一人の印度人も委員に任命せられなかつたことに対して、大なる屈辱と憤懣とを感じた。此の委員会に彼等の境遇に対する同情ある理解を期待し得ざるのみならず、印度が自治の能力ありや否やを、英人の一団によつて裁断せらるることを侮辱と考へた。有らゆる党派・宗派の指導者は、此の委員会を排撃せよと叫び出した。穏健派さへも勢力に押されて、此の叫びに雷同した。

かかる空気の間に、此年十二月、マドラスに国民会議が開かれた。ネールは旅の疲れを癒やす暇もなく、直ちにマドラスに急いだ。彼は国民会議が現在の如き状態に彷徨する限り、印度のために竟に為すなきを痛感し、敢然として会議の指導者たちに向ひ、現実に直面して大胆に前進せよと迫り、印度の目指すところは「完全なる独立」に外ならぬことを明かにせよと提案した。彼の熱意は会議を動かした。国民会議は、満場一致を以て彼の提案を可決し、その

歴史ありて以来、初めて堂々と印度の「完全なる独立」を宣言した。其上この会議は、一切の場合に一切の形式を以て、サイモン委員会を排撃すべきことを議決し、且全党協議会を召集して、彼等自身の手によつて印度憲法を起草すべきことを決議した。

かくて一九二八年二月、サイモン委員一行がボンベイに上陸して以来、彼等は到る処閉ぢたる窓と、翻へる黒旗と葬式の如き行列と、「サイモン還れ！」「委員会を排撃せよ」とのスローガンを以て迎へられた。官憲は例によつて有らゆる方法を以てデモンストレーションを抑圧したので、諸処に大小の衝突が起つた。就中ラホールでは、ラージパト・ライがデモンストレーションの指揮者として街頭に立つて居た時、年若き一英人警察官が、棍棒を以て彼を殴打し、そのために此の老いたる「パンジャブの獅子」は、数箇月の後に長逝するに至つた。而してルックノーに於ては、ネールもまた竹杖を以て乱打せられ、全身に数々の打撲傷を負つたが、幸にして皆な急処を外れて居た。

サイモン委員会排撃は見事に行はれたが、印度憲法の起草には幾多の波瀾があつた。マドラス会議の決議に従ひ、全党協議会が召集せられ、ネールの父モティラールを委員長とする起草委員会が組織されたが、イギリスは多年に亘つて印度に於ける諸勢力の統一融和を阻止するため、之を離間し抗争せしめて来たので、社会的・地方的・宗教的・政治的に離反せる諸階級に、等しく満足を与ふべき憲法の作成は、難事中の至難と言はねばならぬ。而も委員会は万難を排して統一憲法を起草し、之をルックノーで開かれたる全党協議会に提出した。それは委員長の名に因んで「ネール草案」と呼ばるるものである。然るに此の憲法は、印度を以てカナダ・濠洲と等しく、イギリス帝国内に於ける一白治領たらしむることを根本原則とせるものなりしを以て、会議内の急進派は猛烈に之に反対した。而して之を指導せる者は、実に委員長の愛子ジャワハルラール・ネール其人であり、飽く迄も英国支配よりの完全なる独立を主張して譲らなかつた。彼は新に「印度独立聯盟」を組織し、此の目的のために邁往することとなつた。

一九二八年度の国民会議はカルカッタで開かれ、ネールの父が議長となつた。彼は其の「ネール草案」を、此の会議に於て必ず通過せしめねばならぬと意気込んで居た。従前も亦此後も、父子の間に屢々政治的意見の対立にあつたが、此時ほど激しい衝突は無かつた時、ネールは忌憚なき批判を加へて猛烈に反対した。而して穏健派と急進派との幾度かの交渉の末、会議は一応比の草案を通過せしむるも、若し英国政府が満一箇年以内に之を承認せざる場合は、会議は之を廃棄して再び完全なる独立を宣言するといふ妥協案によつて、父子の争ひを調停した。ネールは、英国政府が断じて此の憲法を承認せぬだらうことを熟知せるが故に、異議なく之に応じた。

国民会議の一進一退の態度は、印度に於ける年少気鋭の革命家を憤慨せしめた。彼等はガンディの非暴力主義を以て、さながらに臆病なる印度人をして、愈々卑怯ならしむるものとし、因循姑息なる会議派とは別個の路を歩み、独立の行動を取り初めた。此の傾向は印度北部に於て極めて著しく、各地に於て英人官吏に対する襲撃が頻発するに至つた。デーリでは、印度立法議会の開会中に、柔弱なる議員等を覚醒せしむる目的を以て、一個の爆弾が議場内に投げられた。ラージパト・ライを殴打せる英人警官も、ラホールに於て射殺された。カルカッタ大学出身の一婦人は、その卒業式に臨めるベンガル知事を射殺した。ベンガル州ミドナポールの二女学生は、該地方の英人長官を訪ひ、卓子を中にして会談中に之を射殺した。カルカッタでは警視総監が殺され、ボンベイ知事は狙撃され、印度総督を乗せてデーリに向つて進行中の列車が襲撃された。

労働不安もまた一九二八年以来、急速に激化した。ボンベイでは紡績労働者が、四月より十月まで、総員約十五万人の総罷業を敢行し、五月にはタータ製鋼所に於て総罷業が行はれ、南印度鉄道三千の労働者、東印度鉄道工場一万の労働者も、ボムベイ紡績労働者が、またもや五箇月に亙る総罷業に反抗して起つた。翌一九二九年には、ボ

を行ひ、カルカッタ黄麻労働者十五万も、また罷業するに至つた。印度労働者は、一九二九年の第十六次大会に於ては、ネールを議長に推し、その階級的・革命的・政治的色彩を濃くした。但し労働運動の是くの如き傾向を喜ばざる温和派は、此時より会議を脱退し、別に純粋労働組合主義に立脚する「労働組合聯合会」を組織し、茲に印度労働組合は、左右両派に分裂するに至つた。

六　不服従運動

希望と焦躁と昂奮との間に、一九二九年も十二月となつた。而して全国民の異常なる期待の裡に、国民会議はネールを議長として「ラホール」に於て民衆がネールに与へたる歓迎は、彼自身の言葉を藉り来れば「量に於ても強度に於ても凄まじきもの」であつた。彼の宿舎は、群がる民衆に取巻かれ、多くの歌が彼を讃美するために唱はれ、数々の伝説さへ作り上げられた。此の異常なる人気は、彼を喜ばしめ、また反省させた——「何故に予は此の人気を博したのか。学問のためではない。予は非常な学者でもないし、また反省させた学問は人気の因にはならない。予の払へる犠牲のためでもない。幾百幾千の印度人が、予よりも遥に大なる犠牲を払つて居る。英雄としての予の人気は全く質のものであり、予自身決して自ら英雄と考へず、且英雄的な態度や浪漫的な歩振りには、予には馬鹿馬鹿しく見えてならない。また予の如く非浪漫的な人間もない。予は唯だ若干の肉体的並に精神的勇気だけは有つて居る。而も此の勇気の背景となるものは、恐らく個人的・団体的・国民的自尊心、及び強制を厭ふ性情である。……予が上流社会に生れ華美なる生活を営んで居たのを、後に之を捨て去つたといふことが、人気の一因でもあらう。斯様な五欲遠離は、印度人の心に常に訴へるからである。果して然りとすれば、予は聊かも快くない。予は消極的道徳を

喜ばず、積極的道徳を重んずる。遠離も犠牲も、それが自身のためであるならば、予は毫も之を重んじない。予は唯だ靖神訓練として其の価値を認める。予は禁欲生活、五欲の極端なる断滅に心惹かれない」。

彼自身が是くの如き冷静なる理智的性格なりし上に、彼は勝れたる家族並に友人を有つて居たので、決して人気に酔ひて自負矜高に陥ることなかつた。彼は斯く語る――「予が人気者となりしこと、美辞麗句の限りを尽せる讃辞や称号を深し集めて面白半分に触れまはした。彼等は予にからかつて〈印度の宝玉〉などと呼びかけた。そして此の冗談が予の心を和らげ、公会に於ける予の厳粛なる気分の緊張を緩めてくれた。予の家族及び親友の団欒に於ける揶揄の的となつた。予の妻や姉妹は、国民運動の諸先輩に夫だの、又は〈犠牲の神様よ〉などと呼びかけた。そして此の冗談が予の心を和らげ、公会に於ける予の厳粛なる気分の緊張を緩めてくれた。予の小ない娘までが此のいたづらに加はつた。唯だ予の母だけは、飽くまでも予を真面目に遇し、大切の息子に対する揶揄を喜ばなかつた。予の父は面白さうに眺めて居た。彼は静に其の深き同情と理解とを示した」。

閑話休題、ネールを議長とせるラホール会議は、永久に記憶せらるべき会議であつた。印度の完全なる独立が、未曽有の熱誠裡に、殆ど満場一致を以て更めて可決された。此の会議は、前年度のカルカッタ会議の憲法に対するイギリス側の応答を、最後の瞬間まで待つて居た会議が、一九二九年十二月三十一日夜半を以て其の猶予期間が満了すると同時に可決せるものである。独立が決議されると、ネール議長は、万雷の如き「母国万歳 Bande Mataram !」の歓呼の裡に、印度国旗を掲揚した。独立の覚悟は新にせられ、独立のための偉大なる戦の準備が開始されることとなつた。而して之に関する計画を樹立し、闘争を実行する権能は、全印度国民会議委員会に与へられた。

かくてラホール会議は、絶大なる昂奮裡に閉ぢられ、その決議は深甚なる感激を全国に与へた。但し人々は如何にして戦ふべきかに就いて、何等確然たる方針を有たなかつた。ネール自身が斯く述べて居る「吾等は将来の見透しが

つかなかつた。会議中に示されたる熱心に拘らず、実行計画に対する国民の反応については、何人も予測し得なかつた。吾等は既に舟を焼き棄てたから、再び回ることは出来ぬ。而も吾等の上陸せるは、殆ど未知なる、地図にもなき国土であつた。唯だ彼等は、吾等の戦争の出発点たらしめ、一九三〇年一月二十六日を以て〈独立節〉と定め、全国に亙りて国旗を掲揚し、独立宣言書を朗読することとしたため、一九三〇年一月二十六日かかる間に独立節が来た。一切の杞憂は払拭された。全国民は熱烈に、而も粛然として此日を祝福した」。

んとする闘争に対する覚悟は、極めて堅確なるを示した。予てより人々はガンディの命令を待ち焦れて居たが、此時まで彼は何如なる具体的方針をも示さなかつた。今や彼は名医の適確を以て国民の決意を診断し、実行の機正に熟せりと看取した。一九三〇年二月初旬、国民会議執行委員は、ガンディに独裁者としての全権を賦与し、其の適切と認むる時と処とに於て、所謂平和的不服従運動を号令する権能を授けた。ガンディは、三月十二日を以て闘争開始の日と定めた。人々は如何なる形式の不服従運動が、最も民心を捉へ、従つて最も効果的なるかに思ひ惑つた。其時ガンディは、塩専売法の蹂躙を以て闘争を開始すべしと声明した。人々は初めて之を耳にせる時、いつも乍らのガンディの奇想天外に驚き、或は惑ひ、或は嘲つた。而もガンディが塩専売法の真義、及び此の日常生活の必需品に対して如何に法外なる重税が課せられて居るかといふ事実を闡明せる時、国民は上下を挙げて昂奮した。彼等はイギリスの法律のうち、最も不道徳なる塩専売法を蹂躙せんために奮然として起ち上つた。

いよいよ平和的不服従運動開始の日が来た。三月十二日払暁、ガンディはアーメダバードのサバルマティにある真理護持道場で、存分に訓練を与へたる同志七十九人を率ゐ、勝利を得ずば再び道場に帰らずと宣言し、名高き「海への行進」を開始した。彼は途上の村々に足を停めて人々を鼓舞激励した。行進の報道が急速なる勢を以て伝はるや、

四方より集まれる民衆は、堵の如く沿道に立ち列んだ。かくて三週間の行進の後、一九三〇年四月六日、一行は目的地たるキャムベル湾頭のダンディに到着し、海に入りて斎戒沐浴せる後、海水を蒸発せしめて製塩を行ひ、明らさまに政府の塩専売法を蹂躙した。

ネール父子は、行進中のガンディをジャムブザルに訪うた。彼等は民衆の比類なき熱情と、燎原の火の如く拡まり行く運動の勢ひとを見て、此の戦術が却めガンディによつて提唱せられし時、その成否に疑問を抱きしことを恥ぢ、今更ながらガンディの民衆の急処を摑む偉力、之を組織的行動に導く才幹に驚嘆した。而して数時間の会談の後「手に杖を携へ、同志の先登に立ち、確乎たる足取りで、平和にして而も物を畏れぬ顔」で、次の村へと進み行くガンディの姿を見送り、アラハバードに帰りて運動の指導に当つた。

官憲の弾圧が直ちに始まつた。四月九日にはガンディの息子二人が先づ逮捕せられ、次で五月五日にはネールが塩専売法違犯の廉で、カルカッタ市長セン・グプタは煽動の廉で逮捕せられ、カラディで逮捕せられた。

ネールは、逮捕の即日、裁判に附せられ、直ちに禁錮六箇月の判決を受け、ナイニ監獄に投ぜられた。然るに二箇月半を経たる六月三十日払暁、実に思ひがけなくも彼の父モティラールがアイド・マフムードと共に入獄して来た。それは印度政府が国民会議執行委員会を非合法と宣言し、同時に委員会を捕縛せるためであつた。当時モティラールは、甚だしく健康を害して苦痛であつた。雨期は将に始まりかけて居たし、屋根からは雨漏りして、房内はじめじめして居た。それでもモティラールは、其の愛子と同一舎内に起臥して、其の真心からの介抱を受けることを幸福に感じた。

越えて七月二十七日、サー・テージ・バハドゥル・サプルとジャカルとが、是亦思ひがけなくナイニ監獄にネール

父子を訪うた。此の両人は、親英派の旗頭として、革命的なる印度青年の最も悪むところとなつて居た。彼等は二日に亙りて協議を遂げたが、ネール父子は、是くの如き重大なる問題は、同志殊度政府と国民会議の間に立ち、一定の条件の下に不服従運動を止めさせ度いと考へ、印度総督の意を受けて、ネに父子を訪問したのである。彼等は二日に亙りて協議を遂げたが、ネール父子は、是くの如き重大なる問題は、同志殊にガンディとの相談なしには決して決定せられるべきものでないと主張したので、両人は一旦引上げた。

八月八日に至り、両人は再びナイニ監獄に現れ、印度総督はネール父子とガンディとの会見を許可したので、其意ありや否やを尋ねた。ネール父子は、固より異存なき旨を答へた。時にガンディは、プーナのエラヴダ監獄に於て服役中なりしを以て、ネール父子は八月十日、特別列車に乗りてナイニからプーナに赴き、十三日より十五日まで、三日に亙りてエラヴダ監獄の一室に協議を凝らした。その結果、不服従運動撤回のための最小限度の条件を決定し、之を文書に認めて両氏に手交した。但し印度総督は、此の提案に応じなかつたので、両氏の骨折は水泡に帰した。

此の協議に於ける緊張がモティラールの病軀にこたへ、十六日には高熱を発したので、父子は十九日までエラヴダ監獄に静養し、然る後に再び特別列車でナイニ監獄に送還された。此の往復は秘密に附せられたるに拘らず、何処よりともなく聞き知れたる民衆は、雲霞の如く停車場に集まり、時として線路の上まで埋め、危く事故を生ぜんとした程であつた。ナイニ監獄に帰りて後、父の病勢は益々悪化し、痛くネールの心を悩ましたが、九月八日に幸にも釈放された。而して十月十一日には、ネール自身も六箇月の刑期を了へて出獄した。

時に彼の父はムッスリーに転地療養中であり、妻カマラのみがアラハバードに留まりて国民会議の仕事に没頭して居た。彼は其妻及び諸同志の言により、アラハバードに於ける当面の問題は、租税不納運動を開始すべきや否やに在ることを知つた。恰も地代及び租税納入期が近づいて居たが、世界的不景気の影響は印度に於ても著しく、農産物の価格は暴落し、小作人も地主も等しく其の負担に堪ふべくも無かつた。ネールは政治的並に経済的条件が、該運動を

開始するに最も有利なるを見、直ちに国民会議州委員会を召集し、長時間の討議の後、その実行に同意せしめ、且アラハバード市に民衆大会を開きて熱烈なる演説を試みた。越えて十三日、彼は妻と共にムッスリーに老父を訪ひ、楽しき三日を過ごした。父の健康が次第に恢復しつつありしことが、甚だ彼を喜ばせた。十九日にはアラハバードに農民大会を開催する予定であつたので、夫妻は老父に別れを告げて十八日夜に帰宅した。然るに十九日早朝、彼が十一日に試みたる演説の故を以て、再び逮捕せられ、出獄僅に八日にして、またもやナイニ監獄に投ぜられた。而して翌一九三一年一月一日には、彼の妻カマラもまた逮捕された。此時カラマは一新聞記者よりメッセージを求められ、次の如く語つた――「妾は夫の踏める道を辿ることを、限りなく欣び且誇りとします。妾は印度国民が飽くまで旗を掲げ続けることを望みます」。

一九三〇年より一九三一年に亙る印度の平和的不服従運動は、世界の歴史に於て全く類例なき革命運動であつた。ガンディに於て塩専売法蹂躙による戦闘開始の炬火が、一たびガンディによつて上げらるるや、未だ数週間ならざるに、不服従の精神が印度の津々浦々に燃え立つた。人々は塩専売法のみならず、彼等が悪法と認めし一切の法律を蹂躙し初めた。彼等は森林法を無視して官林を伐採し、治安維持法を無視して革命的文書を公けの場処で朗読した。イギリス製品及び外国製織物のボイコットは徹底して行はれ、一九三〇年五月の英国海外貿易は、前年度の同月に比して実に二千二百八十万ポンドの激減を示し、ランカシャ及びマンチェスターを破滅に瀕せしめた。外国製の酒類や薬品の店舗に対しても、同様にボイコットが強行された。

運動の進行に連れて、官憲の弾圧は峻烈となつた。彼等は武装せざる民衆に対して、容赦なく機関銃や装甲車を濫用した。而も民衆は堅くガンディの命令を守り、官憲が敢てせる言語道断の暴虐に対して無抵抗の態度を堅持した。

U・P通信社の記者ウェップ・ミラーは実に下の如く述べて居る――「予は二十二箇国、十有八年に亘る通信員生活の間に、無数の騒擾・暴動・市街戦・叛乱などを目撃したが、未だ曽てダラサナ事件の如き悲愴なる光景に接したことが無い。欧米人は、暴力によつて報いらるる暴力を理解し得るけれど、冷然として進み出で、何等防衛も試みず殴らるる侭に委す人々を見て、驚くの外なかつた。その光景は余りにも悲惨を極め、予は屢々顔を背けざるを得なかつた。一の驚異すべき特徴は、運動参加者の紀律である。彼等の精神には、ガンディの非暴力の信仰が、完全に沁み込んで居るやうに見えた」。

印度の警官は、如何なる暴虐を運動参加者に加へたか。英国海軍提督の娘マデリン・スレードは「世界史に於ける最も悪魔的なる、冷血なる、許し難き悪虐」として、非暴力の集会を解散するために執れる警官の手段を、下の如く列挙して居る――「（一）ラティ（鉄節ある長き竹竿）を以て頭部・腹部・胸部・関節等を殴打する。（二）ラティを局部・腹部に突込むこと。（三）殴打する前に裸体にして鞭うつこと。（四）腰布を剝ぎ取り、棒を肛門に突込むこと。（五）睾丸を強圧し、絞め上げて昏倒せしむること。（六）手や足をとりて負傷者を引摺り廻し、其間屢々殴打を加へること。（七）負傷者を棘ある生垣や塩水の中に投入れること。（八）地上に坐臥する民衆の上に馬を乗入れること。（九）針や棘を身体に刺し時としては人事不省に陥らしむること。（十）昏倒せる人間を殴打すること。其他の卑劣なる行為は数ふるに遑ない」。

民衆は捕縛や投獄を恐れなかつた。彼等は親戚や友人に見送られ、欣び勇んで獄に下つた。官憲は逮捕者を収容する場処に窮するに至つた。初めは官憲が運動者を追ひかけたが、後には運動者が自ら逮捕されるために官憲を追ひかけた。官憲は一旦彼等を拘禁処に連行したる後、謝罪すれば釈放すると言つても、彼等は謝罪を拒んだ。因惑せる官憲は、監獄の広場に彼等を収容し、夜に入りて密かに「帰れ」と告げるのを常とした。或る地方では、捕縛せる運動

者を貨物自動車に乗せて遠方に運び人里離れし野原に置去りにした。到処の学校其他の建物が仮獄舎に充てられた。此の期間を通じて、不服従運動に加はりて有罪の判決を受けた者の数は実に九万人を超えた。

さて、印度に於ける排英運動が、上述の如く悲壮を極めつつありし間に、一九三〇年十一月、予てアーキン総督によつて約束せられし英印代表者の第一次円卓会議が、ロンドンに召集せられ、印度の憲法問題と英印間の基本的関係とについて討議されることとなつた。英国の諸政党は、皆な有能なる代表を会議に送つたが、印度より来れる者は、印度を代表する資格なき者として、国民の侮蔑せる人々だけであつた。蓋し此時には、ガンディを初め、ネール、マラギヤ、サロージニ・ナイドゥ等の国民指導者は、皆な鉄窓裡に在つたのである。従つて此の会議は、印度聯邦組織案といふ収穫を得ただけで、印度民衆の望んで止まざる責任政治の実施に就いては、単に将来に対する原則を承認せるに止まり、印度不穏を鎮静する上に何の役にも立たなかつた。

ネールの父モティラールは、エラヴダ監獄にガンディを訪へる時より、血痰を吐き初め出獄後も衰弱甚しかつた。然るにネールが又もや検挙せられ、重禁錮二箇年の宣告を受けたと聞くや、彼は奮然として卓を叩き、今は病床に晏如たるべき時に非ずと叫び、爾来病軀を推して不服従運動に号令し、巨細の指示を与へて鼓舞奨励した。昂奮は一時モティラールの元気を恢復させたように見えたが、やがて反動が来て衰弱は加はり、痰に混ずる血液の量も増すに至つた。ネールは獄中に此の消息に接して甚だしく心を痛め、絶対的静養を父に向つて切願した。而も父が印度に居る限り、間断なき来訪者のために満足なる休養の不可能なるを知り、暫く印度を去りてラングーン、シンガポール、蘭領印度等の巡遊を試むべきことを切に勧めた。父は此の勧告を容れ、一医師を伴ひて旅程に上り、カルカッタまで行つたが、此地で病勢が思はしくなかつたので、乗船を見合せてカルカッタ郊外で静養することとなり、ネールの妻カ

マラを除く全家族も、カルカッタに赴いて、月余に亙りてモティラールを看護して居た。

かかる時にカマラの検挙の報道がカルカッタに到着した。父は甚だしく昂奮し、病を推してアラハバードに帰り、一月十二日にはナイニ監獄に愛子を往訪した。二箇月振りで其父を見たネールは、其の余りにも変り果てた容貌に吃驚した。父はネールの吃驚に気付かず、カルカッタに居る時よりも元気になつたと告げたが、ネールは此時初めて父の生命に対する真剣な心配を痛感した。此時までネールは、父と言へば直ちに精力と健康とを聯想し、父と死とを結びつけて考へたことはなかつた。然るに今や痩せ衰へた父の容貌は、ネールの心を暗黒にした。

一月二十六日、ネールは思ひがけなく釈放せられ、カマラもまたルックノー監獄を出た。ネールは一層進んで居た。談話も困難になり、意識も時々不明になつて居た。唯だ彼の意志だけが昔ながらに強く其の意力を以て心身を支へて居た。彼はネールを見て非常に喜んだ。此時ガンディもまたエラヴダ監獄から釈放されたのであるが、モティラールの病篤しと聴き、翌日ボンベイを発し、深夜アラハバードに着いて直ちに病床を見舞つた。ガンディの言葉、ガンディが傍に居ることが、父並に家族全体に取りて何よりの慰安であつた。

モティラールの重態を聞きたる多くの旧友並に同志は、皆な彼を見舞ひたいと切望して居たので、此の機会に国民会議執行委員会をアラハバードに召集することになつた。やがて数十名の委員が四方からアラハバードに来着した。父は医師の言葉を斥け、安楽椅子に坐して、代る代る見舞へる彼等を引見した。彼の姿は、致傷を負ひて殆ど体力を失へる老獅子の如くであつた。彼はガンディを顧みて曰つた——「マハートマさん、もう長くはありません。此世で白治を見兼ねたが、やがて貴方が実現して下さるだらう」。

遠近より集まれる人々は概ね去り、後にはガンディと、二三の親友と、親戚のものだけが残つた。二月四日朝に至

り、少しく快方に赴いたやうに見えたので、此機に乗じてルックノー病院に父を移し、X光線の治療を受けさせることに決し、自動車に乗せて家を出た。ガンディも同行したのであるが、此の旅行は甚だしく父を疲労せしめた。出来るだけ徐行したのであるが、苦痛のために殆ど不眠であつた。六日の朝に至り、彼の顔は平静になり、苦悩の痕が消え去つた。病床に侍して居たネールは、父は安眠したと思つて喜んだが、母の直感は彼よりも鋭く、高く叫びを挙げた。ネールは母の方に向き直り、父は既に入つたから静にして下さいと言つた。然し午ら此眠は彼の最後の永き眠であり、最早再び覚めなかつた。

七　ガンディ・アーキン協定

モティラール・ネールが長逝せる丁度其日に、第一次円卓会議に出席せる印度代表一行が、ボムベイに帰着した。シャーストリ、サプル其他数人が、直ちにアラハバードに赴いて、ガンディ及びネールを訪ひ、会議の経緯を報告した。其時彼等はガンディに向ひ、アーキン総督に会見して忌憚なき意見を交換すべきことを勧めた。ガンディは之を承知した。会見の手配が直ちに講ぜられ、ガンディ先づデーリに先行し、数日後にはネール以下デーリに集まつた。外国の新聞記者も夥しかつた。一曽てはガンディ及び国民会議より各種の人々がデーリに集まつた。外国の新聞記者も夥しかつた。一曽てはガンディ及び国民会議より遠ざかり、之を非難して居た人々が、その埋合せに忙しき有様を見るのは面白かつた。国民会議執行委員数名も同地に赴いた。此事ありてより各種の人々がデーリに集まつた。外国の新聞記者も夥しかつた。一曽てはガンディ及び国民会議より遠ざかり、之を非難して居た人々が、その埋合せに忙しき有様を見るのは面白かつた。国民会議の為すことは、悪いことばかりでもないらしい、とにかく国民会議や其の首脳部と仲好くして居る方が安全らしい。彼等は左様に考へたのである」。

ガンディは早朝の散歩を常とした。ネールは屢々彼と共に散歩した。此の早朝の散歩だけが、唯一の機会で、其他の時間は仕事と接客とのために、細かく予定されて居た。彼等は此の散歩の時間に、過去のこと、

現在のこと、わけても将来のことに就いて語り合つた。彼はガンディの理想と彼の抱く社会主義的理想とは、その拠つて立つ精神に於て白雲万里なるを知つて落胆した。彼は下の如く自問自答して居る――「如何にして吾等はガンディと政治的に相結び、また多くの場合に其の熱烈なる随喜者となつたのであらうか。そは難解の問題であり、如何なる答案も、ガンディを知らぬ人々を満足させ得ないであらう。人格は担み難き存在であり、人間の魂を支配する不思議の力であるが、ガンディは豊富に此力を所有し、且彼は己れに来る総ての人々に、厘々異なれる姿を現はす。彼の人格は民衆を彼に近づけ、彼の許に留まらせるのは、牢乎たる知見である。人々はガンディの人生哲学に同意せず、彼の多くの理想にも賛成しない。往々にして人々はガンディを理解して居らぬ。然し乍らガンディの提唱する実行は、知識的に理解し納得し得る具体的なるものである。道徳的光耀を伴ふ勇敢にして効果的なる実行は知識と感情とに対して強力に訴へるものがある。ガンディは一歩一歩吾等に実行の正義を確信せしめ、吾等は仮令彼の哲学を承認せずとも、進んで彼と行動を共にするに至る。実行と其底に流れる思想とを別つことは、恐らく正しいことではなく、後には精神的矛盾に導くかも知れない。唯だ吾等は、ガンディは本質的に実行の人であり、且時勢の変化に対して極めて敏感なるが故に、正しき線に沿ひて進むであらうと望んで来た。而して今日までのところ、彼の進める路は正しかつた。……吾等は常にガンディよりも一層論理的であるとは思ひ乍ら、ガンディの方が吾等より遥に精確に印度を知つて居ると感じて来た。また民衆をして是くの如き帰依渇仰させるためには、民衆の望み求める或者を彼自身の裡に所有するに相違ないと感じて来た。……ガンディは、印度の懶惰にして頽廃せる民衆を訓練し、能く偉大なる実行に入らしめた。而もそれは強制によるに非ず、物質的誘惑によるに非ず、唯だ和やかなる顔、優しき言葉、わけても実践躬行の模範によつたのだ！

……個人的にはガンディは予に格段なる親切と好意とを示してくれた。父の死後は特に親密の間柄になつた。何事に

よらず彼は辛抱強く予の言葉に耳傾け、予の望みを容れるやうに務めてくれた」。

さてガンディ・アーキン会議は、断続し乍ら行はれた。或時は数日を経ても総督からの招待に接しなかつたので、執行委員等は談判不調を覚悟し、デーリを去る準備を始めた。彼等は会談が破裂すれば、必ず再び逮捕せらるべきが故に、此の機会を逸すれば、再会は何の日たるやを期し難いと感じ、悲壮なる気持を以て数々の決議を行ひ、後事を託すべき人々を選定し、然る後に出発の旅装を整へた。丁度其時に総督よりの招待が来て、会談はまたもや続行されることになつた。

五月四日の夜である。ネール及び其の同志は、深更まで総督官邸より帰り来るガンディを待つて居た。ガンディは午前二時に到りて漸く帰つて来た。而して協調は遂に成つたと告げた。彼等は急ぎ覚書を続んだ。覚書の第二条は、印度憲法に関しては円卓会議案を基礎として討議せらるべしとしてあつた。それは政府に対する国民会議の明白なる譲歩又は屈服であつた。ネールは断腸の思ひに堪へなかつた——「わが民衆の一年に亙る花々しき戦闘は、之を獲得するためであつたか。吾等の一切の勇敢なる行動と言論とは、斯くの如き終局を見ねばならなかつたのか。国民会議の独立決議、一月二十六日の宣言は何うなるのか。予は身を横へて此の五月の一夜を思ひ明かした。予の心は、最も大切なる宝が去りて又帰らぬ如き空虚を感じた」。

然し乍ら事は既に決したのである——「吾等の指導者が自ら決めたのだ。吾等が彼に不同意を唱へたところで、何を吾等は為し得るか。彼を拋り出すか。吾等の不同意を声明するか。それは個人的満足を齎すかも知れぬが、最後の決定を如何ともすることが出来ぬ。市民的不服従運動は、少くとも当分終局を告げたのだ」。恐らくガンディは民衆の戦闘力に限度あるを知り、妥協による一時の休養が、最も有効且必要であると考へたのであらうが、独りネールのみならず、此のガンディ・アーキン協定に対しては、不平不満を抱く者が甚だ多かつた。国民会議指導者は執行委員会

の決議に従ひ、運動を中止させるために努力したが、それは並々の骨折りではなかつた。

かかる間に此年も十二月となり、カラチに国民会議が開かれた。此の会議の主要問題は、及び円卓会議であり、波瀾重畳を期待されて居たが、ガンディ・ネール両人の人格が会場を支配したので、大なる紛糾なきを得た。会議は該協定を承認し、円卓会議に代表を送ることをも承認した。其他、此の会議は印度の独立国家内に於ける人民の「基本的権利」を決議し、また若干の経済政策を決議した。後者は労働者保護、農民の負担軽減、累進税の設定、重工業及び鉱物資源の国家統制等を定めたるものにして、何等急進過激のものならざりしに拘らず、政府は、ボルシェヴィキの黄金が潜かにカラチに忍び入り、会議派の首脳部を買収したと吹聴し、暗にネールを其の主役者なるかの如く言ひ触らし、以て彼の人望を失はしめんと企てた。穏和なる社会主義者ネールが、過激なる共産主義者として宣伝せらるるに至りしは、此時よりのことである。

カラチ会議終了後、過労のために健康を損へるネールは、医師の勧告によつて、妻カラマ及び娘インディラを伴ひセーロン諸島に保養旅行を試みた。但しヌワラ・エリヤに於ける二週間を除けば、セーロン島でもゆつくり静養は出来なかつた。それは彼を慕へる人々が、到る処で潮の如く寄せかけて来たからである。ヌワラ・エリヤでは、職工や茶園労働者などの大群が、毎日数哩の路を歩み、野の花や、野菜や、手製のバタなどを携へて来た。言葉が通じないので話を交はすことも出来ないのだが、互に微笑を交換するだけで満足して帰つた。彼等は往路をボムベイから汽船によつたが、帰路は南印度の諸藩王国を経て、五十日の後に再びボムベイに帰着した。而してネールは直ちにまた政治運動の渦中に飛込まねばならなかつた。

ガンディ・アーキン協定によつて、国民会議派は譲歩したが、印度政府は毫も弾圧の手を緩めようとしなかつた。ベルガンでは、不服従運動が継続せられ、頻々としてテロが行はれた。聯合州では農民問題が次第に激化し、諸処に

暴動の勃発を見た。国境州ではアブドゥル・ガファル・カンの「赤シャツ団」が、急速に発展しつつあつた。アーキン卿に代つてキリングトン卿が印度総督となつた。新総督は、温厚なる前総督とは似もやらぬ剛毅一徹の性格であるといふ評判が、一層民心を激化させた。イギリス本国ではガンディとの談合によつて事態の緩和を図らんとし若りに彼の円卓会議出席を希望した。八月にガンディは其為にシムラに赴き、二度、総督以下の当局者と協議した。ガンディはネールをシムラに招きて相談した。彼は聯合州及び国境州の険悪なる事態が心配で、容易に印度を留守にする決心がつきかねたのである。種々協議の末、ガンディは遂に渡英することとなつた。ネールはボムベイまで彼と同行し、其の乗船を見送つた。

ガンディが憂慮せる如く、聯合州の農民問題は此秋に入りて頓に悪化した。借金のために土地を失へる農民、小作料を納めかねて土地を逐はるる小作人が続出したが、政府の取締は次第に苛酷を極めたので、惨澹悲愴なる空気が全州に漲つた。ネール等はガンディの留守中に政府と衝突するを欲せず、滞英中のガンディに打電して切迫せる情勢を報じ其の助言を求めた。而してガンディよりの返電は、彼自身の力に余るが故に適宜に善処せよとのことであつた。ベンガルの形勢もまた激化した。監獄の囚人が暴動を起した。警官の暗殺が行はれた。印度教徒と回教徒との争闘があつた。十一月ネールはカルカッタに赴いたが、テロリズムに対して烈しき反感を有する彼は公私の席上に於て之を非難した。彼がカルカッタを去らんとする夕、二人の青年が彼を訪ひ、若し彼が反テロ宣伝を止めなければ彼をも血祭に上げるぞと脅した。ベルガンではそれほど殺気立つて居た。

一方イギリス本国では、此年九月から第二次円卓会議が、ガンディを加へてロンドンに開催されたが、印度各派代表の宗派的利己主義を痛切に体験せねばならなかつた。斯くして此の会議は度教徒対回教徒の確執を惹起し、所謂少数宗派問題で暗礁に乗上げた。ガンディは、イギリス政府の丁寧ではあり乍ら断じて譲歩せぬ態度を見、

何等の効果を挙げずして終了し、十二月ガンディは帰途に就いた。ガンディをボムベイに迎へるため、十二月二十六日朝、アラハバードより汽車に乗れるネールは、途中の一小駅に於てまたもや逮捕せられ、直ちにナイニ監獄に収容された。其の二日後にガンディがボムベイに上陸した。

八　獄裡の試煉

ボムベイに上陸せるガンディは、彼の親愛なる同志が牢獄に投ぜられ、休戦は官憲の挑戦によつて破れんとしつつあるを見た。それでもガンディは、尚ほ一縷の望を棄てず、直ちにキリングトン総督に会見を求めた。総督は之に対して、若しガンディが、ベンガル州・聯合州・国境州に起れる最近の事件、其等諸州の緊急命令、その命令の下に逮捕せられし人々に就いて言及せずとの条件を容れるならば、会見の求めに応ずべしと答へて来た。之によつて印度政府は、国民会議との断交を宣言し、飽く迄も之を粉砕せんとする決心を明示せるものである。之に対してガンディは更めて無条件会見を総督に申込んだが、総督は啻に之に応ぜざりしのみならず、直ちにガンディ及び国民会議議長ヴラブハイ・パテルの捕縛を命じた。それは一九三二年一月四日早朝のことである。而して同日ネールもまた重禁二年・罰金五〇〇ルピーの宣告を受けた。同時に国民会議及び之に従属する全印度の数千の大小団体が、悉く非合法と宣告され、大量的検挙が開始された。

ナイニ獄中に之を伝へ聞けるネールは、感慨無限ならざるを得なかつた——「吾妻はボムベイに病臥し、不服従運動に参加し得ざる不甲斐なさを嘆いて居た。老母と二人の姉妹は熱心に運動に携はつて居たが、姉妹はやがて捕へられて、共に一年の宣告を受けた。断片的ニュースが、新入獄者及び差入を許されたる地方新聞によつて伝へられた」。彼は六週間目に、ナニイ監獄よりバレイリ監獄に移され、次いで猛夏の酷暑堪へ難くなりし頃、ヒマラヤ山麓のデー

ラ・ダン監獄に移された。

政府は数箇月以内に国民会議を絶滅し去る決意を以て、あらゆる術策と警戒と残虐とを濫用した。就中獄中のネールを断腸せしめたのは、老母の負傷であつた。四月六日より十三日に至る、処に悲劇が演ぜられた。彼は語る――「アラハバードで、老母は示威行列に加はつて居たが、行列は警官に制止され、老母はラティで殴打された。行列の先頭に在りし老母は、街頭で其の倚子を持ち来り、行列が解散し、警官は立去りし後も、人影もなき路頭に倚子に腰かけて居た。老母は倚子から突落され、それから杖で頭部を連打された。老母は倚子から突落され、それから杖で頭部を連打された。頭部の裂傷から鮮血が流れ、人事不省に陥りて、行列は解散し、警官は立去りし後も、人影もなき路頭に倒れて居た。暫くして一人の警官が老母を助け起し、自動車に乗せて家に送り届けた。其夜アラハバードでは、老母が死んだといふ噂が立つた。激怒せる群衆は、平和も非暴力も忘れて、警察署を襲撃した。警官は小銃を打ちて多数の死者を出した。数日の後に此の出来事が伝へられた時、予は血に塗れて路頭の塵中に横はる老いてかよわき吾母の姿を想ひ、予が若し現場に居たならば、如何に振舞つたであらうかと考へた。予の非暴力は果して守られたであらうか。恐らく否である。その光景を目撃すれば、十数年に亘る非暴力の教訓を忘れ、個人的並に国民的の結果も打忘れて行動したであらう。老母の恢復は遅く、翌月予をバレイリ監獄に訪へる時も、尚ほ繃帯して居た。それでも老母は、息子や娘達と同じく、棍棒やラティで殴たれたことを欣び且誇つて居た」。

政府の弾圧が峻烈を極むるに従ひ、運動は次第に困難になつた。国民会議は非合法団体と宣告せられたるが故に、公けに議会を召集することは、直ちに官憲との衝突を意味する。それでも一九三二年四月、その第四十七議会が密にデーリで開かれ、ラホール及びカラチ議会に於ける決議を更めて確認した。警官が駈付けた時には殆ど終了して居た

が、出席者は散々にラティで殴打せられ、多数の逮捕者を見た。翌一九三三年四月には、第四十八議会がカルカッタに召集された。ネールの老母は、マラギヤ其他の指導者と共に出席するためアラハバードを出発したが、途中で官憲のために捕へられ、数日間アサルソン監獄に拘置された。官憲は議事進行中の会場に闖入し、センプタ夫人が議長となり、独立が再び強調せられ、英貨排斥が力説せられた。センプタ夫人以下数百名を逮捕し、例によってラティの雨を降らせた。途中に捕へられし出席不可能となりしマラギヤは、此の議会に於て為すべかりし演説草稿の中に下の如く述べて居る――「数千の婦人並に多数の少年を含む約十二万の人々が、此の十五箇月間に捕縛され投獄された。弾圧を開始するに当り、政府は六週間以内に国民会議を絶滅せしめんと期して居たことは、今や公然の秘密である。而も十五箇月を経てさえ、政府は其の目的を遂げ得ない。今後三十箇月を経ても同然であらう」。

然るに翌一九三三年五月、エラヴダ獄中のガンディは、三週間の断食を宣言した。それは魔術の如く全印度を昂奮せしめた。政府は彼が獄中で死ぬことを欲しなかつた。彼等はガンディの獄死が、如何なる影響を印度国民の上に及ぼすかを知つて居た。それ故に政府は、遂に無条件でガンディを釈放した。出獄せるガンディは、六週間の不服従運動中止を国民会議に勧告した。六月中旬に中止期間が満了したので、彼は再び七週間の中止を求めた。其間に断食の衰弱より恢復せるガンディは、国民会議の首脳部を非公式にプーナに招致し、大衆的不服従運動を廃棄し、秘密運動を停止し、唯だ個人的不服従を認むべしと提議して出席者の同意を得た。事実、当時の峻厳なる取締の下に於て、大衆的運動は不可能であり国民は一箇年半の悪戦苦闘に疲れて居た。かくて時の印度事務大臣サミュエル・ホーアは「野良犬は吠えても隊商（カラバン）は進む」と傲語するを得た。

但しガンディは、決して闘志を棄てたのではない。彼は個人的不服従の範を示すべく、八月一日よりグジラートの農民に此の思想を鼓吹し始めた。政府は直ちに彼を捕縛して、再びエラヴダ監獄に送つた。ガンディはまた断食を開

始した。絶食一週間にして、彼は際立つて衰弱したので病院に移された。彼は既に死を決して居た。を処理し、看護人に形身を与へ、遺言までした。死期は近づいた。いま一日遅れたならば、彼は最早此世の人でなかつたらうが、その前夜に突如、政府は彼を釈放した。

殆ど時を同じくして、ネールはデーラ・ダン監獄からナイニ監獄に移された。そして老母が急病に罹りて入院したとの報知に接した。彼の刑期は、九月十二日に満了するのであつたが、老母の病気が危篤となりしため八月三十日に釈放された。彼は直ちにルックノー病院に赴いて老母を見舞つた。老母は幸に生命を取止めたが、恢復は遅々として進まなかつた。

病母の小康を見届けたネールは、プーナにガンディを訪うた。ガンディは尚ほ衰弱して居たが、恢復に向ひつつあつた。彼等は二年振りの面会を喜び、綿々として語り合つた。而して両人とも今は決して不服従運動を撤回すべき時に非ず、微力ながらも之を続行すべしと決意した。ネールはプーナよりボンベイに赴きて諸同志と会見し、一週間の後に再びルックノーに帰りて老母を看護することとなつた。妻カマラもルックノーに来りて老母に侍した。国際間に於けるアラハバードに居るよりも多く時間の余裕があつたので、ネールは数々の論文を新聞雑誌に寄稿した。国際間に於ける印度を論じたる「印度は何処に往く」と題せる連続論文は、わけても弘く続まれ、ベルシア及びアフガニスタンで其のペルシア語訳が出版された。そのうちに老母は病院生活に飽いて荐りに帰宅を欲したので、十月に入りてアラハバードに帰つた。官憲の弾圧は其後も緩まず、同志の逮捕が相続いたので、ネールも何時再び投獄されるかも知れぬ身の上であつた。それ故にネールは家事の整理に看手した。独立運動に身を投じてから、最も質素な生活に終始して来たので、多くの収入を不要とした。唯だ老母の養生と娘インディラの教育のために準備すれば足りた。そのために妻カマラの宝石や其他の装身具を悉く売払つた。

やがて一九三四年となつた。一月二十六日は「独立節」である。此日は官憲の圧迫に拘らず、度の各地で規則正しく祭日として守られて来た。今年も祝賀式を挙げねばならないが、全印際仕事をなし得る立場にある者はネール一人であつたので、ネールは全国に向つて祝賀式を挙行すべきこと、但し其の方法は各地の自由に委ぬべきことを通牒した。彼は祝賀式関係者が、此日に必ず逮捕せらるべしと考へ、彼自身も覚悟を決めた。そして入獄以前にベルカン州の同志を見舞ひ、兼ねて妻カマラの診察を求めるため、一月十五日カルカッタに向つて出発した。彼はカルカッタに三日滞在し、三つの集会に出演したる後、シャンティニケータンに赴きて老詩人ラビントラ・ナート・タゴールを訪ひ、娘インディラを将来彼の学園に託することにした。恰も此頃ベンガル南部に未曽有の激震があり、被害甚大であつたので、ネールは該地方を巡視して救済事業の計画に奔走し、二月十一日疲れ果ててアラハバードに帰つた。而して翌日午後、妻と卓を共にして茶を飲み了へた処に、警官が来りて彼をラリポール監獄で服役することとなつた。出獄僅に五箇月半の後、彼はまた禁錮二年の宣告を受け、カルカッタのアリポール監獄に護送した。

カルカッタの気候が悪いので、アリポール監獄の生活は痛くネールを衰弱せしめた。五月に入りて、官憲は彼の健康を慮り、再び彼をヒマラヤ山麓のデーラ・ダン監獄に移した。其間にガンディは全国に向つて不服従運動の撤廃を声明した。印度政庁は弾圧の成功に微笑して居た。国民会議派の指導者等は、立法議会の議員選挙に没頭して居た。政府は不服従運動を放棄せる国民会議の合法性を承認した。総て此等の経緯は獄中のネールを悲しませた。彼は独立運動の一時的挫折を見た。現実に落胆せる彼は、静かに過去を顧みた。彼が国事に奔走し始めてから、如何なる政治的事件が印度に起つたか。彼等の運動は正しかつたか。彼は此の反省のために、又一つには獄中の煩悶と無聊とに打克つために、此年六月その「自叙伝」の筆を執り初めた。吾等が今読みつつある彼の自叙伝は、斯くして書かれたも

のである。

一九三四年七月末に至り、妻カマラの病勢革まり、八月十一日ネールは面会のために仮出獄を許され、ラハバードで妻の病床に侍するを得た。カマラが稍々小康に復したので、八月二十三日、彼はまたナイニ監獄に収容されることとなつた。此年十月にはボムベイで国民会議例会が開催され、十一月には立法議会議員総選挙が行はれることになつて居た。若し此の二つの政治的行事が無かつたなら、官憲は恐らく彼を釈放したであらう。政府は彼の活動を欲しなかつたので、彼は老母と病妻とに別れねばならなかつた。彼は語る――「予は人々に挨拶をしに自動車に乗らうとせる時、衰へたる母は両手を伸ばして予の許に駈け寄つた。その母の面影は長く予の脳底を去らなかつた」。

ナイニ監獄に入りて一箇月目に、官憲は再びネールに病妻訪問を許した。此頃より彼に向つて、色々な方面から、若し彼が未了の刑期間、政治的活動をせぬと約束するならば病妻を看護するために仮出獄を許可すると示唆された。彼はカマラの精神を熟知して居たので、左様な誘惑に耳傾けなかつた。十月に彼は二度目の面会を許された。此時カマラは高熱のために夢現の間に在つた。ネールが辞し去らうとした時、カマラは雄々しき微笑を以て挨拶せる後、身を屈めよと彼に合図した。彼が其の通りにするとカマラは彼の耳に囁いた――「政府に向つて政治運動をせぬ約束をするといふ噂がありますが、決して左様な事はして下さるな！」

やがてカマラの病気は稍々快方に向つたので、清涼なるボワリに転地することとなり、ネールもまた官憲の好意により、ボワリに近きアルモラ監獄に移された。此年も暮れて一九三五年となり、カマラの健康は徐々に恢復し、五月には治療のため渡欧し得るまでになつたので、独逸シュワルツワルトのバーデンワイラーで静養することとなつた。獄裡のネールは、只管彼女の恢復を禱つて居たが、九月初旬に至り、病勢頓に革まつたとの消息があり、そのためネ

ールは仮出獄が許された。かくて彼は五箇月半の刑期を残して出獄し、直ちに飛行機に乗りて欧羅巴に向ひ、カマラの病床に馳付けたが、幾くもなく彼女は白玉楼中の人となつた。

前年、彼が仮出獄を許されて十一日間カマラを病床に慰めた時、彼は衰弱せる妻を見守り乍ら深き思に沈んだ——「結婚生活十八年！　その十八年のうち、如何に長く予は監獄に、カマラは病院に過したことか。いまもまた予は獄中に服役して数日の出所を許され、彼女は病床に横はりて生きんと戦つて居る。予は彼女が健康に無頓着なることを若干腹立たしく感じた。而も予は何うして彼女を非難し得るか、彼女の緊張せる魂は、国民的闘争に存分に参加し得ぬ不甲斐なさに焦れて居るのだ。彼女の健康がそれを許さないで、彼女は活動も出来ず又療養も出来ず、哀なる炎が彼女の五体を焼き尽すのだ。予が最も彼女を必要とする此時に、彼女は決して死んではならない。吾等は本当に互に知り互に理解し初めたばかりでないか。吾等の一体同心の生活は初まつたばかりだ。吾等は是程深く互に相頼り、偕にやるべき仕事は是程多いではないか」。この大切な同伴者が遂に彼を残して長逝した。

九　新憲法をめぐりて

さて一九三五年三月、英国政府によつて発表せられたる印度憲法案は、国民会議派の猛烈なる反対ありしに拘らず、一九三五年十月、遂に英国議会を通過し、一九三七年四月一日より実施せらるるに至つた。印度新憲法は、第一に英国直轄領十四州及び藩王国五百六十を以て印度聯邦政府を組織せしむること、第二に英領印度の人民に自治権を与へること、第三に緬甸を印度より分離することを骨子とするものである。

右のうち、聯邦組織及び之に関する規定は、一九三七年の憲法実施に際して、留保せられたるまま今日に及んで居る。蓋し各藩王国の聯邦加入は、住民過半数の賛成を必要とするのみならず、有力なる藩王国二十以上の参加なくん

ば聯邦の実を挙げ難く、而も諸藩王国の利害は甚だしく錯綜せるが故に、英国は早急に之を強行することを避けたのである。

直轄領印度は、各州に英国より任命せらるる知事を置き、其下に制限選挙による州立法議会及び州政府あり、州政府は州立法議会に対して責任を負ふこととせるもので、原則としては州政府の自治を認めるのであるが、州知事は治安維持のためには、州議会の議決を無視して必要なる措置を執る権限を与へられて居る。加ふるに印度皇帝即ちイギリス国王の代表者たる印度総督は、安寧秩序の維持・軍備の施設・少数宗教の保護・外交上の諸問題・財政上の諸問題について、立法議会の決議に対する拒否権を有し、且必要に応じて何時にても議会の審議を停止し、また緊急命令を発布する権能を与へられて居る。

かくて此の新憲法は、第一にそれが印度人自身の手によらず、全然英国側によつて起案されたといふ点に於て、第二にそれが民主的仮面の下に飽く迄も印度を英国の独裁下に置き、自治領の地位をさへも与へぬといふ理由の下に、第三には封建的藩王国を恒久化し、而も之に印度政府に対する発言権を与へるといふ理由の下に、草案発表当初より印度側の激しき反対を受け、其の細甸分離の如きも、之によつて英国の緬甸統治を容易ならしめ、且印度の排英勢力を分散せしむるための術策として憤慨した。而して最も熱烈に新憲法拒否運動を指導せる者は、亡妻の遺骨を携へて欧羅巴より帰り、再び選ばれて国民会議議長となれるネールであつた。彼は一九三六年十二月、フアイズプルに開かれたる国民会議総会に於て、下の如く国民を激励した——「此の憲法は、立法議会の内部に於ける行動のみでは打倒し得ない。其為には外部に於ける大衆運動を必要とする。吾等は、自由のための戦の本隊が、常に民衆の組織と民衆の行動とであることを決して忘れてならぬ」。

一切の反対に拘らず、とにかく新憲法による最初の英領印度州議会総選挙が、一九三七年一月より二月にかけ、男

子二千五百万・女子五百万・合計三千万の印度選挙民によつて行はれた。国民会議派は「新憲法排撃」の旗幟を掲げ数々の約束を提げて選挙戦に臨み、官憲の激しき圧迫に拘らず、英領印度十一州のうち、六州に於て絶対多数を占め三州に於て第一党となつた。而して三月十八日、ネールは当選議員全部をデーリに召集し、下の如く宣誓せしめた―「予は印度のために一身を投げ、議会の内外に於て、印度独立のために一身を投げ、議会の内外に於て、印度独立のために尽すべきことを宣誓す。予は国民会議の統制の下に、会議の目的並に理想を遂行し、印度をして自由と独立とを獲得せしめ、其民を苛斂誅求の苦悩より解放せんことを期す」。そは彼等をして飽く迄も印度独立のために精進せしめ、断じてイギリス帝国主義との妥協を防止するための宣誓であつた。

国民会議は、絶対多数を獲得せる諸州に於て、当然内閣を組織すべきことを求められる。而して其の可否に於ても、また議論が沸騰した。ネールは猛烈に之に反対した。彼及び其の同志は、英人知事の下に政府を組織し、英国と協力することは、致命的妥協なりとして之を排撃した。数箇月に亘る論争の後、ガンディの調停により、ネールは政権受領に譲歩した。而して過ぐる三月、印度独立のために献身すべしと宣誓せる議員が、いまや「国王・皇帝陛下及び其の後継者に対して忠誠を励むべし」と誓ひて、州政府の閣僚となつた。但しネールを委員長とする国民会議執行委員は、一人も入閣せざることに決したのである。

かくて此年七月、国民会議派は八州に於て絶対多数を占め大臣に就任せる党員の多くは穏健派に属する人々であつた。

さて是くして組織せられたる諸州の国民会議政府は、先づ政治結社の禁止を解き、総ての官吏に印度国旗に対する敬礼を求め、印度国歌を以て立法会議を始め、閣僚以下官吏の減俸を行ひ、禁酒令をも布いた。而も自ら政治を行ふことは、決して他の政治を批評する如く容易ではない。わけても多年に亘る宣伝の後に、数々の約束を民衆に与へて選挙に勝ち、いまや責任ある当局者になつて見ると、其等の約束を直ちに実行することの不可能なるを知つた。禁酒

令は州政府の収入を激減せしめて財政難に陥つた。農民は約束通りの地代軽減を要求して騒ぎ立てた。労働者は待遇改善を要求して罷業を行つた。過激なる行動に出でたる国民会議党員が捕縛された。一方に於ては州政府の政策を社会主義的なりと攻撃して、従来会議流を支持し来れる印度教徒、資本家階級が党の運動から遊離し始めた。而も他方に於ては州政府の行動を妥協的なりとして、急進派が激烈なる攻撃を浴びせ始めた。此年十月二十七日、カルカッタに開かれたる全印度委員会では、独り若干の大臣のみならず、ネールまでも微温的なりとして攻撃された。而して一般の党員等も、国民会議幹部によつて組織せられし州政府の態度が、在野当時と比べて甚だしく穏健になつたと痛感するに至つたので、急進派の筆頭シュバス・チャンドラ・ボースが、一九三八年の国民会議議長に選ばれたのも此為である。

さて印度が独立のために悪戦苦闘しつつある間に、世界政局は目まぐるしく回転し、欧羅巴並に東亜に於て、風雲頓に急を告ぐに至つた。之と共に従来は専ら英国の支配と搾取との排撃に全力を挙げ、また他を顧る遑なかりし国民会議も、漸く目を国際政局に注ぐに至り、之に即応して政策を樹立するの必要を感じて来た。大英帝国主義打倒の選手として、惜みなき讃辞を彼等に捧げヒットラーがズデテン条約を蹂躙し去れる時の如き、印度人は雀躍して快哉を叫んだ。日本に対しては、日露戦争に於ける勝利以来、常に同情と尊敬とを抱き、その経済的並に軍事的発達をば、東洋に於ける欧羅巴帝国主義に対する防塁として歓迎して来た。然るに一旦独伊両国に独裁政治の確立を見るに及び、彼等は其の政策に対して不満を抱き初めた。イタリーに於ける社会主義弾圧、ドイツに於けるユダア人追放は、印度をして全体主義国家に対する感情を冷却せしめ、次でイタリーのエチオピヤ征服、ドイツのオーストリア併合は、一層其の傾向を助長し、国民会議は猛烈なる非難の声を挙げるに至つた。而して日本に対してもまた日支事変勃発以来、帝国主義的侵略国として頓に敵

意を抱き初め、新聞雑誌の排日論調が露骨になつて来た。

是くの如き時に当り、シュバス・チャンドラ・ボースは、一九三八年二月の国民会議議会に於て「エジプトが地中海に於ける英伊両国の抗争を利用し、流血の惨を見ずして英国と対等の協定を結べる実例に学び、吾等もまた印度に同情を寄せる者に対しては、団体と国情の如何を問はず、進んで之と提携すべきである」と主張したが、彼の言に同意しなかつた。而して反対者の随一は、実にネール其人であつた。ネールは帝国主義・ファシズム・資本主義を以て等しく印度の敵なりと力説し、印度は飽くまでも此等の三反動勢力と戦はねばならぬと高調した。彼は此年の州議会選挙戦に際し、全国に亙る千以上の演説会に於て、繰返し、日・独・伊を非難し、ファシズムの危険を説き、印度に於ける全体主義的傾向の擡頭を警戒した。彼はスペイン並に支那に対する同情を示すために、屢々全国的なるデモンストレーションを行ひ、屢々言論によつて遥に声援を与へ、また寄附金並に救護班を送つた。国民会議事務所内に新に外務課を設け、全世界の反帝国主義的並に反ファッショ的団体と聯絡を取り、印度諸新聞に国際問題に関する資料を供給することとした。而して自らスペイン及び支那に赴きて、印度国民の彼等に対する同情を伝達しやうとした。

ネールが重慶を訪へるは、昨一九三九年八月のことである。滞在一週間、支那側の非常なる歓迎を受けた。恰も彼が一夜蔣介石夫婦を私邸に訪ひて懇談しつつありし時、日本軍は月明に乗じて重慶空襲を行つた。此の訪問に際し、彼は支那側に向つて下の如く告げて居る――「吾等は日本に対して如何なる悪意をも有せず、今日といへども日本国民に対しては毛頭悪意を抱いて居らぬ。但し日本が支那に対して執る政策は、吾等の悪む所のものである。多年に亙りて吾等は吾等自身の自由のために、強力なる帝国主義とファシズム、及び之を助長する侵略主義が世界から払拭し去られるまで、如何なる真個の自由も有り得ぬことを信ずる」。而

して印度に帰りて後は、更に下の如く声明した――「支那と印度は、共に世界に対する使命を有する。彼等は此の任を遁がれることが出来ぬ。此の偉大なる志業に於て、両国は各自の福祉のため、並に世界の福祉のために協力せねばならぬ。今や世界は総て歪められて居る。やがて諸国の再編成が、避け難きものとなるであらう。而も銘記せよ。如何なる世界の再編成にも、自由なる印度の協力を前提とするに非ずば、それは必ず無価値のものである」。

一〇　欧羅巴戦争と印度

一九三九年三月、第五十二次国民会議がトリプラに開かれた。議長に再選せられたるボースは、高熱に苦しむ病軀を担架に運ばれて会場に臨み、英国に向つて最後通牒を発すべきことを力説した。然し乍らネールは、ボースの主張を性急なりとし、「誇大なる言葉を吐くことによつて、英国より印度の自由を獲得し得るが如く考へることは、甚だしき自己欺瞞である」と非難した。ガンディの信奉者も、また革命のために暴力を辞せずとするボースに賛成しなかつた。かくて四月二十九日、ボースは遂に議長を辞し、穏健なる長老ラジェンドラ・プラサードが議長に選ばれ、漸進独立派が国民会議を左右するに至つた。

此年九月三日、英国は遂にドイツに向つて宣戦を布告し、印度もまたドイツと交戦状態に在りと宣言した。翌九月四日、リンリスゴー総督は、特にガンディを招致して印度の対英協力を懇請したが、之に対してガンディは、自分は如何なる諒解又は協定をも結び得る立場に居らぬと答へて辞去した。而も越えて六日、ガンディは其の機関紙上に於て、ヒットラーを以て暴力あるを知りて神を知らざるものと非難し、その戦闘行為の停止を要求した。やがて九月十四日に至り、全印度国民会議執行委員会は、対戦態度に関する国民会議の決議を発表したが、その内容は第一に何等印度に図ることなしに印度を交戦団体と宣言せることを非難し、第二にファシズム及びナチを排撃して民主主義を讴

歌し、第三に若し英国が真に自由と民主主義の擁護のために戦ふといふならば、先づ之を印度に与へよと要求せるものであり、曾に何等の積極的方針を示さざりしのみならず、寧ろ英国に対して媚態を呈せるものであつた。さればこそボースは、此の決議を微温的なりとして痛切なる非難を之に浴びせた。

而も独り此の決議のみならず、国民会議主脳部は屢々印度総督と会談し、若し英国が印度に独立を許すならば、印度は欣んで英国と協力すべきジェスチュアを示した。然し乍ら此の印度側の媚態に対する英国の態度は、十月十七日のリンリスゴー声明によつて明瞭なる如く、極めて無愛想なものであつた。即ち此の声明は、戦争終結後に於て、英国は印度が諸自治領の間に伍して適当なる地位を占め得るやう、英国関係を強化すべしといふに止まり、従来幾度か為されたる約束を、更めて繰返したるに過ぎなかつた。

此の声明は、流石に穏健なる国民会議主脳部をも激昂せしめ、その執行委員会は、十月二十二日、イギリス帝国主義政策排撃の手段として、英領印度に於て会議派が組織する八州の内閣に対し、一斉に辞職を要請した。八州内閣が此の要請に応じて辞職したので、其等の諸州に於ては、州治の全権が英人知事の掌裡に収められた。英国政府は、断じて協調によらず、弾圧を以て印度に臨む覚悟を決めたのである。而して印度回教徒の一部の如きは、会議派内閣の辞職を喜び、此年十二月二十二日、ジンナーを総裁とする回教聯盟主唱の下に、印度各地に「解放祭」を催ほし、英領印度八州の回教徒を、会議派の弾圧より救へる神に対して、感謝の祈禱を捧げた上会議派排撃行進をさへ行つた。

ボースを指揮者とする急進派は、此の機会を逸し去らば、また印度独立の日来らずとなし、一切の手段を尽して此の目的を遂げんと努力したが、遂に国民会議の大勢を動かすこと能はず、本年二月の議長選挙に於て、ガンディの信奉者にして漸進派の長老たるアブル・カラム・アザードの当選を見た。ラムガールに開かれたる第五十二次国民会議に於けるアザードの長時間の演説は、前年九月十四日の執行委員会決議を敷衍せるものに過ぎざりしのみならず、平

和的交渉によつて其の目的を遂げたいといふ意図を下の如く表明して居る――「この一般的暗黒時代に処して、偉大なるマハートマ・ガンディの魂を支へて居るものは、人性の光明の半面に対する信仰である。彼は有らゆる機会を利用し、その堅固なる立場を傷けることなしに、相互的解決をなすべき用意を有する」。

而も是くの如き形勢は、却つて急進派を憤激せしめ、わけてもベンガルに於ては、暴力を辞せざる直接行動に出でんとする気配が顕著になつた。かかる空気を反映して、本年三月ロンドンに於ては、ジャリアンワラ虐殺事件当時のパンジャブ州知事として印度国民怨嗟の的なりしサー・マイケル・オドワイヤーが暗殺せられ、印度事務相ゼットランド卿が狙撃せられた。而して六月に至りて、ボースは「完全なる主権を有する印度臨時政府」の樹立を提唱したが、幾くも無く捕へられて獄に投ぜられた。此間ガンディは、一貫徹底して運動の暴力化を戒め、印度は事態が明瞭となるまで待機する必要ありとし、また「吾等は廃墟と化したる英国より独立を欲するものでない」とさへ声明し、全国的不服従運動の再開を迫る者に対しては、準備未だ成らずと答へて応じなかつた。急進派と漸進派の対立によつて常に左右に動揺する国民会議は、六月二十一日ワルダに開かれたる執行委員会に於て、ガンディの態度を余りに消極的なりとし、ガンディと訣別して反英独立運動に邁進すべきことを決議した。

かかる間に欧羅巴戦局は、俄然独伊の優勢を示し、英国は未曽有の国難に当面した。而して印度の空気も日に険悪を加へたので、八日八日、英国政府はアメリー印度事務相の名に於て、戦争終局後の印度人の手に成る憲法を許し、新しき政治的地位を印度に与ふべしと公約して、排英の気勢を緩和せんとした。同時にリンリスゴー総督も、シムラに於て長文の声明を発表し、戦争に対する印度の積極的協力を求め、且印度代表を以て組織する戦時顧問会議を創設する意図ある旨を告げた。而して、総督は此の公約に関して協議するため、国民会議議長アザードを招致したが、アザードは「英国が与へんとする所のものは、会議派の求むる所のものと相距ること遠く、到底協議の余地なし」との

理由を以て、総督との会談を拒絶した。而して八月二十日ワルダに開かれたる国民会議執行委員会は、印度が英国の対独伊戦争参加を拒否する旨を、正式に総督に通告した。

懐柔の無効なるを見るや、印度政府は一層の弾圧を以て国民会議派に臨んだ。党員は次から次へと逮捕投獄せられた。其間に又もや漸進派が勢力を回復し来り、九月十五日の執行委員会は、一旦訣別せるガンディを迎へて、対英態度を緩和すべきことを決議するに至つた。而して九月十七日の全印度国民会議委員会に於て、一般革命と総罷業とを力説せる急進派の主張は完全に葬り去られ、実に六票対一九二票の多数を以て、運動の一切の指導権をガンディに委ねることに決した。此の席上に於てガンディは、一時間四十分に亘る長演説を試み、英国が死活の戦を続けつつある間に印度の独立を強要するは正しくないと主張し、自ら印度総督に対して真剣に独立の交渉を行ふべき旨を告げ、且仮令交渉不調に終る場合も個人的不服従は兎に角として、団体的不服従運動を開始するの意図なきことを言明した。

さてネールは、既に屢々述べる如く、ガンディの思想並に戦術に対して大なる不満を抱き、明らさまに之を非難して居る。彼はガンディに比べて遥に急進的であり、またガンディの如く非暴力に執着しない。而も彼は絶対にガンディの人格に傾倒し、一切の重大なる場面に於て、常に己れを殺してガンディの決定に従つて来た。彼曰く「ガンディは、一陣の清風、翁に伴ひ、その空気を爽かならしむる。わざとらしきほど温和謙譲であり乍ら、満々と力と権威を湛へ、時としては敢然命令を下して人々を従はしめる。翁の澄みたる深き眼は、静かに人を深みに引入れ、その清らかに透る声は、人の腸に徹して情感をそそる。翁は内なる平和を見出して、之を他に光被する」。かくて彼は、ガンディが此世に在る限り、ガンディの指揮に随順するであらう。而して其のネールも、十月三十一日、遂に逮捕されてしまつた。

印度の指導権はガンディの掌裡に在る。度々その勢力の後退を云々せらるるに拘らず、依然としてガンディは印度

独裁者である。ガンディが指揮する限り、印度に於ける独立運動は、過激なる手段に訴へることは無いであらう。現に彼は「独立の延期は左まで苦にする必要がない」と言ひ、また英国が突如没落し、印度が一朝にして解放せらるる場合を想像して、それが必ずしも印度のために幸福ならざるべしとさへ暗示して居る。いづれにもせよ印度独立運動の成敗が、欧羅巴戦争に於ける英国の勝敗によることは言ふまでもない。国民会議は、内外の情勢に刺戟せられ、今後も時として右に、時として左に傾きながら、兎にも角にも独立を目指して進むであらう。